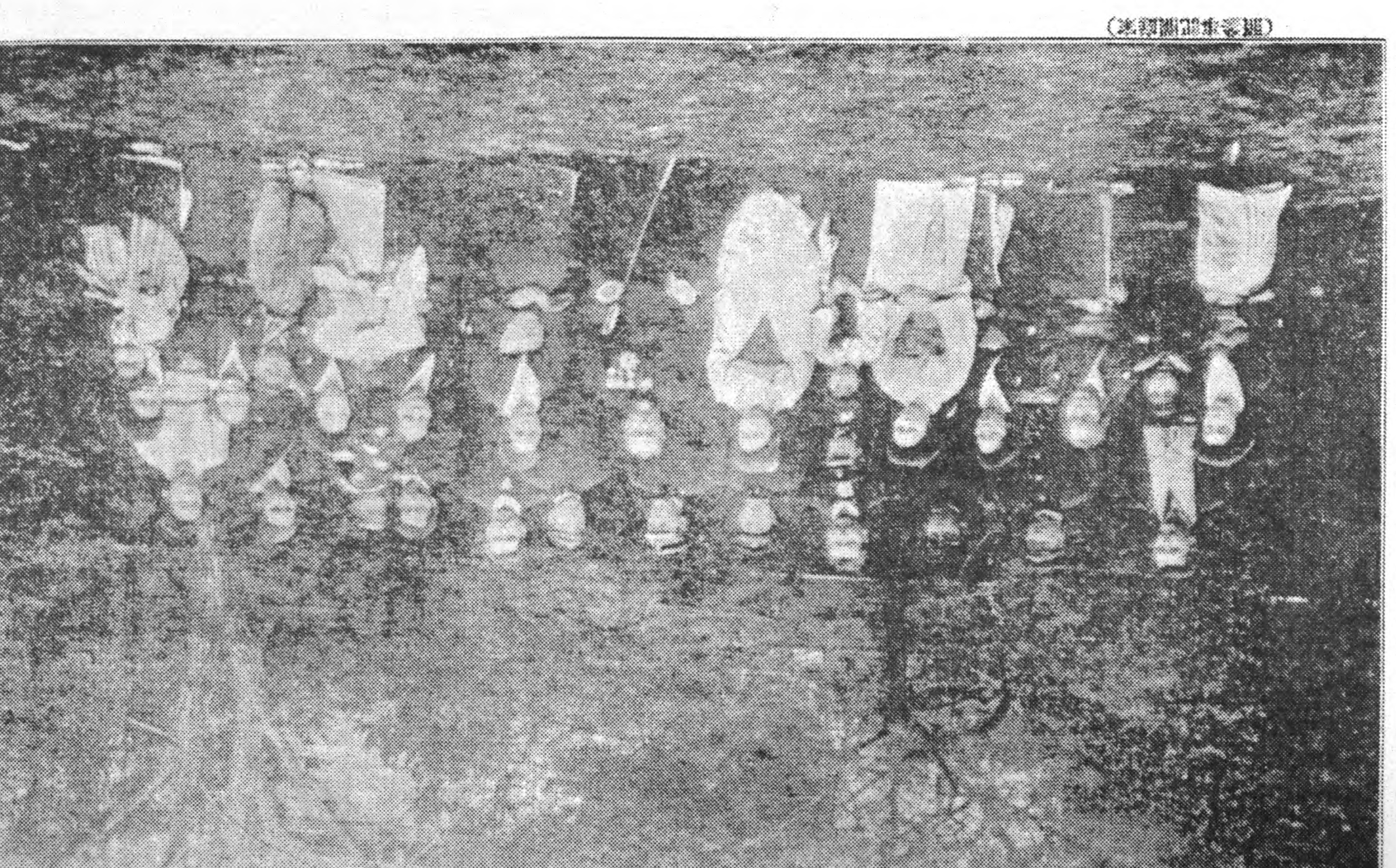
毎月[illegible]日發行 第三種郵便物認可
明治[illegible]八月創刊 明治三十五年三月十二日
女鑑
第十五年
第二号



女鑑　第十五年 第二號　目次

東郷海軍大將の一家

（凱旋後[illegible]邸内にて撮影されしものなり）

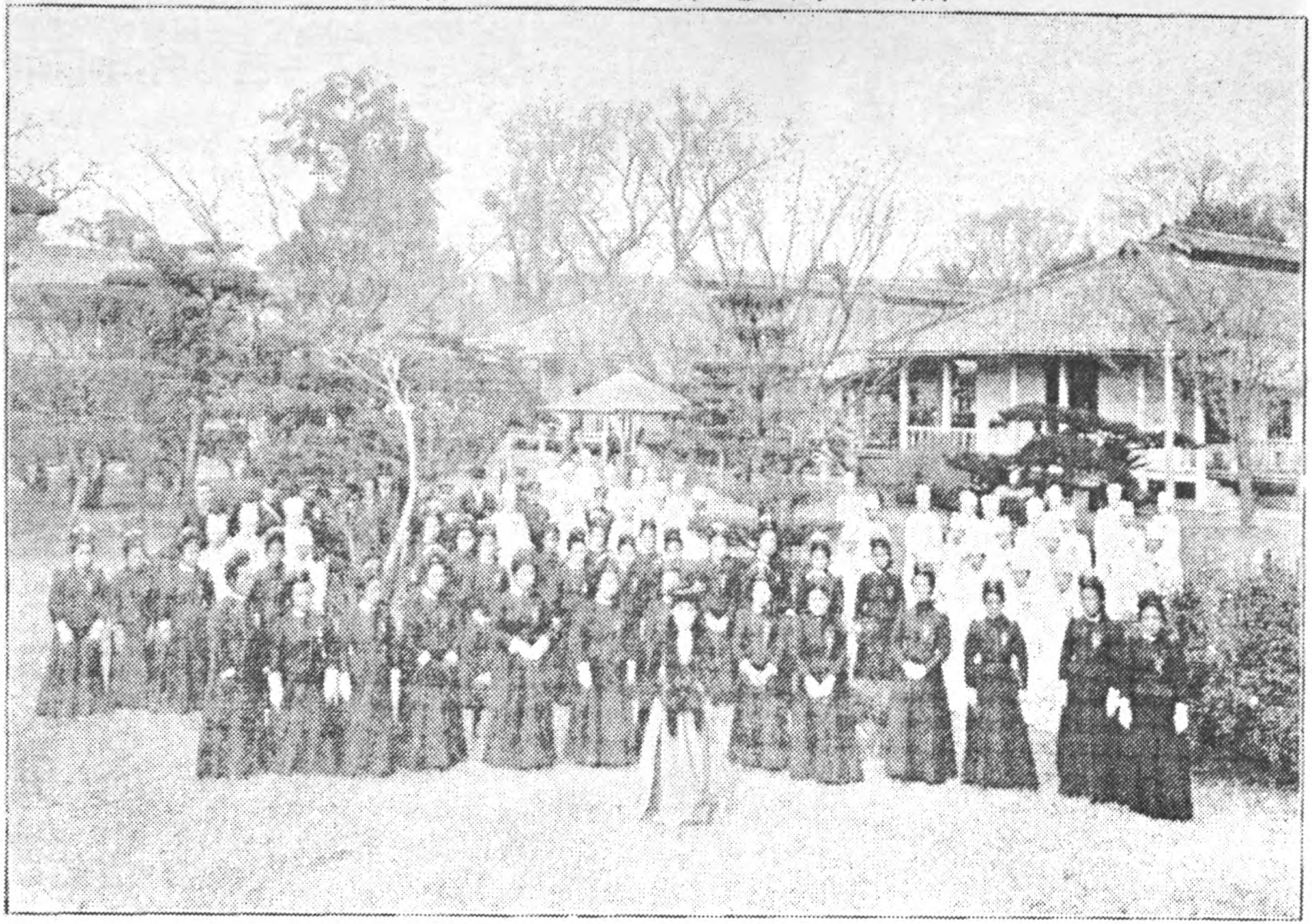


前列右方より【東郷吉太郎氏夫人、東郷せい子、町田秋子、海江田夫人、東郷夫人、東郷大將、令孃八千代子、税所篤子、税所夫人、[illegible]、有村壽子、】

後列右方より【田中豐子、岩下賴子、有村國太郎氏、野々至氏、大將二男實氏、大將長男彪氏、有村正男氏、鮫島氏、東郷吉太郎氏、海江田孝吉氏、家庭教師立花氏、】

（家庭雜誌記事參照）

熊本篤志看護婦人會員



（昨年十二月十一日　皇后陛下御使北島權掌侍熊本豫備病院收容の傷病者御慰問の際同院中央庭園に於て撮影したるものにて中央に立たれたるは則ち北島權掌侍なり）

川島海軍大佐の一家



（訪問欄記事参看）

吉島海軍中佐の留守宅

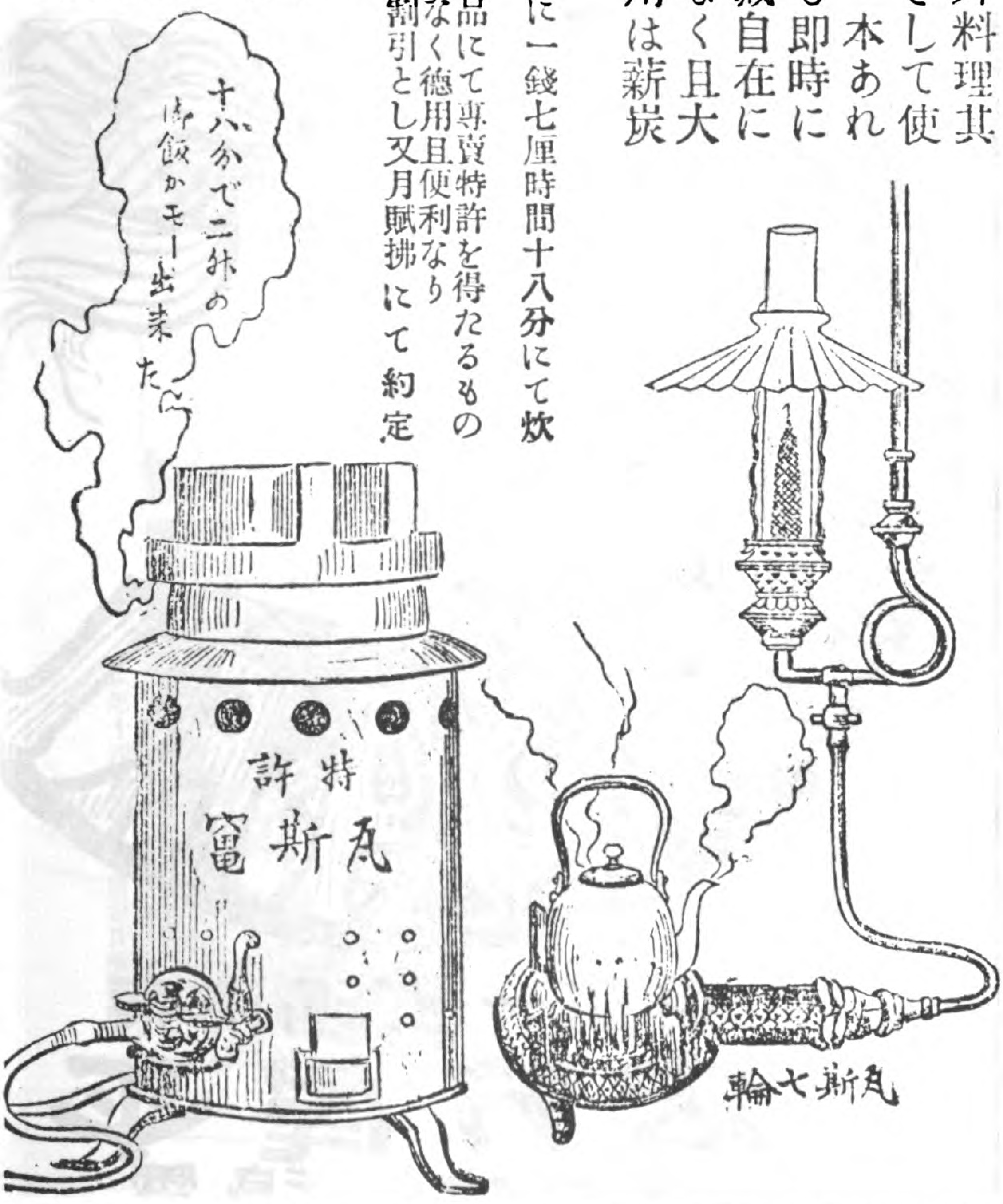


母堂くら子

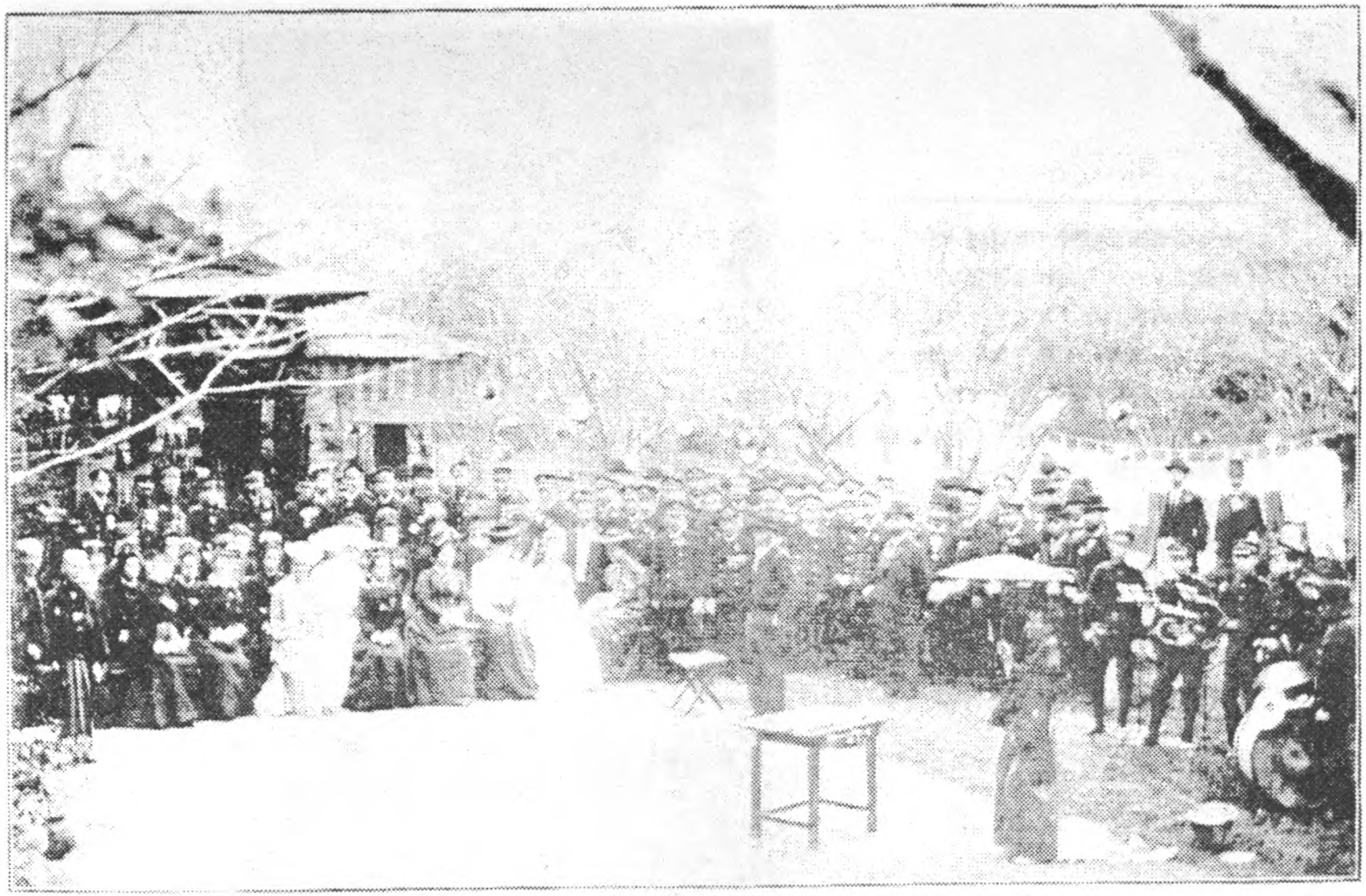


（第十四年第十三號訪問欄參觀）

夫人光子及令息重太郎氏



十八分で二升の御飯がモー出来た
特許
瓦斯竈
瓦斯七輪



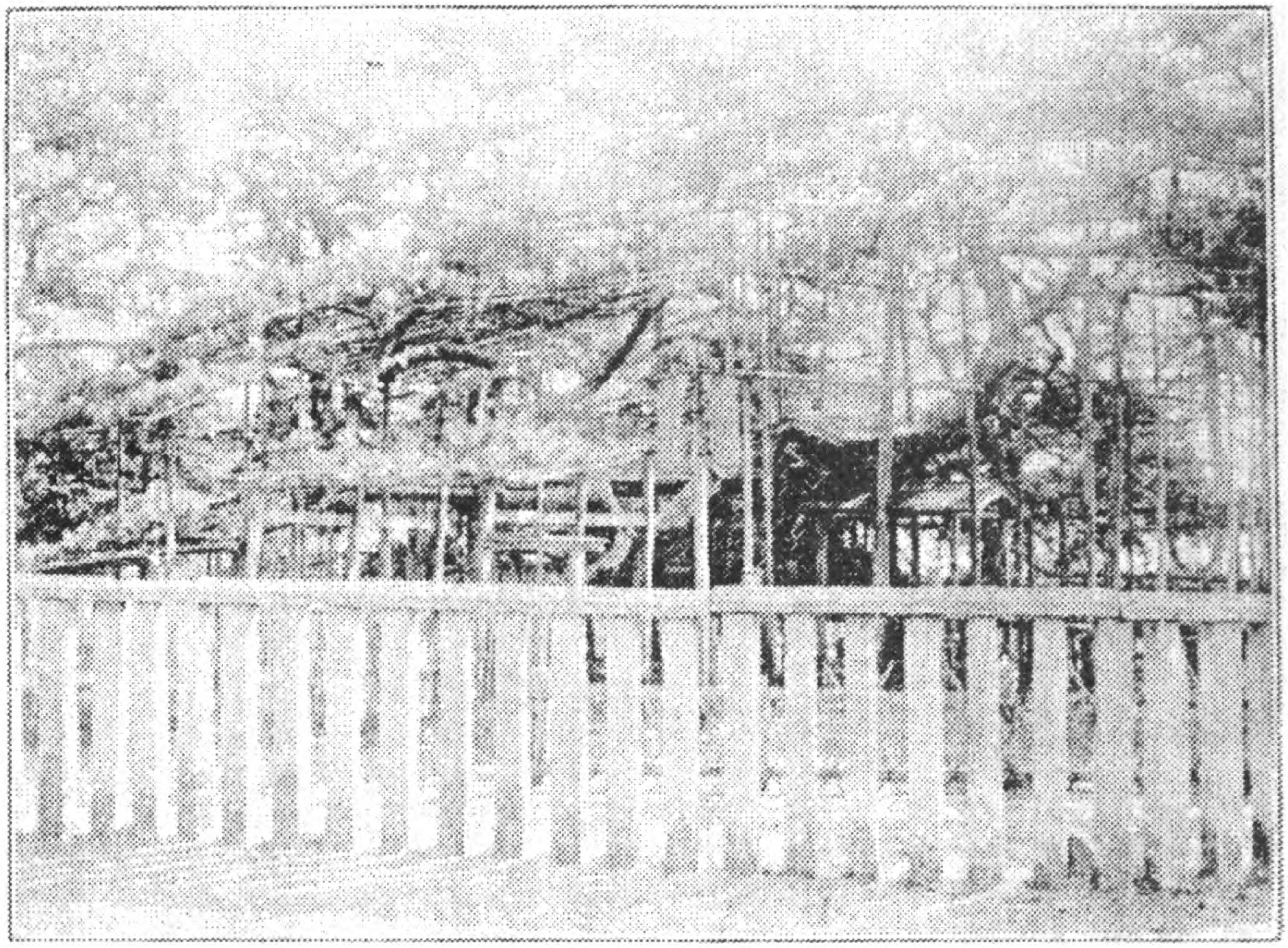
廣島に於けるマダー夫人一行送別會

山下義韶氏夫妻

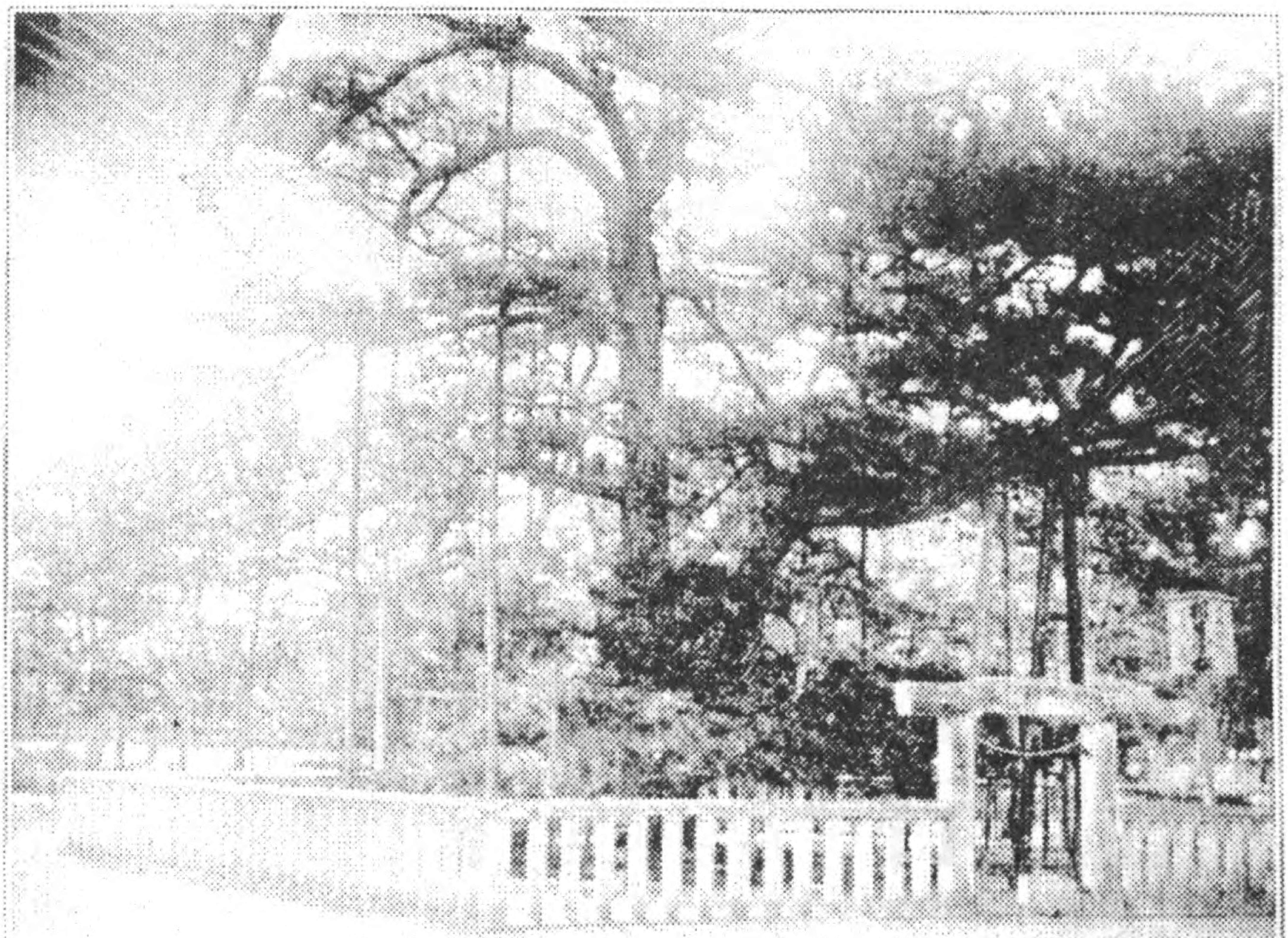


山下義韶氏は講道館屈指の名手なり前秋年米國シャトルの鐵道王ゼームスヒル氏に招聘され渡米して專ら柔道を教授しける程に日本柔道の評判は嘖々として同國に喧傳され隨つて氏の名聲もまた高く揚りて遂に大頭領ルーズベルト氏に知られて師範役となり爾來盛んに大頭領夫妻を始め令息等を教授し居れりといふ氏は相州小田原の人なり右方にあるはその令閨なり

老松古幹



播州手枕の松



岡上相生の松

恭賀新年

御羽織紐　御帯とめ　時計紐

絹糸編物類　房類

✡印優等絹縫糸

全絹小町糸各種

其他糸組物類大勉強販賣仕り候

日本橋區兩國米澤町
三丁目五番地

富屋商店

褒状受領

定價 壹袋壹錢 罐詰五錢



此名題洗粉は皆々樣の御引立に依り益々盛大に相成難有仕合に奉存候然るに近來諸方に名題洗粉の擬造品澤山顯はれ候に付弊舗製造品には袋の裏面に芝居櫓形の登錄商標を相印し御座候間何卒御求の節は篤と御熟覽の上多少に不限御用向の程偏に奉希上候也



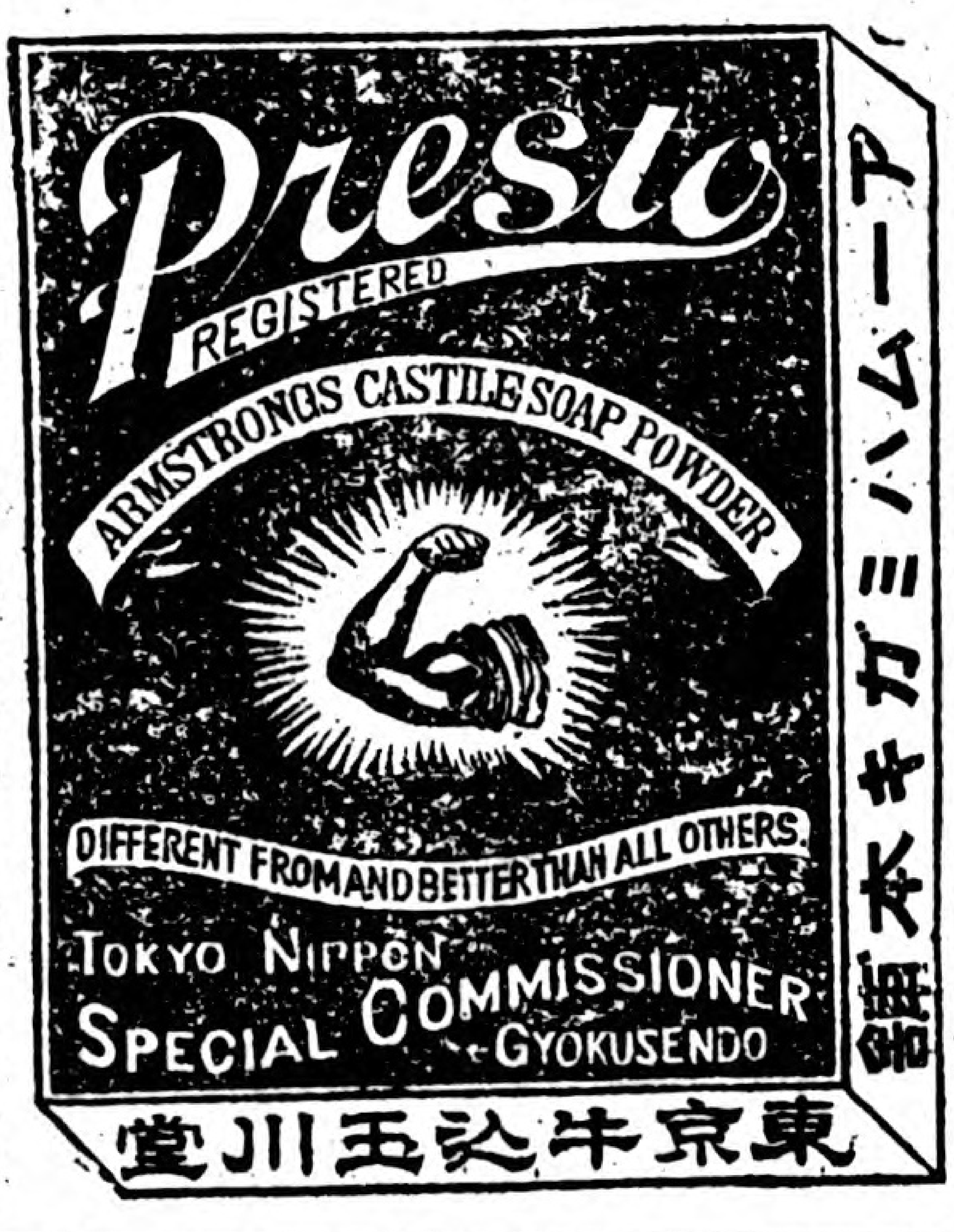
東京淺草區黒船町

梅素亭謹製

紳士貴婦人用

米國有功專賣

●プレスト洗粉は皮膚の理を緻密にし色を白くし光澤を艶麗ならしめ自ら精心の爽快を覺ゆること妙なり●プレスト洗粉は（にきび）（あせも）等を治するに特効あり平常使用せらる、時は皮膚病に罹るの憂なし●プレスト洗粉は効能顯著なるが故に普通の洗粉の如く多量に使用すべからず故に經濟上却て德用なり販賣店は全國到る處の化粧品小間物店賣藥店にて販賣す



日本特約一手販賣

東京牛込西五軒町

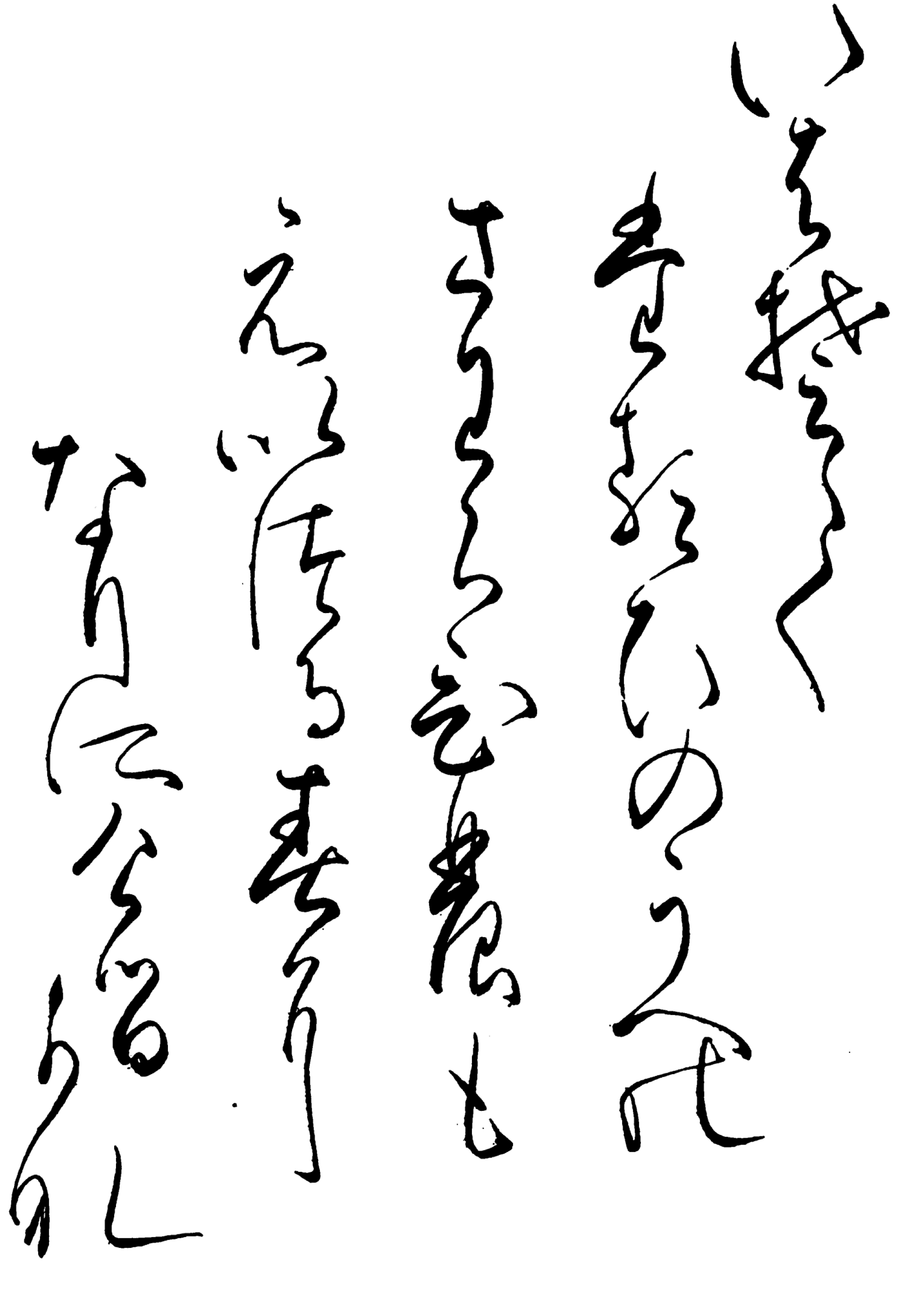
山本玉川堂

女鑑兼題投稿優等者



小山かく子

小泉みつじ子



宮里三木枝子書

教父關兒　家庭の讀物　新版發賣

富永岩太郎先生新著（製本既成發賣）

兒童心身の發達

洋裝上製全一册
定價金壹圓
小包料金拾錢

兒童心身の發達を詳知するは家庭の養護に於ても學校の教育に於ても、共に極めて必要なり、而して心身發達の程度に應じ、相互に關係する所を明かにして、以て適切なる教育を施さゞるべからず。本書は著者が生理上及び心理上より多年實驗的に兒童を觀察してその發達狀態を述べ觀察法を說き以て實際教育上に應用する所を示したるもの、その微を穿ち精を盡せる一讀さながら兒童の心身を解剖して鏡面に立たしめたるが如し、教育者の好參考書たると同時に善良なる家庭教育の指針たるを疑はず愛讀を乞ふ

學習院教授 大村仁太郎先生編

教育寓話 我子の惡德

本書發行後一月にして壹萬部を賣盡せり如何に家庭に愛讀せらるゝかを知るべし今や五版發賣大好評大歡迎

五版發賣　和裝全一册　定價金六拾錢　郵稅金八錢

印刷中 近刊

▲學習院教授 大村仁太郎編述 ◉教育寓話 我子の美德 ◉和裝全壹册

▲學習院教授 大村仁太郎註補 ◉太郎は如何にして教育すべき乎 ◉和裝全壹册

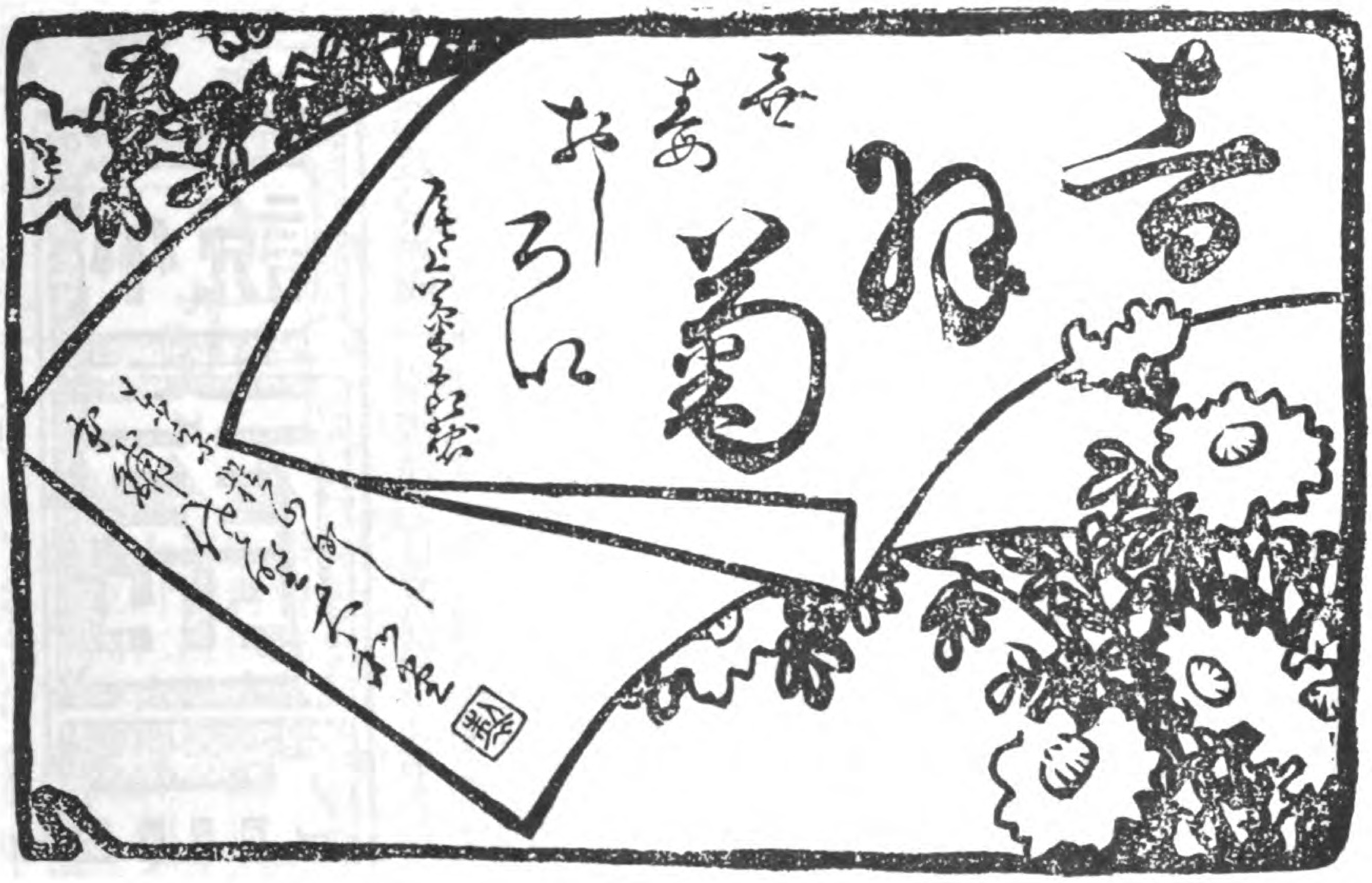
▲東京高等師範 森岡常藏編 ◉教育寓話 鑑鐵三 ◉和裝全壹册

▲文學士 久保得二編 ◉武家時代 少年士道の訓 ◉和裝全壹册

近刊

發兌元　東京神田表神保町　同文館

關西大賣捌所　大阪東區備後町四丁目　吉岡平助





定價●金五十錢●金廿五錢●金十五錢●金十二錢



第十五年第二號

女子教育上に於ける都會と地方

男兒たると女兒たるとを問はず、世の子女を有する父母が、其子の將來に就きて憂慮するは、固より當然のことなるべく、隨つて教育の事に關して、種々に苦心するところあるもまた當然のことゝいふべし。蓋し教育の方法如何に依りて、子女將來の運命に幸不幸を與ゆること大なればなり。

予輩の知人にして、地方に老親と兄妹とを殘し、長く任官して、東京に在住せる某といふ人あり。其の長女今歲十五の春を迎えて、來る三月には、高等女學校第一年の課程を了ふべし。然るに此頃ろ中國の某縣に轉任の命を受け、一家を伴ふて、任地に赴かんとするに際し、長女將來の教育に就き、憂慮して、之を東京に殘さんか、任地に伴はんか、或は故山の老親に托せんかの三點に就きて、頗る疑惑するものゝ如し。其意思へらく、東京に置くは、將來の教育に取りて、尤も便利なるべし。しかも年來双親の膝下に生長し、一日も嘗て家庭を離れたることなき少女をば、獨り放ちて、他人の間に在らしむるは、情に於て忍びざるのみならず、果して其女の利益なるべきか。任地に伴ふも亦官に在るの身は、南船北馬殆んど旅から旅の境涯なれば、何時復た何地に轉任を見むも知るべからず、其時に當りて、又其女を携え行かんには、頻々學校を

轉ずるの不幸を受くべし。さらば故山の老親に托せんか、兄妹の在るありて、教育を始めとし、萬端の注意に於ては、顧慮するところなきも、其地の女學校は、東京若くは任地たる某縣に比して、甚だしく劣るなかるべきや、教育の方法亦宜しからざるものなきかと。某氏の容易に決する能はざるは茲に在り、遂に予輩に問ふに、此の三者の中、何れを選ぶべきやを以てして曰く、足下幸に吾女の爲に其一を擇びて、予をして決するところあらしめよと。想ふにかゝる疑問は、某氏と境遇を同うする人々のみならず、女子を有する一般父兄の常に思慮するところなるべければ、某氏の下問を好機として、予輩の卑見を開陳するは全く無用の言にはあらざるべし。依りて今問題を三項に次第して、世の女子を有する人々の參考に供し、併せて女子教育家の教示を乞はんとす。

第一　東京に在學せしむるは　將來進んで高等の教育を受けんとするに於て、多くの便宜あるべし。又た都會の地は、地方と趣を異にするものあれば、睹馴れ聞馴れの上に於て、實地の經驗を積むことを得て、才智の開發に資益する鮮なからざるべく、世態人情の上に於ても自然に得るところあるべし。乃ち高等教育との聯絡上又は將來の生活上にありては。東京に在學せしむるを以て、得策といふを得べきなり。されど又た一方より熟考するときは、年弱くして、心も亦弱き女子をして、繁華なる都會の地に居らしめ、紅塵萬丈の衢に彷徨せしむるは、虎狼の群に投ずるに羊を以てすると趣きを同うせざるべきや。親切なる知人の家庭、嚴格なる學校の寄宿舍は、心を安んじて、身を托するに足るべしと雖も、和氣靄然たる温良なる父母の家庭に在りて、日夕その教訓を受くるには比すべくもあらざるのみか、倘且つ一歩を誤らば、進

むべき道を取違えて、邪なる小逕に蹈み入るの恐れなきにあらざるは、往々見るところの實例にあらずや縱しさまでの恐れはなしとするも、高等女學校程度の女子にありては、其の年齡上心智體格の發育の十分ならざるより見るも、父母の家庭に置くを以て萬全の策とせざるべからず。

第二　地方に伴ひ行く　は前段に陳べたる家庭の關係に取りては、尤も策の得たるものなるべし。況んや其地の高等女學校に入らしむれば、東京に於て修業すると、格別の優劣を見ざるべく、加ふるに朝夕父母の監督と、慈愛とを以て、臨むを得べきが故に、學業以外に、女子生涯の思想と操行との導きとなることも少なからざるべし。尤も高等教育との聯絡に關しては、東京に在學するに比し、幾分の不利益あるを免かれざるべしと雖も、こは一年二年の豫修を以て優に償ふに足るべく、又かの都會見聞の實驗より受くべき智識の如きも、勿論高等女學校在學中に限るべきものにあらざれば、高等教育の修業中に、十分受け得べきものと見るを得べし。尚歩を進めて詳論すれば、心智未だ開發せざる前と、意識粗々成熟せる後とは同じ見聞上の實驗に於ても、その得るところに、少なからざる利害の關係ありて、前者は是非を識別するに力足らず、後者は已に判斷の智を有し、前者は意識定らずして惑ひ易く、後者は心思稍々確定して守るところあるを以て、實地の見聞上兩者受くるところの利害は自ら同じからざるものあるべし。但だ此の地方亦永住の地にあらずとすれば、或は再び轉校の已むべからざる懸念なきにあらざるも、これ必ずしも憂とするに足らず、その新任地の教育の情況に依りては、轉校も大なる差支へなかるべく、又た學期の終りか、卒業間近き時ならんには、其間は前地の學校に入れ置かば、何等の故障もあらざるべし。

第三　故山の老親に托するも亦惡しからず。此の場合に於ては、卒業の日までは、他に轉せしむるの心配もなく又必要もなし。而して家庭上に關しては、父母の許にあると殆んど同一なるのみならず、祖先墳墓の在る處、父母出生の地は、滿目の山河風色自から子女をして、高尚なる觀念を起さしむるの利益もあるべし。たゞ其地の女學校及び一般女子教育が、東京若くは某地に比して完全ならざるの虞れあるは、遺憾なりと雖も、これとて單に四年と五年との修業年限の差異位のことならば、他日之を補足するの道もあれば、長く故障とするには足らざるべし。但しその學校にして尤も不完全なるか、若くは設備の整はざるものならんには、不利益たる鮮少ならざれば、絶對に不可なりとせざるべからず。

以上の所陳に依り、卑見を斷定せんに、先づ其の任地に隨伴するを以て上策とし、次ぎに故郷に托するを可とし、東京に放置するを以て、下策とせざるべからず。尤も其の女子の目的が、大に高等專門の學術を修め、他日特立特行せんとするにありて、都會に居るの必要あり、父母亦其女の將來を慮りて、斷然之に同意を表するといふが如き場合は、例外なりと認めざるべからず。

近來女學の勃興に伴れて、女子の笈を負ふて、東京に來學するもの、日に多きを加ふるは、喜ぶべきことなれども、其地に於て尚ほ學ぶべき學校を有しながら、之を舍てゝ、遠く東京に遊學するが如きは、眞に學問執業を志すにあらずして、徒らに一時の流行を趁うものといふべく、結局利益を受くること多からざるべし。故に高等女學校を卒業する迄は、その地方に於て出來得る的の修業を積み、進んで高等教育又は專門の技藝を受んとするに方て、始て都會の地に遊學するを以て、健全なる教育の方法とすべき也。



獨逸に於ける婦人の職業

内閣統計局長　花房直三郎氏述

曾一日花房統計局長を訪ひ歐米諸國に於ける婦人の職業問題に就きて敎を乞ふ本篇は即ち同局長の語られたる講話の一節にして獨逸帝國職業調査の一班を示せるものなり讀者之れを熟讀せば將來我國に於て本問題を調査する時の資料として得る所必ず尠なからざるべきを信ず（一記者）

婦人の職業研究は近時我國に於ても著しく世人の注目する所となつた一問題であるが予は此に千八百九十五年に施行された獨逸帝國の職業調査に依て、獨逸の國勢上婦人の職業が如何なる狀態を呈し居るかといふ事を述ふる考である。然し其の目的は獨逸の國勢を硏究するに在るのではなくて、職業調査といふ調査に依て社會の如何いふ事が見えるか、即ち職業調査の價値を一般の理論に依て求めず、一個の邦國の實例に據つて示さうと云ふ意見である。從つて細目には渉らぬ積りである。乍併此調査は獨逸全國に通じて施行された大調査であつて、其の觀察も各種の生活界に及んで居るから、我國に於て職業調査を行ふ場合若くば女子の職業を討究する場合には、資つて參考と爲すべき點が極めて多いのである。

千八百九十五年六月に調査せられたる婦人の總數は、獨逸全國で二千六百三十六萬千百二十三人であつた。其内五百二十六萬四千三百九十三人は本業に於て有業者たる婦人である。之に尚ほ下婢を業とする者を加へると、婦人の有業者の總數は六百五十七

萬八千三百五十八人で、獨逸國總婦人數の百分の二十四、九六即ち四分の一弱である。男子に在ては有業人員が男子總數の五分の三を占めて居る。尚ほ十四歳以下の幼年者を除くと、女性に在ては有業者が婦人總數の百分の三十六、二一、男性に在ては男子總數の百分の九十、七〇となる。即ち婦人の職業に就くことは遠く男子に及ばない。

右は單に本業に就て述べたのであるが、更に副業の關係を調べて見ると、職業生活に參加する女子の數は大に增して居る。副業百七十四萬六千三百二十六件は婦人に依て營まれてある。之に對する人員幾千なるやは明かでないけれど、兎に角一人にして數業を兼ぬることの尠ないのは事實で、是等の事情に據つて見ると、人員と件數との間に大差は無いかも知れぬ。即ち前陳の本業有業の婦人六百五十七萬人餘に、尚ほ百萬以上の副業婦人が加はるものと見て宜からうと思ふ。

同年の調査に據ると、千八百八十二年の調査よりも、婦人の有業者は大に增加した。且つ其增加の速力は有業男子の增加よりも、又一般人口の增加よりも速かであつた。即ち九十五年と八十二年との間に於て生じたる職業上の女性人口構成の變化は概略左の通りである。

	一八九五年	一八八二年
有業者(婦人百人に付)	一九、九七	一八、四六
婢(同)	四、九九	五、五六
家族(同)	七〇、八一	七二、九四
無業獨立者(同)	四、二三	三、〇四

即ち婦人の有業者は百分の一、五一丈け增加した。男子の有業者も此間に於て增加することはしたけれど其增加は婦人の如く速かではなかつた。即ち僅かに〇、六五の增加に過ぎぬ。從つて職業に關する人口上

男女構成の割合は左の如く變化して來た●

	一八九五年	一八八二年
有業男女百人に付女	二五、三五	二四、一六
僕婢百人に付婢	九八、一一	九六、七九
合計百人に付女	二九、七五	二九、二三

以上は職業人口上に於ける男女の構成の大體を示した丈けである。之を以て見れば、婦人の職業に參加することは男子に比して大に尠ない。併し近年に至つて迅速なる增加の趨勢を現はした。此事に就てツアーン氏は「婦人の天然の勞働範圍は、國民經濟的生產に在るにあらずして、家庭家族の內に在るのである。然るに若干の婦人は此天然の職務を實行するの便宜を得ずして、已むを得ず職業に就くものがある。其他又近世の商工業の發達に依つて、從來家內で行なつた婦人の職業（例へば絲を紡ぎ機を織り衣服を裁縫し麵麭を燒くと云ふか如き）が、家族的經濟から分離して獨立の職業となり、夫れが爲め家族的生產の範圍が狹ばまつて、家族經濟（ハウスウキルトシャフト）即ち世帶を持つと云ふ事が、主として消費の整理に限るやうになつて來て、夫れで婦人の手が空いて、家族以外に職業を求むるやうになつたのである」と言ふて居る。又ラウフベルヒ氏は種々の統計を擧げて、「千八百八十二年以來婦人有業者の百萬人以上增加したのは、男子の勞力が供給せられ得るたけ供給せられて、尙は其不足を補ふの必要があつた爲めである」と說いて居る。此等は單に大體より觀察した論であるが、尙ほ之を一層細密に稽査せざれば、其趨勢を詳かにすることが出來ない。

故を以て先づ本業の大分類に關し、男性に對する女性の職業狀態を調査して見ると左の通りである。

大分類	有業婦人 絶對數	有業婦人 百分	一八八二年に對する増 絶對數	一八八二年に對する増 百分	有業者百人に付婦人 一八九五年	有業者百人に付婦人 一八八二年
A農業	二、七五三、一五四	四一、八五	二一八、二四五	八、六一	三三、二〇	三〇、七八
B工業	一、五二一、一一八	二三、一二	三九四、一四二	三四、九七	一八、三七	一七、六二
C商業及び交通	五七九、六〇八	八、八一	二八一、四九八	九四、四三	二四、七九	一八、九八
D家事僕婢	二三三、八六五	三、五六	五〇、〇二九	二七、二一	五四、〇七	四六、二四
E公務及自由業	一七六、六四八	二、六九	六一、三七六	五三、二四	二二、三九	二一、一八
G家内に在る僕婢	一、三一三、九五七	一九、九七	三一、五四三	二、四六	九八、一一	九六、七八
總計	六、五七八、三五〇	一〇〇、〇〇	一、〇三六、八三三	一八、七一	二九、七五	二九、二三

是に依て見ると、有業婦人の五分の二は悉く農業に屬し、四分の一は工業に屬し、五分の一は家内の下婢である。而して男子に對する比例を見るに、家内僕婢の殆ど全體は婦人を以て成立つて居る。又D即ち主家に居らざる僕婢及び定業なき職工も過半は婦人である。農業では三分の一、商業交通では四分の一、工業では五分の一を婦人が占めて居る。而して何れの業務に於ても、有業婦人の増加は有業男子の増加よりも速かである。就中商業及び交通業に於ては、有業婦人の數は千八百八十二年に比して殆ど二倍となつた。Eの公務及び自由業に於ては二分の一の増加、工業に於ては三分の一の増加である。農業及びDの家事僕婢に於ても亦た増加した。從つて何れの業務に於ても男子に對して婦人の比例が高くなつて來た。其最も著るしきはDの家事僕婢であるが、之には多少調査の手續上の關係もある。次に著るしきは商業交通と農業とである。工業に於ては婦人の増加も強くなつたが、男子の増加も決して緩慢でない。故に此業務に就ては男女從業者の比例が餘り變はらなかつた。尚ほ之を地位に因つて區別して見ると左表の通りである。(但し(＋)は増(－)は減)

大分類地位		有業婦人 絶對數	有業婦人 百分	一八八二年に對する増減 絶對數	一八八二年に對する増減 百分
A 農業	獨立者	三四六、八九九	五、二七	(+) 六九、七三一	(+) 二五、一六
	役員	一八、一〇七	〇、二八	(+) 一二、二二六	(+) 二〇七、八九
	補助家族	一、〇二〇、四四三	一五、五二	(+) 一三六、二八八 (補助家族及其他の勞働者)	(+) 六、〇五 (補助家族及其他の勞働者)
	其他の勞働者	一、三六七、七〇五	二〇、七九		
	計	二、七五三、一五四	四一、八五	(+) 二一八、二四五	(+) 八、六一
B 工業	獨立者	五一九、四九二	七、九〇	(−) 五九、九八六	(−) 一〇、三五
	役員	九、三二四	〇、一四	(+) 七、〇五五	(+) 三一〇、九三
	補助家族	四三、九七四	〇、六七	(+) 四四七、〇七三 (補助家族及其他の勞働者)	(+) 八二、〇〇 (補助家族及其他の勞働者)
	其他の勞働者	九四八、三二八	一四、四一		
	計	一、五二一、一一八	二三、一二	(+) 五一四、一一四	(+) 三四、九七
C 商業及交通	獨立者	二〇二、六一六	三、〇八	(+) 五二、〇四四	(+) 三四、五六
	役員	一一、九八七	〇、一八	(+) 八、八二六	(+) 二七九、二二
	補助家族	九四、五二七	一、四四	(+) 二二〇、六二八 (補助家族及其他の勞働者)	(+) 一五二、八一 (補助家族及其他の勞働者)
	其他の勞働者	二七〇、四七八	四、一一		
	計	五七九、六〇八	八、八一	(+) 二八一、四九八	(+) 九四、四三
D 家事僕婢及定業なき勞働者		二三三、八六五	三、五六	(+) 五〇、〇二九	(+) 二七、二一
E 公務及自由業	a 獨立者に準ず	一〇二、四三八	一、五六	(+) 三〇、五二五	(+) 四二、四五
	b 役員に準ず	一四、六二四	〇、二二	(+) 一、七二三	(+) 一三、三六
	c 勞働者に準ず	五九、五八六	〇、九一	(+) 二九、一二八	(+) 九五、六三
	計	一七六、六四八	二、六九	(+) 六一、三七六	(+) 五三、二四
G 家内に在る婢		一、三一三、九五七	一九、九七	(+) 三一、五四三	(+) 二、四六

有業婦人總計				
獨立者	一、一七一、四四五	一七、八一	(十)九二、三一四	(十)八、五五
役員	五四、〇四二	〇、八二	(十)二九、八三〇	(十)一二三、二〇
家内に在る婢	一、三一三、九五七	一九、九七	(十)三一、五四三	(十)二、四六
補助家族	一、一五八、九四四	一七、六二	(十)八八三、一四六	(十)二七、九九
其他の勞働者	二、八七九、九六二	四三、七八		
計	六、五七八、三五〇	一〇〇、〇〇	(十)一、〇三六、八三三	(十)一八、七一

此表に據つて見ると、婦人は概して低き地位に於て職業に從事して居る。而して其増加も亦た低き地位に於て強大である。役員の地位に於ては其増加二倍以上にも昇つて居るが、然かし之は實數が甚だ尠ないから大勢上輕重を爲すに足らぬ。尚ほ獨立者の地位を婦人の職業上より調べて見ると、名は獨立であるも、其實は勞働者の地位と相擇ばぬやうな者も尠なくない。故に大體上婦人の職業と云ふものは地位の甚だ低いものと見なければならぬ。

又ツアーン、ラウフベルヒ二氏の著書には中分類小分類に就ての調査表があるが、其詳細は此に省略する事として、唯だ其小分類に就て現はれた重もなる現象を擧げて見ると、先づ二百七種の小分類の中で、一萬人以上の婦人が從事して居る職業は、僅かに三十二種に過ぎぬ。此三十二種の職業に從事して居る婦人の數は四百九十五萬六千八百二十一人で、婦人有業者の百分の九十四、一六に當る。而して殘餘の三十萬七千五百七十二人即ち百分の五八、四が他の百七十五種の職業に配當されて居る女子である。又右三十二種の職業中二萬五千人以上の婦人の從事して居る職業は十七種ある。結局此十七種若くは三十二種が、婦人の職業の重もなる領分と云つて宜い。尚ほ婦人の數男子に超過して居る職業を擧ぐれば二十一種、即ち婦人の數が其就業者の半數以上に昇つて居る職業が二十一種で、半數以下四分の一以上の職業が三十三種

ある。今一々其種類の名は擧げないけれど、兎に角前記の大分類に依て考へて見ると、如何なる職業が主として婦人の從事するものであるかといふ事、又婦人の從事すべき職業の種類は甚だ多いものでないと云ふ事も解かる。

何れの種類の職業に就て見るも、八十五年の獨逸の婦人の數は八十二年に比して殆ど總て增加して居ると云ふて宜しい。ラウフベルヒ氏の說に據れば『獨逸の國民的經濟の發達は、男子の職業に於ても、女子の職業に於ても、勞働の需要を急速に增加した、而して男子の勞力の供給は、今日の勞働市場の組織の許す限りに於て供給し盡した、之に反して婦人の勞力の供給は、其原因の何たるに關せず、兎に角尚は甚だ餘裕がある、是に於て婦人の職業に就く者の數が大に增殖して來たのである』との事だ。ツアーン氏の意見も大同小異である。

婦人の有業者の增加した職業の種類を見ると、從來よりも婦人の職業の領分に屬する種類が多くなつて來た。例へば農業、飲食店業、物品販賣業、被服業、織物業等である。此の外又從來専ら男子に屬して居た職業に婦人が顯はれて來た。此種の業務に從事する婦人の數は從來尠ないため其增加の割合は著るしく眼に着く。併し男子の就業者が非常に多くして且つ其增加も決して僅少でないから、婦人の增加は男女の比例を動かす程には至らなかつた。此等は多くは發達の迅速なる職業であつて、男女共に增加して行くやうである。又從業者の減少する職業にして其減じ方が男女兩方に及んで居るものがある。之は男子の數を減すると同一の原因が婦人の上にも及ぶのであるが、唯だ女子は男子よりも一層多くの耐存力を持つて居るので、男子の去り若くは減じたる後も、尚ほ往々其位置に踏留まつて居る者がある。斯樣な次第で、千八百九十五年に至り八十二年よりも有業者の減じた職業は二十二種であつたが、其中婦人の有業者の減じた

業は十四種に止まるのである。又其間には男子の數が減じて婦人の數の増加した職業がある。例へば農業製靴業の如きものである。此兩種類は何れも大體に於て就業者減少の傾向を示して居る職業であるが、特に製靴業者の減少の如きは、手工的工業より工場的大工業若くは下職を統轄する大工業に移る過渡時代の現象であつて、要するに男子は其職業を不利とし之を棄て丶他に有利の職業を求め、而して婦人は其後を填補して行くのである。之は前陳の男女共に從事者の増加して行く職業とは大に趣を異にする。此種の業務に在ては、男子の勞力を充分に吸集して、其不足を婦人が補ふたのである。而して尚ほ其殘餘が男子に向つては不利なる業務に注入されたのである。

今一つ男女職業上の比例に異なつた趨勢を現はす職業がある。即ち從來は專ら婦人の職業であつたものが現今大に男子の加はつて來たことである。例之ば被服業の如きも其一種で、婦人の從業者の増率は僅かに百分の四十九に過ぎざるに、男子の就業者の増加は實に百分の九十八に達した。又婦人頭飾品業の如きも、婦人の從事者は百分の二十八に過ぎざるに、男子の増加は百分の五十に及んで居る。而して此男子の増加は高等の地位即ち獨立者及び役員に於て顯はれて居る。顧ふに之は此等の職業が漸次商人的に組織せられ、從つて之を指揮監督する爲め男子が必要となつた結果であるが、物品の製造は、前後共依然として婦人の手に存して居るのである。

（次號完結）

女子の人格

博士　元田作之進

今より凡そ三四年前の事なりし、帝國の首府たる東京に於て女學生墮落の批難頗る喧しく、或一部に屬する某々女學生墮落の實例として新聞紙上に掲載したるものを見しこと屢々なりしが、當時余は某女學校に關係を有したる旁々、其の女學生墮落の記事を掲載せる新聞を讀みつゝ大に悲みたり、而して之を悲むと同時に之に少なからぬ同情を寄せ、又同情を寄すると共に一種の喜びをも感じたるなり、何をか悲みといふ、女學生はやがて人の妻ともなり母ともなりて、將來有爲の子女を產み出すべき責任あるもの、即ち其の第二の國民の母たるものが、斯の如く人格を破りたる行爲をなしたりとせば實に遺憾の極みにして、其の行爲ありたる土地が東京といへる首都の中央なるに至りては、國民の恥辱として、女學生全體の恥辱として、將た又た此等女學生を收容する學校の恥辱として、悲しみたり、悲みて而して再考するに及び之に同情を寄せたる所以のものは、是れ獨り女學生の或一部にのみ伏在せる事實にあらず、若し此種の實例を一々に枚擧し來らんには、男子は女子の十倍なるべく、學校內よりは他の總ての社會に於て、其の多數を占むるなるべし、而して其の數に於ては二十倍三十倍にも達するならんか、殊に甚しきに至りては女學生の爲めには模範ともなるべき敎員其人の中に在りても亦決して絕無なりとはいふべからず、然るを單に其の攻擊の鋒先を女學生にのみ向くることは、既にそが權衡を失したるものなるに、只だ一二の事實を捉へて餘濫を殘さず批難を逞ましふするは寧ろ殘酷にはあらざるか、人あり一歩を進めて、攻擊者其人の內部に立入り之れが平生を調査したらんには、却つて此等の人々の身上に事實の多きを認むるなるべしと信じたり、而も、男子のそれは多く默々に附して、獨り女子のそれをのみ列擧し、得々として之を喜ぶが如き傾きあるは解し難ければなり、次に之に同情を寄すると共に三思して一種喜悅の感ありしは、他なし、斯の如き悲むべく同情を寄すべき事實が、不幸にして女學生の或部分に幾分存在しつゝありとすれば、此

の事實の存在によりて、否、此の批難攻撃の喧しきによりて、女學生全體に向つて一の警戒を與ふるを喜びしなり、女學生中の多少廉潔心に富むものは之を聞きて憤慨せしなるべく、萬一此等の忌はしき徑路に走らんとしつゝあるものならんには之によりて悔悟の心を喚起されたるなるべく、又今後女學生として幾年かの光陰を消費せんとする新來のものに向つては豫じめ一の警戒を與へしなるべく、兎に角、何れの方面より見るも、女學生全體に對して多少有益の事なりと信じたればなり、尤も一時此の忌はしき問題の盛んなりし爲め、首府の事情に暗き地方の父兄は、或は安んじて女子を東京に遊學せしむるを肯んぜざるに至るなきかを懸念したり、而も事實は全く此の懸念には反比例を示して、女學生の數は年々に多く、從つて之を收容すべき學校の數も增加したり、而して此の批難攻撃の聲の熄むと共に、女子敎育は一段の盛況を呈し、東京市中何れの處に至るも、女學生の姿を認めざるなきに至り、電車に乘れば電車の中に、汽車に乘れば汽車の中に、將た街路を徒行すれば途上に於て、彼等女學生の容姿に接せざることなく、之を今より十年以前に比して、非常に其數を增加したることは、誰人にても等しく之を認めざるなきに至れり、勢ひ斯の如くなるを以て、自然女學生問題は敎育問題として、又た一個の社會問題として存在することゝなれり。

好し、過去は兎も角、之を論ずるの必要を認めずとするも、目下開かれつゝある日露戰爭の結果につきては、世間は一般に女子に對して少なからざる要求をなしつゝあるに似たり、從つて女子敎育の上に及ぼすべき其の影響に至りては非常なるものなるべし、今余が信ずる處によりて、其の影響を及ぼすべしと認むる點について之を說かんか、第一は、此の日露戰爭によりて我國民中何萬、何十萬といへる多數人の、尤も勇壯に、尤も働き盛りなる屈强の男子は奪はれつゝあるなり、言葉をかへて之を言へば、此の戰爭によ

りて勇壯なる有爲なる多數の男子は戰死若くは負傷の爲めに我日本の生産社會より奪はれつゝあるなり、而して我日本の社會が此の働き盛りなる二十一二より三十、四十の頼母しき男子を奪はれたる結果は、果して如何なる狀態を呈すべきかといふに、此の不足に對しては、健全に生存しつゝある日本人が其の塡補をなさゞるべからず、即ち此の戰爭によりて奪はれたる學校教員、官吏、並に商店員とも、殘存したる人人によりて補はれざるべからず、而して其の塡補を要すべき人員は計算上決して少數に止まらざるべし、之を米國に於ける南北戰爭後の實例に徵するも、四年の久しきに涉りし出軍の爲め非常に多數なる男子を失ひたる同國にては、從來男子の手によりてなされつゝありし事業が多く女子の手に移り、其の遺習として、否、寧ろ米國婦人の一の慣習として、今日に至るも各商店に於ける店頭の賣子、小學教員、中學教師若くは中學校長の如き職務を執るに至れり、現に米國にては、各商店の賣子は女子最も多數を占め、小學教員は殆ど其の總てが女子の職務に歸し、女子にして中學教師となれるものも少なからず、中學校長となれるものも亦往々見受くる所なるが、女子の職業は唯だ單に之れに止まらず、教育界より實業界、實業界より官界にまで切込み、各官衙に於ける下級吏員、即ち田舍の郵便局内の執務の如きは殆ど女子の職業の如く見做され居り、其他、速記、簿記、店頭の執務、電信電話の事務、及び銀行會社の書記などは、皆女子の職業にして、或州の如き女子に議員たるべき選擧、被選擧の權能を與へ、女子にして議員の職に在るものも亦た尠なからず、尤も此の女子の議員の如きは、元來我國とは事情を異にする國柄のことなれば、直ちに取つて之を我國に比せんことは穩當ならずとするも、南北戰爭の結果が女子に向つて要求したる以上の事實より考ふるに、日露戰爭の結果が今後我國の女子に向つて大に要求すべきことあらんは、火を睹るよりも明らかなる事實にして、從つて女子の責任は今後一層重きを加ふべければ、諸君は各種の學術と

共に實業教育をも習得して、他日社會の爲めに働くべき覺悟あるを要す、次は、此の日露戰爭の爲め戰死、若くは負傷して不具廢疾となりたる人々の中、將校に在ては其筋よりの賜金も少なからず、又家計有福の向も少なからざるを以て、直ちに悲慘の境遇に陥るが如きことなしとするも、其他通常の下士卒に在りては、其の家族たるものは町村郡區の厄介となりて、所謂恤兵の救護を受くるの外なきもの、比々皆然らざるはなかるべし、然るに若しも其の妻たり姉妹たる人々に、社會の勞働に堪へ得べき素養なき時は、果して如何なる悲慘の境涯に陥るべきか、其の妻たり姉妹たる人々にして、男子と同じく社會の或種の事業の爲めに働き得るものならんには、例令一家の主人は戰死するとも、將た不具廢疾となりて勞働する能はずとするも、優にそれら女子の手によりて一家を支ふることを得べし。若し然らざる時は、一家は忽ち其の生計の途を失し、取殘されたる妻は止むなく生家に立歸らざるを得ざるが如き始末となり、其極一家離散の不幸を見るに至るべし、即ち日露戰爭の結果は、女子に向つて社會に立ちて相當の働きをなすべく要求するものにして、要するに日露戰爭は女子たる諸君に向つて一の教訓を與ふるものに外ならず、

由來我國は、日清戰爭の如き、將た日露戰爭の如き、人爲的事變の多きのみならず、世界に於ける一の災難國なり、地震は多く、强風は多く、火事は多く、兎に角宇内無類なる天變地異の國なるに、今や文運日に開けて化學の進歩すると共に、器械の使用は益々頻繁となり、此の器械の使用の爲めに死傷するものは年々其の數を增加することゝなれり、故に文明の進歩は人類を或る程度まで損害しつゝあるなれば、よしや戰爭の如き人爲的事變は第二とするも、諸君の夫、若くは父兄は何日何時如何なるものゝ爲めに奪ひ去らるゝやも知るべからず、故に諸君は諸君自身の腕前、働きによりて一家を支へ兒女の教育をなし得ざるべからず、若し此の腕前、働きに於て欠ぐる所あらば、諸君は人の妻たるに不適當にして人の母たるにも

亦た不適當なれば、結婚をなすことも亦た其の可ならざるを見るなり、諸君にして其の一家の主人を奪ひ去らるゝも、よく一家を支へ兒女の教育をなし能ふだけの自信と目的なくば、人生唯一の大事たる結婚は、偶ま以て諸君の爲めには不幸の原因となるべし、此の如く今後は時勢の進歩に伴ふて、女子の責任が重大なると共に、諸君の勉强勵精すべき事柄も益々多きを加ふることとなるが、其の學科より得來りたる働きの外に今一つ必要なるは、即ち女子の人格を發揚することにして、斯の女子の人格を養成することは、多くの學科の必要以上に必要なるものなり。

熟ら各種女學校の規則書につきて、其の第一條に記載したる大綱領ともいふべきものを見るに、文字の排列にこそ相違はあれ、悉く、

本校は賢母良妻たり得べきものを養成するを以て目的となす

といふが如き意味の文字を記したり、因て今其の文字の示すがまゝに解釋したらんには、此等の學校は母たり妻たる希望を有するものゝ爲めには適當ならんも、終生妻ともならず母ともならず、獨自一個を以て社會に働かんとする女子の爲めには不適當なるものに似たり、勿論、女子教育の目的として賢母良妻たらしむべき必要を認むるはいふまでもなき事なれども、其の主眼とも稱すべきは女子の人格の養成に在り、此の養成にして完全になし遂げられ、此の人格にして完全に發揚されたらんには、何れに適くとして可ならざるなく、母となりても、妻となりても、コックとなりても、下婢となりても、一として其の適當なるを認められざるなく、授けられたる職務に對しては之を十分に遂行し得べきなり、之に依て考ふるに、各種女學校の規則書に現はれたる文字の面は如何なるにもせよ、其の大眼目とする要點を叩き來らば、各學校とも女子の人格を養成する點に重きを措きつゝあるは復た言を待たざるべく、これが建設者たる人々の

見地も亦た此の外に出ることあるべからず、言ふか言はざるか等しく人格養成の必要を認め居れるに疑ひなし、故に女子が多年の光陰を費して教育を受くる所以のものは、單に妻となり母とならんが爲めにはあらず、要は其の人格を養成して之を發揚するに在り、結婚の如きは人生の第一目的にはあらざるなり、是れ獨り女子のみならず、男子に在りても亦た然り。

然らば則ち、女子の人格は如何にして養成し得べきか、此の問題を解釋せんには先づ知德の關係を明らかにするを要ず、教育上國文、理化、數學等の科目によりて、諸君は多くを知ることを得、即ち知識を完全ならしむることを得んも、之によりて人格を養成せんことは望むべからず、國文と德、理化と德、數學と德、此等は決して並行し得るものにあらざれば、諸君は多くの學科を完全に修得したりとて、それにて滿足し得べきにあらず、何となれば、人生尤も大切なる德の養成を欠ぎたればなり、果して然らば如何して可なるか、人格は如何なる方法によりて養成し得べきか、往昔希臘の哲人ソクラテスは「知は德なり」と唱道したり、而も知と德とは元來別種の問題なり、知を涵養したりとて德の圓滿を望むべきにもあらざれば、德を養成し得たりとて知の完全を期すべきにもあらず、左すれば女子の人格を養成すべき方法は如何といふに、今日實際に行ひ得べきは、一面矯風も必要なり、即ち裏面に向つて正しからざる善からざる點を矯め直すことの必要はいふまでもなからんが、余は寧ろ表面よりして善事を勸めることの、却つて矯風の必要よりも一層必要なるべきを信ず、假令ば花園を作るとせんに、其の園內に生ずる雜草を刈り取ることは、言ふまでもなく花園を作るの上より見て、尤も大切なることには相違なし、先づ其の雜草を刈り取りて而して後に之を完成せんことは固より必要なり、而も其の雜草の幾分は尙は殘存し居り、未だ充分の刈除をなし遂げざる時に在りても、之れに山を築き、水を貯へ、橋を架け、松を植ゑ、櫻を植ゑ、燈籠を

据え、石を措き、諸種の設備を施したらんには、少許の雑草は遂に蔓るに處なく、やがて完美なる花園となすことを得べし、それと同じ道理にて、余は常に人に向つて、爲すなかれと戒しむるよりは、なせよと勸誘することの効大なるを認め居るものにて、惡事を戒めむよりは勉めて善事を勸めんと欲しつゝあるなり、即ち女學生の或者に向つて之が墮落を矯正するは固より必要なれども、女學生全體に對して善事を勸め、善さが上にも尚ほ善くなるべく、誘ひ導くことの極めて切要なるを信ず、余は此の見地によりて、女子の人格の養成につき、二つの方法を研究し得たり。

第一の方法は男女交際、男女交際といへば今日の場合、諸君は聞くと等しく一驚を喫するなるべく、又世間には、そは人格を養成し得べき方法にあらずして寧ろ其の人格を破るべき導火線にはあらずや、との疑念を起す人もあらんが、余の見る處を以てすれば決して然らず、抑も男女兩性の關係として、男子の性格は女子の前に於てのみ完全に發表され、女子の性格は男子の前に於てのみ完全に發表さるゝものにして、其の發表されたる性格は、兩性ともに優美高尚の點を認め得るなり、其の他、男子が男子に對する時、若くは女子が女子に對する時に在りては、兩性ともに其の性格を完全に發表し得んことは望むべからず、故に優美高尚なる性格を發達せしむる爲めには、男女間の交際を頻繁ならしむるは尤も大切なる一の方法なり、勿論、此の目的に於ける男女の交際は其の間一點の汚濁をも容すべからず、清淨無垢なる此の完全の性格を養成する目的によりて、汚れなく行はるゝものならざれば不可なり、即ち余の所謂男女交際は此の目的を達する爲めの交際ならざるべからず、若しも、男子をして自己に對して罪惡を冒さしめ、又は、男子の誘惑によりて自己なるものを失ふ如きことあらば、こは以ての外の事なり、故に此の方法によりて人格の養成をなさんとするには、先づ女子其人の自重心と大確信とを要するなり、女子は常に眼中男子なる

ものを措きて女らしく努め、或點までは男子に對して極めて親しく交際するの必要あり、尤も此の正しき交際の區劃を少しにても逸したらんには、人格養成上些の效益なきのみならず、非常の害毒を及ぼすものなるを以て、極めて愼重周密なる注意を要することは言ふまでもなし、但し、世間一體の女子に自重心と大確心との欠乏しつゝある今日に當りて、此の理想の問題を直ちに實行せんことは困難ならんも、一面男子に對しても此の用意を充分に與へ置き、而して女子も亦た充分の用意をもつて之を實行したらんには、漸次に其の効果を收むべき時機は來るべしと信ず、乃ち之が豫備方法として、女子は切に今日に於て、自重心と大確信とを把持することに務めざる可らず。

第二の方法は他を模範として自己を養成するに在るなり、由來人格の養成に於て成功したるものは、書籍上の研究にあらず、又た、教師其人の講義にもあらず、論語を讀むもバイブルを讀むも、之れによりて成功せんことは頗る難し、所謂小なる人格は大なる人格を以て感化し得べきものなれば、諸君は努めて大なる人格を見出して、之によつて自己を感化することを務むべし、而して其の大なる人格は幾多の歴史中にもあれば、又た現存して諸君の眼前にも在るものなるを以て、諸君にして心茲にあれば、歴史を讀みゆく際に於ても容易に理想とする人物を見出し得べく、其の外、諸君が日常交際往來つしゝある人々の中に、高尚にして優美なる教師、朋友を見出さんことは亦決して難きにあらず、既に之を見出さば朝夕心して之に接すべし、之に接することの久しきに及べば、自然に其の人格に同化せられて、前に模範としたるものを後には自己のものとなすことを得るなり、假令ば親たるものが如何に口頭にて善事を其兒に勸むるも、其兒の目前に正しからざる行をなしたらんには、其の善事を勸めたる効なく、口には之を勸めずとも、行を以て善事を示せば、其兒の之に同化さるゝは、卑近の例證ながら爭ふべからざる眞理なるを以て、諸君

は朋友、敎師に對しては撰びに撰んで之が模範を取り、又た勉めて故人の高潔なる傳記を讀むべし。
以上、第一の方法は稍實行に困難ならんも、第二の方法に至りては極めて容易なる養成法なれば、諸君は努めて大なる人格に接することを心懸け、之れが實行に怠るべからず。
之を要するに、女子は日露戰爭によりて社會の要求に迫らるゝと共に、其の責任は重きを加へ、其の修養すべき科目は增加するが中に、尤も重きを措くべきは人格の養成なり、聊か之が養成方法を述べて、女子諸君の參考に供す、

（此篇は元田博士が矯風會にて女子の爲めに講演されし大意なり、）

戰勝後女子の覺悟

日本女子大學校敎授　杉浦政泰　述

何れの國に於きましても、戰後國民の責任は非常に重大なるものでありまして、國民がよく其責任を知つて、つくすと、つくさないとは、非常に國運の消長に關係があるものであります。
若し其國民にして徒らに戰勝をのみ狂喜して、戰後の策其宜しきに出でなかつたならば如何でせう、……折角幾千の屍を犧牲とし、たふとき軍人の血を以て得たる名譽の冠は、見る間に地上に蹴落されるでありませう、されば今、
名譽の大なる戰

を、なしつゝある我が日本帝國の國民は、須らく考慮す可きの秋であります、實に我が國民が戰後の責任の重大なるは、云ふ迄もなく皆樣も御承知の事で、誰も彼も萬人の均しく認むる所、且また其責任の全部を擧げて男子にばかり擔はしむ可きものでなく、女子もまた其一半を分つ可きは、今更申す迄もありません、この一理由を以てしましても、**今日の女子は**悠々として、安眠を貪る事は出來ないのであります、そればかりでなく、且つ大に愈々進んで、世界の競爭場裡に侵入せんとして居る我が國の社會は、今後必らず各方面に、益々活氣を帶びて來まして、恰かも閑靜な小石川より忽ち銀座の街頭に立つ樣な思がするでありませう、鉛雨鐵霰の戰爭は今後も尚は、開戰以來の好果を繰返しつゝ勇ましく最後の凱歌を奏するを得ると假定いたしましても……………否必らず然だと信じますが、次に來る**戰爭ならざる戰爭**は果して如何なるでありませう、商工業の戰は如何でせう、農業の戰は如何でせう、彼のフランスや、アメリカは、日夜、轟々壯大なる機械が運轉しつゝ、盛に羽二重を織出し、現に御存じの通り聖路易の博覽會に於ては、其光澤多き事と、又手垢のないことゝ、廉價なることゝに於て、優に**我が國産を嘲弄**する樣な現象を示して居るではありませんか、又彼の米國は、滔々たる密河の水を引て、渺茫萬頃の米田を開き、大に農事にはげみつゝあります、實に盛なものであります、バンクバーに支店を有つて居る輸出貿易の大家が申しますのに、七八年後にもなりましたら

外國の良米は傲然として私共の食膳に上り來るであらうとの事であります、これを以て思へば、我が國の農商界も、また實に心細いではありませんか、夫の第一次の戰爭は主に男子の血と肉とに依らなければならないのでありますが、

さて、この第二次の戰は、半は男子の腕と、半は女子の纎手とに待たなければなりません、この一大責任を双肩に擔つて居る明治の新女子は、正に非常に強健な心意と、非常に強健な身體とを養はねばならないのであります。でありますから、女子の高等教育の必要が、刻下の如く切實なるは、實に空前でありまして、また絶後だと云つても敢て過言ではあるまいと信ずるのであります、それから

腦の教育

の程度の高まるにつれまして、體の教育も亦これに準じて愈々振はねばなりません、然でないと、腦裡に蓄積する學識の重量に堪へない樣になりまして、折角の身體が終には衰へ、或は中途に倒れ、更に非高等教育の聲が、天下に、かしましくなる樣な結果になる事は、所謂火を睹るよりも明かな事であります。彼の太平洋對岸の共和國＝米國＝に於て、女子の高等教育が、日に月に進み、近來長大足の進歩をしまして歐洲の各先進國を後に瞠若たらしむる愉快なる境に進みまして、而かも其間に、些少しの非難の呟きを聞かないのは、そもそも、これ體育激勵の結果ではありませんか、さて彼の米國は元、清教徒主義の感化を受けまして、建國以來體育は頗る微々たる樣でありましたが、獨逸人民の移住と南北戰爭とは端なくこれを警醒しました、……丁度浦賀一發の砲聲が我が徳川三百年の夢を破つた如く……先年シカゴ博覽會の時

でありました、體育界に其人ありと知られた、有名な博士サーゼントが幾多女子大學生の體格の平均を取て、そして自然大の女子の模形をつくり、これを博覽會に出品された事がありましたが其體格の立派な事と云つたら毫しも大學教育を受けない者に一歩も讓らなかつたのであります。Fairly healthful attraction and above all, throughly womanly.（仲々壯健にしてまた愛す可く、而かも頗る婦人らしく）でありまして、夫の最も完全なる人類の標本といはるゝギリシヤの神像に恰似でありました。また裁縫を彼地に習ひに行つて近頃歸朝した人の話によりますと、――誰も知つて居ます樣に、彼地では服の注文をする時には、皆各自、自己の身體に適合する樣に寸尺を計つて依賴するのでありますから、其の服の注文寸法に依て女子大學生は直に知る事が出來る由であります、即ち後の丈が長くて、前の丈が短いのは體格のよくない方なので、大概、前も後も同じ位の丈の人は立派な體格を有つてる人であります……そうして米國の女子大學生は、何れも、この前後、同じ丈の服を着る、頗る立派なる身體を有つてるのであります、實に羨ましいものです。

そして如何して、こんな好結果を來しましたろふか、其原因をたづねますると、實にこれ全く（一）サーゼント式（又獨逸式）（二）瑞典式（三）デルサード式この三種の體育が各女子大學を通じて、盛に行はるゝがためであります。ヴァサーの如きはテニスのコートが十五あるのです、そして外にはロックフェラーと云ふ豪商の好意で出來た、百呎に四十呎の小湖がありまして、舟に棹

す事も出來るし、また靴で滑る事も面白いでせう、兎に角雪の晨、花の夕、湖畔は常に樂しげな聲で充たされて居ます。中にはまた卒業生の寄附で以て出來た、大體育館の雲を凌ぐのがありまして、階上の演技場に喝采の絶ゆる事がないなどは珍らしくもない事で、階下の游泳槽には、

束髮頻に浮動す

と云ふ樣な有樣でありまして、校長のデーラー氏が鼻を蠢かして「米國の女子教育は大に女子の體格を改良した」と云はれるのも尤もな事であります。ウエレスレー女子大學には、校醫と身體檢查醫と體育館長と能辨術の教授とで成つてる體育會がありまして、頻りに新奇の運動を研究し、體育の奬勵を勉めて居ます。テニスコートが十三ありまして漕艇も亦盛にやります、生徒

七百人中

病氣のために退學する者が一年に僅に二十九名に過ぎないとの事であります。スミッス女子大學にも亦卒業生寄附の壯麗な體育館があります、館内には游泳槽、浴場、更衣室などがありまして、設備も極めて周到であります、且附近丘陵の散歩も、なか〲盛なのです。ブリンモア女子大學の體育館、これまた、合衆國有數のものでありまして、半年毎に身體を檢查して、入館の許否を決するのだそうです。

米國四大女子大學の

體育の隆盛な事は、今御話しいたした通りで其他は推して知る可きです、實に文明國の體育はこの通りであります、また大に天下に雄飛せんとする戰後の日本帝國……その女子は大に、こゝに見る所があつてよく自己の國家に對する責任を思ひ、同時に

大なる覺悟を以て

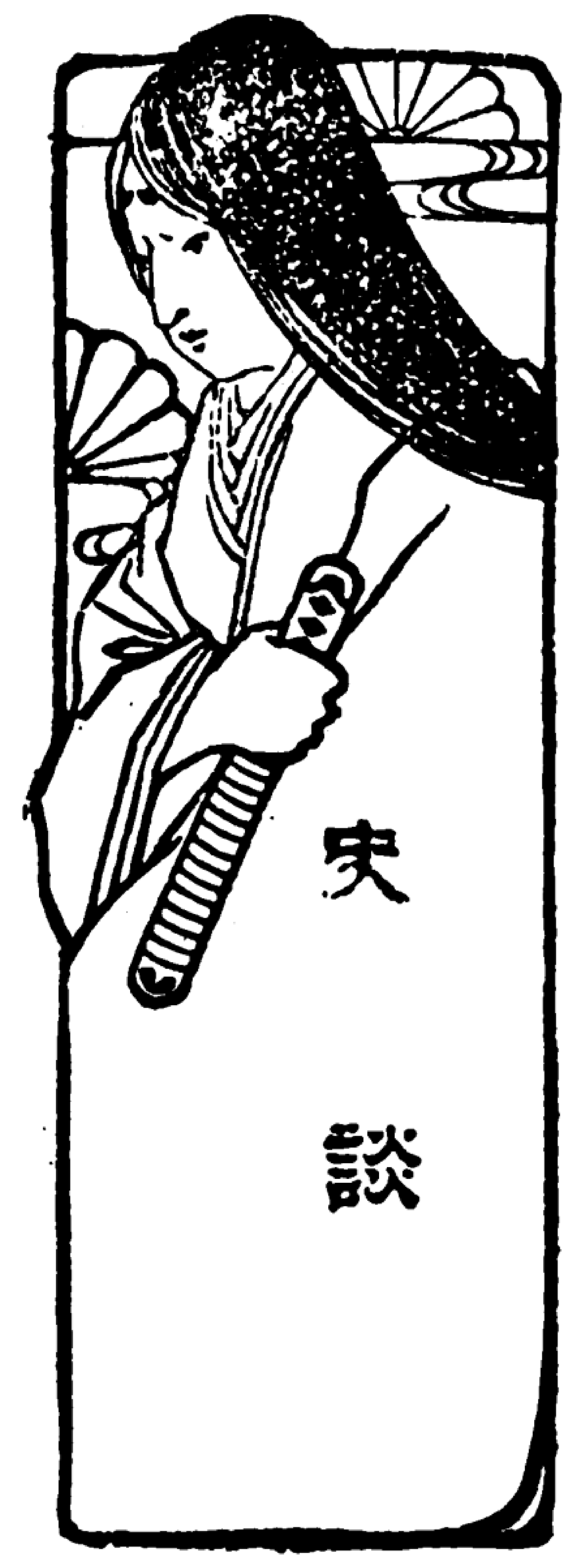
いよ／＼益々、其體育を奬勵せなければなりません。我が國女學校の體操を見ますと、一體に其進歩が遲遲たる觀がある樣です。若し二十年前の小學校教育時代、また從來の高等女學校教育時代ならば、それでよかつたのでせうが、今後大に勃興す可き、我が國女子教育の將來を思ひますと、頗る不滿に感ぜらるゝのであります。學科は高等女學校に進んでも體育は何小學校であるとか、また學科は女子大學に進んでも體育は依然として高等女學校だと云ふのは、抑も不可思議の現象ではありませんか、今後戰勝後の女子はなほ更、家庭に學校に、體育を盛にせねばなりません。

それから體育に次で必要、大切なのは、今後の女子に、職業をさづける事であります、中等教員、小學教員などの資格でも、裁縫刺繍などの教員資格でも、女醫でも、記者でも速記……タイプライター……何でもいゝから職業を授けて置く可きであります、これは中流以下の女子ばかりでなく、中流以上の婦人にも極めて必要であります、なぜ必要であるかと云へば、今日は第一社會の變動と云ふものが、甚だ激しくなつて來まして、丁度、昨日の淵は、今日の瀨となると、古人が咏じたあすか川の如く、また例へば、朝滿開の櫻も、夕に其影を期し難い如に、富貴は一場春夜の夢、古來より變り易いのでありますが、殊に世が文明になり行く今日の社會では、その現象が甚しいのでありまして、世の富は賴む可からざるものであります、だから婦人とても……苟しくも文明國の女子たる以上は、まさかの時の覺悟が肝要であります、轉ばぬ前の杖が必要なのです、かくの如くして、帝國の進歩を助け、國民たるの義務をつくさねばなりません。また偉い人を夫としても、

其人の生命は矢張、頼にならないのであります、此頃軍人の寡婦が路頭に迷ふのをごらんなさい、もうこんな戰爭は今後無いとしても、戰爭でない戰爭――商工業の戰爭――は今の戰爭よりも烈しく、負傷者や、戰沒者は今の戰爭より多いかも知れぬ、この渦卷の眞中に立ち色々の不幸に逢つても、シツカリ、やつてゆくには是非自活するに足る職業がなくてはならぬのであります、マサカの時には何かの職業に從ひ己れは勿論、小供の二三人は養つてゆく技量を備へる事が必要ではありますまいか、これは實に大切なる事だろふと思ひます。假令、そんな場合に立入らずとも、平時に於て、己れはこれ丈けの技倆があると思ひますと、これに越した安心はありません、恐らく宗教上より來る安心に劣らない安心だろふと思ひます、而して、かゝる資格を備へる事は第二に、女權擴張の上にも大關係があります、いくら、口でばかり女權を擴張しても、男女同權を叫んでも、實力のない所に權利のあろふ筈はないのでありまして、敢て世の物笑ひとなる丈けの事でせう、これに反し、口に一語を言はずとも、若し婦人各勵んで、それ丈の實力、資格を備へますなら、云はずとも人は尊敬します、ごらんなさい、貴き威嚴、若しくは品格を備へてる人の前には自然と頭が下るではありませんか。女權の擴張は決して口で云ふのみを以て足れりとするのでありません。然る可き實力を養つた、事實の上に其位地を高む可きであります。其點より云つても職業は、いよ〳〵必要であります。

今後の女子諸君に注意してもらひたいのは、要するに、體育と職業との、この二つであります。

（をはり）



義侠なる女文學者 コッチン女子

吉田義卿

虎の尾を踏むとかいふなる危き機に臨みて、心を沈め氣をやはらげ、從容として、迫らず恐れざるは、男子といへども甚だ難しとするところなり、況て婦人の身としては、かゝる時には、胸轟き魂悸きて前後をさへ辨へぬが常なるに、凛然として其間に處し、却つて敵をして、自づから服從せしむるが如きは、匹儔稀れなることゝいふべし、フランスのソヒア、コッチン女史は、則ち是なり。

ソヒア、コッチン、コッチン女史はボルダウ府の銀行家コッチン氏の妻なるが、夫と共にパリスに移住せしより間もなく、その夫を失ひたり、女史此時齢方に二十歳さなきだに容顔世に優れて、艶麗珠玉の如くなるに千代を契りし愛しの夫に別れたれば、愁に沈める其姿の譬へば雨に濕ほふ花にも似て、また格別の眺めをましぬ、左れば優しき巴里男の燃る許りの胸の懐を包みかねて、それとなく言寄るも多かりしかど、女史は更に之を肯がはず、貞節堅固に身を持ちて、再婚の勸めに隨はざりしは、わが國古來の節婦にも似て、歐米には其類甚だ多からざる所なるべし。

それより後女史は、深くも心靈界に分け入りて、專ら宗教文學などの研究に身を委ねければ、その優美な

る思想と感情とは、自づと詩歌文章にあらはるゝに至りぬ、かくて女史はその小詩と物語類の著作をば梓に上せて、大に世の喝采を博しけるが、その發行の手續こそ、實に稀づらしくもまた感ずべきなれ、そは此頃は彼の有名なる千七百八十九年の革命後に當りければ、女史は孰れの黨派にも關係せず、偏へに讀書修學にのみ耽りしとはいへ、罪なき多くの人人が、或は鐵窓の月に啼き、或は斷頭臺上の露と消ゆるなど、哀れなる噂の聞こゆるが中には、豫ての知合の人さへ加はりければ、やさしき胸に同情の涙を湛へて、双の袂をうるほしにき、折しも或夕べのことなりき、女史は思ひもかけず、一片の書牘に接したれば、何事にやと封じ目とく／＼讀み下すに、

拜啓小生義は是まで一兩回御目に懸りたる位の事に御座候へば、定めて御記臆とてもこれあるまじく存候へども、目下危難身に迫りて萬策謚き果て候まゝ、貴女の御援助を仰ぎ度と相願い候次第に御座候。

小生の姓名は、罪人目録の中に認められ居り候へば、探偵又は反對黨等に嚴しく注目され、歩々刻刻斷頭臺へと近づきつゝあるにて候、されば一身を安全にするの道とては、唯々外國に向ふの外之れ無く候へども、差當り入用なるは金錢にて、殘る家族の生活に要する費用は、調達致し置かざるべからず候、願はくば此義御諒察下され候て、不幸なる家族の生活費として、二千百五十リーブルを御惠み下され候はゞ、幸福の至りに存じ奉り候使の者は十分信用するに足るべき者に候間、御疑念なく御返事下され度候不備、

ド、フォンペル

女史は思ひ出しぬ、フォンペル氏とは嘗て或家にて席を同うせしことありしが、其時一家の人々より、痛く尊敬せられたる紳士こそ乃ち彼なるを、縱ひ知己は薄くとも、今生死危急の時に當り、態々救ひを求めしものを、爭でか助けずに措かるべきと、義と愛とに富める其心には直ちにかくと決心せしが、

其身も元より富めるにあらねば、如何にして二千百五十リーブルといふ大金を調ふべきやと深く思案に暮れけるが、偶と思ひ出せるは、慰みにとて豫て認めたる夫の小詩小説をば、書肆に賣りて金に換へんには、事大方は成就せんと、元來女史の性質として其名其著作の世に顯はれ人に知らるゝを厭ひしかどかゝる非常の時に際しては、前後を顧慮すべきにあらざればとて、愈々それと思を決し、一刻も猶豫すべきにあらざれば、直ちに舊稿を開きてその不完全なる處に添削を加へ、速かに脱稿せんと、燈かき立てて机に向ひぬ。

夜は早や深けて、午前二時過る頃となりけり。草木も眠るといふなるに、誰ぞ、ホト々々と戸をたゝく音の聞えぬ、さては警吏憲兵等のそれと悟りて來りしには非ざるかと、胸先づ騷がれけるぞ道理なれ、推量果して違はずして、數人の憲兵は闥を排きて、女史の室に入來れり、此時女史は心を靜めつゝ最も落附拂つて答ふるやう、妾は著作を以て職業とするものなれば、眞夜中すぐる頃までも斯く机に對ひて勉め居るなり、若し尚ほ疑ひ晴れ玉はずば、拙なけれどもその小説の筋書をば、概略お話し申さんにと陳べければ、そを聞かんとて、いづれも女史の邊りに椅子を寄せぬ、女史は巧妙なる音聲と身振もて、その書中の筋々をうまく語りければ、一同其の面白さに感動しけん、暴くれたる髯男の、曾ては罪なき哀れの者を情容赦もなく、刑場へと曳出して、首刎るをもて樂しみとせるが、お可笑や、潸々と泣き出だして、殆んど席に堪へ得ぬまでになりけり。かくて物語りは了りぬ、彼等は最も滿足して、その職務なる家宅搜索は名のみに止め、慇懃に握手の禮を爲しつゝ、その書の發刊せられたる時には、一同一冊づつを購ふべしなどいひつゝ歸りけり。

程なく稿を了へければ、明る朝早く書肆へと持ち行きて買はんことを求めしが、昔も今も、西も東も、みな同じ道理にて、名の知れぬ作者の著述は、善き惡きの區別なく、拒絶はるが常なれば、遂に二十餘

軒の書林を廻りしかども、一人として相談に應ずるはなかりき。されど女子の一たび決心したる友誼上の熱心は、拒絶に逢ひて容易に屈すべくもあらざれば、遂に或る知人の紹介によりて、篤實なる某書肆の許に至りて面會しぬ。書肆の主人は女史の金錢に困り居れると聞くものから、親切にも承諾しつ、さて何程の金子を要せらるゝにや、文章は美はしく書かれたりと見受くれど、左りとて傑作とはいふべからずといへり。女史は答へて、御親切にあまへて御答へ申さん、非常に迫れることありて、五十ルイスの金を要するなり、五十ルイスと聞きて、主人も一時は躊躇せしが、女史の苦心せる狀を見て、氣の毒とや思ひけん、遂に心よく承諾して、この少なからざる黄金をば、其場に女史に渡しけり。女史の喜悦は如何なりけむ。かくて急ぎ其家に歸りつ、かの二千百五十リーブルの金をば、使の者に渡して、フオンベルへと贈り、その餘りをば、己が家計の爲めにとて、保存することゝしけり。それより二週間を經て、フオンベルの手翰は屆きぬ、無事に外國に到着したる悅びと、女史に對する感謝とは、字句の間に溢れけり、而して之と同じ日に、その著述は發刊されて、世に公けにされけるが、一般世人に歡迎されて、幾萬といふを賣盡したれば、女史の名聲は一時に高く揚りて、其後は之にも優れたる、著作をなして、いよいよ世の賞讃を受くるに至りき。

花の二十歲の頃よりして、確く貞操を守りて動かざると、一面半知の友人に對して、盡せること斯の如きと、及び危害目前に迫れるに臨みて、沈着從容たるとは、女史の人格の如何に高尙なるかを知るべしその文學に造詣することの深くして、著述の世に賞讃せらるゝもまた偶然ならずといふべし。

我國近時の女文學者と自稱するものを見るに、多くは徒に意を文句の間にのみ馳せて、揚々として人に誇り、ひとへに世評の高からんとをのみこれ力めて、毫もコッチン女史の義と愛とあることなきは、寔に耻づべきの至りならずや。

江戸時代の烈女

西村梅軒

(其二) 酒井忠峯の母堂

元祿の頃に名高き酒井雅樂頭忠清は上州前橋の城主にて、其比天下の大老を勤め理世安民の良臣なりと稱へらる。然るに將軍家綱公の御舍弟甲府宰相左馬頭綱重公御部屋住の節に、聊か御入用の筋ありて、金子三萬兩借用被遊度よし雅樂頭へ仰付られたるにぞ『雅樂頭當分は御倉廩の金子乏しく、御逼迫の折柄なれば、その內時機を見計らひ差上ぐべき旨』御返答に及びたりしに、綱重公には殊の外これを御遺憾に思召し、委細遺書に認め、御短慮にも御屠腹に及ばれたり。其後この遺書を家綱公の御覽に入れけるに、家綱公には以ての外御氣色惡しく、畢竟雅樂頭の不調法と相極まり、直ちに閉門仰付られける。雅樂頭以爲らく、我が身天下の大老にて餘り念入り過ぎたるより計らざる罪科を得かくなる上は最早是非に及ばずと、先づ妻子に暇を告げ、その夜潔よく自刄して相果てぬ。その比御呵責を蒙りて切腹するものは、其家斷絕する掟なりければ、酒井家と緣ある歷歷の諸士寄集まりて評議の上、表向きをば雅樂頭急病にて卒死したることに取極め上聞に達したるに、家綱公には御憎み深く、怒氣容易に釋け給はず、當時出頭隨一の堀田筑前守正俊を檢使に撰ばれ、雅樂頭卒死の樣子委細見分致すべしとの事なり。

是に於て筑前守上意を含み雅樂頭の屋敷に至れば、藤堂和泉守高久、松平讚岐守賴常、水野美作守勝慶松平豐後守定有等親族の面々いづれも言葉を揃へて申しけるは『夜前雅樂頭儀俄かに發病、さま〳〵療治を加へ候も不相叶卒死いたし候、親族一類共かく申上候うへは、御見分も御苦勞の至りに奉存候、上の儀は何分にも宜敷やう御執成賴み奉つる』よし述べたるに、堀田筑前守は生來邪智佞奸の人にて、無謀にもその頃日本第一の大船たる安武丸を破却し

後逆心の機顯はれ、殿中に於て稻葉石見守に殺害されたる程の人なりしかば、此の時威儀を正し『某儀多人數の中より殊に檢使仰付けられたるに、委細の樣子も見屆けずして罷歸り、卒死と申し上んこと上を欺くに同じ』と言へば、藤堂和泉守威猛けだかに伸び上り申しけるは『身は不肖に候へども、斯く申す高久を始じめ、その外一門の諸士みな雅樂頭卒死の儀を誓ふ、武士の僞言申し入れべくや、侍は相互是非御承引これなきに於ては、この上は寢屋へ御同道申すより外なし、見苦るしくは候へども早や御見分』と、眼をいからして座中を屹と見廻はしつゝ覺悟の體に見えければ、流石の筑前守正俊も薄氣味惡くや感じけん、貴公左樣に仰せらるゝ上は別儀なしとて實檢に及ばずその儘引取りたり。然れども家綱公には御憤怨倘ほ強く、その後大手下馬屋敷を取上げこれを松平肥後守正容に下されたるは誠に是非なき事共なりき。

酒井雅樂頭の內室は藤堂和泉守高久の伯母にて氣骨ある女性なりしが、今更ら詮方もなければ、姑並びに子息河內守忠峯もろとも大塚なる下屋敷に引込みその後暫らく謹愼を守り居たり。然るに五十日も經つたれども、跡目家督の沙汰なく、何の仰せ渡され事もあらず、雅樂頭の後には堀田筑前守正俊大老に仰付けられける。酒井家には一門の諸士度々寄集まり家督相續の儀に付評議さまざまに涉りけるが、ある日藤堂和泉守言ふやう『かく內輪の評議いつまで相續き候とも埒明くまじ、依つて某老中を驅廻はり兎に角有無の沙汰探り見ん』と、夫より自身老中に對面して『酒井河內守儀未だ跡目出勤の仰せ渡しこれなく候も、最早日數相立ち候へば如何取計らひ然るべきや』と尋ねしに、老中方みなその儀尤も至極に存ずるよし應へられぬ。然れども何故か日一日と延引して容易にその沙汰もなかりける。

然るにその頃偶々朝鮮の使臣來朝して、將軍家より彼の國王に贈るべき返柬を認め遣はしたる處、その返柬に大老堀田正俊と記しありたれば、朝鮮の使臣

これを見て不審に思ひ、是まで貴國と弊國との間に取替はしたる證文には、下馬將軍酒井雅樂守忠清と記しありて先來よりの印形も明かなり、然るにこの書に堀田筑前守とあるは何者ぞや、かく前後相違せる返簡にては弊國王迚も合點致さず』と申しければ酒井雅樂頭儀病死したるに依て同役たる堀田筑前守立代つて後を繼ぎたる趣き申し聞かさせたれど彼の使臣中々に承服せず『然らば下馬將軍雅樂頭の子孫あるべし、日本國にては世嗣なく皆一代限りにて斷絶するや』と尋ね、容易に納得する樣子も見えざるゆえ、將軍家に於てもさまぐ詮議の上、是非なく太田備中守を酒井家に差遣はし、河内守に亡父に繼ぎこの印形仕つるやうにと相達せられたり。

河内守忠峯は此の時未だ十六歲に過ぎざりしかど、母公の養育行屆き、智勇共に備はりたる若武者なり暫時母公と會談したる後、使者の備中守に向ひ『上意畏奉候、さりながら私儀只今にてはその役儀にも御坐なく候へば、無理に印形仕候と罷成らざるよし明白に返答に及びたれば、備中守も強いて爭はずその旨承知し歸りぬ。忠峯右の段委細母公に申されけるに、母公これを聞きて『其方も流石大老忠淸殿の嫡子なり、未だ二十歲にも足らぬ身にて能くも斯かる決心したるものかな、役儀不相應の御用は引請けぬが武士の習ひなり、母永年の苦心いさゝか效驗あり』とて悅ぶこと限りなし。かくてこの趣早早一門家臣中へ觸れ廻はされける程に、皆々馳集まりて、成程御返答尤もの儀なりと語り居る處ろへ、太田備中守此度は上使として入來り『この書簡へ印形仕り差上げよとの上意なり』と申し付けらる。時に忠峯を始め家老用人一門等皆口を揃へて『たとひ上意なりとも役儀不相應の儀は相勤めかね候、此の儀若し越度に思召し候はゞ切腹致すより外なし』と言ひて請合はざれば、備中守も力及ばずその儘引返したり。

是に於て藤堂高久、松平賴常、水野勝慶、松平定有等歷々の諸士酒井家の家臣一統へ向ひ『最早兩度まで

も上意にそむき申したれば、此の上は皆々覺悟あるべし』と申し渡され、且つ母公へも右の趣き申し傳へたるに、母公はいさゝかも驚く氣色なく、下に萠黄縅しの鎧、紅の踏込、紫柄の大小打太刀、兜は近習の侍に待たせ、上には色好きかいどり、刀提さげ靜靜と立出で來りて、一門の面々並びに家老用人下々までへも對面に及ばれたり。近侍の局、中老等に至るまで、皆孰れも下に甲冑を著し、雄しくも母公の左右に立並び、これを守護したるその姿、昔し木曾殿一方の大將としたる巴御前といふとも斯程にはあるまじと思はれける。

時に母公一統に向ひ、のぶる言葉もいと嚴重に『此度の變事に付一門家中をはじめ皆々酒井家の恩誼をわすれず能くも覺悟されたり、たとひ上意たりとも役儀不相應なる儀は御請致すこと罷成らず、若し夫れを御咎めとあらば、已むを得ず御恨みの箭一筋射て屠腹するより外なし』と決心の程を告げられつゝ重ねての上意遲しと待ち居る處ろへ、案の如く又候上使立たれ候よし通ずれば、今度は何人やらんと一座犇めき合ひ、酒井家存亡の機今一髮の間にありと主從一同片唾を呑んで相備ふ。然るに此度の上使は備中守にあらず、文武兼備の良臣會津中將正容にて上使として威儀を正しつゝ入來る。河内守忠峯も禮儀嚴かにこれを迎ひ奉り、上使の安危をいかにと伺ふ。時に正容上座して言葉靜かに『河内守先達上願の趣き尤もに思召さる、依つて此度家督相續仰付けらるゝに付、出勤苦しからず、只忠峯未だ若年たるを以て御役儀の事は當分會津正容後見致し相勤め申すべき由』上意申し傳へられければ、忠峯母公をはじめ一門家中の諸士に至るまで、思ひも寄らぬ寬仁の上意を承はり、感恩骨髓に徹し、はつとばかりに平伏して御請け申上げられける。夫より早々事調ひ主從一同始めて愁眉をひらきけるが、肥後守直ちに登城して御請け相濟み、忠峯は首尾よく亡父雅樂頭の家職を相續することゝはなりぬ。

酒井家家督相續の事一度び定まるや、朝鮮國王への

返柬には日本下馬將軍酒井雅樂頭忠峯と認め、印形もいと鮮かなりしかば、韓國の使臣も始めて安堵の思をなし、これを攜へて直ちに歸國したりとぞ。其の後下馬屋敷も元の如く忠峯へ返へされ、めでたくも酒井家の家門いよ〳〵繁昌するに至りたるが、實は是れ皆母公の智慮勇氣世に優れたるの賜なりと言ひ傳へらる。

(其二) 佐々木るい女

慶安の頃下總國佐倉の城主土井大炊頭利重の家臣に佐々木武太夫とよぶ古侍ありけり。意地つよくして惰弱なる風儀を嫌ひ、劍術は一刀流の奧儀に通じ、鎗は柳生流の極意を究め、馬は新道惡馬流の目錄をゆるされ、捕手柔術は關口流の手強きを我が物にして、武道の事殘る方なく達しければ、家臣中又は他藩の人々にて門弟を望むものいと多かりしが、武太夫常に門弟等に對つて申しけるは『武藝は元と武士の魂にして、一旦事の有らん節主君の役に立てんより外に希望あるべからず、他に教へて賣物同樣にせんことは武士たる者の本意にあらず』と。一人の娘るいに幼少より熱心に武術をならはせ『女子なれどもいざと云はゞ、君國の爲め一方の用に立ちて、花々敷討死し、武士の面目を失ふことなかれ』とて、我が嗜なみ覺えたる武藝の秘訣をば殘らずこれに傳授せり。

かくて娘るいは年頃になりければ利重の奧方に附添へて勤め居りけり。然るに武太夫たび〳〵養子を迎ふといへども、偏屈武士の意地ばりたる堅爺なれば一人も尻を据えて居るものなし。依りて家督を相續すべき嗣子もなく、空しく年月を送れるほどに、武太夫計らずも病に罹りて、藥石効なく、終に世を去りける。而して佐々木家は嗣子なき爲め家祿斷絶する事となりぬ。るい女これを殘念に思ふとはいへども、今更ら爲べきやうもなかりければ、亡父武太夫の備へたる武具金銀等一切散らさず、其身は遂つてお暇を申し請け、淺草聖天町に引き移り、健氣にも

女一人にて一家を借りて住ひけり。玄關には鎗、長刀、具足櫃抔を置き、入口には菅簾をかけ、門札には『武道諸藝指南女師匠佐々木氏』と筆太に記るし、その身他行の折からは、色よき小袖を一つ前に引違ひ、黒縮緬の羽織にいづれも四ツ目ゆひの縫紋、髮は屋形風にて飾り物を附けず、金拵の細身の大小を帶し、絹緒草履へ素足といふ扮裝にて、稽古日には男女に拘はらず、夫々の敎へ方につき細かに心を盡し、蒔繪の煙草盆を前にひかへつつ刀脇はさみ居る有樣、美敷ともしほらしとも評すべきやうなく、見る人みな古今珍らしき女丈夫なりと談り合ひける。

その頃目栖組、角袖組、神祇組なんどいへる男伊達江戸城内を徘徊し居りて、時に或はるい女の宿所へ押し掛け來り、又は大道にて腕に覺えある者共戲れに當つて見れども、いづれも手ひどき目に逢ひければ、以來るい女に對ひて手を差すもの一人もなく、異風の女といひながら流石の男達も道をゆづりて通ほすほどの武勇勝れたる女丈夫なりし。

ある時數寄屋橋なる石谷將監の番所より家主五人組に佐々木るい女を召し連れ來るべしとの事にて、使者の同心來りければ、町中うろたひ驚き、早速るい女を伴ひて番所に至りしに、沿道の男女老少みな異風の女の姿を見んとのゝめきけるも、るい女は毫もわろびれず、武士にも勝りていと雄々しき勢ひなりし。かくて白洲へ召出されければ、まづ大小を脫りて侍女に持たせ、羽織ばかり著して立出でしに、その時石谷將監るい女に對ひ申されけるは『佐々木氏の娘るいとは其方のことなるか、今日その方を召出すこと別儀にあらず、婦女の身として大小を帶することは珍らしきも、开は用心の爲めなるべし、又天下の法度にも非ざれば差支なし、刀は武士の魂、浪人または女子たりとも武家の出生は左もあるべく尤もの事なり、去りながら用心の爲めならば、外出の節は、女模樣の紅裏などを止め、編笠頭巾等のかぶり物を用ひ、成る丈け男裝を爲して往來すべき筈な

るに、さはなくして、女の面貌をあらはしながら武士の姿に擬するは何故なるぞ、大抵女には女の姿あるべし、然るに其方の服装は奇を好むに似たり、所存いかにや、この儀相尋ぬべき爲めに召寄せたり」と申されける。

るい女は謹んで兩手をつき「之はお尤もなるお尋ね妾儀は土井大炊頭家臣佐々木武太夫と申すもの丶娘にて、父死去の後は男子之れなく、家祿斷絶に及びかひなき婦女の私一人生殘り申し候、あはれ男子ならば家名は潰さゞるものを、女子なりとて亡父の後を相續しかぬるは誠に口惜しき限りに候、依りて姿も魂も男同樣に持ちべく心得、父の遺訓に從ひ、佐々木の家業を立ち續け修業致し居る次第にて、若し妾の志望に適へる同氣の武士もあらば、之を迎へて亡父の堅意地をゆづりたく、夫が爲めわざと女の相貌をその儘に武邊をば表へ現はしまゐらせ候、若し女と思ひ狼籍するもの來り候はゞ、直には歸へし申さず候、さりとて此方よりは決して手出し致さゞるべく、たとひ大小を佩び候とも、むざと他人を傷め申すこと萬々無之、兎も角後日夫を迎へまゐらせ候までは、亡父の姿を以て我が姿とし、亡父の魂を以て我が魂となすべく、他家へ嫁入りすることはお斷り申候、身はかよわき婦女にて候へども、復び佐々木の家を興し武士に讓り候までは、いつまでも男の女にて暮らす覺悟にて候」と言葉爽かに申しければ、石谷將監もこれを聞き、丌は尤もの希望なりとていたく感賞せられ、何事もなくて白洲より退出したり。

然るにこの事いつか同役神尾備前守の耳に入りて、その後殿中に於ても沙汰に及びければ、主君たる土井利重にも打捨て置きがたく、いろ〱詮議の上家臣中隨一の武士小杉十左衛門の次男なる小杉九十九を召出し、これを佐々木九十九と名乘らせ、同人を以て彼のるい女に娶はせ、こゝに目出度佐々木の家系を立てられける。この石谷將監といへるは、慶安の變にかの名高き丸橋忠彌を召捕りし武勇絶倫の町奉行なりとぞ。

漢文講義

（近世叢話拔萃）

阿井笛村

大休了然尼、少奉仕東福門院皇后、皇后崩後、歸居江都、爲武田壽菴妻、生二子、了然雅有出家之志、爲壽菴買妾、去見鐵牛、請爲弟子、了然雖有子、容色猶盛、鐵牛見之曰、是法魔也、使弟子出之門、了然乃至白鷗、白鷗又不受、了然將歸、過市中有銅斗盛火、借見之、覆火自燒其面、一市大驚、遂爲白鷗弟子、乃爲詩曰、

昔遊宮裡燒蘭麝、今入禪林燎面皮、四序流行又如此、不知誰是箇中移

此の大休了然尼と云ふ人は、名を總と申て別に知眞とも稱して居ました、此人は武田晴信入道信玄の曾孫に當る女子であります、其父は葛山内記と申た人で、徳川二代の將軍秀忠公が、其の女を納れて後水尾天皇の女御と致しました時、此の了然が其頃はまだ總女と申して居ました時で、お選みに預りまして少御と申す御附人の内に加へられました、此の女御こそは、後に皇后の御位に進められまして、東福門院と御呼ばれ遊されたる方であります、然るに東福門院の御崩れに爲りましたる

後に總女は京都より江戸に歸つて來まして、武田壽庵と云ふ人の妻と爲りまして二子を儲けましたが、此總女には雅て出家の志を持て居ました故に、夫壽庵に其の志を明しまして、夫の世話を爲せる爲に、妾を雇ひ置きまして、駒籠の吉祥寺と云ふ寺の、白鷗和尙と申す、其の頃名高き名僧のお弟子と爲りまして、佛道を修行致しました、其時より名を了然と改めましたので、天資が豁達として才辨で妙に禪の道の機を得まして、白鷗和尙のお弟子の中でも能く之に及ぶものがありませぬ、夫のみならず、詩歌を上手に致しまして、且つ字を能く書きました、後に武州落合村の泰雲寺及び蓮乘院と曰ふ寺の、住職となりまして、中興の開山と仰がれましたが、年六十六歳で寂りました、其辭世の詩に、六十六年秋已久、凛凛月色向レ人明、莫レ言那裡工夫事、耳熟松杉風外聲、と云ふのがあります、此詩は禪の悟り味を述べたので、悉しく解釋すればくだ〳〵しくなりますから、略して置きます。

以上は便宜の爲めに、了然の略傳を前以て申述べ置いたので、是より例に依り本文の講義に移ります、大休了然尼少奉ニ仕東福門院皇后一皇后崩後歸ニ居江都一爲ニ武田壽菴妻一生ニ二子一了然雅有ニ出家之志一爲ニ壽菴一買レ妾去見ニ鐵牛一請レ爲ニ弟子一‖此の一段は前に述べたる略傳中にあるのと、同じ文字が多くありまして重複に渉りますから、其の分は略して述べませぬ、偖て了然は家を立去りまして、鐵牛和尙と云ふ名僧に目見えをして、弟子にして下されと請みました、(鐵牛和尙と云ふは、豐臣大閤秀吉公に事へたる、有名の大勇士、塙團右衞門と云ふ人が、出家をしたのであります)了然雖レ有ニ子容色猶燦一‖然るところ此了然は、既に二人までも子を生みたる人でありますけれども、其の美しき容色が猶燦りであります故、鐵牛見レ之曰是法魔也使ニ弟子一出ニ之門一‖鐵牛が其容を一見して、是れは則ち法魔と云て佛門を惑はする魔物

である、早々に逐ひ出せと申して、弟子たちに申付て、門の外に逐出しました、了然乃至ニ白鷗一白鷗又不レ受＝乃で了然は駒込吉祥寺の白鷗和尚の處に往きましたけれども、同じく此の和尚も受合て呉れませぬ、了然將レ歸過ニ市中一有ニ銅斗燃レ火借見レ之覆レ火自熱ニ其面一一市大驚遂爲ニ白鷗弟子一、＝仕方がないから了然は、そこ〳〵と自分の家に歸りかけましたるところ、市中を過る時に、ふと目に止つたのは、或は店先に、銅斗に火が一杯に燃てあるのです、了然は何氣なく其處に立寄りて、一寸之を見せて下さいと云ふが否や、いきなり火を覆して仕まつて、其燒けがねで以て自ら其の花の如き面を燒きました、一市の者の驚きは一通の事ではありませなんだ、夫から再び白鷗和尚の處に往きまして、入門を請ひますと、和尚も其の志の堅固なるに感心して、遂に弟子と致しました、乃で了然尼か詩を作りましたる其辭に　昔遊ニ宮裡一燒ニ蘭麝一今入ニ禪林一燎ニ面皮一四序流行又如レ此不レ知誰是箇中移＝此の詩の意は、昔は宮裡に御宮仕へして蘭麝と云へる名香を燒きたる吾身であるが、今は禪林に入りて出家の身となるにつき面皮を故と燎いた、四序（四序とは四時と云ふに同し、春夏秋冬の時節を云ふなり）寒暖炎涼の流行ことが、恰ど又此の通りである、然るに人間として自分の外に誰人が、同じ樣に箇の中に移り行くか知らぬ、と云ふのであります。

講義者曰

此の事柄の如きは今の世の中の事實には適ひかねますけれども、只其の雄々しき氣象と堅固なる志とは何れの世いかなる場合にても、應用の出來る美談であります、由來我日本人は、古より今に至るまで、柔しき女流にても、此の了然尼の如き氣象優れたる人に乏しくありませぬ、これが則ち此度の如き世界第一の強大國と戰て、見事に勝を制する所以であります故、今後もます〳〵此の氣象をば發達させたきことゝおもふのであります。

英文雜録

慶應義塾大學講師
宮森麻太郎

MISCELLANY IN ENGLISH.

I. Easy Conversations.

No. I. About Russia.

露國に就て

A. They say Russia is a very large country. Is that true?
露國は大層大きな國の樣に云ひますが。本當ですか

B. Yes, that is so. Did you not study the world's geography?
本當です。あなたは萬國地理を學びませんでしたか

A. Yes, I did; but I have forgotten much of it.
學びましたけれども大抵忘れました

B. Have you [forgotten much of it]?
そうですか

A. Is Russia as large as China?
露國は清國ほどの大きさですか

B. Russia is as large about two times as China.
露國は清國の二倍位の大きさです

A. Are the Russians a civilized nation?
露人は開化せる國民ですか

B. A portion of them are civilized but the rest are not.
一部分は開化して居ますが其他は開化でありません

A. Can you tell me the name of the Czar?
露帝の名は何と申しますか

B. His name is Nicholas II.
ニコラス二世と申します

A. Is he a good man?
帝は善人ですか

B. No, he is not. A good man can never wish to take what belongs to another man.
否善人でない善人ならば他人の所有物を取ろうと云ふ樣な望みは起さないです

A. What do you mean by that?
今の御言葉はどういふ意味ですか

B. Why, the Russian Emperor wants to rob China of Manchuria.

露帝は遼東を清國から奪はんと欲するのではありませんか

A. Yes, indeed. By the way, is the Czar loved by his people?

如何にもそうです。時に露帝は其人民に愛せられて居ますか

B. No, he is hated by them. Miss. A., please do not ask me any more about Russia. I do not like to speak about such a hateful country.

否帝は人民に憎まれて居ます。Aさん何卒露國の事を此上私に問はないで下さい。私はあんな憎らしい國の話を御話しするのは好みません

Notes [註解]

1. They say の they は漠然世人の意にして何々ジヤソウデスに當る一例を擧ん

They say German pronunciation is not so difficult as English pronunciation.

獨逸語の發音は英語の發音ほどに六づかしくないそうです

2. Yes, I did は Yes, I studied the world's geography を省略したるものなり尙一例を擧げん

Did you go to Uyeno Park yesterday? Yes, I did.

3. Have you は Have you forgotten it? を略したるものなり

4. Czar はザーと發音す即 C は默字なり Czar は露帝に限て用ふる名なり猶は土耳其帝を Sultan と云ひ獨逸帝を Kaiser [カイザー] と云ふが如し Emperor と云ふ語は何國の皇帝にも通じ用ふ

5. Nicholas II は Nicholas [ニコラス] the Second と讀むべし

和文英譯練習

1. 大和孃は敷島男爵 [Baron] と結婚 [marry] すると云ふことですが。本當ですか

2. 本當です。彼等は兩三日中に結婚します

3. 支那は日本の三十倍位大きいです

4. 英國王 [king] の名は Edward 七世と申します

5. あなたの學校の校長 [president 若くは principal] は其生徒に愛せられて居ますか

6. 然り生徒は皆彼を尊敬 [respect] し且つ愛します

7. あなたの英語の敎師は憎らしい女ですか

8. 否彼女は實に愛らしき [lovely] 婦人です

以上八文の英譯は次號に掲載すべければ諸孃豫め英譯し置きて對照せられなば興味あることならん

II. Hints on Grammar.

Yes と No の用法

日本の學生にして Yes と No とを正しく用ゆるものは少し其原因は主として Yes を常に然り No を「否」と譯するに在り。

Yes を時には否と譯し No を時々然りと譯せざるべからざることあり。下に此二語の用法を述べん。Answers の中に not 若くは adjective なる no あるときは "No" を用ひ然らざる場合には "Yes" を用ふ questions の形の如何には關係せず

Shall you not go to school to-morrow?

{Yes, I shall go.
No, I shall not.

I suppose he has not yet returned?

[彼は未だ歸らないでせうね]

{No, he has not returned.
　然り未だ歸りません
Yes, he has returned.
　否歸りました

I suppose you are not so old as Miss Ota?

あなたは小田さんほどの御歳ではありますまいね

{No, I am not so old as she.
　然り小田さんほどの歳ではありません
Oh, Yes, I am just of the same age as she.
　否同年です

How do you do, Miss Takeyama?

I have not seen you for a long time.

久敷御目に懸りませんね

{No [I have not seen you for a long time.]
(左樣です) I am very glad to see you.
Oh, Yes; didn't we meet the other day at Miss Tanaka's?
(否先日田中さんの內で御逢ひ申したではありませんか)

Does not your sister speak French?

{No, she does not.
Yes, she does.

以上の文例に於て見る如く日本語にて然り若くは左樣ですと答ふる場合に No を用ひ否若くはイーエと答ふる時に Yes を用ふることあり能く々々注意

すべきことなり
但し questions 以外の事柄を言ふときは Yes と No の用法に例外あり:—
Do you speak English?
No [Yes に非ず], I speak French. 此れは No, I do not speak English but French. を略したるなり
Has not Mrs. A come?
No (Yes に非ず), Mrs B has come. 此れは No, Mrs. A has not come but Mrs. B has come. を短縮したるものなり

III. Practical Letters.

NOTIFYING ONE'S ABSENCE.

My dear Mr. Shirasu:—

I am very sorry to have been so often absent lately, and to-day also I must ask to be excused as I do not feel well, and I believe I shall consult the doctor. Hoping you will excuse me,

I am

Monday.

Sincerely yours,

T. I. Chapman.

Mr. Shirasu,
℅ the Tokyo Medical School,
Atago Cho,
Shiba,
Tokyo.

欠勤を通知する文

拝啓小生儀近來兎角欠勤勝にて遺憾に存居候然るに本日も不快にて醫師の診斷を受けねばならぬかと存候ゆへ欠勤の御許可を得度此段奉願上候

月曜日　チャプマン拝

白須殿

市内芝區愛宕町　東京醫學校にて
白須殿

註解 I must ask to be excused は私は宥恕せらるゝことを乞はねばならぬ即ち出勤することをよして貰ひたいとの意なり

As I do not feel well は「私は快く感せぬ故に」の意なり

consult the doctor は「醫師に相談する」即ち醫師の診察を乞ふの義なり

I believe I shall &c は「私は何々することになるであろう」なり即ち I believe は I think と同義なり

又 c/o は care of 即ち何々方若くは何々内の義なり日本語にて芝區三田二番地山田氏方

田中樣は

Mr. Tanaka,

c/o Mr. Yamada,

2 Mita, Shiba.

REPLY TO THE ABOVE.

My dear Mr. Chapman :—

Your card duly received. I am very sorry to hear of your illness and hope you will soon be all right again. I think you would better stay at home until you are completely recovered.

Yours very faithfully,

K. Shirasu.

同返事

御葉書拜見仕候處御病氣の由何卒速に御平癒のほど奉祈候尚全く御恢復遊ばさるゝまでは御療養可然と存候早々

白　須　勤　拜

チャプマン君

註解

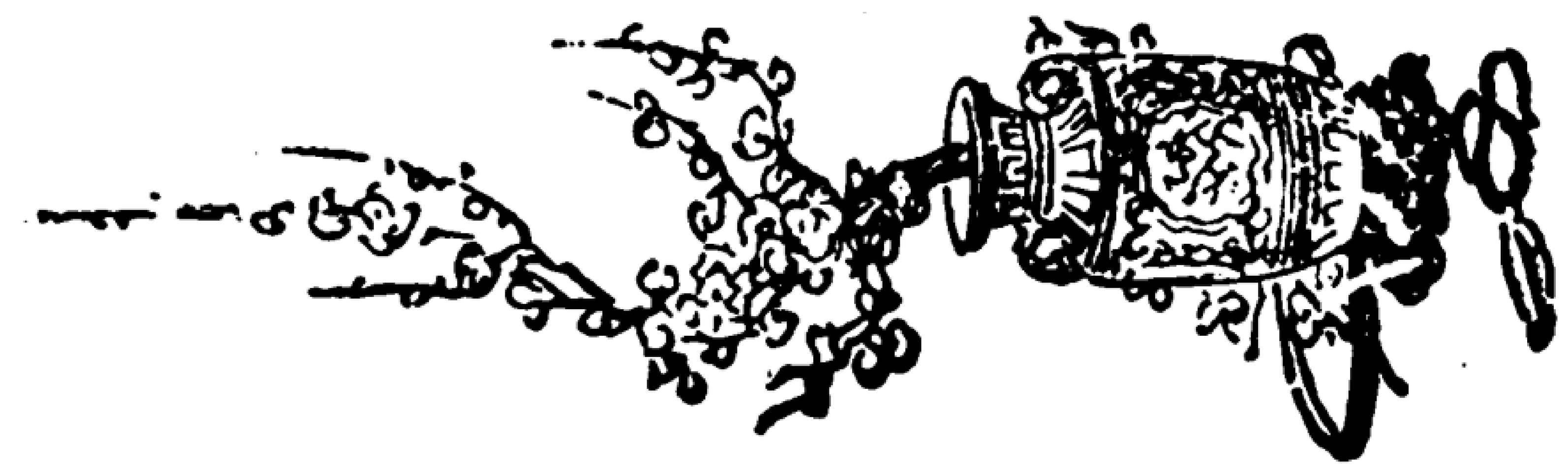
Your card duly received. は君の葉書は慥に落手致せりの意なり

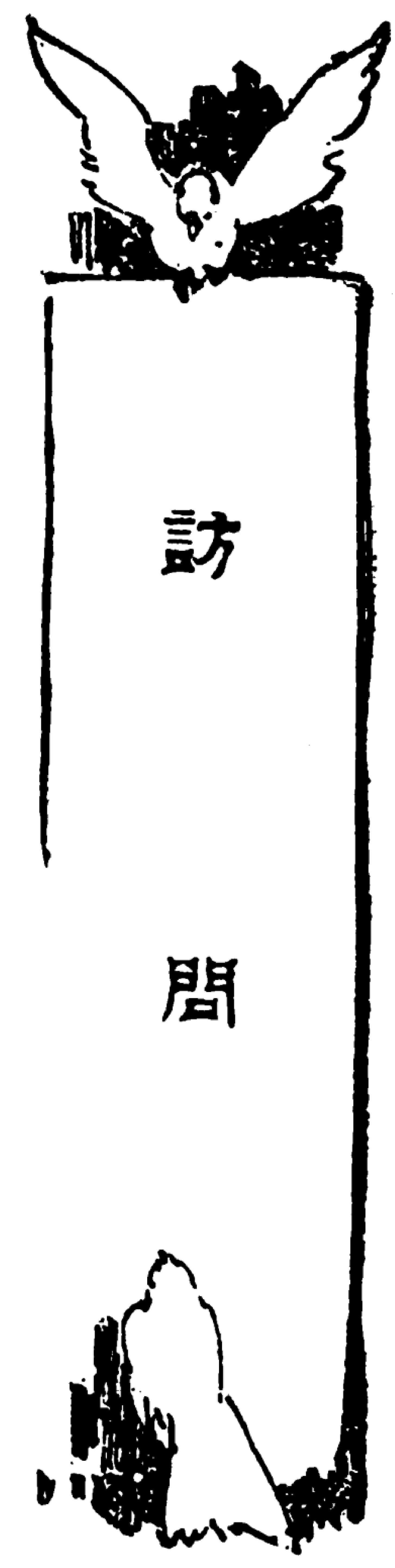
You will be all right again. は君は元の如く健全となるの意にして You will be quite well again と同義なり

You would better stay at home は「君は在宅した方がよろしいでせう」なり尚一例を示さん

You would better go at once.

君は直ぐ行く方がよいでせう





川島海軍大佐夫人を訪ふ

一記者

想ひ起せば十年の昔、彼の日清戰爭當時の我勇敢なる艦隊の旗艦、即ち當今の三笠でありました艦は、果して何艦でございましたらうか、君が代は千代に八千代に色は變らぬ、

▲松島艦

とて、名からして實に床しい艦で、今猶ほ健在で去年の八月十日の黄海の大海戰にも參加して、更に勇名を轟しましたが、その艦長は、即ち、前號に御紹介申しました中村海軍大佐（靜嘉）の甥なる海軍大佐

▲川島令次郎氏

で、その留守邸は芝區三田綱町一番地で德川伯爵家の隣家でございます、記者は過ぐる一月の五日の午後同邸を訪れました。

元日から續いての好天氣で、而かも暖かで、風さへ吹かぬ極めて長閑な日でございました、德川伯爵の邸の前を過ぎまして、左手を見ますれば、枳殼で取り圍れてゐる一つの邸があつて、まだ古からぬ門に軒洋燈が揭げられて「川島」としてありますが、これ即ち川島大佐の留守邸でございます。

人力車を下りて、幅六尺位な小さな木橋を渡り、格子門の木戸を押し開けまするとチリ、ン〳〵と用心鈴が急躁しく鳴りました、記者は先づ門内に入つて、四五間眞直に進んで、今度は玄關の格子戸を押し開き、乃ち案内を乞ひますると、年比二十歳位な人品賤しからぬ婢が出で參りました。一體記者は初めて此家を訪問するのでなく、曾て或る事情の爲めに二三度も訪れたことがありますので、召使の婢も能く記者を存じて居りますし、記者も亦無論記憶のある婢でしたから、『先達ては參りまして有難う…』と、先づ形式の如き挨拶を述べ、次に『奥樣は』とお尋ねしまするト、『ハイ、被居います、何卒、此方へお上んなすつて下さい』とのことで、案内せらるるまゝ、玄關より右手の階段を登り、お二階の四疊の部屋を通りて

▲八疊の座敷

へ打ち通りました。

且見れば、床の間には松島艦の名にも相應しい雙鶴の墨繪の幅が掛つてゐて、その前には、赤銅の見事なる花瓶を紫檀の臺に据え、それには武士の譽の香しいと云ふ謎にでもありませうか、白梅が床しく挿けられてあります。又、其横には、松の内の事とて大きな三寶に立派な鏡餅を飾つてあります。又、その横には玉製の大砲の雛形を二三臺まで据え付けてありました。

顧返つて仰げば、大槻磐溪翁の筆なる『清陰夜煮茶』の扁額を掲げ、その向の小壁には、大佐の寫眞、夫人の洋裝の寫眞、軍艦の寫眞、その他海軍士官の寫眞等を掲げてありまして、何となく大佐夫人の西洋趣味が發揮されて居りました。

やがて、召使の婢が、座蒲團、火鉢、茶を運んで來ると間もなく、階段の方に足音がして、次室の襖の蔭から出て來られましたのは、即ち

▲大佐夫人榮子殿

で、年頃は三十二三の、頭髮を洋風に束ねた、顔色白な、眉の濃い、眼の涼しい、氣品高き一個の婦

人、記者は、まづ『明けまして、お目出度うございます、……又何日やは失禮いたしました。と、相互に新年の祝詞を言ひ換はし、記者は、『まあ今年は實に此上ない目出度い新年でございます、元日から緣宜の宜い號外で……』と、云ひ出でますると、夫人は口元に微味さへ浮べられまして、如何にも冴々とした語調で『左樣でございますね、待ちに待つて居ました。

▲旅順も到頭陷落

しまして、大變結搆なことでございました、けれども、何ですね、まだ、なか〱陷ちないと思つて居ましたが案外に早く陷ちましたので、私なんか彼の開城の號外を見ました時は本當に驚きましたよ、斯樣なに早く陷ちましたのも、これは乃木さんの一色お骨折になつたお蔭でせうと思ひますね、まあ、まあ、是で奥齒に挿まつて居つたものが取れたやうで實に宜い鹽梅でございます。……隨分酷いものですね、彼の二百三高地が我軍の手に陷ちましてから、軍艦はドン〱瞰射されて直に全滅しますし、其他東鷄冠山とか、二龍山とか松樹山とかもバタバタ陷ちまして、やがて、到頭開城といふやうになりました、……して見ますると、二百三高地と云ふは餘程要害な所と思はれますね、まあ、併し宜い鹽梅でございました。……左樣ですね、去年の暮には東鄕さんや上村さんなどが一ト度凱旋されますし、元日には開城の申込がありまして、二日の初號外には開城の談判が成り立ち、三日には皇孫殿下が御誕生されまして、實に開闢以來、類例のない御目出たいことでございます、これで、何でございますね、ずつと又景氣が付きまして、嘸、これから、祝捷會や、提灯行列などで、市中は湧き立つばかり賑かなことになりませう。……』

さて、次に、

▲大佐の畧歷

に就いて承りまするに、大佐は舊加賀金澤の藩士で、當年四十二歳になられ、海軍兵學校の出身で

明治十九年少尉となり、二十四年に海軍大學に入り翌年の春卒業し、二十六年の末に侍從武官に補せられましたさうです。その後、日清戰爭の當時は、丁度大尉で侍位武官でありましたが、その資格で、軍艦松島に乘り組み、澎湖島の方へ一ヶ月程出張せられ後二十九年の十月英國へ留學仰せ付けられ、三年經つて、最う歸朝せられうとする時に、又直に同國の公使館付を命ぜられ、猶ほ三年間滯英して三十五年の九月歸朝され、直に艦隊の參謀に補せられ、次に、富士、朝日の副長、宮古の艦長に歷任し、一昨年の九月大佐に進み、同時に現今の松島艦長に補せられたのであります。

つぎに、記者は、

▲今度の出征

に就いて伺ひますと、夫人は玲瓏たる聲音で『ハイ、日清戰爭の時には、今もお話いたしました通りもはや戰爭もおしまひになつてから、侍從武官の資格で、暫く澎湖島の方へまゐりましたきりでありましたし、また、北清事件の時は英國に居りましたから、まだ、一度も實戰には出なかつたのです。で、今度も亦出られないかと心配してゐましたが、やうやう出征の命が下りましたので、非常に喜んで參りました。』

▲大佐の平生

大佐人となり、極めて豁達で、磊落、人と語るに城府を設けず、その人と交はるや些の隔意を挾まず至つて質撲な、話好な方であります。而して平生在邸の際は、唯、令孃令息を相手に或は相共に戶外に散步を試み、或は罪なき遊戲をなして無上の娛樂として居らるゝさうです。また、

▲その嗜好

に就いて尋ねました所、『ハイ、自轉車も隨分嗜きでありますし、又、第一の娛樂としてゐますものはまあ、寫眞術で、これは英國に留りました時に、公使の林さん(董)の寫眞好に感化れて、おしまひには林さんに輪を掛けた程好きになりまして、軍艦に居

ても、家に居ても、二六時中この機械を手放さぬといふ風です。又、活花も好き、犬も好き、猫も好き鳥も好き、何でも生き物は好ですから、オホ……子供は大好、……そして、良人は何でも遊ぶことゝ騒ぐことが好きで嫌ひといふことはありません……オホ……』と、聲高に打ち笑はれました。

で、記者は、また大佐が數學的思想の發達した、至つて頭腦の緻密な所謂參謀側の御方であると仄に聞いて居りまして、猶ほ且つ艦長の劇務あるにも拘らず、常に綽々として胸中所謂閑日月あり、折に觸れ事に感じて、好んで和歌を物せらるゝといふことを聞いて居りましたから、記者は『大佐には、和歌がお上手と聞きましたが、何うか御近作を一つ拜見したいものです』と、云ひますると、夫人は、いたく打ち笑はれまして『何、貴公、良人なんかのは和歌といふものか、何にか分らぬもので、唯、三十一文字になつてるといふだけのことでございます。唯折に觸れて感じましたことを手紙の度に必ず五六首書いて來るのですが、イヤハヤとても／＼他人樣にお目に掛けるやうな歌ではございません、が、之でも少し誰樣かに手を入れて頂けばちつとは物になるかも知れませんと思ひますから、彼の、貴公も御存じでございませう、内親王の御歌の先生小川さん（直子刀自）にでも、以來は見て頂かうと思つて居ますよ。オホ……』

▲その家庭

大佐と夫人との間に、長男清君（一四）長女正子（九つ）次男直君（六つ）三男眞君（四つ）四男忠君（二つ）との都合五人で、長男清君は慶應義塾の幼稚舍へ、長女正子は芝區白金小學校へ通はれて居ります。四男の忠君は、昨年大佐の出征後に生れられたもので、まだ、大佐も顏を知らず、忠君も父君を知らぬのでございます。

で、記者が夫人と種々お話して居まする内に次男の直君が、召使と共に二階へ來られましたので、夫人は『さあ、御客樣にお辭儀は』と云はれましたの

で、小さき双手を疊へ突いて輕く挨拶せられ、直に夫人の膝へ靠れて記者の面を打戍目られました。

そして、やがて、直君は愛らしい口元に微笑さへ浮べられまして、『マンマ、ベービーにもお菓子を頂戴な』と、云はれました。が、初めて訪問して、此言を聞いたならば、嘸や、異に思はれるのですが、私は、既に其の理由を知つてゐますから、左程奇しくも思ひませんでした。

しかし、去年の春、はじめて、此直君の ▲ベービー〳〵 の言を聞きました時、非常に異に覺えましたので親しく夫人に承りまするに、話の大略は斯うでありました。

『此兒は ▲英國で生れましたので、保姆に預けて置きましたが、保姆がベービー〳〵と言つたものですから、自分の名だと思つてゐるのです、……ハイ、なんです、只今も申し上げました通り、良人が留學が濟んで了ふて、直ぐ又、公使館付となつたものですから、林さんなんかのお勸めで私を英國へ呼びました。で、私と淸は正子とを川島の母――今は既う歿なりましたが――に預けまして英國へ參りました。其時、此直が生れましたのです。……ベービーは何處で生れたの？、あの兄さんにお聞かせなさい』と、直さんに命令けられますと、直氏は莞爾として、『ベービーは英吉利のロンドンで生れたんだ。』と無邪氣に云ひ放つて、やがて、又『マンマ、ベービーも海軍になるんだね』と云つて、愛らしく笑はれました。夫人も亦微笑まれて、『貴公、實に可笑いんですよ、これは、坊は西洋の名と日本の名と兩方持つて居ると云つて大威張なんですよ』と。

で、夫人は英國に永く滯在して居られて彼の地の風俗人情等に就いて觀察せられたことも少なからずございませうと思ひまして、記者は、まづ、

▲英國婦人の氣質

に就いて伺ひましたところ、夫人は徐に丹花の唇ひらかれて、『私などは、學者でもなければ、また小說家でもなく、なか〳〵そんな難しい觀察などといふことは思ひも寄らんことです。』と甚く謙遜せられて、暫くは記者の尋問に對して應ぜられなかつたけれど、記者は遂つてお願ひ申しましたところ、夫人は漸く口を開かれまして『貴公のお尋ねの事なんかは、なか〳〵難しくつて、何んとお答申して宜いやら分りませんが……まづ、彼國の婦人の可いところを申しますれば性質が至つて剛毅で、また着實なところであらうと思ひます。又、反對に可けないところを擧げますれば、執拗で、剛慢なところであらうと思ひます。で、一體日本の人と比べて見まするに英國の人は男も女も固守耐忍の力が强いやうです。又剛慢で自ら尊ぶといふ風が甚だしいやうでございます。ですから、善い方に移り、新しい方を取るといふことは遲くつて鈍い代りに、一度これが宜いと信じた後ちは、容易に動かぬといふ風があります。

ですから、又、何か決行してゐることは、如何なることがあつても、一步も退かぬといふ風で御座います。……で、交際なども始めは先づ冷淡なやうでございますが、お互に其性行を知り合ふやうになつて來ると、それは〳〵又非常に深切なもので、決して〳〵輕々しく交際を變へるやうなことはありませんです。……この子（令息直氏）の保姆なんかも、矢張りさういふ風で、それは實に淚の出るくらゐ深切にやつて呉れました。此子も亦能く其保姆に親んで居りました。そして、此方へ歸る時なども、其保姆が甲板の上まで送つて來まして、別離を惜しんで、泣いて泣いて、まるで甲板へ根を卸したやうになつてちつとも動かないんですよ、私も、それを見て、縦へ異國の人とは云へ、眞に人情といふものは溫かいもので、また美しい光のあるものであると思ひまして、その保姆の有樣を見て、思はず淚がほろ〳〵と落ちました。それから、私共が此方へ歸つて了ひましてから、手紙は每度今に寄越ますが、また感心

なのは、毎年此の子の誕生日の前までに、此方へ屆くやうにして、何か多少に拘らず品物を送つて來ます、此間も此方から品物と直の寫眞を送つて遣りましたら、大變喜んで、長い〳〵手紙を寄越まして、此頃は、ベービーも大分大きくなつたから、會話も隨分わかるだらうとか、何んなことをして遊ぶとか何とか彼とか寫眞を見て種々と自分が想像したことを事細に書いて來ましたが、實に感心なものです。とても、我國の保姆などには、彼位な情熱の深いものは恐らく無いと思ひますよ、……しかし、まづ、此直の保姆のやうなのは、英國婦人の中でも極々深切で懇篤な人なのでございます。が、此と反對に一つ不深切のものと來ては、それは餘つ程つれないもので實に驚く可きものがございます。……兎に角にこれで、英國の婦人は、自分を信じ、自分を守ることが甚しいものですから、其主義とか、道とかの爲に主張したり、確守したりする時は、如何に他人の攻撃を受けても、それこそ馬耳東風と聞き流して、我を張ることは、多情多感の女子で、何うして彼樣なであらうと思はるゝくらゐ、強情ばりなものでございます……。』

△日本の赤坊

談は大分外れますが、大佐が英國に居らるゝ時、倫敦は騷々しいと云ふので、倫敦から程近いリッチモンドに其居を移されましたが、その近隣の人が次男直氏を物珍しさうに、『日本の赤坊〳〵』と、云つて、見に來るやら、寫眞に來るやら、始終直氏は英人の見世物のやうになつて居ましたさうです。ですから、其當時諧謔に巧なる大佐は笑つて『これから見に來るものに二ペンス位づゝ取り立てゝやれば、日に一弗や二弗に儲る』などと云つて居られたでさうです。また、中には餘程日本好な英人があつて『日本のベービーは世界の何れの國のベービーよりも、より多く神聖で、又、無邪氣である。』と云つて自分の妻君の孕んだ時もわざ〳〵直氏を見に來まして、そして、

▲胎敎の材料

とさへ、しましたさうですが、何と趣味ある話ではございませんか。

なほ夫人の英國に於て人情風情を觀察せられたとの談話は少なからずございますが、これは、又の日、本誌の家庭欄を賑すことにいたして置きませう。

寺田歩兵中佐夫人を訪ふ

一記者

彼の南山の大激戰に參加して、名譽の負傷をなされしも尙ほ屈せずして、繃帶頭のまゝで○○聯隊長小原正恒氏（これも南山に負傷せられて一ト度歸朝せらる）に代りて軍を指揮し、勇名を轟かせし、歩兵第○聯隊第○大隊長陸軍歩兵中佐

▲寺田錫類君

は、去年の十二月中又も旅順の方面で名譽の負傷をされました。記者は牛込區南山伏町の留守邸を音訪れましたのは、過ぐる十一月の二十日でございました。

新しき檜木の門を突と門内に入り、眞白な敷石を傳ふこと十間ばかり、玄關におとなへば、年比十八九の召使の婢が出て來ましたから、記者は、まづ例の通りに刺を通じて、來意を述べまするど、間もなく、今度は年比四十二三の、丸顏の、肉付豐な、丸髷の婦人が出迎はれましたが、これは、即ち

▲中佐夫人美野子殿

で、ございました。記者は御令息の正男君と同鄕で、しかも、竹馬の友でございまして、四五年前正男君が在京の折は、度々此家を訪ねまして、自づと夫人とは相知つてゐましたが、それを夫人には我が刺を見られてさへ、お覺えが出ないやうでございましたから、乃ちまづ、記者から切り出して、舊を語りまするど、夫人は、其肥滿せられてゐる體軀をぐいとばかりに反らせられて『あゝ、さいでございま

したつけ、私は薩張り、おみわすれ申して居りました。これは、どうも〳〵』と、さも〳〵打ち驚かれて、溢るゝばかりの微笑を満面に湛へられまして、『さあ、どうか、此方へ〳〵』と、先に立つて、玄關より右手の襖を明けらるゝので、まづ其所の八疊の座敷を通り抜け、その次の

▲八疊の座敷

に通りました。まづ、正面の床には、何人の筆でありませうか、隷書の大幅、其前には朱塗の臺に人物の鑄物を飾つてあります。また仰げば至尊の御影でございませう。これには金の菊紋を拔いた白縮緬の帷幕を垂れてあります、また左手の向の隅には銀臺の中屏風が一双おいてあります、その他家康の畫贊の額、極彩色の花卉の額等が掲げてあります。また、右手の縁側の方は硝子入の障子を見越に、霜除した植木棚が見えました。

召使の下婢が火鉢を運ぶ後方から、夫人自ら茶盆を持つて來られて、再び挨拶せられ、やがて、談話は令息正男氏のことから始まりました。が、さて、

▲中佐の略歴

に就いて承りましたが、君も舊金澤の藩士で、正明氏の第三男で幼名を順之助と申されたさうです明治三年の頃はじめて大阪兵學寮に入り、業を卒へ同七年五月少尉に任ぜられ、大阪鎭臺第八聯隊附となり、八年の前原一誠の佐賀の亂に從うて偉功あり十年七月中尉に進み、西南の役に從はれ大に奮闘せられたさうです。日清戰爭の時は、丁度大尉で、豊橋聯隊の中隊長を務められ、彼の有名なる佐藤鬼將軍の部下に屬して、また殊功を樹てられました。三十年十月少佐となり、今度は第四度目の出征でございます、中佐に昇進されたのは、今度の南山の激戰の後でありまするが、その如何に拔群の功を奏せられたかの一端を知り得べきでありますが、幸に輕傷で、彈片が前頭部を掠めた許りだといふことでございます。

記者は中佐が負傷せられたことのお見舞を申しま

したところ、夫人は少し笑ひながら『ハイ、良人のは、幸ひ輕い方で、砲彈の破片が額の上の方に中つたのでございます。云はゞかすり傷でございましたさうです。その負傷しました時、軍醫の方や、他の將校方は是非とも全癒するまで入院なさつた方が宜いとお勸めになりましたけれど、元來が强情我慢の質ですから、只繃帶だけ施て貰ふて、

▲『何のこれしきの疵に入院なんかして、人手を煩はして堪るものか』と、云つて繃帶頭のまゝで、矢張り御役を勤めて居ましたさうです。……そして、良人などの直ぐ上官の小原聯隊長が負傷せられましたから、良人は其代理をやつて居まして、至極元氣でございますさうです。ハイ、此頃は旅順の方で一生懸命に戰つて居ますと思ひますが、まあ、何時、何うなりまするやら。』と云はれましたが、又も旅順の方面で名譽の負傷となられましたが、夫人の心情果して如何でございませうか、縱へ軍人は國家の爲に身命を抛つものとしても……。

▲中佐の平生

を申しまするに、人となり如何にも豪毅で、忍耐で、また情熱のある至つて優しいお方でございます職務にも元より忠實で、早朝牛込から麻布まで、只の一日とても缺勤しないで、また遲刻もしないで勤めて居らるゝといふ風でございます。また、平生、在宅の際は、常に古今の歷史を讀んで、或は天を仰いて嘆き、或は手を拍つて喜び、徹宵咿唔の聲聞窓を破ることと屢々あるといふことでございます。そして、又、閑暇さへあれば、召使に至るまで家人を殘らず一座に集め、自ら讀得したる、古今の名將、烈婦、義士、貞女等の譚を物語つて、此上なき娛樂としてゐらるゝさうです。また繪畫にも趣味を有つて居らるゝが、歷史が好きなだけに、重に歷史畫を蒐集してゐらるゝさうです。又、中佐の最も好まるゝところのものは刀劍で、本阿彌も亦大分得意なものださうです。その他植木、小鳥の類も嗜きで、始終

小鳥を飼つてゐるといふ風です。酒は軍人としては珍しい位少量であるさうでございます。

さて、次に記者は、

▲中佐の逸話

に就いて伺ひましたところ、謙譲なる夫人は笑ひながら『何、良人なんかには、そんなに豪いことも、珍しいこともございません。』と、云つて退けられましたが、記者は、中佐が、彼の日清戰爭の時（その際大尉）

▲奮闘して刀を折られた

と、云ふことを思ひ出しまして、その時のお話を承りました。

中佐は彼の戰役の時、前記の如く佐藤大佐の元山技隊に屬してゐましたが、同隊は陽徳を經て成川に出で、東山、松橋等の地を過ぎ、山岳を攀ぢ、溪澗を渡り、巖角に縋り、樹根を攫み、憂い目辛い目の數々を盡し盡して、やがて、順安に出たが、此時は中佐は何時も先登して大に勇を奮ひ、智を運らして流石の鬼佐藤をして舌を捲かしめたさうです。順安は平壤より義州に通ずる街道で、實に敵の後面で、而かも兵站部のある所でありましたが、忽ち其敵を撃攘して同隊の占領するところとなりました。けれども如何にも緊要な所でありますから、何うしても守備隊を置かなければなりませぬので、佐藤大佐は中佐に一個中隊の兵を與へて守備をさせ、本隊は平壤の方へと猛進しましたので、中佐は豫期の如く、彼の難攻不落と恃める平壤を攻撃して、劍戟相摩するの激戰奮闘の出來ないのを、一方ならず遺憾に思つて、唯つまらぬ、欠伸の出さうな、隱居仕事のやうに思ひ、到底敵と相見え相接するものとは思ひませんでした。けれども元來が緊要な土地でございますから、全く絶望もしないで、唯、忠實に其任務を守つてゐましたが、愈々平壤が陷落して間もなく、清國の敗兵が二千人ばかり、順安を目差して潮のそれの如くに押し寄せて來ました。さあ、大變、衆寡迚も敵するものでなかつたけれども、剛勇なる中佐

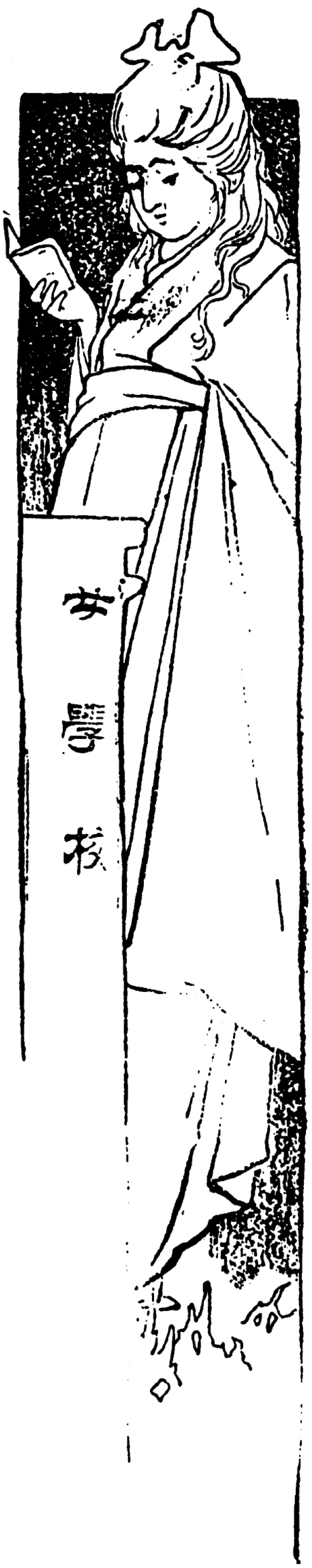
は此大兵を見て大に勢を得、僅か一個中隊の兵で以て、又これを擊攘しましたが、實に是れ劍戟相摩するの大戰鬪、中佐は其時、豫て佩してゐた腰間の名刀を引き拔いて、狂獅の如く敵軍に猛進し、右へ切り、左へ薙ぎて、敵を斬ること無數、敗軍の敵再び茲に又敗軍して去るに及び、中佐はその刀を檢めまするに、何ぞ知らん、流石の名刀も鍔元僅に四五寸を餘すのみであつたさうですが、中佐が豫期してゐた平壤攻擊以上の戰鬪を一手で引き受けられたのでございました。

▲その家庭

中佐は當年明けて五十二歲で、夫人は四十八歲でございます。そして、此兩者の間には、長男正男(二九)長女秀子(二八)次女淸子(二五)三女芳子(二四)四女五百喜(二二)五女脇枝(一七)の都合六人で、長男正男君は騎兵大尉で、第九師團騎兵聯隊に居れますが、既に渡淸して從軍されて居ります。それから長女秀子は陸軍二等主計士師長次郎氏に嫁し、三女芳子は步兵大尉鳥居兼太郎氏に嫁し、四女五百喜は步兵大尉東方籌氏に嫁してゐまするが、女婿何れも渡淸し滿洲の野に活動されて居ります、なほ中佐の甥に騎兵中尉で寺田正治といふ人がありますが、一門擧つて軍人、實に以て邦家の爲に盡す、また以て光榮とすべきではありませんか、又二女淸子は女子高等師範學校を卒業して、直に熊本縣高等女學校に敎鞭を執られて居ります、家庭は斯樣に賑しいけれども、此頃留守宅には、夫人と脇枝子と二人のみで、脇枝子は、目下東京女子職業學校へ通はれ、只管母堂に孝養を盡して居られます。

(をはり)

記者はこれまで、日露戰爭が始まつてから、海陸軍人の家庭を訪づれましたとは、都合幾度でありませう、隨分と多數で御座いますが、此頃程訪問するに氣が引立つて愉快を感じるとはありません、それも全く新年の劈頭第一にめでたく旅順といふ大難物が、陷ちたからでありまず。



女學生の寄宿舎生活

しらぎく

三年五年の間經歷した實地のお話を、少しも飾らずに記します。何處の寄宿舎でも大畧同じことゝ存じます、某女學校の寄宿舎で何子は、フト目をさましました。

まだ、早いのかしらん、何時だろふかと思ふ折に、丁度同室の眞島さんが、くらりと、ねがへりをなさるので、眞島さんと思はず叫んでみました、が眞島さんは、ねぼけた樣な目を、しばたゝいて、不思議相にあたりを見廻し、そして「鐘がなつたの？」とぼんやりした間、「いゝえまだ、靜かにしなければ、御目玉頂戴するわ」「ホ……そしたら、おすいものにするさ」

「シッ靜かになさいよ、……そりや然と何時頃でせうね、私、先刻から、目がさめて、いけないの」、小こゑで云ふと眞島さんも聲をひそめて「私、何だか夢見てたのよ」「起きたいわねえ」「まだ鐘ならないかしらん」

「鐘がならない前には、起きられないつて、どんな因果でせう」「ホヽヽ、これがもし自由ならねえ」

△試驗前とか何とか

云ふのでありますど、もう、ソッと人に知れない樣

に起きて勉强して、鐘がなると、今起きたと云ふ樣な顏を造つて、手拭さげて、ねぼけた振をして、トン〳〵階子を下りるのですが、まだ、そんなに時節も切迫して居ませんし、また忍んで起きる必要もありませんから、勉强家の眞島さんでさへ、起きよふとはなさらない、寄宿舍は全く靜まつて居ます。

其の中、夜は、ほの〳〵と明けそめて、朝のかねが起きよとばかり、いさましい、………

△これが寄宿舍の夢

を破りますのです。隣室には寢床を、けたてゝ起る氣合がする、彼方には雨戸を開ける音がします、と同時に「オ、寒い霜が眞白」またその向の室には、何の事だか、ホ、ホ、と、わけもなく笑ふ聲がする、やがてまた上草履の音がして、手拭と石鹼と楊枝を手にして、洗面場にゆく人もあります、はたきの音がする、箒はとの聲が起つた。

それでもまだ何子は起出ません、「如何したの？、鐘のならない前から起きたいつて、云つたくせに」と眞島さんが、詰ると「だつて」

△寢床の中がパラダイス

だもの、あゝ、日曜なら、朝御飯食べなくても、ねてるんだけども」と以ての外の御挨拶、眞島さんも思はず、ふき出して、つめたい手を何子の温い頰にひやり、………驚いて、飛び起きよふとしたが、また床の中に、もぐつてしまいました。

「ぢや火を、おこすからね、そしたら、御起なさいよ」眞島さんは、トン〳〵炊事室にゆかれましたが五分もたつと、消えそうな火を、火すくひに入れて御出になる「如何したの遲いぢやありませんか、そして、まあ、其火は………情ないねえ、ジャックよそれは何と、情ない火であるよ」と冷かすと「だつて、もう無いんだもの、早い方が澤山もつていらしたんだわ、ヘン、これでも、見てゝごらん、早晩にあなたを、やきつくすからねえ」やがて炭をつぎ

△頰をふくらして

プー〳〵一生懸命に吹きはじめます。「さあ火が出來

た何子さん、早く御起きなさいよ」と云ふ聲を聞きつけて、隣室の、虎澤さん「まだ何子さん起きないの？」と親しい間の事とて、遠慮もなく冗談を云ひます「起きたのよ」何子は、はね起きつゝ、かく云つてまた「あなた、何してる？」「私？、私、髪結つてるわ」

何子は、先づ手拭を手にした「髪結つてから、いらつしやい」「だつて、わんまり遲く、洗面場に行つては、淑女の對面に關するから」「ホヽヽ、よく出來た」何子は笑つて出て行きます。

後で眞島さんは、箒、はたきなど持つて來て、氣持のよい程、

△室の障子も窓も

明けはなつて、すみからすみまで掃除がすむと、火鉢をはさんで机をならべ、辭書と首引をはじめます。そこに、何子さんが活々と生れ更つた樣になつて、雑巾手にして歸へつて來ましたが、窓や、しきゐを奇麗に拭ひはじめます、「だめだ、こんな、辭書なんて」と眞島さんの獨語に何子は思はず笑ひ出しますと「オヤ、いつ歸つたの」と振り返つて「まあ雑巾なんか手にして、淑女の對面に關しますよ」と冗談、掃除はこれで立派にすみました、監督の女先生に來られても大丈夫です。

何子さん、今度は、結髪に念が入つて、……また今朝のつめたさ、到底火鉢には、はなれられません仕方がないから、二人で火鉢を圍んで、手をかざし、本をかざして、授業の準備にとりかゝります。

處に歩音がした、監督の女先生であります、はつ、とび退いて、知らん顔で机に向つて正しく座りました。先生は、御免なさいと障子を御明けになる、

△お早うございます

と手をついて挨拶をすると、お笑辭なさつて、室内を見廻し、滿足氣に立去られました、今まで、眞面目にかまへて。居た何子は、笑つて、また火鉢に向つたのですが、また足音に、キッと机に向ふと、馬鹿らしい、お友達の秋吉さんではありませんか、

「地理が、わからないから敎へて頂戴な」と、とぢ糸のゆるんだ本を手にして、不得要領の面色でやつて來られます。

それから三人が火鉢の上で頭をつき合はせて見て居ますと、「何だか、ヤケくさい」と、向の室の聲、「ま、眞島さん……」フト氣がついて見ると、眞島さんの袖は、直徑五寸ばかりの火災に合つてるのであります。其中

△御膳だては、誰人？、

「もう七時よ」と、どこからか、迫る樣な聲がしました、「貴女でせう」と云へば秋吉さんは驚いた樣に、「あら、如何しませう、私だつたわ、廊下の掃除も初まつてる」と立つて、本を捨て、逃げる樣に出て行かれる「私も、御手つだいしませう」二人續て出ました。助け合ふのが常であります、膳立も廊下の掃除も皆、寄宿生が順番でやつてるのであります。

生徒の室は、四疊半で、一間の押入があつて、棚があつて、一室二人づゝであります。

食堂は階下の炊事部屋に近い處で、殆んど四十疊、ばかりもある廣間、日本流の食卓十ばかりありまして、凡そ五十人計りの生徒を容れるのであります。

御膳立てがすみ、食事の鐘がなると、あちらからも、こちらからも、ばら〳〵集つて來ます、鐘がなつたら直集れとの事でありますから、讀みかけの本も半に、編みかけのレースも捨てゝ集ふのであります其集る順序に由つて、上草履は入口に正しくならべて、いそがし相にでも、又ゆつたりしてでも、自分の好み〳〵にまかせて、各自の席につきます。

千紫萬紅、一堂に集つては箸を取つても話は絕えませぬ、面白相に

△笑つたり、六ケし相に

話したり、寒いと云ふ、夢話をする、學課の事、先生の事、實に、いそがしいものは口でございます。

「あまり御聲が高い樣ですよ」と眞中の上座の、監督先生が仰しやると、鶴の一聲、ぱつたり話はやむ

素より話すなとの仰せでありません、唯聲が高いとの事ですから、また、そろ〳〵話が始まるのです。

何子は、一番端の食卓に。ついてるのでありますが、監督先生の視線を伺ひ〳〵隣席の人と話をして居ますそれは今度の土曜の外出の事ですが、「私、出たいけれども、今度は出られない」と何子は、失望の樣な、笑談の樣な口調で云ひますから、「なぜ」と問へば、「なせつてねえ、此の前、

△門限におくれたの、唯五分

それで謹愼さ、唯五分で」



と、面白半分に云つたが、ジッと首をちゞめて、ソッと、先生の顔をぬすみ見ました、其の風のをかしかつたので、同じ卓の人はドッと笑はんとして、さてまたせき上ぐるおかしさを、ジッと、嚙しむる苦しさ、到底悲しい時の比ではないのです。

滿堂の視線が一時こゝに集注しましたが、先づ事もなく食事もすみ、食堂を出ると、一時に吹き出して笑ひ〳〵運動場の方に走せ行きました。

庭園を逍遙するもの、運動場裡に遊ぶもの、秋草の亂れ咲いたかの如くであります。

何子は、眞島さんと共に、

先生御自身の、花園のあたりを歩いて、あれや、これやと品評をして居ましたが、やがて、美しいロースの香高いのが目にとまりますと恍惚として彳みました、「ほしいねえ、先生が居らつしやらない間に取つてやろふか」と例の戯談まじりに云つたとき、後の方で「おとりなさいよ」と聲がしたので、びつくりして振り返ると先生がニッコリ笑つて立つて居らつしやる。

、、、きまりが悪いやら、はづかしいやら、モジ〳〵して立つて居ると、先生は相變らず、笑つて、

△一番美しいの

から手折られましたが、多分御自分の机の上にでも飾られるだろふと思つて、少々羨やましい氣味をしてジット見て見ますと「はい、あげませう」と差出さるゝ、何等の天恵ぞ、先生の生徒を、いつくしまれるのは實にかくの如く、母上の如く、また姉上の如くであります。

何子は、をどる様に、よろこんで、其まゝ室に、かけこんで、机の上にかざりました、もう他の友も大がい室に歸つて居ます。

「ほんとに、御飯の時は、あんなにくらしく叱つても……優しい先生だはねえ、お母様の様な」とは全く心服した言葉でありました、先生は四十ばかりで、某の未亡人であります、其日一日、

△必要なすべての準備

をして、それから鉛筆を、、、といで居ますと、何子さん郵便よと、背の高い、お友達が持つて來てくれたのは古郷よりの手紙……而かも夢の間も忘るゝ事の出來ぬ古郷の便、……あゝ唯一人の

△いとしき弟から

……披いて見れば、時候の挨拶より、其次には

――姉上様には、一人で旅の空で御苦勞なさる事、如何に立身のためとは云ひながら、御いたはしく存じます、父様も母様もいつも、姉様の事ばかり案じて居られます、また私も案じて居ます、何卒、御勉強なさつて、

△早く御歸りを待ちます

と、いぢらしや、愛らしき文字が、幼き筆にも力をこめて書いて、最後に御自愛専一にと筆をとめてあります、何子は泣きました、如何して、萬里遊子の身、況て便りない女子の身で、これが泣かずに居られませうか。

始業の鐘はなる、何子は

△泣顔して教室に

出ました、三時間、四時間の課業も、すんで、一先づ午前の正課がすむと、また寄宿舎の、自分の室にかけこむよりも、むしろ、直に食堂に行くのであります。また早ければ膳立ての、手つだいをするとか何とかして、食事となると晝は大抵過んだ學課の事や、午後の授業時間の事などで話は持ちきりであります、例に依つて食事がすむと、一時までは勝手な時間、身だしなみをする人は、髪を結ひかへたり帶をしめなほしたり、また、少し、おてんばな人になると、袴のほころびも、そでの破れも、つくろはねばなりません、或は、くだらない話をする人もあるし、友の病氣を見舞ふ人もあり、手紙を書く人もあり、爲替を取りにゆく人もあり、何でもない樣な午後

△一時間のやすみ

が寄宿生には、非常に必要なのであります。

三時の鐘がなつて、放課になると、一時淋しかつた寄宿舎が、また、にぎやかになりまして、教室での失敗談や、先生の批評、――勿體ないけれど――欠席生のうはさ、それ〳〵得意の辨舌を以て講ぜらるゝので、實に、時としては、腹もよれる程でございます、すると、いつの間にか、つまらない話にうつる、………大概、放課後より夕餉までは、編物裁縫などを、しつゝ、話をして居ます……。

また非常な勉强家が居まして、机と首引して居る人もあります、眞島さん抔も其の部類ですが、何子は、いつも「お止しなさいよ、腦が、今勞れてる時だから……」と云つては、とどめて、へだてなく

打興じて居ます。

△面白い時

には時間のたつのが早いもので、もう下で膳立ての音がします、さてはと驚いて顔見合はせる、……夕餉の鐘がなる、例に依つて例の如く、食事がすむ

今度は、また運動ついでに

△郵便函をのぞいて

見ると云つた樣な風で、歌のけいこもする、ピヤノ、オルガンの練習もやる、さま〴〵でありますがその中、寄宿舍の廊下にランプが點いて、はじめてあたりの、暗くなりかけたのに氣がつき、内に入ると程なく、自修時間のかねがなります。

「あゝいやだ

△土曜の晩なら

敎科書なんて、野暮なもの、見なくていゝんだけど」と何子は低語して本を開きました。半時間も經た頃生徒の氣づかぬ樣に、監督の先生が巡視せられます。

何子は突然「今度の土曜の料理番は誰？」と問ひかけました、これは土曜日には特別に、生徒が順番で三四人級をなし、料理を實習する樣になつてるからであります、「誰かしら、……多分○○さんの級ぢやないかしら、多分」「御馳走があるといゝな」「なぜフイに、そんな事？」「え、ねえ、今日生理の先生が、御馳走食べなければ駄目だつて仰しやつたからよ、今一寸思ひ出したの、こゝに四季の料理つてあるから」と雜誌を指しました、「まあ、あなた、いつの間に雜誌出したの？」思はず調子が高かつたので、隣室でコツコツコツと机を叩く音がしました、これは素より靜かにの意であります、何子は面白い人でまた、自分もコツ〳〵と叩いて返しました今度は、それを聞いて左方の隣室で、コツ〳〵と叩く、順から順に傳はつて、寄宿舍の二階一ぱいになりましたが、これには先生も閉口なされたものか、今梯子を下りかけて居らしつた先生

△御自身も御笑ひなさる。

ので、一同もクス〳〵笑ひ出しました、

やがてまた、ヒッソリとして、今度こそは眞に勉强をして居ると、もう五分で九時――自修時間が終ると云ふ頃になつて、電報との聲は舍內を驚かしました、同室のものと互に顏見合はせるもあれば、また胸とゞろかして、とび出す人もあります。

「電報は鳥田さんによ」と時間がすむや否や、一番上級の濱邊さんが何子の室に走せて來ました、「母病氣かへれつてよ」「エー？」と眞島さんは驚くのを何子は平然として、「ほんとの病氣ぢやないわ」如何にも平氣、「なぜ？」と左右より、問ひかけますると「あの何だわ、然して、よび返して御目出度事があるのよ」と委細を承知せるものか、かすかに笑みをふくみました、「然かもしれない、わ、道理で、鳥田さん笑ひ相にして居らしつたわ」三人は打笑んで口をつぐみました。

△「面白い寄宿舍生活も鳥田さん、おしまいだわねえ」と何子が、わだかも自身の上の如く、殘り惜し氣に云ひ出す、「ほんとよ、土曜の晩の茶話會なんかねえ、やさいもの御馳走も最後だわ」「ホヽヽヽ」と笑つてしまいました。

九時から九時半までが、自修も終へ、最もたのしい時であります。かしこに、こゝに、心のまゝ打集りて　何の遠慮もなく　辯論の自由は素より誰にはばかる事もなく、姉妹の如きむつましさ、しばしは古鄕も忘られます。

就寢の鐘が鳴る、廊下の燈が消える、皆眠ります、夜はます〳〵更けて、あたりは靜かに、沈みゆくのであります。

何子は、ねむられません、閉ぢたる眼にも、今朝の弟の手紙が明々とよまれます。

△すると古鄕の山河

我が家、我が父、我が母、兄弟、あらゆるもの、面影が　かはる〳〵浮び出まして到底眠られません。廻つて御出になる先生の足音も其夜ばかりはよく知つて居ました、そして夢には古鄕の正月を見たのであります。

（終）



東郷大將の家庭

滄浪生

△東郷家

東郷大將の家は大將の甥東郷吉太郎氏（海軍中佐）の方が本家で、大將の方は明治四年頃に分家せられたのである。

東郷家の由緒を正して見ると、甚だ奥床しい、即ち東郷家は全く平家の正統である、それは小松内府重盛の姫君が、平家沒落の時、鹿兒島へ落ちて來たのに、薩摩隼人の豪の者が花聟となつたのが、抑々の東郷家の始祖である。

始祖以後東郷家は、連綿として以て今日に至つたのであるが、東郷家に東郷家の家神といふ者があつて、毎月十八日は其例祭で、十一月十八日には、其大祭をする、そうして家神の本體は白馬である、それは白馬は小松内府の愛せられたもので、又東郷家の祖先と白馬とは、戰場の上に大いなる關係があつたといふ譯で、其家神となつて居るのである。

又島津公の藩士としては、東郷家は古術指南の家で、先君東郷吉左衞門氏は、御廣式用人といふ重役を勤められて、藩中に先生と呼ばれて敬はれて居た古術の指南といふは、首實檢前髮の立方、上下の着

方等、即ち武士の禮儀作法を掌るのである故に、東鄕家は全く鹿城一番士弟の風儀を掌つて居る家である。

大將の嫂東鄕せい子の御話に、『當家では古本禮式道具が澤山ありましたが、其中に木造の人間の似首が、轉々と出て來るのには、氣味が惡う御座いました』と言はれたが、これ等から推して見ると、東鄕家は壯んに古術を研究せられた家と見える、鹿城武士の禮儀作法は、全く此家で出たといふことが分る。

●●●●●△東鄕家の質素

東鄕家を見舞ふて、其質素なるを觀、又貞賢なる令夫人に接して、其古術の家の事を引當てゝ考へて見ると、成るほどと感ずることが多い。

世間でいふ如く全く東鄕家は質素である、余は先づ其本家吉太郎氏方と、大將の方との二家を併べて見やう。

芝區の中央を拔けて高輪泉岳寺を越へかゝる手前一寸した坂がある、此邊を松坂町といふ、其坂の中ほどに、東鄕家が二軒併んで居る、而して其坂上の家が、即ち東鄕の宗家、即ち大將の亡兄の家、今は姪の吉太郎氏の家である、此家は間數が五ツか六ツ位門塀も通常のもので、玄關から座敷へ通つて見ると、美しいとか又當世風とか言ふ樣なことは少しも無いけれども、床間に天照皇大神宮の大軸を掛け、額、置物、生花等が皆正々と式を守つて置かれておつて、質素ではあるが、儼とした家風である、又茶器酒杯の如きは、洵に貴重なる物が多い、大將の家は、麴町番町で、これも坂の中ほどにあるが、黑塀黑門、それから玄關の搆へが、大將の御邸としては如何にも粗末で、月收の百圓か二百圓位しか取らぬ役人の家らしく見えるのであるが、さて座敷から奥に通りて見ると、表の即ち世間で質素といふ家の外に、奥に建增の離家が一棟ありて、此處に八疊の御座敷が二つある、表の八疊二間の座敷を之に合はすれば、即ち御客間が都合併せて四間ある譯である、

而して玄關から座敷の有樣は、凡べて質素ではあるが、決して構はぬといふ風では無い、古雅なる軸物が床間に掛けられ、布團も火鉢も決して粗末では無い、凡てが儼として規則正しくて、武家として一點非難の無いやうにしてある、單に世間でいふが如く唯構はぬといふ風のものでは決して無い、武といふものは、如何なるものであるかといふことを考へ又大將の家が古來古術の家であることを知り、且つ大將夫人鐵子は、有名なる人物、即ち西鄕南洲翁の友人海江田信義氏の令孃でありて、賢婦の聞えあるより推して考へて見ても、大將邸の質素は、甚だ奧床しい質素であることが分る、即ち萬事に武士の禮儀作法を凡てに施して、淸淡と嚴肅とを家門に表はして居られるのである。

△四人の男兄弟

大將の父君吉左衛門氏は、藩公に重く用ゐられて居た、義の堅い方であつたといふ、大將の兄弟は男子のみ四人であつた、長兄四郎兵衛氏、次は宗九郎次は大將、次は四郎左衛門氏であつたが、長兄は質に維新の際從軍して七回も激戰した人であつたが、後故山で病死されて、之が即ち本家を相續されたので、今の吉太郎氏の父君である、二男宗九郎氏といふは隨分意地の強い人で、三十歲の時島根縣知事に任ぜられ、常々桐野、村田等の先輩と往來して居たので、十年の戰亂に彼等と共に城山の露と消えた、四郎左衛門氏は十五歲の時、藩兵となりて上京し、十七歲の時、會津戰爭に出て、陣中に病沒したが、軍功のあつたので、戰死といふことゝなつて、招魂社に合祠せられて居る。

大將は未の年の生れで、今年五十九歲である、大將が幼時からの事をいへば、大將は氣分のサラ〳〵とした人で洵に決斷がよくて、何を言はれても又如何なる事があつても決して顏を濁したことは無い、而して克く氣轉が利いて居て、辯舌はよい方ではなかつたけれとも、さりとて今日の如く寡言沈默ではなくつて、要するに大將の眞面目なることは古から

東郷家傳來の本性を發揮したものである、大將の青年時代に、大將が其の父兄と共に一間に集つて、互に向合つて談話するにも、端座して甚だ嚴格であつて、誰一人決して冗談などを語り出すものはなかつたのであつた、是れ元より作法の家であるから、家風が自から爾うなんであつたでもあろうが、兎に角眞面目は東郷家の傳來の美風であると思はれる。

△大將と家庭

大將が還回凱旋せられて、目出度其家に歸られた時、東郷家の親戚海江田、有村、税所等を始めとして、其他の人々も打集りて一夜親戚中の酒宴が開かれた、其席上一同大將の健康を祝して、和氣洋々、嬉々たる笑聲も聞えたが、大將は格別嬉しいといふ樣子も無くて、何だか心の奥に未だ一の不安があるやうであるので、一親戚が大將に向ひ盃をさすと、大將は『乃公は一萬人も人を殺して來たのであるから、それを思ふと氣が浮かない』と言はれて、始終眞面目で居られた、世間では大將が夫人兒女と共に一家團欒和樂を極めて居らるゝが如くいふものもあるが、それは大變見當違ひで、大將は大名譽の凱旋をされたに係はらず、ひたすら時局の前途に心を傾け、日々本省に出勤し、又幕僚と協議を凝し、實に多忙を極めて居られる、まだ家庭の和樂などいふ閑暇は無いので、夜分少しく早く歸つた時には、長男彪氏、二男實氏、令孃八千代子を相手に、揮毫せらるゝ位で家庭に居ても常に戰地に居るが如く、少しも氣を緩められ無いのである、親戚の一人が余に語るに『實に私共は感涙に咽ぶことがあるのです、一寸の間も御自分の職務を怠らず、全く戰地に在る時の通りなんです、體力の疲れざる氣力の緩まざる如何に忙しい時でも疲れたといふことを穗にも見せず、又少しも人を外らさないです』と言はれるが、大將は全く間斷なく或る大目的に向つて進む人で、大忍耐の人である、大至誠の人である、故に大將の家庭が、勿論美しい清い武士的家庭の典型を具へて居ることは、いふまでも無いことで、此戰時に一家

が笑ひ興ずるといふやうなことは決して無い。

△夫人鐵子

夫人は今年四十四歳で、背の高い品の可い御方である、即ち夫人は名門海江田家の出で、夫人の實弟孝吉氏は、今東鄕家に居らるゝが、此の人は氣品と云ひ、力量といひ、人に秀で、一時學習院のチャンピオンとして、名を賣つた方である、今は京都大學法科の學生である。

夫人の父海江田子爵は、維新の元勳の一人として實に一二と言はるゝ人である、此人の令孃たる夫人の人格如何は言はずとも推知すべしである。

夫人は料理、裁縫、生花、音樂それは何でも婦人としての事は、大概堪能であるが、特に人に秀づるは堅實にして且つ濟家の技に長じ、大將をして『大丈夫』と安心せしめて、全く內顧の患なからしむるにあるのである、其濟家上の二三を言へば、夫人は今でも決して洗濯物を外に出さず自分でされる、兒女の衣物は必らず自分で裁縫する、大將の食膳は必らず自分で調理して出さるゝ、それから障子の破れた時は、松下禪尼的に自分で補せらるるのである、さりとて夫人は又世間でいふ如く、一切外に出ないの、或は前垂掛けて、玄關に取次するのといふやうな方では決して無い、余は四五度大將の宅を伺ふたが取次にはイツでも下女又は書生が出られた、夫人は別に人に外づれて目立つといふことは好まぬ人であるから、かくと取留めて言ふ可きことは無いが、唯靜肅なる婦人の美德を備へられた方である、口數の如きも言はぬでも無し、言ふでも無し、語る可きには語り、默す可きには默し、又衣物の如きにしても出る可き所には立派に盛裝して出られるが、家にあるときには、質素な服裝をして、人に目立たゝぬところが、奥床しいではないか。

△家內の數

大將家族は大將夫婦兒女三人、書生一人、女中二人である、而て殆んど棟續きに、親戚税所少將の家宅が在つて、又海江田孝吉氏も滯在せられて居る。

愛孃八千代子は、華族女學校に通はれ、長男彪二男賓二氏は學習院に通はれて居る、一家内の空氣は實に美しいもので、武士的の美風が充ち溢れて居るが、大將が家にありて一同と共に食卓に向はるゝ時に大將の前に堆く盛らるゝものは、小ヒラメや鰯などの乾魚である、大將は乾魚の雜魚が、至つて御好といふことである、若し夫れ戰局愈々終結して了つた後の大將の家庭の和樂は、果して如何であらう而して今は尙ほ此の和樂を縱ひまゝにせられざるのも、又た實に大將一家の美德である。

乃木大將と夫人

記者

對攻不落と銘打つた旅順の重鎭を包圍して、朝に二百三高地を拔き、夕に二龍山を陷るれ、松樹山を占領して、敵の死命を制し、頑强不屈の名を擅まゝにしたる「ステッセル」將軍をして、白旗を立てゝ遂に降伏を軍門に乞はしめたる乃木大將は、如何なる人であらう、又た此の英雄に仕れそはるゝ令夫人はどんな方であるかは、恐らく日本國民は申すも愚か支那朝鮮、さては西洋各國の人までも、仰望して、聞かんと希ふところのことであらう、イデや大將と令夫人のことについて、知つて居るところと、聞いて居ることとを綜合して、こゝに記して見やう。

△丸龜師團に於ける大將

乃木大將が、身を持することの至つて質素であつて且つ甚だ嚴正であることは、第十一師團長時代の二三の逸話でもつて、充分に會得することが出來るから、丸龜師團に於ける當時の乃木將軍を寫すことにしやう。

通例丸龜師團といふは、第十一師團のことであつて日淸戰爭後の軍備擴張に伴うて新設せられ、讃岐の善通寺に置かれてあるのである、さて此の師團に最初の長として任命せられたのが、則ち乃木將軍であつた、將軍の此地の師團長たることは四年の間であつ

たが、軍紀頗る嚴粛にして、下兵士に至るまで、能く將軍の教訓を守り、威望に伏して、實に模範師團の名を天下に揚げたのである、而して此の四年の間將軍が、同地の一寺院に僑居して、從卒馬丁と共に淡泊無味なる境涯を送り、遙々尋ねて來られた令夫人を門前拂にせられたことは、その高風洵に千古に傳ふべきものである、それは

△讃岐金藏寺

といつて、善通寺に續いて居る龍川村の内の字金藏寺といふところにある禪寺に住居して居られた時のことである、そも此の寺は讃岐鐵道の金藏寺驛から三町ほど距たつた處にあつて、樹木鬱蒼として、如何にも莊嚴なる古寺である、由緒を尋ぬれば、醍醐天皇の延長六年勅命により、土地の名を、そのまゝ金藏寺と命名されて、四國七十六番の靈場で、弘法大師の甥智證禪師の生れた處である、かゝる靈地に起臥せられた將軍の四年間の生活は、實に

△一名の從卒三名の馬丁

を相手に朝夕を共にせられ、殆んど上下の區別もなく、磊落に月日を過ごして居られたので、寺から賄つてくれる料理は、勿論精進ものであつて、御馳走のある道理はないが、その旨くもない精進料理に舌鼓摑つて、二人の從卒と共に食膳に向はれて居た、そして從卒に給仕をさせると窮屈がるからといふて蓋のついた大茶碗に一杯盛り切りの飯を獨りで食べて居られたのである、然るに着任されて間もなく、臺灣で受けたマラリヤ熱が再發したので、軍醫に診斷せしむると、餘り淡泊な滋養の少ない食物ばかりを喰べるから、營養不足の爲に、病氣が再發したのだといはれたので、それから遂に馬丁の女房が何か見計らつて、料理をすることゝなつたが、何にしろ元來が質素の達で、殊に嚴格であられるので、馬丁の女房が差出がましい事でもすると、散々不興を蒙むることがあつた、此間別て人々の最も推服したのは、

△常に軍服を着通し

であつたことで、軍人たるものは、何時如何なる命令を受くるも知るべからずと言はれて、夏でも冬でも常に軍服を着通しで、たゞ床に就くときに日本服に着換へられるばかりであつた、萬事がみなかういふ風であつて、實に質素と嚴格とは、將軍の性質を一貫した善德である、その頃東京から令夫人が令息故保典氏を伴れて金藏寺へ來られた、然るに將軍は、痛く立腹されて誰れが來いと命じたかと、一言の下に叱り飛ばして數百里の海山を越えて遙々來られた

△夫人を門前拂ひにして、すぐに東京に歸れと嚴命された、尤も夫人の方では前以て手紙を出して置いた故、ヨモヤ差支はあるまいと思はれて來られたのであるが、將軍はその手紙の返事をも待たないで、勝手に來たといふので、斯く嚴重にせられたのであらうが、又一つには金藏寺といふ靈場に、假にも婦人を入れるのは、寺の風紀にも關すると思はれたのも其の一原因であらう、寺では斯くと察して、御遠慮なく御通し下さる樣にと、再三再四勸めたけれども、將軍は頑として應じなかつたので、哀れや令夫人は山門の前に立



つて、兎角の思案に暮れて居られたのを、副官の葦原少佐が氣の毒に思ひ、種々將軍に說いて、やつとの事で面會丈はされたとのことである、將軍の己れを持することの嚴重にして、寸毫といへども假借せざる性質は、此の一事にもあらはれて、適れ日本古武士の俤を偲ぶべきではないか、元來將軍は

△非常の大酒家

であつて、酒を飮むと、隨分元氣の出る方であつたが、舊藩主毛利家では、此事を知つて居られて、或年の元日に、今日乃木が來たなら、一つ大きな盃で困らせてやれとのことで、家扶が一升入りの大盃を出して待ち構へて居るところに、將軍が出かけて來られた、それとばかりに、その大盃を面前に差つけて、それに酒をナミ〳〵と酌いで、一同は樣子如何にと見て居ると、將軍は更に恐るゝ景色もなく双の手に其の大盃を捧げて、一息に飮み了り、二杯目を突きつけて、イザお酌をと平氣でいはれたので、居列ぶ面々一同壓氣に取られたとのことである

然るに洋行後は、丸で見違へる樣なとなつて、殆んど盃を手にせぬといふ風になられた

△少酒家

そこで別にこれぞといふ嗜好もないので、たゞ時々寺僧を相手に圍碁を弄そばるゝ位で、その外には、乘馬を手入れせらるゝのが樂みであつた、又將軍が始めて一師團の司令部に登廳して、師團長室に這入られて、そこに花模樣の

△美しい絨氈

の敷き詰めてあるのを見られて、忽ち氣色を換へ、こんな贅澤なものは、早く取のけて了へと命ぜられたので、直ぐに取のくることになつた、こんな風でもつて部下を董督せられたので、將軍在職當時の丸龜師團は、軍紀整肅にして、假りにも風紀を紊るといふ樣なことがなかつた、然るに先年第五師團下にかの北清戰爭の分捕事件といふが天下の噂となつたので、純潔なる將軍は、非常に慷慨されたのに加へて、その部下からも之に關係のある某將校を出した

ので、いよ〳〵憤慨されて、忽ち責を引いて職を辭せられたが、かゝる威望德望幷び備はる將軍を爭て長く閑地に置かるべき、日露戰爭の起ると同時に、將軍は、復び旅順攻圍軍司令官の大任を拜せられたのである。

△將軍の住宅

將軍の質素を尙ばるゝことは、前に記した通りであるから、その居宅の至つて狹隘なることも知るべきである、赤坂新町の通りに、修飾なき關木門の中に極めて無風流な木造新築の一搆へが、則ち將軍の二十年來住み馴れた邸宅であるが、此の門內にふさはしからぬ赤煉瓦の建物があつて、それは將軍の常に撫育せる愛馬の廐なのだ、木造粗製の住宅と、煉瓦の廐、これ丈けでも將軍の人物を知るに餘りあるといふべしだ。

一月三日といへば、旅順陷落の大吉報が達いた翌々日であるから、同邸の門前は定めし車馬の山をなすであらうと思はるゝに、全で反對で、門內一輛の車なく、一個の人影だになかつたが、此日同邸を訪づれた人の話に、入口に數葉の年賀の名刺を入れた名刺皿が、テーブルの上に橫はつて居るのが、平日と異なるだけで、その他には更に正月らしい模樣もない、蓋し二人までも愛子を失はれた乃木家にあつては、家庭に春の來やう筈がないから、それも尤もな譯と思ひながら、名刺を通じて

△大將夫人に面會

を求めたが、程なく應接室に導かれた、やがて夫人は出でられて、丁重なる挨拶をせられたが、窶れたる姿に被布を着け、最と憂愁に沈みたる樣哀れに見受けたが、又何處となく喜悅の色を湛て居らるゝやうでもあるのは、旅順陷落の吉報が、如何に夫人の心を躍らしたるを知るべきである、先づ旅順陷落のことから、お話を始めて祝詞を陳ぶると、夫人は

左樣旅順は中々急には落ちまいとの噂を聞いて居ますので、何日落つることかと案じ暮して居りましたが、急に敵の方から降伏を申し出たとのこと

で、昨日陸軍大臣から、お知らせが參り、又宮內省からも、お人が參られましたので、愈よ陷落になることと存じまして、一方ならず悅んで居ります、しかし何分多くの死人がありましたことですから、實は私も世間に對して、何となく面向けが出來ないやうに感じまして、戰地に贈物一つ致しますにも、女中では用が辨じませぬので、自分に出たいと存じますれども、書間は何となく氣後れが致しますし、夜分では色合などが分りませず、朝早く人の知らぬ間に用を足すといふ次第でありましたので、たゞもう日となく夜となく陷落をのみ祈つて居つたのでありますが、今度の報でヤット氣も安まりました、定めて乃木も世間に申譯がたちまして、何程か滿足したことゝ存じます。

訪問者は、幾度か二人の令息の名譽ある戰死に就き弔詞を陳べんとしたれど、爲に夫人の悲嘆を招かんことを恐れて、わざと差控へて居たが、今や夫人の悅びの色を見て、此時こそと、令息の弔みを述べたが、夫人は之に對して、答へられるには、

倅の打死いたしましたのは、軍人の常で御坐いまして、お國の御爲めでありますから、私は少しも悲みは致しませぬ、夫が常々倅どもは役にたゝぬと申して居ますので、ドンな打死をいたしましたかと、氣遣つて居ましたが、此の間戰地から倅の刀がとゞきましたので、中を檢めて見ますと、刀先きが大層毀れて居ますので、少しは働らいたのかと存して居ります、長男の勝典が戰死ました時は

弟の保典から悉しい手翰が參りましたが、此度保典が戰死ましたに就いては、まだ誰れからも、消息がありませぬ、乃木は出征以來一度も便りをいたしませぬ、留主宅のことに就いて、問合せの手紙を出しましても、何とも申して參りませぬ。

少尉保典氏は友安少將の副官であつて、爾靈山の戰鬪中傳令として、戰線に行かれたが、傳令を達すべき聯隊長が、前進して、爾靈山散兵濠の頂點に在つたので、其處に行て、使命を全うせられたのである

が、此日は非常の激戰であつて、我が將校も過半死傷した時であつたから、滿腔の勇氣抑へがたくて、聯隊長に乞ひて、その部下の一隊を提げて、挺進した一刹那に敵彈來つて少尉の眉間を貫きて、そのまゝ戰場の露と消えられたのである、之より先き少尉は常に戰鬪線に加はらんことを熱望して、度々少將に其旨を願はれたけれども、少將は兄中尉勝典氏も戰死されたことであるので、遠慮し、特に衛兵長とせられたが、忠義一圖の乃木將軍は却つて之を不滿に思はれ、『倅は役にたゝぬのであるか』と言はれたとのことであるが、遂に天晴の戰死を遂げられたのは、流石に將軍の令息として耻づかしからぬのみか日本の軍人たる本分を盡されたのである、訪問者は此ことを夫人にお話しすると、嬉し涙を拭はれつゝ

少しでもお國の爲になるやうな、戰死をいたしましたのは、私の大に滿足するところであります、彈丸の眉間に中つたことは聞き及びましたが、詳しいお話を伺ひますのは、今が始めてゞ、大に安心いたしました。

といはれた。訪問者は話頭を一轉して、乃木將軍が彈丸雨注の間に立ちて、指揮されるのは、上下一般の感激するところであるが、萬一のことがあつてはとお氣遣ひ申して居ましたのに、旅順陷落の報に接して、此の憂慮の無用となりしは幸なりと申せしに夫人は

承まはりますれば敵の總指揮官クロパトキン將軍も絶えず戰線を巡視されるとのことでありますれば、乃木に於ても、さうするのが當然の職掌でありませう。

と答へられ、又た

正月とは申しながら、旅順が何日落つることやらと、松飾りもせず、熨斗の備へもいたしませずに置きましたが、思ひがけなく、陷落の報知がまゐりましたので、昨日から熨斗丈けなりと、用意するやうにと、申して居りましたところです。

と語られた。

ア、渾身を君國の爲に献げて、己れと己れの妻子あるを忘られたる忠勇無双の將軍よ、二人の愛兒を失はれ、由緒正しき血統を絶ちて、半年餘の長き間、一夜とて安き夢だに結ばれざる夫人よ、今や旅順は陷落して、その大なる職責を盡し了はられしも、猶自ら足れりとせずして、一意終局の勝利に汲々として粉骨せられ、日夜之が爲に熱禱せらるゝ精神に對して、我等國民たるものは、幾何にして感謝の意を表すべきであるか。

新皇孫の御乳人

勤儉なる家庭の美德

第三皇孫殿下御降誕あらせ給ひしに就ては、御前例の通り、妃殿下親しく御乳を付けさせ給ふ事であるが、尚御乳人として豊多摩郡野方村伊藤政五郎妻うた子を御採用に相成つた、御乳人を擇ぶに就ては、素より其筋にて百方嚴正なる調査を盡せし結果であるが、記者が、伊藤方を訪問した時、母親のやすは滿面に喜悦の色を湛へ、「那女が皇孫さまの御側に上らうとは夢にも思ひませんでした」と嬉し涙に暮れて果は言葉も出なかつた位である、いでや同家の勤儉なる美風からうた子の性行を紹介致さう。

▲裁縫の名人　昨年の十月に分娩した婦人で、新皇孫殿下の御乳人を選擇すると云ふ事から、うた子も其候補者の一人となつたが、多くの婦人の中で當選する資格を有し天晴御冊き參するに至つた同人の名譽は勿論、伊藤家の榮譽は絶大なものと云はねばならぬ。うた子は、九歳の時土地の小學校に入學したが、學校は其當時沼畊小學校と云ひ今は野方小學校と改名されて居る、十五歳の春迄通學し普通教育を終へ、夫れから隣村高圓寺村に裁縫の師匠で、俗稱士方の婆さんと云ふナカ々々斯道には熟練した者があつた。其の師匠の許へ通ふ事になつた、うた子は女の手藝として、裁縫は村内でも評判の名人で今日迄一家の針仕事は、自分一人で取仕切つて居り

其間には、農業の手傳ひをするのが、例になつて居つたが「うたは力があるから、裁縫をさせて置くのは惜しい」と農業する側はらは、裁縫に時間を費すのを惜がられ居つたのです。

▲家庭の春風　うた子は家付きの娘で、父は德次郎(五六)母はやす(五五)と云ひ、同胞は自分共四人で、孰れも女姉妹ばかり、良人は政五郎と云ひ、夫婦の中に權左衛門(十)みえ(三十七年十月五日生れ)と云ふ二人の子供を産け、權左衛門は、目下尋常二年生である。子供を教育するのは、母親の責任だと良人政五郎が常に訓誡してゐるから、子供を敎育するには頗る嚴肅で、夜も復習を終へなければ寢ませぬばかりか、自分も其傍に居て裁縫を仕ながら、讀書の監督をする、夫れが毎度の例になつて居つた。性質は快活であるが、之れ迄兩親や良人に對し、口返答一つした事はない、一體温雅な勤儉な家庭であつたが、うた子は實に家庭の女王と云はれて、兩親達も我子乍ら「うたが側に居ると怒る事が出來ない」と云ふ程である、融々たる家庭の春風は、常にうた子の身邊に吹いて居つたが、愈々去る三日東宮御所の御召により出發する際、良人政五郎は懇ろに誡めて云ふよう「高貴の御方に册くこと故、萬事落度のないように注意するのは勿論であるが何事に付けても心配致すな、心配する程乳に影響する事はない、お前の役目はお乳だから、萬一夫れが爲め細くでもする事があつては、夫れこそ一大事である」と此事をのみ繰返し申含めたと云ふ事である。積善の家には餘慶ありと諺にもある通り、うた子の兩親は村内でも正直過ぎると云はれる程の人物故、土地の者も彼家から御乳人の上るのも、不常の心懸けが良いからだと評判して居るのです。

▲珍らしき勤勉家　うた子の父德次郎は今年五十六歳にもなり、娘の養子も出來て、安樂な身になつたが、勤儉なることは昔と更に異らず今日でも、夜業に草鞋を二足以上も作るとか、繩なら二十尋位のもの三束も糾らなければ寢に就かないと云ふほどで

ある、母親のやすも其の通り働きもので、眼も良しする處から、折々は着物の繕ひ抔をするが、其の外には縄を糾つたり、鞋を打つたりする、老人には珍らしい勤勉家である。此両親の仲に出來たうた子は親に似て勤儉至らざるなく、良人政五郎も至つて熱心家で農事を勉め、村内に設立されし農事研究會の幹事として、頗る盡す所があるし、率先して會の爲めに斡旋して居る。

▲うた子の見識　うた子の結婚したのは廿歳の時であつたが、間もなく一子權左衛門を産けた。うた子の爲めに尤も感ずべきは、小兒の衛生に就て忽緒にせぬ事である、兎角に世の母親心として、兒の愛には溺れ易く、姑息の愛に陥り安いから、小兒の欲しがる食物なら、母心として悪いと思つても與へるようになるが、うた子は此點に於ては尤も厳重で、時間や食事に就ては、與へてならぬと思へば、如何に泣かうとも決して與へない、或時の如きは、一子權左衛門が菓物を食べて、尚一つと迫望んだけれど頑として與へず、「夫れでは喰べ過ぎるから、幾ら泣いても與りませんぞ」とて應ぜず、實に思切つた行ひで、西洋人の家庭に於ける母親の見識と、實に相肖て居るのは、うた子の一美談として稱すべきである。

▲家庭の精神　夫れからうた子が、東宮御所へお召しになつてからは、一家の光榮として、両親も良人も、之れからは一層農業を勵み、誠實の道を盡さなければならぬと互に相誡しめて居ると云ふ、健氣な心懸けを記者に語つたが、政五郎は尚落ちかゝりし壁を指し、岳父が勤儉でありますから、家屋が損じても、大概なら、我慢しろと申されますけれど、那の通り壁も破れて雨風さへ洩れる譯故、今年は新築しようと思ひ、材木も準備しましたけれど、妻女が御所へ上りましてから、一家相談して家屋の建築も見合せとし、勗めて節儉し、餘裕でもあれば何か御奉公の道にでも使ひたいと決心いたしました」と云つたが、一致した家庭の精神の撓みのなきこそ、

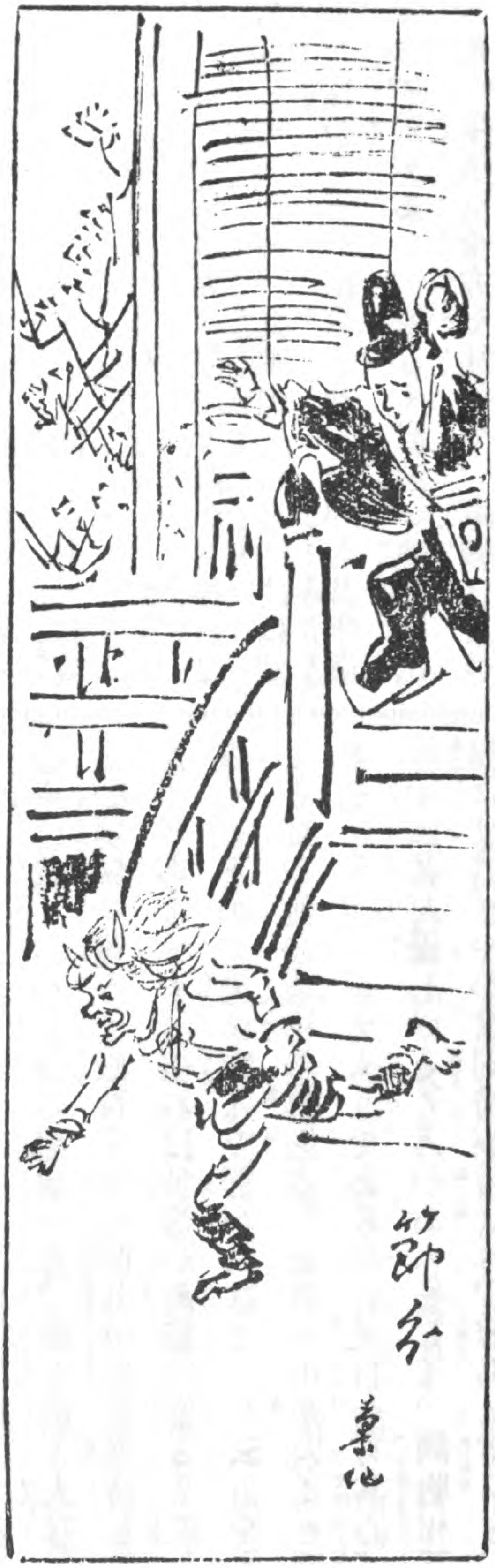
誠に頼母しき次第であります。（報知新聞）

露國の家庭

梅廻舍

ロシヤの家庭をお話し申さうとするには、先づ其國民の位置はドゥ云ふ樣子であるか、其國家の組織がドンナふうであるか。豫め是等のとどもをザット呑み込んで頂いた方が大層都合が宜しいので厶いますが何しろロシヤと云へば其面積に於て歐羅巴の半ばも有らふと云ふのみならず、聞くさへ恐ろしい大鷲の羽音に世界の列强も少々たぢろんで居るので、彼の志賀矧川氏の「ラテン民族……歐洲南部のイタリヤ、フランス、スペイン、ホルトガルの人民……の事業は花の如し。戯曲の如し。豈遂に恐るゝに足らんや。チャトニック民族……歐洲以北のイギリス、ドイツ、オランダ、スーイデン、ノールエーの人民……は商人なり。其脳裏は算術なり。是れ亦恐るべくして甚だ恐るべからず。スラヴオニック民族……歐洲東北部のロシヤの人民……に至りては、其事業花の如くならず。戯曲の如くならず。商人的にあらず。幽涼にして雄大、沈勇にして宏壯なり。因りて想へば彼のナポレオン一世が兵甲五十萬に將として露都モスクワに入るや露人輙ち此府（數百年來の國都にして五六十萬の人口を有す）を燒き棄て、サシモの佛軍を大破したるも、シベリヤ萬里不毛の邊境に鐵道を横絶せるも、日本國都東京の最高所駿河臺に東京第一の建物を築造し、屋上に大鐘を釣りて、アタリ構はず、之を撞き鳴らすも、流石に其意匠の雄大壯宏なるスラヴオニック民族の事業と云ふべけれ。ロシヤは秦なり。其眼中豈六國在らん哉。とシテ見れば外交家と云はず、政事家と云はず、偖は學者の科學的研究に顧みても、中々容易ならぬ民族と言はねばなりますまい。然かも其國都セントピーターースブルグに至れば近世文明の有形的設備や、物質的機關が、完備して居るのみならず、ソレハ／＼

壯麗宏大を極めて居るので、一見人の荒膽をひしがんばかりであります。ソレ故ロシヤに遊んだ人々が多く此大きいと云ふ觀念に呑み込まれて、ボンヤリして仕舞ふやら、後れを取つて仕舞ふやらで、其土産話の如き、唯々エライものだと云ふ一言に終るに過ぎません。勿論イギリスなどには隨分ロシヤの裏面をスッパヌイた調べが多いのでありますが、ドイツやフランスなどが、側から巧みに辯護を致しますので、自ら人の眼を眩ましてソレガ却て露國の幸になる事柄も少なく無いでありませう。兎に角萬里を隔て居る我邦の如きは、唯々ロシヤの目星いものや、際立たところが紹介され居る位で、其細いことや、穢いわたりは、サッパリ分つて居らないやうに思はれます、デ露國の家庭をお話し申すにも、立派な上流社會のことよりも、寧ろ國民普通の有様の方が珍らしくもあり、面白さうにもありますから、先づ



（一）露國の農民

の狀態をザット申し述べやうと思ひます。却說ロシヤは到るところ平原高野の土地からゆゑ、其立國の

大本は勢ひ農業に據つて支持しなくてはなりません從つて農民の數は全人口の大部を占めて、商業や工業に從事するものゝ如きは甚だ少數で、ロシヤが盛んになるも衰へるも、殆んど農民の双肩に擔つて居るものと云つて差支ありますまい。農民がロシヤに取つて、斯く有力な地位に在るにも係はらず、其境遇の誠に憐むべく、意外な程不仕合なのには驚くの外ありません。第一彼等は常に陰欝で然かも極寒なる自然の大苦痛と戰ひつゝ、其壓迫を打ち拂はねば須臾も其生存を保つことが出來ません。即ち其半歲は空しく雪下に呻吟するか、左なくば遠い他鄉に出稼するので、他の半歲は全力を注いで、車輪になつて働くのであります。此短かい月日の間に、農事の一切を切り上げた上に、冬籠の支度もスッカリ整へねばならぬのに、風雨陰濕などの天災が、手強い攻擊を降すので、貧乏の神も亦車輪になつて彼等の後を追驅けて參ります。故に彼等は此無情な風土と競爭し苦鬪しなければならず、彼の恐ろしい貧乏神の追擊をも打ち拂はねばなりません。彼等は此戰爭に於て、屢々退却をしました。又屢々敗軍をしました然かも彼等は敢て屈服せずして、益々志氣の奮勵に努めて少しも沮喪致しません。彼等は其結果として心中に拔くべからざる忍耐の力、即ち最と大なる受動的勇氣を養うて數百千年の間其位置を維持し來つたのであります。去れば彼等が萬艱に當るも默して堪へるとか、死に臨んで靜かに眠るとか云ふやうなことは、他の人種の眞似ることさへ出來ぬことでありませう。コンナふうであるから又自から其心ばへの中に甚だ優しいところがありまして、同胞相互の間には濃まやかな同情が行はれ、容易に爭ひを好まぬのみならず、相親み相愛して僅かに自然の無情に對する慰安の道を求めやうとして居ります。が他の半面に於ては、此の自然の絕大な暴力には拮抗することの出來ぬもの、人力の思議に及ばぬものと諦らめ、ソガ苦痛を免るべき最良の方法は唯神の力に縋

るより外は無いことと信じ、コヽに大なる迷信の念を起しました。コレゾ彼等が徒らに空想に馳せ夢幻を辿り、果ては浮世をはかなむやうな悲觀的厭世主義を其腦裏に刻みつけて、一種偏固な宗教的の臍を堅めた所以でありませう。

空想的の迷信や、悲觀的厭世の影響が、如何に人の神經を鈍らせ、世の進歩を防げるでありませうか。彼等の歴史に之を照らすも亦明かに之を證して居ります。彼等は三百年の久しきダッタン人の酷待に膝を屈めて居りました。彼等は彼等を奴隷として使役したる貴族の前に頭を低げて居りました。彼等はザールが無限の壓制の下に息を殺して居りました。爾かも彼等は此の屈從を以て自己の義務と心得て、知らず〳〵其積極的活動力を消退し、智力の發達を阻碍して自ら迂愚卑屈に陷りしのみならず、トンダ忍耐力をも馴致するやうになつたのであります。去れど一朝事に觸れ物に感じて怒り出せば恰も眠れる獅子の目醒めたる如く、滿身の蠻力一時に發して血を見ずんば止まぬと云ふ極端から極端に走る最も不可思議な性情を有つて居るのであります。彼等の性情が極端より極端に走る如く、ロシヤの社會もまた貧富上下の兩極より成つて、其中間に位すべき中流社會と云ふものが殆んど厶いません。丸で人情風俗を異にする貴族官吏等は、農民と相對して二大民族を成すの奇觀を表はし、一は富貴を擅にして奢りに長じ、一國の政權を握つてズット高く山の頂にあれど他は飢餓と戰ひ寒暑に呻吟し、苛税の請求に苦みながら低く千尋の谷底にマゴ〳〵して居るのであります。デ貴族官吏の家庭と農民の家庭とは全く天地雲泥も唯ならぬ有樣でチョイト露國の目星しい所を見通した位では、トテも農民の狀態を詳知し其内容の眞相を語ることは出來ません、併し前に記した通り、ロシヤの無情なる風土や、農民の極端なる性狀や、反對なる二民族の存在や、色々樣々の方面から考ゆれば、國民の位置や其社會の成立と云ふものが略々分ること丶思ひますから、更に歩を改めて

（二）農民の家庭

に就いて、先づ其衣食住の三項からお話し申しませう。ロシヤの農民は、富者と云はず貧者と云はず、何れも同じやうに狹苦しい麁末な家に住んで居ります。其家の構造は丸い柱を井桁形に組み立て、木栓を以て其隅々を止めた位のもので、其長さもやうやう二十呎、巾が十五呎ばかり、之を二タ間に仕切るのが普通になつて居ります。シテ採光とか通風とか申す大切の設けさへ、碌々備はつて居ない程でありますから、裝飾とか體裁とか、優美とか、風致とか云ふやうな分子は藥にしたくも、見附けるとが出來ません。吾々から見ると、嘸かし窮屈で、不愉快であらうと思はれますが。彼等は子供も大人も平氣に此中に雜居して不足を感じないのであります。

ソレカラ此家の前には物置や厩があつて、大百姓は之に穀物を貯へ、數頭の馬をも畜うて有ります。村村は其處此處と成るべく河流を選んでズラリと陣取て在りますが、コハ露國名代の火災防禦の一手段で言はゞ造附の大ポンプを枕もとに備へ置くと云ふ妙案かも知れません。

室内に這入つて見ると、キリストの肖像の前に一つの机が備へてあるが、これが家具の重要物で、此外には之と言ひ立てる程のものは何にも有りませんがグルリの壁には漏れなく、ブチツケの腰掛がキチント設備して、晝は椅子の務めをなし夜は寢臺に早變りをして、晝夜兼勤を致しますが、ソレデも間に合はない時は、此腰掛の上に、モ一つ釣棚をして空中寢臺とも云ふやうなものを仕掛けます。敷物にはタマサカ、犬の毛皮などを用ひることがありますが、ソレスラ土地で某と云ふ屈指の贅澤家位に止まりて普通の者は日々着用の外套を夜具にして棚の上段下段の面々何れもクルリト五體を包んで眠るのであります。露兵が滿洲の山野に木の根、岩角を枕にコロリとうたゝねを極め込んで苦とも何とも感じないといふのは全くコンナ風で平素の素養が預つて力ある

ことゝ思ひます。

却說また彼等はドンナ着物を着て居るのか。ドウして寒さを防ぐのか。露國の寒氣では定めし獸皮やヲシヤヤスコッチなどがドシ〳〵採用されて居りさうに思はれますが案外にも彼等は手織の木綿とか、ロシヤ更紗とか、緋ガナキンとか云ふ位な、粗末の材料で仕立た、シヤツと股引とを上下に着込み、チヨツキとズボンとを拔きにして、アッサリ其上に外套をはをるばかりであります。但し外套は多く羊の皮を用ひ冬に至れば更に手織毛布の丈長な外套に改め下着もまた綿入のものに着替へ、爐邊にすくみ込んで僅に冬の凌ぎを致します。此厚薄の外套は例の寢る時と勞働する時との外、四時着通すばかりでなく其下着のシヤツや股引も着替の備へが無いと見えて隨分穢くよごれて居るのは殆んど普通の狀態と申して差支ありません。此の外套が二タ通りある如く靴も矢張二タ種ありまして、冬季のものは貧富を問はず、何れも羊毛の靴を穿きますが、其外の時は貧者は祝日でも無ければ之を用ひることが厶いません。然かも其靴は中世紀時代の遺物であつた植物纖維で拵へたものを、今も相變らず使用して居るので、ツヒ隣のドイツなどに於ては已に考古學者の考證品として博物館に陳列されて居るのであります。彼等が舊習を墨守するの根強さ、丸で支那人と異が無いではありませんか。

それから次ぎに食物のお話ですが、一般の常食は黑パンを噛り、粥をすゝるばかりで、祝日の外肉類の如き御馳走は卓上に上るとがありません。富農と申しても此粥に肉を混ぜる位が關の山で、其食事の手輕で粗末なことは恐らく類ひ稀れなるものでありませう。要するに彼等が斯る食物や衣服や家屋に甘んじて、彼の酷薄なる天地の迫害にも殘忍なる政府の壓制にも怯まず撓まざる手強さ加減は、如何に彼等が個人性の頑勇なるかを知ることが出來ます。之ぞ彼等が一騎打に强い以所、分解力に逞しい所以、野蠻的に剛なる以所で旅順に沙河に大小幾多の戰はア

リ〳〵是等の特相を露はして居る様です。サレド此特相に伴うて團體的に强からず、總合的に逞しからず、文明的に剛ならず、スハ大運動の大活動と成つては見かけ程にエラク無いのは、每度我兵勇に追ひまくられて、アリ〳〵其眞價を暴らし居るではありませんか。ソハ兎も角話頭は漸く

（三）家族の狀態

を申し述べるまでに運びました。彼等の諺に「白髮の頭には限りなき權利あり」と申すことがあります。曾て或二人の農夫が打連れてモスコー市に出掛ました。其折酒に醉へる老髦の一人同行の若者に向つて出任せな惡口に飽き足らず、皺ばかりの瘠腕を振ふといふ始末に、件の若者はう〳〵の體で右に左に避けながら「マア〳〵　ドウゾ〳〵、御尤です。お許し下さい。ソレお危う厶います、お轉びなさると大變です。サア是れ位でお虫を堪へて下さい。」と詫びつ諫めつ一筋に老ひぼれを痛はつて居りましたが、見るに見兼ねて此二人の中へ分け入つたものがありました。スルト若者は「ドウカ捨て置いて下さい。之は私の父で厶いますから」と、言はれて其人も手をおさめたと申すことであります。如何にもスバラシイ親權でありますが、彼等は敢て之を怪まざるのみならず、父が一家の家長たる權は恰も國家に於けるザールの如く、天が神聖な權利を賦與したるものであるから之に背けば神罰を被るものと固く信じて疑はぬのであります。彼等が斯る觀念を抱き居るのは、祖先傳來の一大習慣に依るのであります。彼等が誰れ彼れを論ぜず、年長の者に父若しくは叔父の尊稱を呈して、滿腔の尊敬を盡くすと共に、之に反抗するやうな振舞ある時は、立どころに郷黨の擯斥を被つて、己れの立場さへ保つことが出來ません。コンナ風である上にザールの壓制と貴族の專擅とは二つながら父たる者に、其家庭に於ける好い手本を示して、益々親權を增長せしめますので、父は其妻子を始め其他の家族の者に絕對的服從義務を敎へて居ります。去れば此親權の下に屈從する彼等の情けなさ

結婚して子を持ち孫を抱くも、家族の一員に過ぎぬ上は此親權の束縛より離れることが出來ません。のみならず其財産制度の如きも、彼等が創始時代のままをソックリ繼續して居るので、親も子も兄も弟も叔父も叔母も孫も皆一つ屋根の下、若しくは同じ屋敷に住ひ共有に土地を耕し、一人の家長の配下に、共同生活を營む樣は先づ以て一種のトラスト見たやうなものでありませう。して父なる家長の死亡した時は、血族の順序に從つて、其長男が遺産を相續して、新たな家長になるのが通例であります。若し男の子が無ければ、年長の弟が之に代りますが、時としては家長の寡婦が、其子及び孫を後見して主權を取扱ふか左なくば年の如何に關はらず、才德の勝れた者を推選することがあります。大なる家庭には夫婦ものが、五組も六組もありますから、家政の上に込み入る事柄も尠からず、面倒な衝突も有りがちゆゑ、折々家庭會議を開いて、兎角のゴタ〳〵を防ぎて居りますが、家長は此會議の議長となり、彼等の議論を採決して、ソレ〳〵服務の指揮命令を司ります。

此トラスト共同的生活も時勢の進運に伴うて或る事故の下に申さば父の死亡の時とか、屋敷の手狹を告げたとか云ふやうな場合に、財産の分割を乞うて別居するものが、チラホラ見えて來ましたが、其昔は此家庭分離を痛く嫌ふて容易に實行しなかつたものでありました。してかゝる風變りの家庭に於ける。

（四）女子の狀態

は麗はしい花となつて其光を發揮し居るや否や。西歐の女權に比べて遜色が無からふかどうか。ソレトモ彼等には更に變つた味でも持つて居るのでありませうか。然り彼等は彼等にふさはしい色々の習はしを演じて居ります。彼等の俗諺の一つに「女は髮が長いけれど心は短い」と言つて居ります。之は申すまでもなく女子の智識の淺いことを輕しめたものでありますが、更に酷いのは「女は七人寄つてタツタ一つの魂しか有たぬ」と、更に〳〵酷いのに至つては

「女は魂を有つて居るもので無い、唯一トかたまりの熱發氣に過ぎぬ」と。さても何たる形容の仕方でわらふぞ。何れ如何なる土地にても、マサカ人類と烟との價値を一つに見做すことは有りますまい。然るに女子は、また濟ましたもので「善き夫の拋擲は長く傷まぬ」と誦へて「妻たゝき」と稱する夫の私刑にさへ甘じて居ります。此妻たゝきとは、妻が夫の機嫌を損じた時などに、夫は其妻を引き据え置いて思ふ存分に打ちたゝくのであります。勿論露國の婦人とてフヂミではありますまいから、打たれて痛くない筈はありませんので、心中常に悲慘の涙にむせび居ると見え、人間一生に一度と云ふ嬉しい、結婚の如きも、深く恐れて、サナガラ敵地にでも踏み入るかのやうに、胸を躍らせ身を震はせて、夫の家に歸ぐのであります。サレバ結婚前の生活は、彼等が最も幸福な時代として、白髮の老先までソレガ盛んに歌はれて居ますが男子の無情なる、敢て之を顧みるものが有ません。尤も追々婦人の地位を重んずる人が無いのでも無く、法律も婦人を保護して居りますが、因襲の久しき到底オイソレと云ふやうな改良を見る譯に參りません。コンナ底氣味の惡い風習でも、亦底に底ありで、相戀の男女が千々に心を碎いた末撞き鳴らす教會の鐘の身にシミ〴〵と樂しく聽ゆる例も屢々あるさうです。猶また地方に依つては、多少女子を可愛ゆがり、女權も稍々生氣を帶びて結婚の如きも、多く相愛法が用ひられて居る所もあります。其代りボルガ川附近の住民の如き、未だに婦人の賣買が行はれ居るのみならず、時により丸で見も聞きもしないものを奪ひ來て、妻となすやうな蠻風さへ殘つて居る所もあります。要するに婦人の位置はコンマ以下にさまよひ有れば、地平線上に其曙光を認めるまでは、尙前途程遠いことでありませう。婦人がかばかりの値や力でドウして一家を和らげ、一族を温めて、花のやうなホームと爲すことが出來ませうぞ。然り味なく冷かなる其ホームが更らに氣候の寒さと相待ちて轉た一入の落莫を覺ゆる光景は

（五）結婚の眞髓

却說男子が成長して勞働に堪へるに至れば、家長の二大義務とて一つは之に一頭の馬を與へ、一つは之に妻を迎へてやるのであります。シテ此撰擇の標準は何れも同じ指曲で、見かけの美しいより體の大丈夫で、善く勞働に堪へ得る者を主眼と致します。一口に申せば實利實用向きにあらずば早速落第するのですが、兎角花嫁の檢定を馬匹と同一にするとは甚だ情け無いことで、否彼等は婦人を見るに家畜以上と見做しません。丸で人格と云ふものと馬格と云ふのとの區別が無いのです。デモ茲に一つ稱すべきは、家長より當の男子に結婚を命じ愈々本人が承知すると、主婦は家長の意を奉じて娘の親に向つて、交涉談判を開きます。大村に於てはスバキと稱へる老婦人云はば仲人媼と云ふやうな專門家があつて婚儀一切を取扱ひますが、多く手輕な直接交涉で濟ませて置くか、左なくば双方に親みある友人が、媒介の勞を取るのであります。斯く次第あり禮儀ある上に、更に稱すべきは、嚴しく血族結婚を戒めて、然かも法律上に於て四等親までは、結婚を禁じ居るのです。斯くて双方の交涉滯りなく濟みし上、村の教會に於て婚禮の式を行ひ、花嫁は新郎と共に其家に參ります、此時花嫁は簞笥も長持も何も持參せず、兼ねて見込まれし左右の鐵腕を何よりの支度として擔ぎこむのみならず、愈々翌日よりソガ腕だめしの活劇に取りかゝるのであります。斯く逞しい鐵腕を有する衞生美人は、トン／＼羽が着いて舞ふやうな勢である代りに、又一方には持參金がなくては嫁入口の恐慌に出遇ふ細腰纎手の美人も少くありません。一體彼等が其娘を見るに將來他家へ緣付くまで、一時親の家へ假寓する居候と認め居るのと、今一つは一族共有の財產なれば、自分の氣儘に支度金などを支出するとが出來ないので、斯く見すぼらしい結婚に終るのであります。所が其中に亦旨い融通道がありまして母の手仕事、即ち阿麻や羊毛などで、夫や子供の

衣服を拵へた賃金の收入は、母の特權に屬して貯金を爲し置き、嫁入の持參金などに備へます。モシそれが子供が無くて死亡した時は、貯金の全部が里方の母、又は未婚の姉妹に分配されるのが一般であります。コンナ所は一種の直系相續法が行はれて居りますが、有夫の婦人となつたからは、財產に對する權利と云ふものは更にありません。唯夫の死後一時其家の財產を主宰することはあれど、決して其所有權が、彼れに移つた譯ではなく、未成年の子供の代表者に立つたのに過ぎません。要するに人の妻としては、限り無き夫の專權に服從し、多大の勞役に盡瘁するも、更に財產權の取得の無い上に、兒を育て裁縫洗濯から、勝手の隅々まで家事一切を一手に引き受けて、之に堪へ得るものでなくてはならぬのであります。

近來の傾向を見るに、流石の彼等も此重荷を脊負ひ兼ねたのか、ソレトモ厭氣がさしたのか、若夫婦の中には分前の土地を貰うて自由に耕し、自由に食ふことを願ふものが、殖えて參りました。元來彼等は生れながら大工の技に長じ、僅かの時日と費用とを以て、例の箱家も容易に自作し得るので、見眞似聞眞似して、其處此處に此種の貧民が出現するのも亦止むを得ぬ現象でありませう。シテ此家族の分離に一つの場合があります。即ち家族の一人が、勝手に家を飛び出して別居をするので、かゝる場合には所謂「十字架だけ」で、我邦の「手ぶら空脛」と云ふ阿房拂を覺悟しなくてはなりません。コンナ手酷い處分法の分り居るに係はらず、彼れは何を苦んで、自ら死地に陷る如き愚を爲すのか。何故に前者の意に倣うて財產の分割を請求しないのか。茲にいと面白いのは、財產の分割權に有力なる條件は結婚と云ふことを數へるので、此資格を備へぬ一人者では、ヨシ家長に財產の分割を乞たところが、何の效力も無いのみならず、其不心得を叱り散らされるに過ぎないから、家を厭ふ以上は勝手に飛び出す外何とも致し方が厶いません。故に家庭の分離は勢ひ此二つの現象

を表はすのであります。此現象は利益の上から見れば、結婚は男子にのみ大切な資格を與へて居れど、ヨク〳〵吟味して見ると、女子の配劑と云ふ大切な分子が、這入つて始めて其効力を有するものであるから、彼等とて強ち値の低いものと云はれません。又決して其逆遇を喞つにも及びません。已に其内面に於て斯許りの潛勢力を有する上からは、イツカ陰霧を押し開いて、其光を漏らす時が參りませう。其時こそ彼等が家庭の春を迎へて、和氣靄々たる團欒の上に眞の女王として尊まれるので、先づソレ迄は以上申し述べました暗黑界裏に徘徊して居るのを諦らめねばなりますまひ。

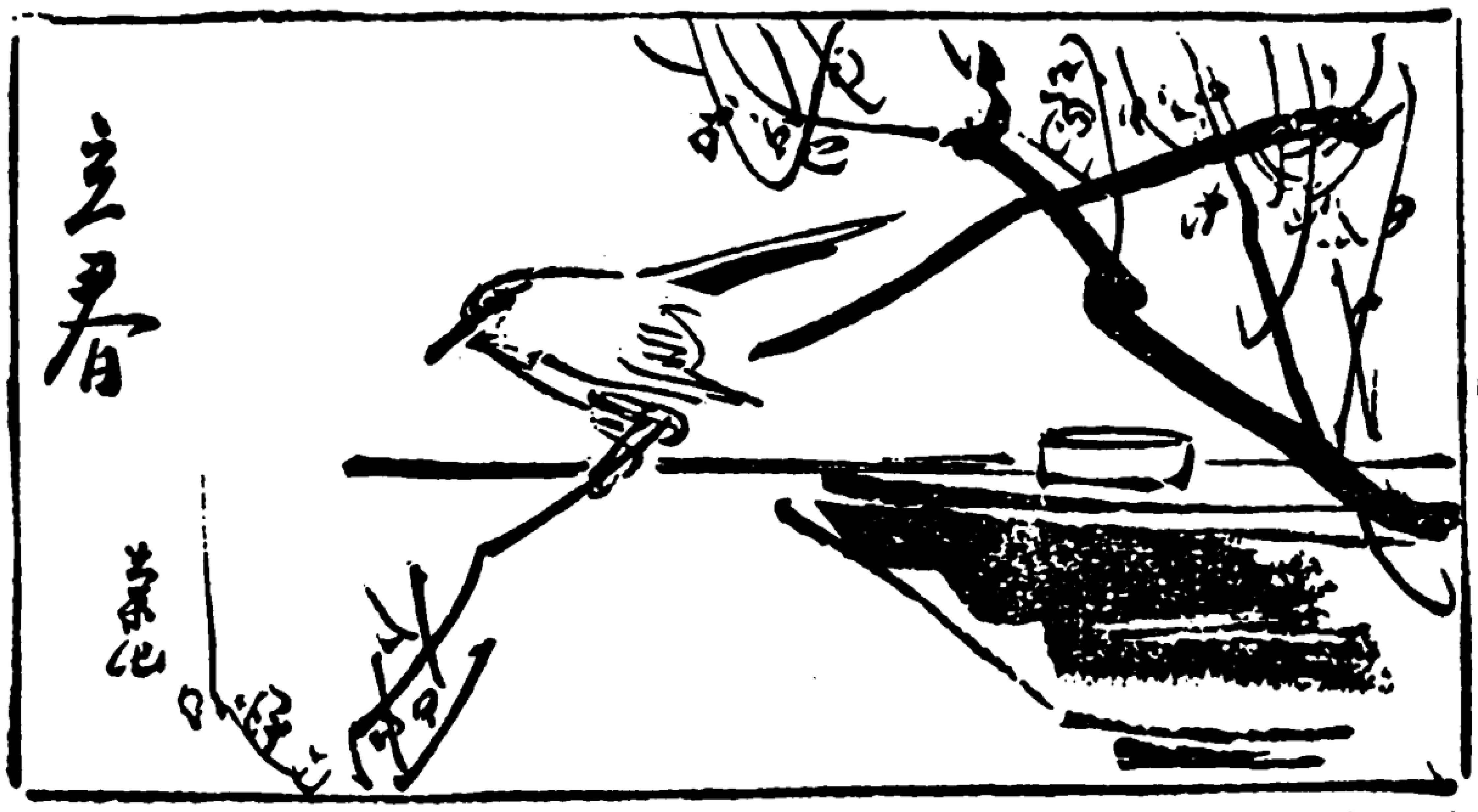
傳染病豫防の心得（續）

醫學士　山根正次君談

又傳染病の流行するのは如何いふ所であるかといふと、一體に衛生智識の乏しい人民の多い處ろに流行するのである。例へば我が國民の如きは、下水の事に付てもまだ十分に利害を知つて居らない。上水が出來るよりも前に下水が出來なければならぬと云ふ樣な大切な道理があつても、さういふ事を心得て居らぬ。かくて衛生智識の乏しい人民の間に傳染病は發生し流行するのである。尙ほこれに付ては種々話したいともあるが、傳染病の流行を來すものは、前述の如く衛生上の智識の乏しきに因ると同時に、その原因中隱蔽といふことが非常に害を爲して居るのである。隱蔽の害ほど甚だしいものはない。法律に面倒なことがあるから、これを持出すと必らず交通遮斷を受けるであらう抔と德義も何も考へずに傳染病を隱して居り、愈々死際になつて漸く屆を出すとは、その病疫は既に他に傳染して居るのである。而して傳染病を隱すのには、醫者が隱すのもあれば家人が隱すのもあるが、今日は法律勵行の結果、東京などに於ては、さう云ふことは一般に禁止されて見

出さぬやうになつた。併しながら地方に在つては今尙ほ往々隱蔽といふことが行はれて、他縣には隨分行政處分を受けて醫業停止を被つた醫者もあるのである。予は曾て虎列剌の流行せる或縣へ行つたことがある。行つて見ると丁度繭を取る所ろである。時に醫者と病家との間にかういふ關係があつた。乃ち或る家で虎列剌が出來た爲めに醫者を迎へた。その時は恰度蠶の上る時分であつた。上簇する時分であつた。時に家人は醫者に向つて、家の老母が病氣であるからドウか御診察を願ひたいといふことである。そこで診察して見ると、眞正虎列剌であつた。この患者は虎列剌であるから早速屆を出さなければならぬといふと、其處の家は多數の人を使ひ、恰度蠶を飼つて居る最中である。そこで先生誠に恐入りますがドウか三日間屆を待つて下さいと賴んだ。何でさう賴んだかといふと、その時五百枚も蠶が飼つてあつて、これが三日も經てば悉く上つて仕舞ふ。さうすれば損耗はないから、ドウか御救助なさると思ふて屆を御猶豫下さい、如何なる御禮でも致します、今御屆け下さると何千圓といふ損害を受けますから、何卒宜しく願ひますと云つた。スルと其の醫者は藥を上げるから取りに來いと云つてその儘逃歸つた。然るにその結果はどうであつたか、遂に老母は生命を失ひ、十二人の家族中殆んど同疫に罹らぬものはないまでに傳染した。のみならず近隣に傳染して忽ち四十何人といふ病人を拵へた。その家の前に小川がある。その小川で種々な汚物を洗つた。處が衞生智識の乏しい人々であるから、その川水で米も磨けば口も洗ひ手も洗ふといふ有樣である。それ故に其川に沿ふて俄かに夥しい患者が出來た。是等は實に誤解の甚だしきものであると思ふ。一人病人を隱蔽した爲めに近隣の人々が迷惑を蒙るのみならず、その生命並びに財産までも失ふたことは非常なものである。最愛の妻を失ふとか、重大な業務を停止されるとか、實に種々な不幸を被つたのである。故に傳染病の隱蔽ほど怖るべきものはない。

次に怖るべきものは何であるかといふと迷信である迷信ほど馬鹿らしいものはない。迷信が如何に多數の傳染病者を拵へて居るかといふ例證は幾干もある。現に茨城縣杯に於てはかういふ事實を見た。即ち天理敎の信者の家に赤痢病者が出來ると、彼の有名なるお水を戴けば活る、金米糖を戴けば活るといふ結果、これを患者に飲ませた。處ろがその水を大きな茶碗へ汲んで飲ませたから、中々病人には飲みきれぬ。然るに迷信者の事とて、こんな難有いお水を捨てることは出來ぬといふので、その家人等は餘つた水を飲廻はした。その結果家族十二人といふもの殘らず赤痢病に罹つた。健康なものは何かといふと馬が一疋だけで、交番所へ繫がれて居たのを見た。天理敎會のお水や金米糖がお役に立つならば、衛生會を拵へたり、衛生組合を拵へたり、自治體の公衆衛生杯を喧ましくいふことは要らない。石灰乳も要らなければ石炭酸も要らぬ。然るに現今の狀態を見ると、迷信家が到る處に多く、種々の迷信が傳染病を蔓延せしめて居ることが實に甚しいのである。



次にまた傳染病を蔓延せしむるものは何であるかといふと、自治體の不鞏固といふことが大なる原因である。苟くも自治體といふものがある以上は、その自治體を鞏固にして、衛生の智識といふものを十分に發達せしめて、これに伴へる設備といふものが十分に行屆いて居らなければならぬ。然るにそれが缺乏して居るといふのは、兎角黨派的の爭からして種々衝突をしたり何かする結果であらうと思はれる。嘗て南多摩郡の一地方の如きに於ては、某村長は何黨であ

る、某村長は何黨であるといふ黨爭心から、豫防費を支出する決議をしやうと思つても、村長が反對黨なるときは、村中の議員は口實を設けて出席しないといふ有樣であつた。一體傳染病の豫防といふヿは急速なる決議を要するのである。然るに當時村會議員等は時間の大切なるヿを辨へず、朝八時に集まれといふを晩方になつても人員が揃はぬので、到頭村會を開くことが出來ない。金を使ふと思ふても無いから自然設備も出來ない。傳染病院を設けることも出來ねば、病人を擔がせる人足を雇ふ金の出道もない。仕方がないから村長自身傳染病者を負ふて火葬場へ持つて行くといふやうな奇觀を呈した。かゝる有樣なりしより終に赤痢病がその地方に蔓延して、何千人といふ患者が出て、或一村だけですらも百何十人といふ病者が出來たことがある。この外にも自治體の結合力弱くして黨爭心烈しき爲め傳染病を增長せしめた例は多數あるのである。

以上述べたる所に依つて傳染病のいかに怖るべく忌むべきかは大略これを知るに足ると信ずる。これより如何にしてこれを防禦すれば宜しきか、所謂豫防の方法に就いて一言して見やうと思ふ。

第一發病前の豫防　傳染病は發病前に於て之を豫防すれば經濟上の利益甚だ多く、即ち多くの金力を要せずしてこれを防禦することが出來る。例へば九州に於て流行する虎列剌病に對して、未だ一人の患者も發生せざる東京に於てこれが防禦を爲し、また芝や京橋に病人が出來たため未だ一人も發生せざる日本橋神田等に於て豫じめその防遏策を講ずるが如き即ち之れである。

第二少數時機の撲滅　傳染病の防禦は金力と最も密接の關係を有して居るが、前述したるが如く未發にこれを防禦するときは、多額の金力を要せざると同時に、患者の少數なる內にこれが撲滅法を講ずるのも、また多く金力を消費せざる一要件である。なせなればその傳播の區域狹少で濟むからである。

右は傳染病の豫防上何人もともに認むる所ろで、定

論として動かざる所の方法である。この原則は個人的豫防法に於ても、國家的豫防法に於ても、孰れも同じ事であつて、傳染病に對する經濟的豫防は、これを以て第一方法といふても宜いのである。尚ほ次回には傳染病豫防法中の最も重もなる方法に就いて讀者の心得となるべき事柄を詳細話して見る積りである。

家庭理科　石油の話

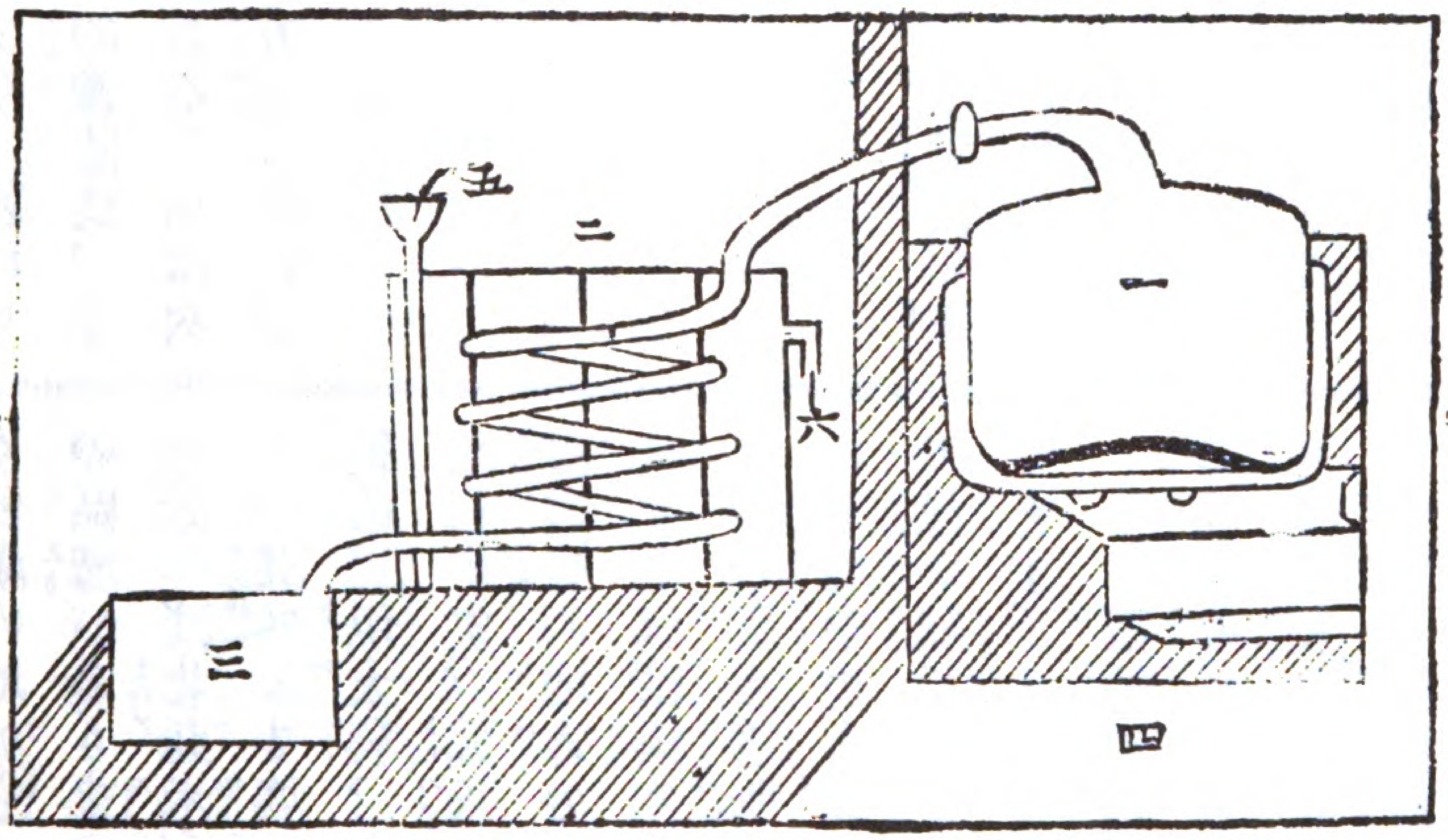
菅原俊翁

五分心の洋燈は山中の一軒家にも輝き、鐵葉製の小燈は藻鹽たく蜑の伏屋にさへ點され、我が燈油としての石油は、今や貴賤都鄙の別なく一般に需用せられて、その年額の消費高は驚くべき莫大なものであります。さてこの貴重なる石油は何處より如何にして得るものであるかと云ふに、もと水の如く地中から湧出するもので、之を汲取て精製した上で、始めて日常の需用に充つるものであります、併し水の如く何處の地からも湧くものでなく、其湧く所は一定の區域があります、世界で最も澤山に石油の出る國と云へば北亞米利加の合衆國と、露西亞でありまして、其外にも墺地利、匈牙利、留麻尼亞、加拿陀、獨逸、伊太利、支那、印度等の諸國にも多少產出いたします。又我國でも越後、近江、信濃、羽後、北海道等の地方から出ますが、米國、露國の產額に比べますれば極めて僅かなものであります。石油は始めから斯く透明にして奇麗なものでありません、始めて地中から汲み上げた時は餘程汚ない褐色を帶びた黑い液でありまして、通例これを原油と申して居ります。

△△△△△△石油の精製法

石油の井戸から汲み上げた黑褐色の液、即ち原油は先づ鐵製の大なる蒸溜器の中へ入れて熱するのであります。今蒸溜の方法を述べる以前に蒸溜器の仕掛を一應申しませう。

この圖は蒸溜器の大略を書いたものであります、(一)は鐵製の『レトルト』にて蒸溜せんとするものを此中に入れて下の(四)に石炭又は薪木を燃して之を熱しますれば、(一)中の液の一部が瓦斯となつて上なる細き管を通つて(二)中の曲管に入ります(二)は冷却器と申しまして、冷水が盛つてあつて曲管中の瓦斯を冷すのであります、(二)の中の水は(一)より來る瓦斯の熱で忽ち暖くなりますから、常に一方(五)から絶えず冷水を注ぎ入れ、暖くなつた水は他方(六)の口から出るやうに仕掛けてありますから、(二)の中の水は終始冷かにして置かれるのであります。そこで瓦斯は冷されて液となり曲管の口から(三)の中に滴り出づるの



であります、(三)は蒸溜した液を受けるから受器と云ふのであります。

さて汲み上げた原油を(一)なる『レトルト』の中に入れて(四)に火を燃して熱しますれば、原油の最も揮發し易い部分が眞先に蒸溜して受器に溜ります。この最初に蒸溜して來たものが揮發油であります。其次に蒸溜して來るものは燈油でありまして、之れが通例洋燈に使用する所の石油であります。最後に蒸溜して來るものは重油であります。この三種の區別は比重計を用ゐて分けるので、即ち最初に蒸溜して來る液の比重が〇、七〇〇より〇、七五〇位までのものを揮發油として取り集め、續いて蒸溜して來る比重〇、七八〇より〇、八二〇位のも

のを燈油として別器へ移し、その最後に出て來る比重〇、八五〇より〇、八八〇位までのものを重油として別に集め置くのであります。その跡に『レトルト』の中にどろ〱した黒い液が殘りますが、その冷ゆるに從つて、固りて來る、是れが即ち『ピッチ』であります。

右の如く蒸溜して得たる燈油は、大抵原油の半分程に當りますですが、さて此燈油はこれで直ぐ洋燈に入れて用ゐられますかと云ふに、否な、尚ほ幾分か不純物を含んで居りますから、これを精製せねばなりません。而して之を精製するには硫酸、曹達等の藥品を用ゐ、又度々水にて洗ふのでありますが、その細なとは略しますが、兎に角精製した上で、始めて洋燈に入れて燈用に供する所の石油となるのであります。

揮發油、重油、『ピッチ』の効用

蒸溜した揮發油は之を精製して、理化學工藝用の藥品に供し、又は醫藥として用ゐます、理化學用には他の水、酒精等に解け難き藥を解かすに用ゐ、工業用には『ペンキ』『ゴム』樹脂『ワニス』等を解かし、又羊毛を洗ふ爲めに使用いたします。醫藥としては多くは外科の手術の時に局部の麻醉藥に用ゐるので即ち局部に揮發油を塗ると直ぐ揮發して其際に其局部の熱を奪ひ、殆んど零度以下の温度にいたしますから、其局部は感覺を失ふに至るのであります。勿論之に用ゆるものは揮發油の中でも、最も比重の輕い揮發の最も速かなるものを撰ぶのであります。又揮發油が揮發する際に、熱を奪ひ去るとを利用して人造氷を製造することもあります、又米國等の揮發油の價の安い國では、之れから瓦斯を造つて燈用に供して居る所もあります。

重油の中には、石蠟を含んで居りますから再び之を蒸餾して、其中の發揮し易い部分を取り去り、跡の比重の油を強く冷却して其中から石蠟を結晶させるのであります、後之を搾りて液體の油を去り、再三精製して白き塊といたします。さて能く精製した純

白なる石蠟は主に蠟燭の製造に用ゐ、稍粗製のものは寸燐製造の原料と致します、石蠟を取つた殘りの重油は更に精製して機械油に用ゐるのであります。『ピッチ』は、多少の鋸屑を混ぜて煉り固め、壓縮して錬炭のやうな形に拵へて、燃料に使用し、又は多少の粘土を混ぜ合せて、土間等に塗り、濕氣を防ぐの用に供するのであります。

石油の成分

石油は一言で申さば、炭素と水素との化合物であります、精しく申せば一個の化合體でなく、多くの炭素と水炭との化合體(炭化水素)の混合物であります、其中で炭素の少ない化合體の方が、早く揮發いたします、即ち揮發油の如きは、炭素の少い化合體の集つたもので、重油は最も炭素の多い化合體の集つたものであります。石蠟の如きは、重油の中でも最も炭素の多い部分であります、燈油は炭素の數から云はゞ中間に位する化合體の混合物であります。さて我國で多く用ゐて居る石油は露西亞か亞米利加の石油でありますが、露油は米油より價が安い、大抵一箱に付て五十錢以上安値であります、それと云ふも露油は洋燈に燈用して、米油よりその光りが暗いからであります、之は何故かと申すに露油の中に含んである炭素の數が、米油より割合に多量であるからで、從つて燃へ難いから斯く暗い譯であります。

石油の由來

石炭は古代の植物が地中に埋れて上から強い壓力を受けて出來たのだと申すことですが、石油の成生の原因に就きましては種々學者の間に議論がありまして、未だ一定せないやうでありますが、要するに次の二説に歸して居るやうです。即ち一説に曰くです地球の表面から水が地中に浸み込み、地中で高熱の所になつて炭素に出遇ひ、其處で化學作用を起して水の中の水素と、其所にある炭素と化合して炭化水素化合體を生じ、これが石油となるのだと云ふことであります。今一つの説には、古代の動物又は植物の地中に埋められたものが、年を經るに從つて上よ

り增々強き壓力を受け、隨て熱度を增して終に自然に有機質が分離蒸餾せられて、石油が出來たものであると云ふのであります。此の後の說を主張する學者は、實際に動植物質のものを蒸餾して、石油に類せる油を製したと云ふ事でありまして、その外にも此說を證明する事實が澤山あるそうで、只今では先づ此の後の說を信ずる人が多いやうに思はれます。

石油の引火點

引火點とは、一定量の石油を熱して生ずる蒸氣に火をつけて燃え付き始めたとき、其油の持て居る溫度を云ふのであります。此石油の引火點は廿五度であると云へば、其石油を熱して其溫度が攝氏の二十五度に達した時、その蒸氣に火をつくれば燃え始むると云ふ意味であります。此引火點を定むるには別に器械がありますけれど、夫れは略しませう。此引火點は各國皆法律を以て定めてあつて、引火點以下の石油は燈用として發賣するとを禁じます、なぜ斯く引火點のことを八ヶ間敷云ふかと申しますと、餘り引火點の低いものを用ゐますれば、火がつき易くて甚しく火災などの危險があるからです、我國でも石油取締規則と申すものがありまして、その引火點は攝氏三十度(華氏八十六度)と定めてあります、それより以下の引火點を有して居る石油は、醫療製藥調劑及び理化學工藝に於て使用する外は、これを用ゐるを許さないのであります。

石油燈の使用

石油のことは、餘程古い歷史に見えて居ります。二千年程前の名高い歷史家ヘロデタス氏は既に石油の井戸のことを書て居ります。其他古代より歐羅巴、亞細亞の所々に出て、醫藥に用ゐたこともあるやうに見えます、併し多量に產出するやうになりましたのは近代のことゝ見えまして、米國でも盛に出るやうになつたは百年以後のことであります。その一般に歐米諸國が石油燈を使用するやうになつたのも近代のことでありませう。

日本で石油燈を一般に用ゐるやうになりましたのは

近く維新以後のことでありますが、石油は餘程昔から出たものに違ひありません、日本書紀に「天智天皇七年越國献二燃土燃水一」と書てあります、燃水とは即ち石油のことで、燃土とは石油の浸み込んだ土のことで、此土を乾かせば能く燃へます。又和訓栞に

くさうづ、臭水の義、本草にいふ石腦油なり、越後國より燃土燃水を献る事、天智紀に見えたり、今も此國の名物となれり、其出す所のくさうづの油は、村上の城外黒川村に方十間餘の地有て、其わたり三丈餘の深さ五丈ばかりもあり、油水上に浮めり、かぐまと云ふ草につけとりて器に貯ふといふ、大荒戸村、礒明村、水梨村、稲尾村など皆此油あり、土地を三尺程掘て出す、薪に代ふるに日に乾す、柿崎、寺泊の邊皆しかりといへり、美濃國谷汲山、讃岐國香川郡安原村にもあり、又類なり、信濃國水内郡薬山の産も同じ、上野國吾妻郡草津に温泉場あり、此草津も臭水の義なりといへど、蠻薬に土の油あり、また類也

と、記してあります、次に貝原益軒の大和本草には

山油　甚臭、越後處々之有　賤民酌レ之用爲二燈油一又信濃越前佐渡出レ之、阿蘭陀國所レ輸土油是同種也、外科醫用レ之

とあります。此れから考へますと、阿蘭陀國から石油を輸入して、外科の藥に用ゐましたものであります。

飲食物の話（つゞき）

磯部　武者五郎

酒類の良否を検別することは容易にあらず、素人の爲し難き所なれば、若し危險なることを感ずるときは宜しく、醫士又は藥劑士に就いて其検査を乞ふべく、或は醫學士藥劑士の確實なる證明ある酒類なれば差支なかるべし。

酒類には僞造品極めて多ければ購求の節尤も注意す

べし、すべて價廉なる品には僞造品の交るものなれば、なるべく價の貴き方を求むべし、これ却て衛生と經濟とに適ひたることとなり、價の廉なる品を求めて若し僞造品なりしときは、それが爲に疾病を起して身體を損ずるのみならず、醫師の謝禮、藥汁の代價を拂ひて却て價の高きことになるべければなり。

僞造品につき其一二の種類を擧ぐれば

日本酒の僞造品は酒精(アルコール)と水と「サッカリン」と稱する甘味なるものを適當に交せて香氣をつけたるものなり、其の甚しきに至つては粗製の酒精を用ふ、之を飲用するときは忽ち酒精中毒を起し頭痛眩暈を起す。

麥酒の僞造品には「ピクリンサン」を加へて苦味と色とをつくるなり、飲用するときは胃を害し下痢を起すに至る。

葡萄酒の僞造品には葡萄の絞り粕より液を取りアニリン色素」を用ふるものなり、アニリン、は有毒にして之を用ふるは法律上禁ずることとなれば、之を用ひたるは少けれども、中には間々用ひたるもあり若し之を飲用すれば中毒を起して大害を起すべし、アニリンの有無は醫師藥劑士に乞ひて之を檢すべし

火酒の僞造品は始より酒精(アルコール)にて造るなり、有害たること甚し。

すべて酒は少量に用ひるときは興奮刺戟の効を奏し消化力を旺盛ならしむるものなれども其の効は到底望むべきことにあらず、動もすれば量を過ごすことにて適量といふ程度は容易に定め難きものなり、而して少しなりとも量を過すときは其の害たるや世人の想像にも及ばざる程のものなり、先づ酒を飲めば酩酊とか、醉ふとかいふこと通例なれども、此の酩酊又醉ふといふは既に「アルコール中毒」にして酒の害の全身に及びたる徴表なり、酩酊者の身體擧動を察するに顏色は多くは紅色を潮し、其の甚しきに至るときは蒼白に變じ、言語は締りなく、歩行は蹣跚として足元危く、而して平日に異りたる擧動を爲すに至るは其の害を受けたる證據なり、其の極は消化

機を害ひ、輕きは胃痙攣、重きは胃癌となりて不治の症となる、又心臓には痲痺を起し、腦髓には變狀を來たし、腦充血、腦出血、或は卒倒を起し、血液を稀薄にし身體各器管に變狀を呈し、各種の病毒を醸して大患に陥るに至るなり、其の他德行を紊り、經濟上浪費を生ずる等の害あるべし、殊に女子は衞生上修德上自ら愼みて飮まざるを可とす。

飮量の適度といふは至つて定め難く强壯の人虚弱の人にて其の相違あるは勿論なれども、通常日本酒にて五勺より一合の間を適量と定むべく、葡萄酒及び火酒の類に至つては一勺より三勺の間を可とすべしそれも素より下戸のものなれば强いて杯を口にせざるを可とすべし、

酒の害は以上に述べたるが如くして其の効は到底望むべからざれば良人又は家族の人にして酒を飮むことあらば主婦たるもの宜しく注意して其の飮酒の量を節する樣に方法を講じ、其の害を未然に防ぐことを心掛くべきなり。

（二）茶

茶の種類、茶には綠茶、紅茶、晩茶、碾茶等あり、綠茶は本邦固有のものにて山城宇治、醍醐、栂尾、近江の信樂、武藏の狹山、遠江の榛原、周智、豐田の三郡、大和の吉野、紀伊の熊野、駿河の阿部、其の他伊勢、伊豫、日向の諸地方より產出するを重なるものとす、其の中宇治、信樂、狹山を以て名產とす。

綠茶は、茶の葉を蒸籠中にて蒸熟せしめて製したるものをいふ。

紅茶は重に臺灣より產出し又支那より產出す、其の製法は茶葉を生にて日光に曝し凋萎せしめたる後、釜にて炒りて捻揉し、之を乾燥したるものなり、臺灣の紅茶は重に烏龍茶といふ。

碾茶は上茶を粉末になしたるものにて一に之を抹茶といふ、晩茶は摘み後れたる葉及老葉を製したるものにて最も下等の品なり。

茶の成分、重なる成分は茶素と單寧と可溶解質中

の揮發油なり。

茶の傳來、平安朝の始め傳敎大師唐より持ち來りて山城宇治に植ゑたるを始めとす、後久しく絶えたるが、後鳥羽天皇の御字、榮西禪師宋より持ち來りて筑前脊振山に植ゑ、後山城大和の諸國に移し植ゑられたるよりして廣まりたり。

飲用法、綠茶の上茶は微温湯を以て浸出せしめ下茶は沸騰湯を以て浸出す、紅茶は沸騰湯にて浸出又は茶を煮立たゝして之に牛乳、砂糖又は單に砂糖のみを混じて飮用す。

僞造品、茶にも僞造品あり、それは柳葉桃葉を混ずるものなり、これは葉を水に浸して開かせて見れば知ることを得べし。

茶は少量に用ふれば興奮の作用を爲し、消化を助けて頗る有効のものなり、食後には必ず茶を用ひて消化を補ふことを爲すべきなり、若し食前に飮用し或は常時不斷に飮み居るときは消化は却て不良となり心悸亢進し、或は夜中不眠の症を起すに至る殊に小兒老人及び虛弱の人は飮用せざるを可とす。

茶の種類として見るべき同一の成分、同一の效力、同一の害毒を有するものに尚二三種あり、即ち、珈琲、チヨコレートの類なり、珈琲は珈琲樹の實を焙り燒きて粉末にしたるものなり。

四季の臺所（七）

中川雪枝

二月分

食草

【七草】春とはいへど新曆二月の、この期は野も極めてさびしく、豆、麥、大根の寒げに生ふるを見るのみなれど、自然生のものにて野菜の臺所を賑はすは、またこの期なるべし。

自然生にては雪割草などめづらしけれど、近郊に多く見らるゝは所謂七草にて、芹、薺、五行、繁縷、佛坐、鈴菜、鈴代なれど、これだけにては未だ能く

解らぬものもあるべし、即ち芹、薺、蘩蔞は誰も知る所なれば略すとして、五行とはとうごともいひ、八犬傳などに母子草などいへるもこれなり、佛坐はがんぼう草のこと、鈴菜は蕪菜又は小松菜の本名、鈴代は漢名萊服とて大根のことなり、以上鈴菜鈴代を除くの外は容易に蒐集し得らるゝ食草にて、これ等の御馳走は、自ら野に出でゝこそ風味も一しほなれ、君が爲春の野に出でゝといへる御製も偲ばるゝなり、上記七草のうち、佛坐は春の食膳にはとかつぎて、みゝな草を加ふるもあり。

この外濱邊にては落葵、防風、など採取し得べく、防風はさしみ其他料理のつまに用ひ、落葵も取合せに妙なり。

この外あまり多くの人に知られねど、今を芽出の柔らかにて食得らるゝ岩菜とて、鎌倉逗子邊には多く見受く。

下戸の馳走

『玉子ずし』　一枚につき、鶏卵三個に味淋、醤油、アク引、各猪口に一杯宛の分量にてよく攪廻はし、之を平鍋に流し込み、火にかけ、ブク／＼と泡立ちし時鍋を下し、竹箆を以て玉子の下端より漸次卷上げながら、ちぎれぬやうに裏表をかへし、再び鍋に火をかけ、鍋蓋にて強く之を壓し、他の器に移し取る、燒けし玉子はよく冷まし、端の耳は油臭き故落し、凡そ幅一寸五分、厚さ二寸五分位づゝの長方形に截ち、色の濃き方を上にして握る。

『饂飩の餡かけ』　即席にて饂飩の餡掛を調製せんには、この期間に於て製したる干饂飩を茹で、それに思ひ／＼の種物を入れ、葛餡を掛るべし、藥味は山葵に限るべしといへども、間に合はざれば薑のすりたるを用ゐるも可なり。

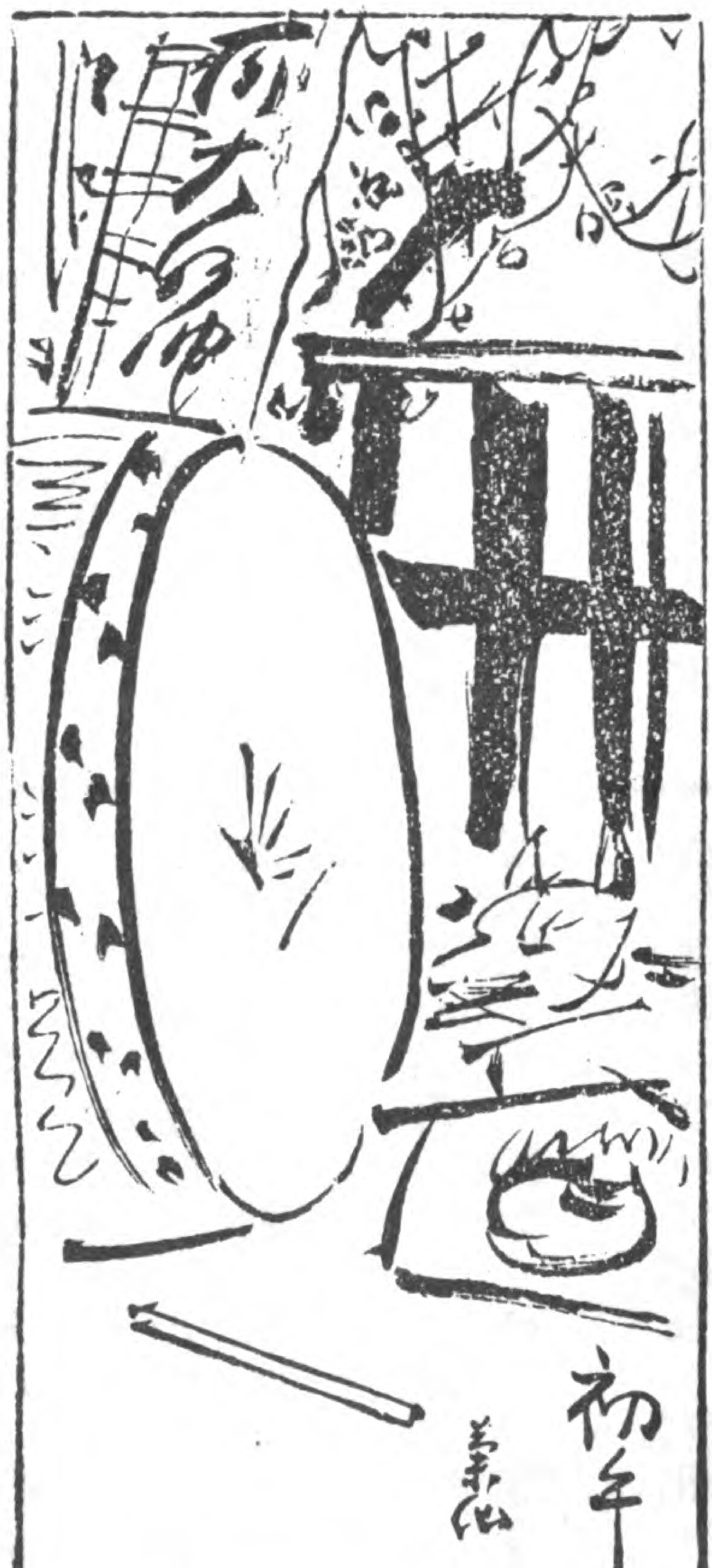
懐石膳

『其の一』　△向附　口にしほ鱈、角作り子もぶし、山葵、配酢△汁　わはせ味噌、くらたち菜△椀盛　雁、卷ゆば、午蒡大輪切、ほうれん草、伊勢海老△燒物　餘毛魚しほ燒△吸物　水せんじ海苔△八寸

焼鳥、慈姑ひしぎて、
『其の二』 △向附 からすみ、鮭、わさび、密柑酢△汁 合せ味噌、獨活、笹ふき、芹、鴨の身たゝき△椀盛 饅頭麩、薄くず海苔かけて、山の芋△焼物 小鯛、味噌漬△吸物 筍小口切二つ△八寸 鮑小角しほ焼、蕗の臺、にしめ、
『其の三』 △向附 鮒糸づくり、寒ちさ、岩茸煮酒かけて△汁 白味噌、小蕪葉つき二つ、干瓢△椀盛鴨身たたき、平たけ、すだれ麩△焼物 鯛しほ蒸△吸物 小梅ぼし、釘生姜△八寸 長芋、たくざく、附焼、玉子、

献立雑俎

汁の一』 あさりの汁に海苔、千六本汁、薩摩芋汁切ぼし、葱にいり湯葉、豆腐、里芋にたゝみ鰯、若芽、むきみ、切ぼしに油揚、蕪、以上は朝の汁の實にて、之に、昆布と豆腐の煮たる、しらたけの煮附黒豆、佃煮、五分玉子等を別に小皿に盛りを景物とすれは、朝の膳にはこの上なし、右の材料は毎日かふる方よし、



『汁の二』 これは晝、夕の汁の種にて、海老と菜、鳥と菜、シラスと海苔、かき玉子、貝柱の玉子とじ鯛なんばん、はんぺんと三ッ葉、等
『皿のうち』 鯛のてり焼、同鹽焼、同さしみ、焼鳥鮭の粕漬、あげもの（材料は海老、あなご、はしら、さつま芋、蓮根、みつば等）牛肉の味噌煮、玉子豆

腐など別に趣向を要するものにあらずして、少しばかり左に馳走のものを、

△蕪の酢漬　大なるものは先づ五枚はかりに切りこれを短册に小切して、そを又中半以上庖丁を入れ半日あまり鹽をあて、後鹽に漬けたる器物よりあげ再び酢に漬ける時に、短册の庖丁目へ山葵のおろしたるものを塗込みて静に漬けるなり、又小蕪ならば葉莖とも少し殘すか、又は株より殘らず切取るかにて、いづれも丸のまゝにて庖丁目を入れ、酢に漬け鹽を一摘み酢の中に入るれば即席にて食し得らるべし、これに生唐辛の種をぬきて、細かに切りたるものを入るれば殊に妙なり。

△芹の根の油いため　水の濁らぬまでによく其の根を洗ひ、目笊に揚げて能く水を切り、胡麻の油を鍋の中にたらし、沸立ちたる處を見て、芹の根を入れ、よく攪廻はし煮へると同時に醤油及び砂糖をいさゝか加へて、其味を加減し、それに豆腐を布巾に包みて、よく水を去り置て其中へ入れ、又攪廻はして煮上ぐるなり、三ッ葉の根もその煮方同じ。

△小松菜の料理　湯煮したるものを細かく切り、黒胡麻を煎りて味噌に擂込み、砂糖を多く入れて和物にし、また魚の煮汁にて煮あげ、魚に付合せば一皿を得べく、油揚を入れて惣菜にし、切干大根を入れて浸し物にもなりてよし。

△菠薐草と鶯菜　これまた小松菜と同じ、價に相違あれば、多人數の家には小松菜の方重寶がらるゝなり。

△春菊のいろ〳〵　浸し物には魚を入れ、さなくば花鰹を多く振かくべし、酢醤油、三杯酢にするもよし。

△佛掌薯のつかひ途　薯蕷を代用するもよし、とろゝにするには、先づ皮を削り、擂鉢にすり込みて能くする、味汁醤油を加減し、一旦沸かして冷えたるものを、その中へすこしづゝ入れながら、又更に大に擂りて、泡の如くなりしを、飯のたきたてに掛け、青海苔を少しあぶりて揉みたるものを、ふり撒

きて食す、飯は麥飯がお定まりなるが如し、とろゝ酢には、酢の中へすりおろしたるまゝ醤油を少しさし、花鰹をかけ、其上に乾海苔のほぐしたるものを撒きて出し、これは酒の下物によし、さしみをくるみなば更に妙、旨煮は、皮を削りて後ぶつ／＼切とし、味をつけてよく煮つけるべし。

△自然薯のあげもの　自然薯を山葵おろしなどにてよく擂おろし、擂鉢にて猶よくすり、葛粉を少し加へ、胡麻油にて揚ぐるなり。油鍋に入れる時は、箸二本にて、丸くくる／＼と巻きながら入るべし

△薩摩芋の南蠻煮　葱と共に煮るなり、薄葛を入るゝもよし。

△湯葉巻菠薐草　菠薐草を茹でゝ、醤油味淋わりのつゆをふくませ置き、中揚湯葉を、砂糖醤油少し入れてざつと煮るべし、さて引あげて（此の如く十枚位づゝ煮るなり）この湯葉を、板の上にのして置き、菠薐草を絞りて、其上にのせて巻く、ゆは二枚位巻付け、厚さ五六分位に小口切にして、鉢肴のつけ合せなどによし。

△湯葉巻さつま芋　芋を長線に切り、水を入れてよくさらし、笊へあげて水氣を去り、鍋に味淋、砂糖、鹽を入れて煮つめ、右の芋をなのかぶる程入れて煮るべし、煮加減は、火の通りたるを度として、鍋をとりおろし、團扇にてあふぎ、さましながら器へとるべし、あまり多く入ればくづるゝなり、右の芋を湯葉にて巻くこと、前記菠薐草に同じ。

△獨活の胡桃和　獨活をよく洗ひ、よき程に切りそを湯煮し、胡桃をすりて、鹽と砂糖を加減して入れ、更によく擂りたるものゝ中に入れ和へるなり。但し胡桃の皮を去るには、一日程水に浸し置き、揚げて水氣を拭取り、火にて炙ればよく口の明くものなり。

『椀の中』　前記汁の外に、少しばかり左に馳走すべし。

△牛肉の吸物　庖丁にてよくたゝき、小さく丸め獨活を少し加へ、薄鹽に仕立て、椀に盛りたる時、

粉山椒を少し入るべし。

△今出川豆腐　通常の焼豆腐を、酒と水と醤油すこし交せて、極薄汁に仕立て、焼豆腐を煮ぬき、別に胡麻を煎りて、味噌に摺交せ、鍋に入れ、味をつけてよく煉上おき、さて豆腐をあみ杓子にてすくひあげ、椀に盛り、上に胡麻味噌をかくるなり。

△牡蠣の吸物　鍋に鹽を入れて煎付け、その鹽を取上げ、牡蠣を二つ三つ鍋に入れ、摺付つぶし、牡蠣に水ひた〲に入れ、一度煮て、いり鹽かわりたる時、醤油を少し加へ、酒をすこしさすもよし。

△同　蛤　剥身を手にすこしゝぼり、鍋に酒少し入れ、能く煮立て、水を入れ、右の蛤を入れて、燒鹽にて仕立つべし、又婚禮には、兩方へ蛤の身二つ入れ、其上に貝殼一つふせて出すなり。

△同　海鼠　生海鼠二つに割き、よく洗ひ、銅鍋のぬる湯につけ置き、吸物したじをとゝのへ、椀へ柚の輪切を入れ、その上へ生海鼠を入るべし。但し芹を少し入るればなほよし。

△鰕の團子　車海老、サイマキ、芝鰕等何れにてもよけれど、芝鰕味最も美なり、先づ鰕の皮を悉く去り、鹽を少し加へて、庖丁の脊にて叩き、適宜の大きさに丸め、沸騰せる湯に投じて茹で、椀盛又は茶碗盛などの種に用うべし、青味三つ葉などよし。

茶うけ

春の彼岸より秋の彼岸までを茶受時といへど、子供持てる家、氣を遣ふ商賈の家には、客の來れる時の午前十時頃、午前三時頃、夜九時頃には、茶受の季節を撰ばぬなるべし。これも毎日のやうに燒芋にてもあるまじ、豫め手帳を煩はすをよしとす、芋せんべい、海苔巻の燒餅、稲荷ずし、切山椒、煎餅、田舍汁粉、うぐひす餅、きぬかつぎ、蜜柑、ころ柿等いろ〲あるべければ、其の時と場合に應じ、日々同しからで然も趣味ある物を撰びて用ふるが家政を司る者の働きなり。

單に茶うけと一トロに言へど、其の一品にも其人の才は表はるゝぞかし。



ピンポン改良室内テニス（旅行用）

一號一箱 二、〇三〇
二號同 二、二三〇
三號同 二、三九〇
四號同 二、五一〇
同用テーブル上等一組拾參圓並等一臺九圓半
一號大人用

御用 體操器械



東京神田裏神保町五
S.A.安藤商店

ピンポン室内テニス

一號一箱 一、二二〇
二號同 一、五〇〇
三號同 一、六八〇
四號同 一、八三〇
號外同 〇、八八〇
其他各種御注文に應じ製造可仕候





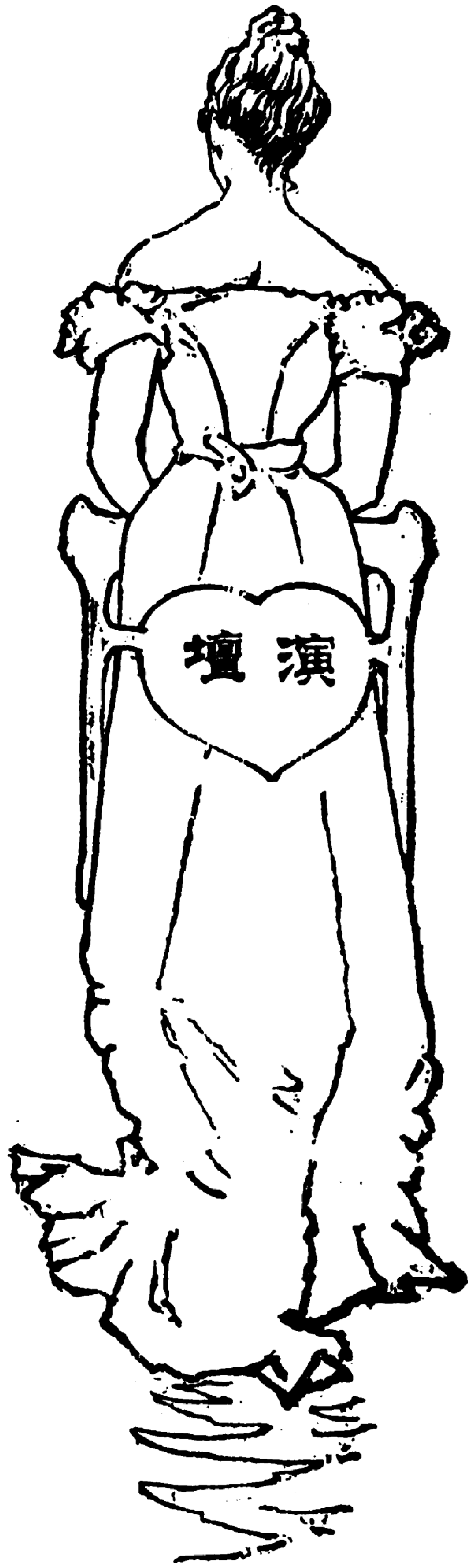
テニス用ラケット一組

一號大人用 一三、〇〇〇
二號同 一一、〇〇〇
三號同 八、八〇〇
四號同 七、四〇〇
五號同 六、七〇〇
六號同 五、七〇〇
七號同（小學用） 四、七〇〇
婦人用（一號） 六圓
同二號 七圓

改良櫻二重枠ラケット一組

一號 拾參圓參拾錢
二號 拾壹圓七拾錢
三號 九圓五拾錢
四號 八圓貳拾錢
五號 七圓貳拾錢
六號 六圓貳拾錢
テニス組一張 一、七五〇ヨリ二、九五
○迄各種あり升

東京市神田裏神保町五 **安藤商店** 電話本局四百八十四



女學生に告ぐ

茨城縣女子師範學校長
兼水戸高等女學校長　本田嘉種 述

左の一篇は昨三十七年十二月十四日茨城縣女子師範學校及水戸高等女學校年末終業式に於て校長本田嘉種氏の演說したるものにて一般女生徒の心得となるべきもの多ければ筆記のまゝ玆に掲ぐること、せり(記者)

皆さん明治三十七年の授業は、今日を以て終りと致します、顧みますれば、皆さんが本年一月八日以來、諸先生の懇篤なる御指導の下に、孜々として勉强されしことは、私に於ても滿足のことであります。

私は本年一月二十七日附を以て、本校長を拜命しましたけれども、本校に着任致しましたのは、二月十一日即ち紀元節の日でありました、そこで私は日露戰爭の開始と同時に、本校に關係を持つた譯でありま

すから、此の點は戰爭と共に皆さんの記憶に留め置かれんことを願ひます。

さて我國は、露國に比べますと、國土は狹く、人口は少く、をまけに吾々の身體は倭小でありますか、何故に戰へば必ず勝ち、攻むれば必ず取ると云ふ樣に、連戰連捷の功を奏するのでありませうか、之は能く勘考すべきことであります。

第一、日本は上に　萬世一系金甌無缺の天皇陛下を戴きますから、それ外敵と云ふ時は、擧國一致事に從ひ、規律整然として亂れませぬ。

第二、三種の神器は、知仁勇の三德を示さる丶傳國の御寶にして、上は　聖天子より、下一臣民に至るまで、皆此三德を有してをります、即ち鏡は知、璽は仁、劍は勇と云ふことであります。

第三、平生質素節儉、勤勉力行して困苦缺乏に堪へてゐますこと。

連戰連捷の原因は、其外にもまだ／＼澤山ありますけれども、先づかいつまんで申しますれば、右の三條に過ぎぬのであります。然るに今日斯くの如く勇武に働く將卒は、誰が產んだものでありませうか、云ふまでもなく、皆お母さんが產んで、且つ之を哺育したのであります、されば母の勢力と云ふものは、非常に廣大なるものではありませぬか。

皆さんも、後來は人の母とならねばならぬので、何時までも、子供だ／＼と思ひをる時は、母となる覺悟を忘れぬにも限りませんから、一言申しておきます。

母となるには、先づ妻とならねばならぬ、妻でなくして母となるのはよくありませぬ。故に皆さんは、人の妻たり人の母たり、又師範生にありては、人の師たるべき覺悟を要します、私は近來或人より或軍人の母と妻との話を聞きまして、大に心配をしてをることがあります、一寸その御話を致します。

或處に軍人が居りました、その軍人は、この振古未曾有の大戰爭に出ることが出來ずして、内地における或る勤務に服して居ました、其の時分には、奥樣には宿も早く軍にいで丶くれねば肩身が狭いなど丶話して居ました、然るに母上にはどうか、出征せねばよいがと、却て其の子息が軍に出でずして、内地に留り、或る勤務を致してをるのを喜んで居ました。

此の時分には妻君がえらい樣ですか、母上がえらい樣ですか、御考なさい。

然るに此軍人も遂に召集になりまして、或方面のひどい激戰のある處に向て出發致しました。さうすると近邊の人々は大に心配致しまして、母上には御老人のことでもあり、御令息が御出征後は、或は身體にさはりはあるまいかなど丶申してをりましたが、母上には中々さうでなく、一旦軍に出た以上は、再び生きては還らぬものとあきらめ、是迄とは打てかはりて、氣丈夫であるにも拘らず、奥樣は大によわり込み、毎日〳〵泣てをられたと云ふ話があります。

爰に一寸注意しておきますが、人間特に女子は、言語を愼まねばなりませぬ、古人も病は口より入るもの多く、禍は口より出るもの少からずと申しましたが、其の通りで、皆樣もなるべく口上は愼まねばなりませぬ。

さて右の軍人は、新聞紙上に於て見ましても、既に激戰をなされ、感狀まで得られたそうですが、之は右の妻君が産まれた子でなくて、彼の氣丈夫なる母上が産まれた子であります、こゝが皆さんの考へ所であります、處が其の後幾月も立ちますので、母上の訓化の爲にか、近頃では妻君も、母上同樣中々氣丈夫になられましたそうで、近所の人々も、大に感心致したさうです。

この奥樣も、此の母上がをられたので、暫時の間に、立派な軍人の妻たり、又一兩人持つてをられる子供

の母たる資格が出來ましたが、元のまゝでは一兩人の子供の母たる資格はないのです、まして學校教員などとなり、何千人何百人の母となる資格はなかつたと云つて可でございます。

然るに御老母は、何ぜかやうにえらいか、之が又考へものであります、昔の人は知惠の鏡を磨くことは、今時の方々には及ばなかつたかしらんけれども、璽の仁愛や、劍の勇氣に於ては、或は今時の人々が及ばない處があるからだと私は信じます、之が間違なきものとすれば、皆さんはます〳〵知惠の鏡を磨きあぐると同時に、子供は云ふまでもなく、一家族親戚朋友は勿論、世間普通の人々否敵までも相當に愛しむと云ふ璽の德を磨かねばなりませぬ。璽の德を磨く手始めとして、只今より慈善的作業を始めようと思ひます、其の方法は種々ありますが、先づ今度は課業時間外に靴下編を始め、其の製作品は、擧て之を恤兵部に寄贈しやうと思ひます、之には勿論諸先生の御指導を願ふ樣にしてありますから、委細の方法は諸先生から御聞きなさい、又之と同時にあらゆる欲とか煩惱とか云ふものを切り拂らひ、意に思ふことを實行に現はす劍の德を修めねばなりませぬ。

劍の德を修むるには如何するかと申しますれば（箇樣云ヘバ私ガ毎朝〳〵三百六十五日トモ劍術ヲ使テヲリマスカラ、皆サンニモ、劍術ガ長刀術デモ勸メルカト思フ方ガアルカモシレマセヌガソーデハアリマセヌ）劍の德を修むるには、意志を強ふせねばなりませぬ、意志を強くするには、一事を熱心に持續する樣にせねばなりませぬ、即ち堅忍持久でなくてはなりませぬ、昔の人などは、或は迷信もありましたらうけれども、神佛などに、千日參をしたものがあります、雨が降らうが、雪が降らうが、千日の間かげなく日參した人などもあります、千日と云へば一口に云へますけれども、約三年間のことであります、約三年間、毎日〳〵之れを續くるのでありますから、普通の人では中々出來ませぬ、私は皆さんに千日參りをせよとは云はぬ、併し千日どころではない、一萬日も二萬日も、常々或る一種の心得を心から離さぬ樣にし

て貰ひたいと望みます、それはどうするかと云へば、皆さんの樣に話を聞てをる間も、私の樣に話をしてをる時も、或は歩いて行くときも、立て停まるときも、乃至橫に寢る時も、常に丹田(下腹)に力を入れてをることであります、(ムート心の內で云ふて)此の修行は六ケ敷ようでありますけれども、歩るくときにも、下腹に力を入れてあるき、話をする時も書物を讀む時にも、何をする時にも、常に下腹に力を入れて我と我心を落附くる工夫であります、之を日々修行しますときは、身體は眞直になりて健康に、心は靜穩にして落附き、昔義公樣が御自分の居間の壁に書附けておかれたように、小なることは分別せよ、大なることは驚くべからずと云ふ樣になります。即ち意志が强大周密になります。

人は進まざれば退くものであります、何ぜならば周圍がずん／＼進むものでありますから、自分計り停止してをることは出來ませぬ、即ち本年三月には、高等女學校の本科は第三回の卒業生を出し、同く補習科は、第二回目の修了生を出し、又始めて技藝專修科を出し、師範生は二年になり、更に一年生がはいりて來ました、其の上四月以來は、作法も學科も著く進歩しました、彼の履物のおき直し方なども、よく揃ふ樣になりましたが、之は御內でも同樣であり、御客に行ても同樣でなければなりませぬ、特に他人と共同に履く履物などは、是非共かうせねばなりませぬ、之が思ひやりと申して、特に婦人には大切なことであります、此のことはなし易いが、更に六ケ敷思ひやりを學ぶ樣に致したいのです、又習字などは諸先生の御盡力にて文字の點畫のかたを版にして、皆さんに渡されましたので、特に著き進歩を見、技藝科にても昨年にない立派な成蹟品などが出來ました、其の上割烹の實習も、昨年は今年ほどにはなかつたらしい、其の他當水戶市に於ける、各製造所、或は農事試驗場などの參觀をなし、學校以外に向ても、知識を取り込む樣な働も致しました、併七月に入りまして、流行病に侵かされたものが二三人ありましたのは、誠に

遺憾に存じましたが、之も他に傳染するに至らなかつたのは、不幸中の幸でありました。其の他本年は、先生方にも避くべからざる病氣にかゝられた方が數人ありましたが、併其の間は皆他の學科を以て補充しましたから、其の爲に別に遲れを取りました譯ではありませぬ、但し遲れた學科もありませうが、それこそ來年には、是非とも補充する樣に、心懸けねばなりませぬ、兎も角來年は、今年よりも各方面に向て進歩する樣に致したいものであります、乍去進歩は決して先生方にのみ打任さるべきではありませぬ、一歩と雖も進むは、我が進むなりで自分〳〵で進む覺悟が大切であります。

終りに臨んで、も少し申しますが、我々が今日始めて此で御話をもし、又御話を聽きをる此の講堂は如何です、誠に壯大美麗なものではありませぬか、之は縣下百二十萬衆に向て、私は皆さんと共に熱心なる感謝の意を表せねばならぬ次第であります、知恩報德は、人道の大切なることであります、皆さん國家の御恩より、縣下の御恩、父母の御恩などは云ふまでもなく、諸先生方が熱心に御教示下された御恩を知り、其の德に報ゆる覺悟がなければ、人道を解せぬものとなりてしまいます、人道を解せざれば禽獸と擇ぶ所はありませぬ、此の知恩報德と云ふことは心を落附けて忘れぬ樣にありたきことであります。

特に我々が斯樣に樂しく一堂の下に集まりて、講話をするのも一に
天皇陛下の御恩であり、且つ此の寒氣にも拘らず、戰地及其他に於て軍務に從はれつゝある名譽ある陸海軍々人諸君の御蔭でありますから、此の御恩を忘れぬ樣致されて、よき歲を迎へ更に明年一月より前に申しました通り、一層の勤勉、一層の質素を旨とし、本校教育の主旨に背かざる樣致されたきことであります。

猶當休業中の心得は、夫々各先生方より承り能く遵守する樣致されたいのです。

女子の道は貞淑靜婉なるにあり

阿多廣介

私が申すまでもなく、我國が歐羅巴の一大武國として、列國から畏敬され恐怖されて居た露國と干戈を交へ、開戰以來連戰連勝、彼の東洋艦隊を殲滅し、旅順の堅壘を拔き、遼陽、大石橋、南山、得利寺等皆稀有の奇捷を占めて、我國の武勇を宇内に宣揚した結果、今日まで東洋の一小島國民と爲し、半開の域に在る人種として、吾々を餘り多く値打ちして居なんだ彼等烈國は、今更のやうに我國の實力を認識し、我國文明の度が彼等を淩駕すとも決して劣ることのないのを知覺した。

米國では、我國を欽仰するの餘り、今年中には、十數名の留學生が我國に渡航するとの噂である、これは重に醫學生ではある相だけれども、何しろ前代未聞の愉快なることゝして、吾々同胞は、充分慶賀して可いことゝ思ふのであります。

又或英國人は、斯う云つた相だ、日本の學生は、學問するに當て、一字一句と雖、決して等閑に看過し去らない、極く微細の事柄でも、能く其意味を闡窮し、其原因結果を推考し、然る後ちに之れが應用を謀る、斯くの如く緻密の頭腦を有して、學問を研究するは、世界萬國中絕えてこれあるなし、唯々獨乙人のみこれを能くす、然り日本人の研究法は實に獨乙人のそれによく似て居ると。

又曰く、日本人は驚く可き、宗教的の信念を有して居る、此信念は、何ぞと云へば、ミカドを至高至尊の主權者として、これを尊ぶこと神の如く、これを敬ふこと天の如く、これに忠義を盡すことを以て絕對の義務として居る、單に義務のみにあらずして、先天的に賦與された信念であるのである。故にミカドの爲

めならば、彼等日本の臣民は、假令水火に身を投ずるとも敢て辭せない、身命を抛つも、決して厭はないそれで一旦國家緩急あれば、彼等は其君主の爲め又は國家の爲めに、其身を殉するを以て無上の名譽として居るのである、これが則ち日本の戰勝を得る所以の理由である。

日本人は又其子が出征するに及んでは、其親たる者は非常に喜んで其國事に殉し、皇帝の爲めに身命を捧げまつる時至れりと爲し、必ず一死君恩に報せんことを吳れ〴〵も云ひ含めて、其行を壯んにするが例である。

其子たる者が、若しも名譽の戰死を遂ぐることあれば、其親たる者は、君の爲め國の爲めに、其義務を完うしたるを喜んで、笑つて野邊の送りを營むのである、若しも今の英國に於て、其父母たるものが其子の出征するに臨んで、必ず一死國に報ゆべきを以てし、其死を迎ふるに、無限の喜びと滿足とを以てすること、日本の父母の如くであつたならば、世の批難は囂々として殆んど底止するとがないだらう。我歐羅巴にも昔は今の日本のやうな、嘆稱すべき武士道があつたのであるが、それは歷史を繙けばよく了解ることで、吾々の先祖を野蠻の域から脫せしめて、文明に導いた、希臘、羅馬の古武士は、實に今日の日本人のやうな面影があつたのである、それは、古へのスハルタやアゼンならでは、其子が出征するには、其母は必ず生きて再び還るべからざるを以て、これを諭し、若し生きて再び我家の閾を跨ぐことがあつたら、其母は却てこれを耻かしめたのであつた。

日本人の此の嘆稱すべき性格は、希臘羅馬の遺風を受けたものであるか、將た特別に其國に發達したものであるか、否やを知らないが、兎に角其美風は實に羨んでも、尚餘りあることである。我英國でも、古へは、斯る美風があつたのであるが、何時の頃よりか武士道は衰へて、今の有樣となつたのである、若し今

も尚、斯る美風があつたら、我英國の英名は、更に宇内に轟くのであらうと。

右は英人の話の意味の大要であるが、實に英人は斯くの如く我國を譽めそやして居る、これは我國の爲めには實に知己の言であつて、實に穿つた説に相違はないのであるが、吾々は前の米國留學生の事と云ひ、又英國人の讃辭と云ひ、二つながら之に安心してこれに滿足して、決して自惚れてはならない事だと思ふのであります。

沈思熟考して見ると中々杞憂に堪へないことがあるのです、何かと申すと、今日我國が露國と干戈を交へて着々成功する所以のものは、今日の教育の効果であるか堂かと云ふ疑が起ること是であります。

私の愚考を以てすれば、器機等に關するもの即ち科學的の知識を得たのは、今日の教育も與つて力があつたらうが、精神的即武勇絶倫の振舞は、今日の教育の勢力は餘程少ないと思ふ、則ち他から得來つたものと私は思ふのであります。

然らば何れの處から得たものであらうか、これが實に攻窮ものであります。今や明治維新の際を去ること僅かに三十有八年、則ち維新前武士教育を受た人で今日現存して居るものは幾らもあります、今日兵役に在り戰爭に從事して居る人は、明治年間に生れた人に相違ないのであるけれど、元と武士の子弟は、其家庭の教育、即ち武士的の庭訓を受けないものは只の一人もないのであります、然らば則ち此庭訓の潜勢力が今度の戰爭の爲めに、一時に爆發したものと見て可いのである。

それでは中流以下の民、重に今の農民や職人は、何の感化を蒙つたものだらうか、これは教育の力を蒙つたと云ふよりも、寧ろ席亭の感化が莫大の勢力があると云つた方が適當である。席亭で話す講談や軍談は多くは古英雄の武勇談である、學問なき徒輩が之を聽いて、如何に壯快に感じたらうか、如何に古英雄の

美名を欽仰したらうか、彼等は知らず識らずの間に感化されて、己れも國家の出來事に際會せば、屹然ひとかどの功名手柄を立てゝ見せるとの考へを持つたに相違ないのである。

論じてこゝに至れば、吾は古への武士的教育の方が、今の普通教育に比べて、其精神的の効果を收めることは遙かに優つて居ると論斷するに躊躇しないのである。是れが余輩の現今の教育に就て聊か缺陷がありはしないかと頗る杞憂に堪へない處である。

併し男子の方では、兎も角も立派に我國固有の精神と泰西の文物とを融和し得て、非常な効果を收め得たのであるが、女子の方では如何であるか、余輩の研究の主題は、實は此點にあるのであります、男子の精神的教育が、我國在來の武士道に負ふ所多しとすれば、同じく女子の教育に於ても、我國在來の婦道が不可であると、否定することは斷じて出來ない事と思ふのであります。

余は寧ろ女德を修める上に於ては、西洋風の女子教育法よりも、我國固有の婦道が遙に優つて居ると思ふ男子が我國固有の美風を發揮し得たやうに、我國の女子たるものが、天晴れ世界に仰がるゝ事を爲し遂げるやうになつたらば、前に英國人が我國の武士性質を誉めたやうに、日本婦德の美點を稱揚するやうになるのは受合である。

それで余は信ずるのである、我國の女子教育には、貞淑靜婉と云ふのを以て、其骨髓を爲し、これに加味するに西洋婦人の活潑な處や、雄々しき處を以てしなければならないことゝ思ふ。

徒らに西洋主義に心醉して、我國固有の美德を打忘れ、ハイカラを氣取り、お轉婆と化するが如きは、誡めても尚誡めなければならないことゝ思ふのであります。

これらのことは、疾くに人の唱導せる所でもあり、多くの人が心得えて居る筈であるのに、どう云ふもの

か、堂も今の女學生は、稍々もすれば輕薄の方へ赴く風があつて困るのであります。女子は、意志が弱くて感情が脆いから、こんな結果になること〻思ふのです、女子が人の母として家庭に及ぼす感化の力は、決して鮮少でないのであるから、苟も軍國の女子、戰後の女子は、益々其身を重んじて、充分男子の後援となり、我が國運の益々隆盛ならんことを計らねばなりません。（終り）

○粉炭の利用

之を炬燵火鉢のいけ込みに使へば燃えが緩徐で、火が柔かで、持ちがよい、空氣を受ける面が廣くて、空氣の入り路い廢棄瓦斯の出路が小いからである、之で造へる炭團の特性も同じ理に基く。炬燵を用ひず、火鉢にもこれの不潔を厭はれる向には、箱に貯へて置いて便所、どぶ、などの防臭、野菜、卵、肉類などの防腐に利用することを御勸めする木炭が臭氣を止めることは見事なものであるのみならず、不潔を覆ふて一擧兩得になる、粉炭の臭氣を止める理由は、之れが其組織の間隙へ臭氣の源因なる「アモニア」瓦斯、各種の「アミン」類瓦斯等を吸ひ取つて外へ放さない爲で、炭の此吸收力は自分の體積の數十倍の瓦斯を吸ひ取る程強いものである、誰も知つて居る例で言はうならば、木炭によると、起始めにいやな臭氣のするのがよくあるもので、俗に之を鼠の小便したのだといふ、鼠の小便したのもあらうが、多くは其を積んで置いた内に、色々の臭い瓦斯などを吸ひ取つて持つて居るのが、火の爲に膨らんで、組織の中から出て來るので、此事實が粉炭の防臭作用を說明すると同時に、木炭の貯へ處を撰ばねばならぬといふ事の理由になる、雨の中には「アモニア」などの臭い瓦斯を溶して居るから、雨に暴した木炭も之を吸ひ取つて居て燃せば矢張鼠の小便の臭氣が出るものであります。



滿洲の婦人

從軍記者　紅村生

◎眺めさびしい冬もはや其半ばを過ぎて、今は二月の初めと相成つた、廣漠たる武藏野の原をピューと無遠慮に吹き頻る筑波颪、身に沁む如に感じられる今日此頃、花の都の子女方は、絹の小袖に紅の御袴優雅なる袂を振りはへて、大道狹しと練り歩き給ふらん。

◎それに就けても、いと〳〵辛らきは、外征の諸將士、彼等は荒寥たる滿洲が原、北山颪烈げしき土地にありて、散り來る吹雪は肌を裂き、朝夕の寒さは指を落す苦みあるにも拘はらず、眞に君のおんため國のため、又なき生命を捨つるも顧みぬ其雄々しさ其辛さ、噫々今の世の深窓に人と爲りて、仇なる浮世の風にだも中らぬもの丶、夢想だにも知らぬ所であらう。

◎今は實に國家危急存亡の秋である、假令かよわき女なればとて、何にしに女々しくして唯々飽食暖衣にのみ其日を過すべき、凡そ男と云ふ男は、御國の爲め、戈を採りて起たねばならぬ時であるから、御婦人方も各自の務を勵み賜ふは勿論であるが、我忠勇なる軍人の後援となりて、充分奉公の實を擧げ賜はねばならぬことゝ思ふ。

◎偖てこれからは、題目なる滿洲婦人のお話、遼東半島邊の婦人に就いては甞てご通信申上げて置ましたから、諸孃定めて御承知でせう、金州城で婦人を見た限り、絶えてこれを見なんだが、海城、及び遼陽の城内では、いくらも見ましたのであります。

◎其内には、お婆さんもあれば、お内儀さんもあり

處女もあり、子供も厶いますから、年齡に依つて多少樣子が變つて居るので厶います。

◎子供と云へば、犬の兒でも猫の兒でも可愛い、イヤ蛇の子でも幼い内は可愛いのであります。滿洲の女の子供は、中々可愛い、色が白くて丸ぽちやで、何とも云へないほど優さしく見える、十二三歲から下の子供は、頭髮は、二つに分りて組んで、後ろの方に垂らして居ますが、其根元を二寸ぐらゐ赤い紐で結へて居ます、これが子供には中々ふさはしくて一層可愛い度を增すのであります。

◎處女はと申すと、これは遼東半島即ち金州あたりの女の風俗とは、全然違ふのであります、まづ頭髮の風から申上げますと、金州邊の婦人は、束髮であつたに引換へ、此邊の婦人は、髷に結つて居ます、其髷の形は、日本で流行する唐人髷に似て居るが、あれよりももつと大きい。

◎大きな二の髷を戴いてるから、ヒヨイと見ると呀〱牛若樣の御入來かと疑はれることは、度々であります、それに銀の平つたい板の、巾が二寸ばかり、長さが五寸ばかりのものを髷の下に結び付けて居るのであります。

◎此頭髮の結び方は、五十ばかりの婦人までは、皆同じ事であるが、五十歲以上になると、其結び方は束髮風で厶います、それに又耳に銀の環を箝めてることは敢て南方と變らないが、其足の恰好は全然違ふ、即ち南方の婦人の足の小さいのに引き換へ、此邊い婦人は、日本人同樣天然の儘であります。たまに足の小い婦人を見ることがあるが、これは至つて少數である。

◎此足を小さくすると云ふのは、明朝の遺風であつて、滿洲の風俗ではないので厶います、滿洲の風俗は、元から足は大きいのである、然るに金州邊でこれを小さくするのは、漢人種の風習に化せられたのでありませう、遼東は僅かに一葦の海水を隔て丶、直に山東省に近いのでありますから。

◎足が小さいからと云つて、見えが好い即ち美的に

感じられると云ふのは、何とまあ馬鹿氣た美術眼を支那人は持つて居ることでせう、よしんばこれが眞の美であつたとした處で、何も我身を片輪にしてまで、男子の意を迎へなくても可いことだ、これらは絶體に禁じなければならない、こんな事を論ずると云ふと日本婦人が天然の純美を捨てゝ、鉛粉を裝ふのは、果して嘉みすべきものだらうか、どうかと云ふ問題が起るのであります。

◎他の話は偖て置いて、支那人の足を小さくするのは、政府でも禁令を出して居り、南清地方では、有識者が天足會と云ふのを設けて、子女に天然の儘に其足を保つやうにと勸める相だから、追ひ〱とは鶩の行列然たる支那婦人を見なくなるでせう。

◎衣服は相も變らぬ筒袖にヅホン、色合ひは矢張り淺黃を用ゐます。それに一つ可笑いのは、彼等が何時も長い三尺位の烟管を手にして居ることで厶います、これは家に居る時も、外へ出る時も、何時も手を離した事がない、其吸ひ口は石で以て製へてあります、これは冬は寒氣が強いから、若しこれが金屬であつたら、脣に氷り付いて、無理に取らうでもせうものなら、それこそ大變脣の皮が剝けて、流るる血潮は、華嚴の瀧見た樣だ……とはちと大袈裟だが、何しろ痛いのは受合だ、それで石で造つてあるのであります。

◎滿洲の婦人は、優さしい顏をして居るが、其臭い事と云つたら全然鼻持のならない程だ、僕は堂云ふ生れ付きか、生來女が大の嫌いで、日本の婦人でも西洋の婦人でも、滅多に側へ寄せた事はないのであるから、滿洲の御婦人方の御側へも侍つた事は絶えてないのである。

◎が併し堂かした機會で、途中で擦れ違ひでもしたら、燻香馥郁イヤ間違へた、臭氣紛々として堪へられないから、余は何時でも鼻を掩ふて、スタコラ駈け出すのである、或る時の事、他の新聞記者が「滿洲の婦人は、實に豪傑だ、我朝の巴でも板額でも、これには徒足で逃げ出すだらう」と云ふから、余は

眞面目になつて、「何故」と聞くと、彼は答へて、「でも考へて見給へ、園田紅村と云へば、彈丸雨注身を掠むるも敢てビクともせぬ薩摩の隼人だ、然るに彼の滿洲の婦人は、鼻の臭で直ぐ此豪傑を吹き飛ばして仕舞うではないか」と云ふから、一坐相顧みて哄笑一番

◎此の臭氣紛々たるのは、何に源因するかと云ふと、外でもない、彼等が韮や大蒜などを生で食ふからだ、西洋人や日本人は香水や麝香を用ひて、防臭劑に使ふけれど、滿洲人は、韮や大蒜を以て、燻香料に使用して居る。

◎中流以下の婦人は、平氣で外を歩いて居るが、中流以上の婦人は、矢張り深窓に閉ぢ籠つて、人に顔を見られるのを憚るやうだ、余が遼陽に居る時に、何か一室の中で、ガヤ〳〵云つて騒々しいから、何事だらうと思つて、何心なしに、ヒョイとそれを窓から覗いて見たら、サア大變、十五六人のお姫様方が、一室の中に綺羅星の如く居并んで、何か遊戯見た様な事をし賜ふのであつた。



◎ヤア面白い、滿州の婦人だと云つて、中々馬鹿にはならない、中以上と來ると、實に高尚で優美だと思つて呆れて居ると、其中の一人が余を見付けて、嫌な聲で叱つて居るやうな塩梅、續いて他の總ての婦人も、一齊に何か嫌味を云つて僕を叱つて居るのであつた。

◎僕は何だか極りが惡るかつたので、赧然顔を赤ら

めて、直ぐ又例の逃走……逃走とは緣起が惡い……名譽の退却をしたのであつた。日本で斯う云ふ事があつたら、余は士君子の名節を辱かしめたものとして、即座に切腹でもしなくちやならない處だが、そこは滿洲だから構はない、どうせ旅の耻は搔き捨て……イヤそんな浮浪人の如な考を以て居るのぢやないけれど……何も初めが可笑な考へで以て覗いた譯でないから、そこは皆さん御推量なされて……

◎此遼陽邊の婦人でも、足は大きくて何でも仕事は出來るのであるが、矢張り男をコギ使つて、自己は何も致さない、即ち女尊男卑で、嬶天下で、何時でも牝雞が晨すると云ふ樣な仕末である、だか遼陽附近の村落では、婦人が男を助けて外に出で、農業に從事すると云ふ殊勝な有樣を見たことがありますが、是等は至つて稀れであります。

◎遼東半島邊では、土地が瘠せてる上に、土地の割合に人口が多いものですから、人民の生活が難澁に見えて居ますが、熊岳城から以北海城遼陽邊では、土地が膏腴で五穀穰々として實るから、随つて人民の生計が非常に豊かで、村落でも豪農が幾らも居りますから、其家の構造も中々廣大で、室内も立派であり、且つ諸具完備して居るのであります。

◎滿洲は土地が廣くて、其面積は日本の二倍半以上もあるのでありますが、人口の割合は日本の三分の一しかないのであります、それに土地が肥沃で、何一つ肥料を用ひないで、穀物が好く熟する所であります。

◎今では其作物の重なるものは、高粱と云ふ、黍を作りこれを常食といたしますけれど、水田を作れば充分良い田が出來るとの話、養蠶の業も營めば、随分成蹟が好いだらうとのことであります。

◎此次には、余々も奉天に這入る時分だらうと思ふのですから、此邊の婦人の有樣も好く見ました上でもつと婦人の內部に立ち入つて、職業幷に習慣等をもつと詳細に・解剖的に御話し申し上げませう。

俗事考　あまぎ

▲ツクモ髮

伊勢物語に『百年に一歳たらねつくも髮、我を戀らしおもかげに見ゆ』とあり、つくも髮は、江浦草とも馬尾藻とも云へる說あれど『ツクモ』は恐らく『ツヽモ』の誤なるべし『ツヽ』は物の滿ち足らぬ事にて、紫日記に手ヅヽとあるは、手業の足り整はぬ事なり、大和吉野郡に九尾村とあるを『ツヽヲ』と訓み、越前敦賀郡筒村より出す布を、九十布と書きて『ツヽヌノ』と讀めり『ツヽモ』髮は『ツヽ百』の意にて、百に足り滿たざる故に『ツヽモ』を九十九と書きて、百年に一とせ足らぬは、百の一畫足らぬ白の字にて、即ち白髮と言ふ意に用ゐたるなるべし、本草網目に、海藻は海島の上に生ず、黑色亂髮の如しとあり、又馬尾藻とは即ち奈々里曾の事にて、俗に穗俵と稱へ、正月蓬萊飾に用ふ。

▲ハヒリ

今の世の人の詞に、外より內へ入る事をハヒリと云へるは、這入の事にて、犬猫に云ひ馴たる詞なるべし、ハヒリは家の門口の事にて、後撰集に、

妹が屋のはひりにたてる青柳の
今や鳴らん鶯の聲

堀川百首に、

柴の家のはひりの庭にたく蚊火の
煙うるさき夏の夕暮

古事記に、大年神子阿須波神波比岐神とある、阿須波は庭のことを云ひ、波比岐は波比里にて、門口のことを出ふなり、萬葉集にいへる。

庭中の阿須波の神に小柴さし
我は齊はんかへり來までに

祈年祭祝詞に、井の神を祭る所に、生井榮井津長井阿須波波比岐登御名者白氐辭竟奉者云々とありて、門の入口を波比里と云ふなり。

▲茶の起源

茶の起源は極めて定かならず、漢土にては、呉の韋曜より始まると云へり、然れ共晏子茶を食ふといふ事、晏子春秋に見えぬ、漢土褒武都に茶を買ふ物語などあれば、既に三國以前より用ゐしものと見ゆ、茶經などには、茶を飲みたる神農氏より始まり、魯の周公の時代になりて、次第に世に聞え、齊の晏嬰漢の揚雄、司馬相如、呉の韋曜、晉の劉琨、張載遠祖納、謝安、左思が徒皆好みて是を愛せりとあり、茶の盛に行はれし事は、晉より始まりたるが如く、家禮考證には見えぬ。以上は碩學貝原益軒の說として、物の本にも見えたれば記しぬ、日本にては昔しより、茶あること海人藻屑に見えたれど、葉上の僧上入唐の折、茶の種を渡され、歸り植ゑて終に茶禮の事など起り、栂尾の明惠上人等、盛に之を翫びたる由、明惠傳記に在り、斯れば其頃より既に茶を翫びし事と覺ゆ。

因に云ふ、茶禮の事は足利將軍義政公に始まる由は諸書にも見えたり、後土御門院文明十一年十一月、

其子義尙卿に職を讓りて、東山東求堂に閑居し、銀閣を作りて北山の金閣に準へ、號して東山殿と云ひぬ、是よりして遂に古器古書畵の類を聚め、茶の禮式などを定められしかば、茶の湯の事次第に、世に行はるゝに至れり、今世に傳ふる、

有樂流　織田信長公の弟源五郎信盛薙髮して東山に住し有樂齋といふ即ち此流の元祖なり

金森流　金森出雲守後に宗和と云ひし人の創むる所

石州流　片桐石見守後に宗閑と云ひし人の創めし所宗和の門より出づ

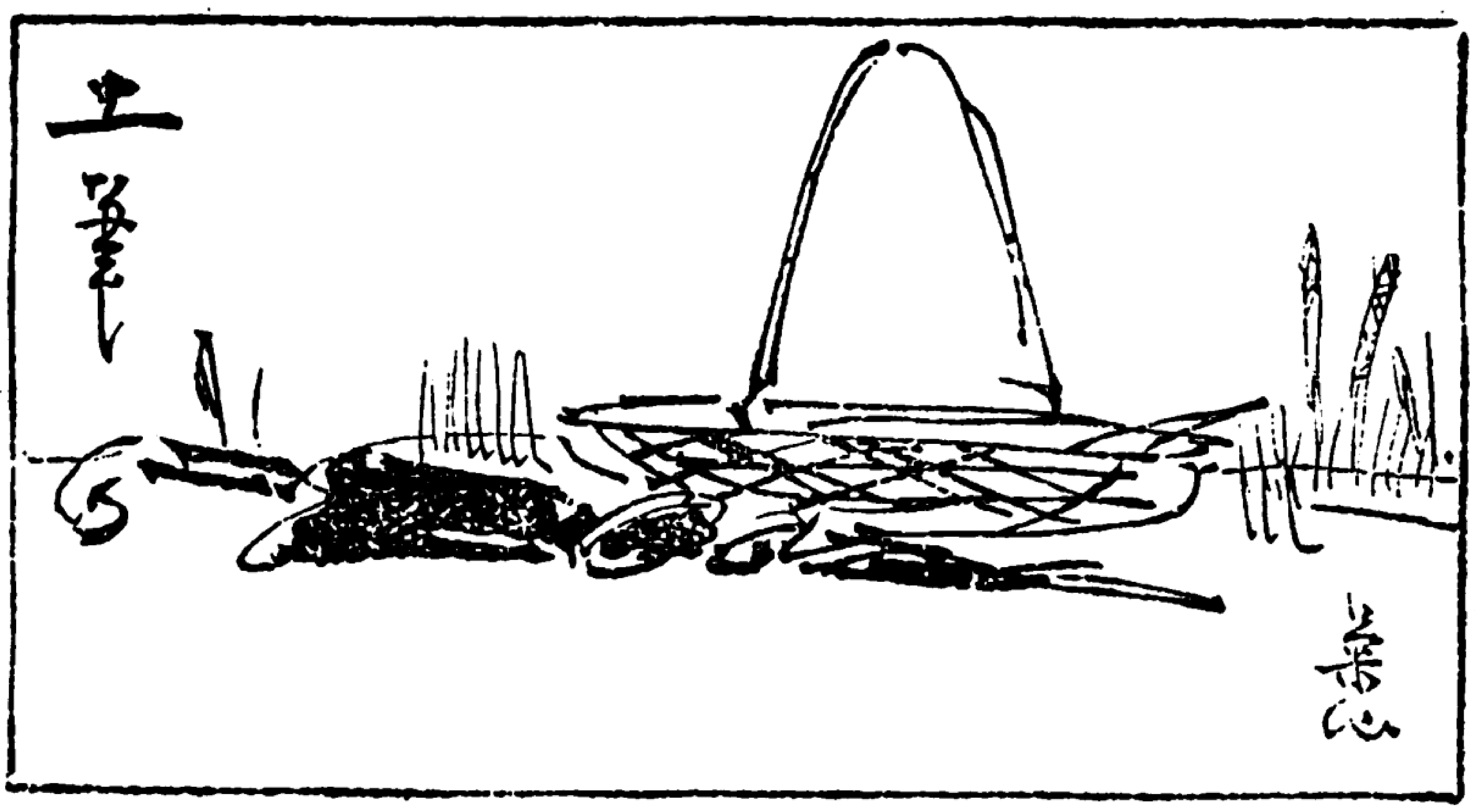
遠州流　小堀遠江守政一薙髮して宗甫と云ひし人の創めしもの

千家流　千利久の流なり其祖を與四郎抛筌齋宗易と云ふ

などいふ總ての茶禮は、禪家隱逸の躰を模し、質素閑靜を學びしものなるが故に、其れより宗匠を指して、和尙と云へりとぞ、然るに儀式ばりて、漸く物

を行ふに至りしかば、貝原損軒、大宰春臺などは、口を極めて誹るに至りぬ、其言ふ所を聞けば、都て飲食の道に於て禮を行ふは宜しけれど、茶の湯の法殊に拙なく、且つ諂ひの甚しきものはなし、先づ何の用にも立たざる、古反故、古茶碗などの類を、高金を出して求め整ふとは何たる事ぞ、器は如何にも新しきを用ゆべしと、尙書にも言ひたれど、幾歳をか經て、誰人の口の垢手の垢の、染つきたるを汚はしとも思はず、喜び貴びて玩ぶは、愚も甚しき極みなり、加之、唐物の香合、茶壺の類、其他古物の名器と稱へて、或は百金二百金、さては千金も惜まで徒に買求めて互に珍重がるとは、抑も何が爲の利益ぞや、其用は例ひ凶年飢歲に遭ふて、寒士貧民を救はんとすれ共、恐らく一掬の米にだも如かざるべし、軍國鬪戰に臨みて、更に一矢の用にも換ふ可からず、暴病急症の時に方つて、是を煎ずるとも陳皮一味の能にすら如かず、斯る無益のものに、金錢を費すことは、無下に拙なく淺間しき極みなり、又彼號の體を見るに、先づ一室に入る時、畫幅を見て賞め、花を見て賞む、主人出て爐に炭をすれば、香合を見て褒め、會席の碗皿其他の器物を見て悉く之を賞む、料理の献立を賛め、偖は總ての物を賞むるは是れ心にも無き御世辭を並ぶるにて、心から感心したるに非ず、只儀式の爲に斯くは云ふなめれ、如何に主人が心を盡したる料理なりとも、人各好嫌ひのあるものなれば、禮として一應の挨拶するは兎も角其出したる者を一品も殘さず、賞めつゝ食ひ盡さんづるは、誠に心憂きわざならずや。次には水指茶碗或は茶入茶杓の類に至る迄之を賞め、主人が手前の爽なる迄を賞む、又主方にても客の請に任せ、其日用ゐたる所の器物より、料理の献立を記したる書付まで、其客に贈るの風あるは、是れ其珍器を貯へ、料理の巧なる等を、人に誇るの意なり。茶の湯はもと禪家隱逸の體なれば、飯を盛るより總ての事に至るまで、皆自ら爲すを禮とし、世を侘びたるさま、風雅の一流とも云ふべきなれど、夫れは貴人或は富

みたる人の、適まかゝる所爲をなして、質素儉約の風を學び、貴に居て賤を忘れざるの誡にはよしとせんも、日頃より且侘びしきもの丶、猶侘びしきを翫ぶが如きは、常ならぬ事なりと云へり。是れ一應の理わりて、最も取るべき節もあれど、予を以て見れば、是其技を衒つて、其花を見ぬ説なり、成程風流に托して、無用の金錢を投ち、古器古書畫の類を聚めて、其の數奇に誇らんことは、固より誡しむべき事にはあれど、其心を豊にして美を愛ずるの心を養ひ、精神を靜に保ちて物に寛濶の情を求め、以て仁慈毅勇の赤心を養はんには、一方に風流を愛せざるべからざるが故に、茶の湯も一應は心得置かねばならぬ事なり、殊に女子に取りて其淑徳を養ひ、擧止動作を謹みて、總てに優雅ならしめんには、常に此道の嗜も持たざる可からざる事なり。



▲帶

女の帶は、昔は總ての卷物を三ッ割、絹羽二重の類は二ッ割として、用ゐたるが如し、就中高田樣懸りと云へるは右の三ッ割を又三分程狹くけ、其端をば結びて押込め置きたるが如しと、落穂集には云へり、一代女ひかりごとむかし／＼物語などいへる本などに、昔女帶の幅は三寸、長さ六尺五寸、或は七尺五寸とあれば、狹くて長さものを用ゐたるが如し、古老物語に、昔は奥方息女方の、神社佛閣に參詣する折は、何れも下げ髪にて、帶は今織金入にて幅三寸ばかり、長さ七尺五寸のものを用ゐ、腰元は木綿金入とて、木綿に金糸を入れて、織りたるものを用ひしが、寛文

の末頃より帶の幅漸く廣くなりて、延寶頃には專ら幅の廣きもの流行し、長さも一丈程になりて、品は何れも純子の三ッ割を用ゆるに至れり。

▲本多髷

世に本多風と云ふ髮の結方あり、是は其昔本多中務大輔忠勝の、家中の風儀を定めらるゝ爲に、諸士下下足輕中間までの髮を、前七分後三分と厚を定めて紙撚を七ッ卷きて髮を結ひたるより始まれり、今異體の髮を本多風と云へるは、違へり云々と夜譚隨筆に見えたり。

▲紙

古へ唐土にても、未だ紙の出來ざる以前には、絹に物書きたる故に、紙と云ふは糸篇を用ゆると見えたり、其後東漢和帝の頃、蔡倫と云ふもの始めて紙を漉きしと傳へらるゝも、其以前に前漢の趙飛燕なるもの、初めて紙を發明せしと云へば、蔡倫に至て精しく漉方に巧者せしものと知らる、日本にては、推古天皇の十八年に、高麗より曇徵といふもの來り、初て紙の漉方を傳へたるものゝ如し、又漉返しといへるは、上古の文には見えざれど、中古に至り、淸和帝の御崩後、東宮の御息所、帝の常に遊ばしたる御書を集め、之を漉返して經典書寫の料に成し給ふ是より公家の料紙として用ゐらる、卽ち此紙を宿紙とも、水雲紙とも、薄雲紙とも云へり、支那にても此事ありと見え、天工開物と云ふ書に、還魂紙とてすき返の事を載せり。

▲いとこ煮

寬永二十年頃の、料理物語と云へる本の煮物の部にいとこ煮は、アヅキ、牛房、芋、大根、豆腐、燒栗クワヰなど入れ、中味噌にて追々に煮る故に、いとこ煮なるべしとあり、追々の詞、甥々に似通へるを以て、從弟似と名けたるか、昔の人の物に名けたるものに、謎語めきたるのもあり、同書汁の部にしゆみせんは、菜も豆腐も如何にも細に切りたるを云ふ味噌汁にはだし加ふとありて、名義を記さず、これ謠曲に北は黃に、南は靑く云々と、須彌山を讀みし

歌より出たるものゝ如し、其の歌の意に依れば、皆實は靑しを南は靑しに通はせ、須彌山と名けたるやと思はる、是は古くより汁の妻を、汁の實と云へるが爲ならん。

▲衣

衣の字を衣と讀ますする所あり、例へば衣通姫などいへるが如し、源氏物語其外古き言葉に、衣類の事を御衣といへり、今も猶衣類の手を出す所を、袖といふは即ち衣手の義なり、裾をすそと云ふも、畢竟は末衣の義に外ならず。

▲眞田紐

天正の頃、眞田安房守昌幸浪人しける折、一種の打紐を拵へ、之を大小の柄に卷きけるを、或人餘りに粗末なるを笑ひしかば、安房守云へるやう、假令錦を着て黃金作りの太刀を佩くとも、其人の心愚ならば何の用にも立つまじ、見懸けは粗末なれ共、此魂を見るべしとて、中身を視されけるが、兩腰とも相州正宗の作なりければ、人何れも其心懸の深きに感じ、其れより其木綿紐を呼びて眞田打と稱へ、爭ふて之を用ふるに至りしが、果ては農商の間にも傳はりて、次第に世に流行するに至れり。

▲綿拔

昔は今の如く四季折々の衣服なくて、綿を拔きて袷とし、又は解きはなして、解分衣と云へり、今云ふひきときなり。

○八日の旅（三）

松林歌子

十八日

午前一時半頃、父上の呼び起し玉ふに打いで見れば、船は左右の海岸を去る五丁餘の海上に、まさに停泊せんとする處にて、左には燈の光り五つ斗りほの見え、此處を室津と云ひ、右を上の關とかいひて、前面は一つゞきとなりて、船のゆくべき方も見えわかねば、いと心もとなくて、

　行船のゆくへしら波立かへり
　　とはましものを上の關守

夜とは云ひながら、月の光りの清けきに近づくまゝに、左右の家々螢く見渡さる、室津に停する事十分餘、四五人の下等乘客ありて、一時五十分といふに又進行をはじむ、ゆく手如何とあやぶめば、今迄一つに見えし室津、上の關は、進むにしたがひ、一尺二尺と次第〳〵に、

白波遠く見渡さるゝに、いと嬉しくて、おぼえず、

　あな嬉し常盤にしげる木の間より
　　ゆくて見えつゝさゞ波のたつ

やがて兩岸相去る事三四丁、右は松の森青々と茂り、左もまばらに松生ひたり、月は中天に高くすみて、晝をあざむきたれば四方のけしきをながむるに、いと便よし、此海峽を過ぐれば、又大小の島々二つ三つあり、今暫くはさばかり見るべき處もなければとて、室に入る。

二時四十分、眼さめたるまゝ起き出で見れば、左には山陽の陸地見え右には大小の島々ありて、恰かも地つゞきの如くにして、あるは遠くあるは近く、折り重なりて、陸島相去る僅か八九丁、此瀬戸を過ぐれば、左の海岸に百軒餘の人家つらなれるあり、此處を小畑と云ふ、海士のいさり火にやあらむ、み空の星にまがひて、九つばかり見えたり、午前六時といふに、含漱手水を終へ、父上母君と甲板にいづれば何といふ所にか、左の山々松杉等の生ひ茂れる中より、恰かも春のみ雪のをちこちに消え殘りたらむが如く、所々面白くはげたる處の見ゆるいとをかし、右は陸地を、さのみ遠くはへだてず、松杉ども、少しのひまもなく、目もさむる斗りに立ちつゞきたり、影うすれたる曉の月は、山陽の山に落ちかゝらんとし、太陽は東の方より、軈て匂ひ出づべく青々したる山の端のあたりにほのめけり、左の海岸にそひて、汽車の線路は、恰かも一つの帶を引きはへたらむが如く、朝風身にしみて、けがれなき空氣を呼吸する心地いとすが〳〵し、母君と筑紫にてはえがたき此景色をたゝへつゝ居たりしに、父上のはや宮島につきぬとの給ふに驚きて、ふりかへれば、今迄綠こまやかに見えしは、實にこの宮島にてぞありける、社殿は既に眼前にありて、其構造古雅にして神々しく、後には青山をひかへつゝ、綠波にのぞみ、折しも滿潮の時なりしかば、百四十八間といはるゝ廻廊は、淸けき波に礎を洗はれ、鳥居は海中遙かにいかめしく立てる樣の美しさ、又風光の明媚なるは、實に描き筆につくしがたく、只々絕景と呼ぶの外ぞなき。

此嚴島神社は、推古天皇の御宇に、勸請せられたるものにて、市杵島田心滿津の三姬をいはひ奉るなり。

海岸線にそひて、無數の小さき燈籠つらなり、社殿の左手なる森のしげみより大きなる瓦屋根の表はるゝは、そのかみ豊太閤の朝鮮征伐の時、軍勢を集めし處なりとかや、世に千疊敷と云ふ、其後より五重の塔ほの見えたり。

海上には、第五十五號と、第五は十八號との水雷艇に、朝日のみ旗勇ましくひるがへりたり。

始めは此宮島より上陸する筈なりしかど、浪靜かなる船路の旅のすてがたく、宮島は、又の便りもあらん、かりそめにはいとかたき金比羅詣でして、歸りに時日もあらば紅葉もよかるべければ、こゝに立ちよらんと、父上のゝたまふに、しかよけんとて遂にこのまゝ四國なる多度津港に至る事とはなりぬ。

高等學校生か、師範校生かと見ゆるが、四五十名ばかり乘り込みて、軍歌のこゑ〴〵いと賑はし、此處に停泊する十四五分

　さゝ浪のまたよせかへり來ても見む
　　ながめつきせぬ宮島の濤

島をはなれて、石垣築きし燈臺あり、高く重なる大空には、眞白く綿の如き雲、薄墨色なる雲どものいやしげくたゝなはりたるが、日の出の光りをうけて、黑く赤く、さては黃金白銀の色にぞかゞやきたる六時半食堂に入り、七時頃甲板にいづれば、太陽ははや山の端を遠くはなれて、さゝ波たつ海上にくだけたり、七時廿五分宇品港に着す。

去る明治卅三年九月、暑中休暇を幸ひ、母上、叔父君、從弟等と同行八人、福山なる從姉の許を音づれし歸るさのをなりき、暴風雨の爲、海岸の線路に損所を生じて、暫時回復の見込たゝざれば、線路回復に至る迄は、門司德山間の連絡船を、門司宇品間に往復せさすとの事なりしかば、其頃はいまだ滊車下の關迄全通せずして、山鐵と九鐵との間は、門司より德山まで、滊船にて連絡することになり居たり、線路の回復を待ちては、學校の始業期に後るゝを以て、此連絡船によらんとて、廣島にいでて、ついでに兵營見物にゆくに、折しも北淸事變の際な

りしかば、兵營の傍なるいと廣き明地には、幾棟ともわかぬ假病院立てられて、人々の出入繁頻なりき、又淺野氏の別莊を見物し、宇品に至るに、此處暴風雨の爲、海岸の堤防破壞して、海水みなぎり、家は一つとして軒迄水ならぬはなく、中央の少し高き所に、板を以て假長屋を立て、爽もなく、蓙などをしきて、僅かに雨露を凌げる樣の哀れさ、そぞろに同情の涙を禁ずるあたはざる有樣なりしに、けふは過ぎしに變る勇壯宏大、海岸は何處も堅固に石垣をつき上げ、廣やかなる波止場は、幾つとなくつらなりたり、實に昔日の宇品とは思はれず。

其昔すぎにし時のあはれさは

ゆめかと思ふけふのさま哉

宇品の少し左の方に、陸地を離れて二三丁ばかりの島あり、此間は石垣を以て連れられて、一つの良港灣となれるは、船舶の停泊にいと便なるべし、日清戰役の當時は、兵士の輸送貨物の積み込み等、もはら此港によりきとの事にて、紀念碑あり、近頃有志相計りて、此築港を斷行せし時の知事千田貞曉氏の爲めに、碑を立てゝ其勳功を萬世に傳へんとの計畫ありとなり、我船は浮棧橋に横づけとなり、上陸者の檢疫あり、門司よりの相客二人及び學生等此處にて上陸す、今迄山の端にかゝりし雲は、俄かに勢を得てまたゝくひまに、大空をおほひつくし、二つ三つ雨滴の落つるよと見るまに、車軸をながす勢にふり來れば、皆々客室にのがれさり、小さき硝子の風窓より外面をながむる程八時十五分といふに解纜す、海中木標に白くぺんきを塗りたるは、暗礁の印なり、行手に二つの白き汽船黑烟をはきつゝ進行せり、暫らくにして、さしもにはげしかりし黑雲も漸く勢を失ひて、綠色燦たる青雲は後の勝利をほこりがほに、しづ〳〵と東の方より進み來る樣いと勇ましく、遂には僅かばかりの雲をも止めずなりて、日の光いとうららかなり、甲板に上るに、僅かにして一の水雷艇と、又御用船めきたる軍艦旗かゝげたる一漁船に行き合ふ、暫時にしてゆく手の山のあなたに、黑烟天に漲れるは吳港なり、右は江田島にて所々に短きは一二丁、長きは三四丁餘の白き恰かも欄を廻らしし如くなるは、何ならん

左手には小さき島の二つ三つ、やがて濵留一禁吳軍港に着しぬ。左側の山手には、處々に廣く垣をめぐらしたる小屋の如きもあり、又軒迄土手を築きて、大いならぬ瓦屋根の七つ八つありて、屋上には何れも避雷針の三つばかりつゞ立てられたるは、火庫にや、右には種々の工場勇ましく、黑烟をはきて曇りなき天津み空も見えぬまで、いと盛なり。此吳ドックはいと大なるものにて、ブロリと呼ぶ一萬五千噸の亞米利加軍艦も、容易に入るゝ事を得となり、又今三千噸の津島と云ふ軍艦製造中とぞ、港内に筑波、八島、吉野、富士、松島、嚴島、比叡、金剛、赤城の九艦停泊せり。又港内四五艘のボート浮びて、その船毎には、白き肌着を着、白き手拭をかぶりたる、或るは鉢卷きにせるなど、思ひ〳〵に身がろに出で立ちたる水兵、兩側に六人づゝかひを取り、へさきには、常の如く粧ひたると、右の如く白の肌着々たるとの二人ありて、號令諸共かひ揃そろへ、や聲をたてゝ、港内縱横にこぎめぐれる、見るからにいと勇ましくて、只管に日の本のみ榮えを祈りつゝ、此處より田中行徇と呼ぶ海軍少佐の夫人同伴にて、四つ斗りの令孃、二歲位の令息に、一人の下女をともなひたる、我等が部屋に乘り込まるこの人々と心易くなり、共に甲板に毛布等しきて語らふ、少佐は久留米の人にて夫人は我と同鄕との事、又久留米の同窓生赤司とみ子孃の兄君、赤司陸軍大尉夫人とは、猶姉妹の間柄なりとの事に、何となくなつかしく見えて、共に鄕里の事等語らふにいと樂し。十五分間停泊の後、九時半出發、暫くにして音月と云ふ處に着きぬ。此地は吳つゞきの山と、相去る僅かなれば、海水の流れいと急なり、此島にも砲臺ありて、所々に陸軍の御用出張所あり、又大阪商船會社の出張店あり、此地は稍賑かなる樣に見受けられ、海產物として、交魚と稱ふる魚の產出甚だ多き由にて、商船會社中國航路中四國なのぞきての良港なりとぞ。又此地より乘り込む客は九分九厘迄男女の勞働者にして、多く神戶におもむくとの事なり、けふも年齡十五六より、二十歲位迄の女二三十人と、若き男子の二三人乘り込めり、此近海は何處に行きても大いなる島は元より、いとも小なる島に至るまで、烟立つはなく、

如何に農業國とはいへ、よくも開拓せしものかなと、感ずるの外なく一つの假屋だつ者だに見えぬは、何處よりか舟にて通ふにやあらん、波は靜かに、風は冷やかなり、十時半長濱といふ處につく、此處は人家二百軒餘りもあらむか、海岸にそひて眞白き倉の、二つ三つ殊更めきて見ゆるもをかし、山は多く畑に開きて青々とあるが中に、所々松杉等の一森二森見えたり、十一時十五分晝食の堂に入る、十二時十五分竹原に着す、此の處は昔頼山陽先生出生の地にして、今も其子孫あり、山陽著書の版權によりて、年に一萬圓餘の收入ありとぞ、前面は大小の島々屏風の如くつらなれり、我船はいつも陸島相去る僅かの處を縫ひ〳〵て行くに、太陽は何處までもへだてなく、我頭上を笑ましげに照したり、風吹きいでいとはだすさむし。

十二時四十分、忠の海といふ處に着く、前面にオク島飯の島横はり、オク島には砲臺あり、忠の海に陸軍要塞砲兵の營所、白壁美はしく立てられ、また少し海中に突出したる山上を二三段に切り開きて、其間に大砲の筒先見ゆるは、演習砲臺なりとぞ、海岸の山の手なる僅かの松森には、小さき宮ありて、その鳥居は水邊にたてり、此處を少し過ぎてゆくに、左の海岸に、石段を築き、白くぺんき塗りたる二坪餘りの家あるは、海底電信局なり、一時二十分神根の燈臺前を通る、スク子島といふ處にて、百噸餘の滊船に行き逢ふ、此の處にも砲臺あり、一時四十分三原を過ぎて、糸崎に着す、糸崎停車場は、海岸にありて折しも上り下り客車行き合ひて、發車す、十分間停泊、鐵道線路は海岸にそひて、所々に丈高からぬ老松の三つ或は七つ斗りづゝ間遠に見ゆるもゆかし、暫らくにして日本郵船會社の遠近丸に逢ふ、二時半尾の道に着く、千光寺前のほとりに停泊す、千光寺は山の中腹より頂近く迄所々の森の中に瓦ぶき、或は藁葺屋根の御堂散在し、又二重の塔あり、山間には奇しき大小の巖數知らず、折重なりて、いとあやふげに見ゆ、五六十段もあらむと見ゆる石段は、草木の間に布を引きはへたらむ樣なり、又千光寺に並びて、二つの宏大なる寺院あり、帆前船の停泊其數を知らず、港の入口に西洋造りの水族館あり、これに面して、岩石斗りにてなりたる小さき出島に、洞穴のごときもの二つ三つありて、そこに女子の五六人大きたらひをたづさへ、洗濯に從事なし居る樣のあやしきに、如何にと問へば、此尾の道は、いと水に不自由なる土地にして、かの洞穴の中より、いとよき水いづとなり、旭川丸大戸島丸等停泊せり、男女廿餘人の乘客あり、又菰包み樣の荷物澤山に積み込めり、六時頃紅茶を喫す、同廿五分解纜。

荷を積みたる人をのせたる小舟の、ゆきつもどりつする樣の面白さ、淨道などいふ寺は、山の中腹にありて、いとも宏大にたてられ、石段の兩側には、二三間位の老松生ひ並らび、山腹には種々樣々なる奇しき岩石の恐ろしき迄に、うち重なりて、あるは茶褐色を帶びたる、あるは白きあり、其間より松の綠の色深き、實に筆紙につくしがたき絶景なり。

我船の餘波をうけたる小舟は、恰かも大嵐にても逢ひたらむが如く、いたくゆれにゆれて、飛沫舟上に上るは、いと氣の毒におぼゆ、眼にあまる山々は色濃く、漸く作りなしたる畑物の榮えに榮えたるいとよし、四時半鞆津着、石を長く築き出したる三つの波止場ありて、一つの波止場より、十間餘りへだてたるは玉津島、其傍なるは津輕島なり、鞆津といふ處の高地に、高等小學校、尋常小學校いと宏大に立てられたり、其少し右入出張りたる高地に塀をめぐらして、木立の間より美はしき家々のもるゝは、林某と呼ぶ人の別莊なりとぞ、いとながめよろしげなり、其下に同じく石段をきつきて、赤き鳥居の立ちたるは辨才天にて、小さき島には稻荷神社あり、其處より十間餘をへだてゝ仙醉島といふあり、此處には海水浴場仙醉島の一部と、玉津島、津輕島とは、何れも岩石の山にて、海岸けはしく其巖の間より、老松若松常盤の色に榮えたり、我船は仙醉島を左舷に見て進行するに、右方には少し島をはなれて、おのがしゞの帆片帆上げたる無數の船は、秋の木の葉と浮びたり、風かはり少し海荒れそぬ、船は太陽にそむきて進みしが、時しも五時半頃四方のけしきは、次第〳〵に夕暮の幕におほはれ、太陽は過ぎ來し山のあなたに沒し、其あたりなる黑き白き雲は名

殘りの光りをうけて赤黑く、赤白くえもいはぬ物すごき色にかゞやきぬ、六時前夕食の報知あり、先程より何となく、胸苦しき樣覺えて心進まねど、少しは食ぶる方却つてよろしかむと、堂に至るといと心地あしく、漸くにして一椀を食べ、直樣室に入りて靜かに横臥するに、少し頭痛さへ加はりぬ、己れはもと汽車汽船とも强く堪ゆる方なれど長らく船路に疎遠なりければ、今度久々の船に、少し波荒れいだしゝまゝ心地常ならず覺ゆるいとわびし、母上には何事もましまさず、七時頃父上の早や多度津に着きぬとの給へど、起きいでなば又心地あしかりなむと、暫しはそのまゝにありけれど、かくてはとて起き上り、手荷物等整へ、甲板に出づれば、月は多度津の山の端に近づきて、光うすれたり、檢疫終りて、田中少佐等に別れを告げ、我等は一番後の艀にて下船するに、波高ければ、いとあやふし、船員等皆親切にして老若婦人等は自分背負ひ、或は手を引きて、上下を助くるなどいたく感じぬ、小船は恰かもブランコの如く、面白く左右にゆらめく、汽船を去る二丁餘にして、兩方より石垣を築き出し、右の方よりなるは中にて一つきれて、港の入口をなし、端の方には燈臺ありて、赤き光りをはなてり、港内の左に棧橋ありて、數多の宿引き各々屋號を呼びつゝ、ひたすら客を引かむと待ちうけたり、己等は初めより花菱といふを名ざし、案内せられてゆくに、一町半餘りにして、左側に石の門立てるは、即はち花菱旅館なり、我等は二階なる十五疊の間に入るに室内の粧飾よく整ひ、床にかゝれる軸物は、玉田の印ありて、岩上に梅匂ひ、岩下には清水きよく流れて、幾千ともわかぬ小雀の、いと樂しげに舞ひ遊べる見るからに心地よし、花器には黄菊の大輪美事にさされたり、八時過入浴し十時寢につく。此處の名產は竹細工籠、柚餅子。

海外思潮

左の一篇編輯の都合上此の欄内に錄す

○桑港日本人學生排斥問題

馬頭

一、此問題の由來

◎桑港の公立學校(小學校中學校等)には日本人の子弟が、二百五十人以上入學して、教育を受けて居ます、同じ東洋人でも、支那人兒童は、市費で立てた支那人小學校が有つて、白人兒童とは隔離して居ます。

◎日本人兒童を白人兒童と同一の學校に入れて教育して居るのは、白人兒童に取つては不便の點もあり有害の點もありますから、日本人兒童をば、今般改めて白人兒童の學校から排斥して、支那人小學校に入學せしめるか、又は特別に日本人小學校を設立して、之を教育しなければならぬと、市の當局者の考

案をめぐらしましたので、此問題がやかましくなりましたのです。

◎因に申します、昨年制定されましたカリフォルニヤ州憲法には、下の明文が有ります『支那人及び其他の蒙古人は別種の學校に收容して之を教育することを得』とあります。

二、此問題の進行及び落着

◎去る九月初旬　桑港　市教育課長ラングトン氏は、當市法律顧問なるロング氏に向け、日本人兒童を白人學校から排斥し得るか、得ざるかを研究させました、ロング氏は直ちに之に答へて、日本人兒童を排斥し得ると明言致しました。

◎ロング氏の研究の決答を得まして、市の學務課員は九月十五日の總會議に於て、日本人兒童隔離學校を設備する費用を支出する事を市參事會へ提議することを議決致しました。

◎日字英字の諸新聞皆此問題に就て論爭する所あり日本人學生の父兄等は、連署して市參事會へ請願書を差出し、市學務課の提議を否決するやう運動しましたのは、九月十九日であります、日本人協議會よりも、市參事會へ同一の目的を以て、請願書を差出しました。

◎市參事會は九月二十六日(?)に開會して學務課より提出の日本人學校設置費用支出の件は、討議する價値ないものとして、廢案となしました、これで此問題一と先づ落着。

三、學務課の日本人兒童排斥意見

◎九月十五日に學務課が決議しました所の箇條は二つであります、一つは日本人兒童に對して、一の學校を特置する事の必要にして、且つ急速なるべき事一つは日本人小學校を設置する費用は、當會計年度の終りより、支出する事を市參事會に提議する事。

◎これに對する當局官吏の説明をきゝまするに、第一は現在の公立學校は、生徒增加の爲めに狹隘を感じて居るに、日本人兒童までが、續々入學して來ては、白人兒童の座席がなくなる、第二は白人兒童と

蒙古人兒童とを、同一の敎室内で敎育するは、悲むべき不幸である、第三は小學校に通學する日本人は十八歳から二十歳までの者が多い、これを白人の年少の兒童と、同一の敎室に置いて敎授するは、甚だ敎師の困難を感ずる所であると。

四、クロニクル新聞の意見

◎九月十九日の社說に論じて曰く、第一日本人兒童は、白人兒童に比べるに、品位が下等である、之を同一に敎育するはよろしからず、第二に日本人學生は、二十歳前後の者が多い、之を年少兒童と同一に敎授するは、不可能の事と云はねばならぬ、第三日本人兒童は英語の素養が足らない敎授の際敎師が日本人兒童の爲めに、特別の厄介を引受ける事が多いと。

五 フレスノ、レパブリカン新聞の意見

◎日本人兒童排斥問題は實行し得べからざる者である、比較的年長なる日本兒童が、白人兒童と伍して敎室に在るは、整理上不都合の點はあるであらうが併ら合衆國の憲法は、日本人排斥と云ふ事を許可してない。

◎日本人を支那人と同一に取扱ふことは、甚だ公平を缺くの所置である、日本人がむしろ白人にも劣らない人種である事は、今日の日露戰爭が、之を證して餘りあるのではないか、云々。

六、日本人兒童父兄等の市參事會へ請願した書面の大意

◎第一、公立學校通學兒童全數に比しては、日本人兒童の數は甚だ少い。

◎第二、日本生徒の多數は、當市に生產したもので他の在留英佛獨伊各國人の兒童と均しい敎育的利益を受ける權利がある。

◎第三、一箇の日本人學校を建て、之に全市の各方面に在住する、日本人兒童を通學せしめやうとするは、不可能の事である。

◎第四、生徒增加の爲め、敎室狹隘を告げるやうの學校には、日本人生徒を見ること甚だ少い、日本人

兒童の多い學校を調査するに、尙ほ空席が澤山にある。

◎第五、敎育課の官吏の意見によれば、白人兒童とモンゴリヤン兒童と同一の敎授の下に置かれるは不幸であると云つた、併ら事實即ち父兄等が實地各學校の校長、敎員等に就いて調査した事實によれば、却て學力、清潔、從順等の點に於て、日本兒童は、白人兒童よりも勝るも劣りはしない。

七、餘談　上

◎此問題は行政上の問題として、とにかく落着しましたが、學理上まだ落着せぬ點があります、即ちカリフォルニャ州憲法にあるモンゴリヤンと云ふ言葉の中に、支那人のみならず、日本人をも含んで居るか居ないかと云ふ點であります、即ちモンゴリヤンと云ふ語の解釋が、まだ決定しませぬ、他の語で云ひかへますれば、日本人はモンゴリヤンでありますかありませぬかと、云ふ問題がまだきまりませぬ。

◎行政處分と、學理問題とは、同一には見られませぬが、米國至る所の役所々々で、或る所では、日本人をモンゴリヤンの中に入れ、或る所では日本人はモンゴリヤンでないとしてあります、それはどうでもよいやうな者の、此解釋のしやう一つによつて、我々日本人の權利利益の消長となる事であります。

八、餘談　下

◎此問題起つて以來、公立學校では俄かに騷ぎ立つて、學生の本籍を調査しました、日本ではどんな片田舍の小學校でも、學籍簿の調製されてない所はないのです。

◎をかしい事には、當市の小學校に居る朝鮮人の生徒も、少々はありますが、學校では、それらを日本人の部に入れて、數へました。

米國通信

桑港にて　澁谷烏頭

一、金剛石婚式

◎と云ふ文句はおだやかでないか知れませぬ。佛語

のノース、ド、チアマンと云ふ語を直譯致しました譯で御座います。

◎佛京パリ府ボスエ街に住んで微かに老年を送りつつあるハワと一云ふ翁は今年(昨年の話です)とつて八十五歳。ハワー婦人は八十一歳。兩人結婚してから丁度六十年目にわたりますので友人及び近隣の者寄集まつて金剛石婚式の儀式を致しました。夫婦とも頭には雪を頂き額には四海波をよせて居ます。

◎式上、老夫婦の懷舊談甚だ趣味ある者でありました。老婦先づ曰く『もと私共は田舍者でございましたから、私共の新婚旅行は此巴里に致しました。其時私は始めて巴里を見ました。十五日間見物して、度々芝居も入りました。プロフエートの幕の時にロジエーが歌ふのに助聲してやりました事がありました。ストルッ、ルワッスウール、リジエーなど云ふ役者は大へんにうまくてチー……あの頃は私共も少少は金持ちと云ふ部へ入つて居ました。今の貧乏な代りに……』と云つて皺よる頬べたに涙を走らせました。

◎老翁の申しますには『文明開化と鐵道とのおかげで荷馬車屋營業の私共はスッカリ身代をつぶしてしまひまして、九人の子供は實に辛苦艱難をして僅かに育てあげました。あらゆる出來るだけの勞働をやつて見ました。長い此年月を……』

◎右は昨三十七年十月十六日の出來事で、翌十七日のマタン新聞に載せました記事であります。

二、英露の紛議と婦人の勢力

◎丁抹國コペンヘーゲン十月三十日の電報は、北海に英國漁船の露艦より砲撃されて沈沒したるに因りて起りたる英露間の紛議が、最早機一髮に迫りて干戈相見んとしたるを婦人の勢力よく之を鎭壓して、仲裁裁判に附せられる事になりたりと傳へました。

◎英國皇后陛下と露國太后陛下とは姉妹の御間柄で共に丁抹國王クリスチアン殿下の王女であらせられます。そこで『英露若し戰を開くならば我が身は此世に生きて居られぬ』と老クリスチアン王殿下が歎き

なされましたが、御王女なる英露の皇后皇太后兩陛下は、父王殿下の御心をやすめ奉らんとの御はからひで、かの紛議最中のをりは、一週間の間、毎日百度の電報を、往復なされましたと申します。

三、前伊國總理太臣夫人の小說的の一生涯

◎伊國ローマ十一月十日の發信に曰く。本日、前伊國總理太臣クリスピー夫人たりし、ロザリヨ、モントマッソン婦人が死去致しましたと。

◎此モントマッソン婦人の一生涯は殆んど小說的でありました。婦人の出生はシ、リー島の漁夫の娘であります。それが總理太臣夫人とまでなり上りましたのは如何にも普通の事ではありませぬ。

◎そのかみシ、リーの監獄の中に罪人としていましめ置かれました青年がありました。これはクリスピー氏は時の政府に反對しまして失敗しました結果捕縛されて入獄の身となりましたのです。其監獄に洗濯女として近村から雇はれて入つて居ましたのは此モントマッソン婦人でありました。

◎洗濯女なるモントマッソン婦人は罪人なるクリスピー氏を見て普通の青年ではない後來有望の人柄であると見込みましたので萬事丁寧に世話をしてやりました所がクリスピー氏も意外なる親切にほだされて出獄の後は相携へて伊太利本國へ歸りまして結婚致しました。果してクリスピー氏は總理大臣まで榮進し世界に其名を響かせました。

◎モントマッソン婦人の榮耀なる生涯は誠に短い間でありました。如何致しました事か婦人は心の締りが緩んだばかりではなく非常に酒を飲む習慣がつきましたので到底貴婦人たる資格は保てませんでしたクリスピー氏も玆に至つては止むを得ず一生涯の扶持を與へまして離緣を申し渡しましたのでありました。

◎それから婦人はローマの町に一人わび住ひを致して居ましたが先年旣にクリスピー氏は世を去り今また婦人の小說的生涯も終りを告げましたのです。

四、婦人合宿の大建築

◎ニウョーク市にて勞働に從事して居る婦女子の數は莫大の數に上る事でありますが、それらの爲めに男子禁制、婦女子專用の下宿屋を建築して安全にかつ經濟に婦女子を保護して置かうと、只今計畫中であります。其費用は總計三拾萬弗日本金の六十萬圓の見込でございます。

◎建築の場所はウエスト、サイド町の大店の並んで居るわたりを撰んで居ます。

◎下宿料は室料とも一週間に三弗か四弗にしやうと申して居ります。

五、女學生喫煙俱樂部

◎十一月六日ペンシルヴアニヤ洲ワシントン市よりの報告に曰く。當市の學校で若い女學生が喫煙をする事が流行して多くの女學生が其毒にかゝり居る事が發見されました。學務委員は大にびつくり致しまして調査致しましたに男女學生合計百五十人のニコチン中毒者のある中に其大部分は女學生でありました。

◎其女學生らは室料を出して或る場所を借り入れ、之を午後俱樂部と名けて其所に集つて盛んに卷煙草をふかして居ました。

◎早速、午後俱樂部は解散させられました。尙ほ一つの規則『喫煙する者は即日退校を命ず』と云ふものが明七日から施行されます。

六、次ぎは女學生自殺俱樂部

◎先頃桑港で若い娘が前後相踵いで五人ばかり自殺を企て或は旣に目的を遂げ或は漸く助つたりなど致しましたので一時市民を驚かせました。或人の云ふには女子の間で左樣な秘密の結社が出來て居るのではないかと申しました。

◎然るにイリノイズ洲のブルーミントン市より十二月十四日に來ました通信を見まするに同市附近の一村の學校の女生徒中に自殺俱樂部と云ふ者が組織されてある事が發見されました。何んでも番號を極めて順々に往生を遂げる約束を極めて置くものなやうです。娘持つ親たちは大さわぎて之を監視して居ま

すとは厄介な事もあるものかなでございます。

七、マツギー女史

◎十一月十六日無事桑港着十八日東部へ出立。

八、伏見宮殿下

◎十一月九日御着翌十日ワシントンへむけて御出發
◎十六日ワシントンの大統領邸内で殿下の御招待會を催された。但し婦人は一人も招待されませぬとワシントンからの報知。

九、ローラフオーラ孃

◎と云ふ桑港の學校教師、月俸の滯り五ケ年分を一度に催促して學務課に拒絕され、之を法廷に訴へ出て目出度く勝利を得、總計一萬三千圓を懷中に入れやうとする所です。

一〇、大統領と小學教師

◎大統領撰擧の間際になり敵も味方も此處を詮度と運動中、コロンビヤ市に於て現大統領ルーズベルト氏反對派なるホブソン氏(有名なる軍人)は大々的のルーズベルト氏攻擊演說を致しました。

◎演說すむや否や、一令孃はツカ〳〵と、ホブソン氏の前に進み出で、氏に喰つてかゝり「如何に政治演說とは云ひながら、無實の非難攻擊をルーズベルト氏に加へるは、餘りと云へば淺ましき至りではござらぬか」と云ひました。此令孃は同市の小學校に奉職して居る女教師ガルブリース孃と自ら名のりました。

◎翌日一封の手紙がガルブリース孃の許に屆きました、それは大統領ルーズベルト氏の禮狀で、氏の寫眞が一枚封入されて居ました。それ十一月七日の事です。八日の撰擧にルーズベルト氏再撰されました。

◎政談演說を聞きに行く日本の教師は免職になる事がありました。國風がこんなに違ひます。去かし我國の女子にも追々豪傑連が出來て、しきりに女權の擴張を主張して居るさうだから、其内には此の豪傑連が、國會や當局者に運動をして、政談演說位のことでなく、選擧權までも掌中に握る時節が參りませう、お目出だいと申さうか。



白毛布

鼠之助

（上）

お姉様は御自分に關係が無いからつて何時でも那如だわ、眞正に酷い、其樣事が誰かの小説に有つたなんて、那麼事被仰るけど、夫では餘りお察しが無さ過ぎると思ふわ、だつて些少は妾の身にもなつて御覽なさるが宜い、昨日からといふもの御飯も口クに頂かなければ、學校は勿論、お稽古日だけど夫も斷はつてる位なんだもの。

左樣々々、妾が彼の白毛布を區役所に出したのは、何日だつたかしら、餘り舊びてたから止しに爲ようかと、餘程左樣も思つたけどお出し〳〵つてお母樣もお姉樣も被仰るもんだから、遂出した樣なものゝ――でも若しか彼時出さなかつたら、勝田さんのお手紙なんか、一生頂かないで死ぬんだつたか知れないわね、妾恥かしいけど今一度お手紙拜見しようかしら、三度ばかし昨日繰返したから、今度若しお姉樣に見附かつたら屹度笑はれるから、お築山の向の四阿へ行つて拜見しよう。

あら、吃驚したわ、いやな斑犬だね、眞正に妾誰か來たのかしらともつて吃驚したわ、あら甜めちアいやよ、眤乎としてお在つたら。

——……………

——……………

是からが耻かしい所なんだわ。

左様ね、妾が十三の歳だつたから既う五年になるわ、早いね年の經つといふのは。

お父樣が未だ須磨で御養生中だつた時分、既う餘程御容體が酷く爲つて被在したから、お母樣もお兄樣もお姉樣もお出になるし、奥ではお祖母樣と妾二人限に爲つてると、丁度四月の一日だつたと思ふ、電報が來たから妾は乳母のお廣を連れて、新橋の其日の夜行に乘つたと思ふわ、眞正に其時の氣持つたら今思出しても悲しくなるわ。

滊車に乘つてから妾と廣とで並んで腰掛けてると、後から一人大學の制服着けた方が入つして、席が無くて困つてらつしやつたから、妾が少し席を讓つて上げると、大變お禮を被仰つたりして、妾眞正に反て耻かしくなつたわ。

夫は夫は體格の良い、奇麗な御容貌で、二十一二とても三とは老つて被在らなかつたと思ふ、夫がまア不思議に、今でこそ知れたが、勝田さんなんだもの……妾又耻かしくもなく種々な事お喋舌りしたわ屹度、だつて廣は眠り相に爲るし、淋しくつて詮方がないのに、彼方は大變面白い事を澤山談して聞せて、妾を慰めて下さつたんだもの、夫も甫つと十三の春だから無理も無い樣なもの丶、遂お名前も伺はないで直ぐお心易く成つちまつて、大船わたりだつたと思ふ、妾毛布二枚有つたから一枚は彼方に……だつて

外套一つでお寒む相だつたもの……左樣、耻かしいけどもお手紙今些と讀んで見よう。

――……什麼して恁麼事書いてらつしやるだらう。其時は些少も氣が附かなかつたけど、屹度彼方は文科だつたに相違ないわ、妾何だかようく判然とは記憶えてないけど、彼方のお貌が恁う眼の前に見える樣な氣がするわ。

是からが尙つと〳〵耻かしいけど……誰か見ちア居ないかしら、妾何だか落付かないわ。

――……

妾恁麼事讀めないわ、まア耻かしくつて。

彼方那麼にお綺麗だつたから、屹度立派なお髯を蓄て被在るわ、文學士で以て中尉なんだから豪いわねまア甚麼に勇ましくつて美しくなつてらつしやるだらう！　妾未だ無邪氣だつたからとは言ふ樣なもの、其樣綺麗な方と汽車の中なんかで一つ毛布に絡つたりして……若しか夫が今、今だつたら、まア耻かしい、恁麼見ともない女は屹度お嫌だわ、まア什麼しよう……妾何だか恁うぼーつとなる樣な氣がするわあら妾什麼かしたんぢアないかしら……若しかあの……あの、おう極が惡い、うそよ、あら不可いね何だか彼方が笑つてらつしやるお顏が見える樣なんだもの……妾もう見ないから、此所の卓子の上に突伏してしまうから宜い。

あら、お姉樣が喚んでらつしやるわ……まア默つて居ようかしら、夫とも此所へ入つしちア大變ね、是から先は今度拜見する事にして早く隱さう、呀、此方へ入つしやるわ、庭下駄の音がするから、あら又……はーい此所へ居てよ、妾今行きますから……眞正に詮方が無いね。

（中）

昨夜はおれから到頭お手紙讀む暇も無つたから、妾眞正に自烈たくつて、口惜くつて、お兄樣の銀貨入の羅馬字の編出しも何も、滅茶苦茶にして除けたわ。

今日は雨だから、車の母衣の中で讀めると思つたから、學校へも出懸るんだわ。

些少暗くて鬱陶しいけど、前掛を片方下すとしぶきが酷いから詮方がないわ、夫にお手紙を濕しでもしては大變だから。

どれ、早く拜見しよう、昨日お庭の四阿では何處まで見たかしら、左樣々々、此處邊は、ぬきにして飛んで是から、毛布の日記なんて眞正に旨い事書いて被在るわね。

斯くて幾久しく孃樣のお膝近く召使はれ夏は大磯冬は熱海に年毎のお供外るゝ事なく難有き世を送る可しとのみ思ひしは夢にて悲しや這度毛布寄附の擧わるに當り孃樣は我多年の奉仕を憐とも思召さず惜氣もなく區役所へ差出し給へり實にや憂世の慣とて悲しみは是に盡きず遙々の海山越えて此處滿洲の野に着きしが這は什麼我は勝田中尉とて彼過る年汽車中に一夜の伴侶となりし憎らしき學生の手に渡りぬ思はぬ所にて出逢ふものかなと恨めしさ言はん方なきを彼は又我を見知りては或は吾隅に記されたる孃樣の御名を記臆えてか漸く奇遇を欣びて五月蠅き迄に我を對手の昔談、男らしくも無き痴漢なりけり頼みに思ふ孃樣には芥の如く捨られしさへ既に死ぬべう覺えしを今更彼の學生の手に阿容々々と永らへん事我ながら淺ましうも又賦甲斐なさよ。

眞正に不思議だわね、彼毛布が何十萬人の中で撰りに撰つて勝田さんのお手に渡るなんて、實際因縁だわね、屹度緣が有るんだわ妾。

高梁の殼の上に引捲らるゝ今の我が辛さを孃樣は夢にも知り給ふまじ晝夜の別ちもなく馳せ回れる戰場の疲を休めんとて或夜淋しく寢癖惡き中尉の臀の下に敷かれ揉苦茶にされる事實や命長ければ耻多き我身の果誰に語らんよすがもなく天幕の外は胡砂吹く風の音のみ冴えて妖氣漲る寒雲の色恐ろしく更くる夜半かな。

◦ ◦ ◦ ◦ ◦ ◦ ◦ ◦ ◦

尙小生九連城以來戰線に立候事前後八回に候へども帽子袖劍鞘の外身には些少の負傷も致さず自分ながら不思議に存居候古豪傑は屍を馬革に包むとか申候ひし由係累なき小生は一日も早く屍を此因緣深き白毛布に包み度只管軍神を念じ居候先は御禮旁右迄匆々頓首

月　日　　勝田生

柳井糸子さま

緣起でもない那麼事書いてらつしやるわ、あら旣う橋に來た、いやな源だね、今日は又什麼して恁う馬鹿に車が早いんだらう眞正に、人の心も知らないで憎くらしいわ。

追白

尙不幸にして花々しき戰死も出來ず阿容々々歸國仕候事も有之候はゞ御許樣の可愛い赤ちやんにお目に懸る幸を得申候機も可有之相考へ居候……

…………

あら吃驚したわ、唐突に車が支えるんだもの、呀、學校の御門なんだわ、あゝ此お手紙を落しでもしたら大變ね、眞正に持て來なければ宜つたに心配になるわ。

（下）

姉様は那麼に被仰るけど、勝田さんに御返事上げなくちア失禮だわ、今夜恰ど姉様がお留守だから書かう。巻紙の宜いのが有つたかしら、あら恁麼のぢア不可いわ、是は色摺で綺麗だけど奉書半切だから嵩ばつて不可いし、といつて是では墨附が惡くて見つともないし、眞正に兄樣の言艸ぢアないが弱つちやつたね、今日學校の歸途に榛原へ回れば宜つたに……あゝ是れ〳〵、でも紫の薄様なんで、伊勢の御の家へ伊衡少將がお使に行つた話の樣で耻かしいわ、寧そ洋紙にしようかしら、お轉婆だとお嫌になると困るね、詮方が無いから音無しく、散櫻漉込の江戸川にしよう、呀筆が無かつた、晋唐小楷よか千蔭が宜いわ、左樣々々お姉様のを默つて使つて上げよう。

御手紙難有〳〵〳〵〳〵拜見仕候。

あら、恁麼に書いちア可笑しいわ、破いちまうから宜い。

難有御文嬉しく拜見仕候誠に〳〵不思儀の御縁と申外無御座候彼の毛布も極めて古く相成居候間何のお役にも立つまじく存候へども、御前様のお側近く召使はれ候と承はりては飛立つばかり御嬉しく奉存候。

度々の戰塲も御無事に御過し被遊候由御武運の程御目出度き極に候私事の祈念のみにても此後とも御功績を積せられ目出度御凱旋の御事と今より相樂しみ居候。

五年前の汽車中にては誠に面白き御話のみ承はり長々の道中も倦む事なく參り候事御禮の申上樣も無御座候其折はボンヤリにて御名も伺はず其後になりて只管御なつかしくのみ存居候處今度計らず御手紙を頂き盲龜の浮木も斯やとばかり御嬉しく存上候……毎夜の夢に御目にかゝり候御前様は御貌は五

外套一つでお寒む相だつたもの……左樣、耻かしいけどもお手紙今些と讀んで見よう。

――……什麽して恁麽事書いてらつしやるだらう。其時は些少も氣が附かなかつたけど、屹度彼方は文科だつたに相違ないわ、妾何だかようく判然とは記臆えてないけど、彼方のお貌が恁う眼の前に見える樣な氣がするわ。

是からが佝つと〳〵耻かしいけど……誰か見ちア居ないかしら、妾何だか落付かないわ。

――……

妾恁麽事讀めないわ、まア耻かしくつて。

彼方那麽にお綺麗だつたから、屹度立派なお髯を蓄て被在るわ、文學士で以て中尉なんだから豪いわねまア甚麽に勇ましくつて美しくなつてらつしやるだらう！　妾未だ無邪氣だつたからとは言ふ樣なものゝ其樣綺麗な方と汽車の中なんかで一つ毛布に絡つたりして……若しか夫が今、今だつたら、まア耻かしい、恁麽見ともない女は屹度お嫌だわ、まア什麽しよう……妾何だか恁うぼーつとなる樣な氣がするわあら妾什麽かしたんぢアないかしら……若しかあの……あの、おう極が惡い、うそよ、あら不可いね何だか彼方が笑つてらつしやるお顏が見える樣なんだもの……妾もう見ないから、此所の卓子の上に突伏してしまうから宜い。

あら、お姉樣が喚んでらつしやるわ……まア默つて居ようかしら、夫とも此所へ入つしちア大變ね、是から先は今度拜見する事にして早く隱さう、呀、此方へ入つしやるわ、庭下駄の音がするから、あら又……はーい此所へ居てよ、妾今行きますから……………眞正に詮方が無いね。

（中）

昨夜はわれから到頭お手紙讀む暇も無つたから、妾眞正に自烈たくつて、口惜くつて、お兄樣の銀貨入の羅馬字の編出しも何も、滅茶苦茶にして除けたわ。

今日は雨だから、車の母衣の中で讀めると思つたから、學校へも出懸るんだわ。

些少暗くて欝陶しいけど、前掛を片方下すとしぶきが酷いから詮方がないわ、夫にお手紙を濕しでもしては大變だから。

どれ、早く拜見しよう、昨日お庭の四阿では何處まで見たかしら、左樣々々、此處邊はぬきにして飛んで是から、毛布の日記なんて眞正に旨い事書いて被在るわね。

斯くて幾久しく孃樣のお膝近く召使はれ夏は大磯冬は熱海に年毎のお供外るゝ事なく難有き世を送る可しとのみ思ひしは夢にて悲しや這度毛布寄附の擧あるに當り孃樣は我多年の奉仕を憐とも思召さず惜氣もなく區役所へ差出し給へり實にや憂世の慣とて悲しみは是に盡きず遙々の海山越えて此處滿洲の野に着きしが這は什麼我は勝田中尉とて彼過る年汽車中に一夜の伴侶となりし憎らしき學生の手に渡りぬ思はぬ所にて出逢ふものかなと恨めしさ言はん方なきを彼は又我を見知りては或は吾隅に記されたる孃樣の御名を記臆えてか痛く奇遇を欣びて五月蠅き迄に我を對手の昔談男らしくも無き痴漢なりけり賴みに思ふ孃樣には芥の如く捨られしさへ既に死ぬべう覺えしを今更彼の學生の手に阿容々々と永らへん事我ながら淺ましうも又賦甲斐なさよ。

眞正に不思議だわね、彼毛布が何十萬人の中で撰りに撰つて勝田さんのお手に渡るなんて、實際因緣だわね、屹度緣が有るんだわ妾。

高粱の殻の上に引捲らるゝ今の我が辛さを孃樣は夢にも知り給ふまじ晝夜の別ちもなく馳せ回れる戰塲の疲を休めんとて或夜淋しく寢癖惡き中尉の臀の下に敷かれ揉苦茶にされる事實や命長ければ耻多き我身の果誰に語らんよすがもなく天幕の外は胡砂吹く風の音のみ冴えて妖氣漲る寒雲の色恐ろしく更くる夜半かな。

○　○　○　○　○　○　○　○　○　○　○　○　○

尙小生九連城以來戰線に立候事前後八回に候へども帽子袖劔鞘の外身には些少の負傷も致さず自分ながら不思議に存居候古豪傑は屍を馬革に包むとか申候ひし由係累なき小生は一日も早く屍を此因緣深き白毛布に包み度只管軍神を念じ居候先は御禮旁右迄匇々頓首

月　日　　　　勝田生

柳井糸子さま

緣起でもない那麼事書いてらつしやるわ、あら旣う橋に來た、いやな源だね、今日は又什麼して恁う馬鹿に車が早いんだらう眞正に、人の心も知らないで憎くらしいわ。

追白

……………………

尙不幸にして花々しき戰死も出來ず阿容々々歸國仕候事も有之候はゞ御許樣の可愛い赤ちやんにお目に懸る幸を得申候機も可有之相考へ居候…………

あら吃驚したわ、唐突に車が支えるんだもの、呀、學校の御門なんだわ、あゝ此お手紙を落しでもしたら大變ね、眞正に持て來なければ宜つたに心配になるわ。

（下）

姉樣は那麼に被仰るけど、勝田さんに御返事上げなくちア失禮だわ、今夜恰ど姉樣がお留守だから書かう。卷紙の宜いのが有つたかしら、わら恁麼のぢア不可いわ、是は色摺で綺麗だけど奉書半切だから嵩ばつて不可いし、といつて是では墨附が惡くて見つともないし、眞正に兄樣の言艸ぢアないが弱つちやつたね、今日學校の歸途に榛原へ回れば宜つたに……わゝ是れ〳〵、でも紫の薄樣なんで、伊勢の御の家へ伊衡少將がお使に行つた話の樣で耻かしいわ、寧そ洋紙にしようかしら、お轉婆だとお嫌になると困るね、詮方が無いから音無しく、散櫻漉込の江戸川にしよう、呀筆が無かつた、晋唐小楷よか千蔭が宜いわ、左樣々々お姉樣のを默つて使つて上げよう。

御手紙難有〳〵〳〵〳〵拜見仕候。

わら、恁麼に書いちア可笑しいわ、破いちまうから宜い。

難有御文嬉しく拜見仕候誠に〳〵不思儀の御縁と申外無御座候彼の毛布も極めて古く相成居候間何のお役にも立つまじく存候へども、御前樣のお側近く召使はれ候と承はりては飛立つばかり御嬉しく奉存候。

度々の戰塲も御無事に御過し被遊候由御武運の程御目出度き極に候私事の祈念のみにても此後とも御功績を積せられ目出度御凱旋の御事と今より相樂しみ居候。

五年前の汽車中にては誠に面白き御話のみ承はり長々の道中も倦む事なく參り候事御禮の申上樣も無御座候其折はボンヤリにて御名も伺はず其後になりて只管御なつかしくのみ存居候處今度計らず御手紙を頂き盲龜の浮木も斯やとばかり御嬉しく存上候……每夜の夢に御目にかゝり候御前樣は御貌は五

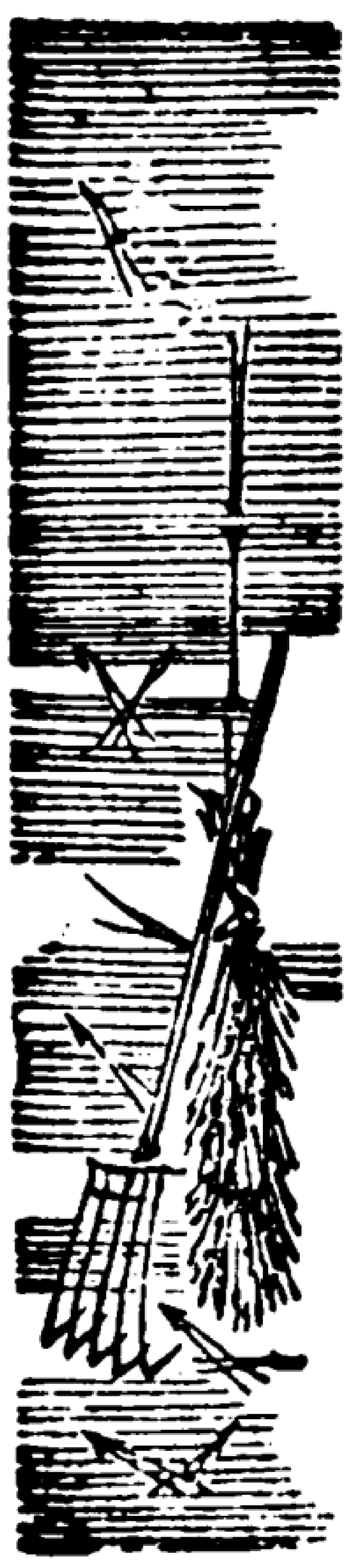
年前其儘ながら御髯麗はしう蓄はへ給ひ劍を杖に勇ましく打笑み給ふ所のみに御座候甚だ甘えたる申條に候へども御寫眞一枚御惠み被下度念上げ候御都合にては御留守宅より頂戴仕候ても宜敷候。あら、若しか奧樣があるんぢアないかしら、あゝ左樣ぢアない〳〵、お手紙に係累なき身と書いてらつしやるから大丈夫奧樣はない、でもあつたら？無い〳〵〳〵〳〵。申上度は胸一杯に候へども餘りに端下なき事お聞に入れ候も恐入候間是にて惜しき筆を擱き申候かしこ。

月　日　　　糸子

勝田の兄上樣　御許

かへす〲御無事に御凱旋被成下度願上候。

、、、もつと書きたいけどね、眞正に些少は察して下さる樣にホンの僅かばかり仄めして置かうかしら、でも怒られでもすると惡いから止さう、妾若しか勝田さんが戰死でも爲さつたら什麽しやうか、眞正にどうしよう、妾も死んでしまうから死なゝくつてさ、彼のお母樣のお守刀で以て死んでしまうから宜い、眞正に勝田さん歸つて頂戴よ、よ、妾何時迄も待つてるわ、待つてるから、待つてゝよう、よう、歸つてらつしやらなければ妾知らないから、よう、待つてゝよ妾、早く歸つて頂戴よう、ね、ね…………。（了）



文林

乙巳新年

大谷伯爵夫人籌子

かちいくさつたふるふみの初刊は
手にとるからにうれしかりけり

松平伯爵女貞子

日のみはたたかくさゝけていくさ人
年やむかふる外國の山

池田侯爵妹沛子

あしひきの山のおくにも日の御旗
のとかになひく年のはつ風

岡澤男爵女偕子

ひむかしの山にかゝやく初日かけ
海の外をもてらすなるらむ

福羽子爵女文子

あらたまの年の光に老松の
みとりいろそふをちの山々

徳川公爵女英子

大内山くにの光もさしそひて
のほるはつ日のかけのゝとけさ

岡澤男爵女末子

いくさ人しめつる山のいたゝきに
年のはつ日や今日はさすらん

米津子爵妹容子

のとかなるはつ日むかへて不二のねは
春よりさきにかすみそむらん

戸澤子爵伯母敬子

あら玉の年のはつ日はにほへとも
また雪ふかしをつくはの山

山内侯爵妹壽子

あら玉の年をむかへて外國の
山にかゝやく日のみはた哉

野村子爵女初子

あふきみる山はきのふのまゝなから

心つからやあらたまるらむ

大河内子爵妹完子

あらたまの年のはつ日のみはたかけ
からのみやまにうちなびくらむ

中村雄次郎女稔子

みなれつる山のすかたもはつ日かけ
かゝやくけさはことにそありける

勝伯爵姪伊代子

あたらしき年をむかへて大空に
そひゆる山そかすみそめたる

毛利子爵女亮子

老松のとはにしけれるたか山は
さかゆる國のすかたなるらむ

鷹司公爵女房子

はつ日かけにほへる山をあふきみて
のとけき年の光をそしる

大谷伯爵妹武子

いくさ人年祝ふらんせめとりし
とりての山に初日むかへて

乙巳の年のはじめに旅順開城の吉報いたり天の下ゆすりみちてよろこびあへる中に東宮第三の皇子降誕ましましけるをことほき奉りて

高崎正風

かぎりなきみさかえしるし生添ひし
はるのみやまの松のふたはに

同旋頭歌

かちときと共に産聲あけませる皇子
いにしへの日本たけるや生ましぬ覽

一月九日御命名式の御祝宴を豊明殿にたまはりて御稱號は國光宣揚の文意に基きて光宮と定めさせられしなど承はりてよろこびの餘りうたひいでたる

大口鯛二

かちときのこゑのうちにもさしいてし
ひかりは國の光なりけり

よろこびのかさなる今日のみさかつき
いたゝく幸もためしなくして

たしめなき御代のみさかえたゝふへき
言の葉なきかくちをしきかな

旅順陥落をことほきて

柳原愛子

あらたまの年のはしめにひゝくなり
わかみいくさのかちときのこゑ

八百萬神のまもれるみいくさの
あるしまさしきかちときの聲

かちいくさいはふと共にさきたちし
ますらたけをの惜くもある哉

同　常磐井文子

かたかりしわたのとりてもおちにきと
きくそうれしき年のはしめに

よきことのつゝくことしはみいくさの
かちもいよ／＼うちつゝくらむ

同　大口鯛二

膽を嘗め薪に臥して國民の
十年のうらみ今日そはれぬる

千葉胤明

何よりもうれしかりけりたゝかひに
いてたる友の年のほきふみ

遠山英一

みいくさのかちしゝらせをきゝなから
迎ふる年そうれしかりける

みいくさのかちをまつこそいはひけれ
むかふる年もうれしけれとも

加藤義清

黄金いつる陸奥山のたかねより
ゆたかなる世の年やたつらん

大口鯛二

みいくさのかちときつくる鳥か音に
あけたる年のいさましき哉

寄國祝　伯爵　東久世通禧

たゝかひにかちていよ／＼仰く哉
よそにすくれし大御國ふり

雪　下田春興

さすたけのよのみやびをは
しろたへのゆきふりぬれば
ゆたかなる御代をほぎでは
しろがねのいろにことよせ
のどかなる御代をめでては
はるはなのにほひにみたて
うたによみふみにもつゞり
さかみつきゑらぎどよもし
おほみよをあふぐときけど
ことしはしつねにあらねや
ふりきてもうたもうたはず
つもりてもゑらぎもたてず

きぐさなすふゆごもりせり
しべりやにたゞにむかへる
ゐろこしのおほ野のはらに
おほみことゝいたゞきもちて
わだまもるすめらみくさが
そのゆきに身をうづめつゝ
そのゆきにゆきなづみつゝ
わだともをいまもうつかと
おもひやるむねのほむらに
ふるゆきのそれにはあらで
みやひをのみやひこゝろも
つねにきえてか

塙忠雄

○
かたてにはろをおしながらかたてには
　つりさをもてりなれし舟人

○
宮まゐり神のおまへのすゝの緒に
　てをもちそへてちこにふらする

○
人心ひるがへりやすし韓の國
　官妓のそてのそてかろきこと

葉山に年をむかへて

典侍　柳原愛子

ふしのねにつゝく山々雲はれて
　年のはつ日そさしわたりける
沖にいつるあまの子もなし年波の
　たつ日は船にしめかざりして
あふきみる空には雲もなかりけり
　のどけき年のはしめなるらん

旅順陥落

大口鯛二

嬉しくも現となりぬあたの城
　落ちたりと見しけさの初夢

千葉胤明

勝閧を共にあげゝむ海くぬが
　うちじにしつる人のみたまも
膽を嘗めたきゝに臥してはらさむと
　思ひしうらみやゝはれにけり
今日いかに大内山も動きけむ
　まちにまちつるかちのしらせに
降りつるわだのものゝ具大船の
　年のはつ荷に積みかへるらむ
世にあらば今日のかちどき共に聞き
　共にいはゝむと思ふ人のみ

詞苑

甲

従二位子爵 黒田清綱先生撰

（代撰菊池武則先生）

水邊梅

天

うくひすのかけさへ見えて池水の
庭にうつろふうめのはつはな
下谷區徒士町三丁目三十三番地 岡田春子

地

新玉のとしのわか水汲むそてに
にほひそめたるうめのはつはな
愛媛縣宇摩郡妻鳥村 高橋茂子

人

うくひすは都にいてし谷河に
ひとりにほへるきしのうめかな
三重縣津市西新町 神田みよし子

きのふけふ里のかはかぜかをるなりきしへの梅もいまさくらん　薩摩 松原みれ子

木干川のみつゝるかなりてなかるらん汀のうめはいまさかりなり　大和 栗山倹子

せりつみてあらふあしたに春川のむかひの梅か見いてつるかな　松山 上原のふ子

川添の梅のさかりになりしよりみつさへかをるこゝちこそすれ　愛媛 柳たけ子

池水のそこにもふかくにほひけりみきはの梅のはなのさかりは　肥後 佐々有鄰子

谷川のなかれの木もにほふまてうつりてみゆるうめのはなかけ　埼玉 横田かの子

山河の梅のしつくやなかるらむなかれのすゑそかににほひける　静岡 竹内みつ子

いさら川みきはの梅の花さきてしたゆくみつもかににほひけり　松山 よし子

きのふまて結ひし氷とけそめしかはへのうめもほころひにけり　本郷 清水はるみ

乙

山川の水もにほひてながるらんつゝみにさけるうめのさかりに　水戸　高村きの子

いかだ舟くだすたもとのかをれるはこの川かみに梅やさくらむ　松山　田村多豆子

雪に堪へ霜をしのぎて雄々しくも河門のうめのさきそめにけり　神戸　今西みさを子

やり水にかげをうつして梅のはなゑめるすがたのなつかしき哉　熊本　田代綾子

梅津川むかひの岸にふれよせてながれにうつるはなを手折らん　埼玉　横田やな子

（以下到着順）

むすぼれしこほりはこちにとけそめて池のみぎはに梅の花さく　長野　小泉たつ子

いち早くはるのわたりて来るらし香りそふかきかはぞひのうめ　長野　山本直枝子

あさぼらけかすむ川邊にかげみえてのどかに匂ふうめの一もと　長野　小泉みつじ

春を深み水かさまさりしなみの上にゆら〳〵にほふきしの白梅　長野　山本碁子

をちこちと岸へにさけるしらうめの清き小川にかげそうつろふ　備後　高坂つち子

みなれさをさしてとひくる人おほし梅さきにほふ川そひのやど　東京　渡邊初子

むすふてもかにゝほふらんさく梅の花のしたゆくにはのやり水　東京　渡邊名於子

川のへのうめのはつ花さきしより氷とゝもにかさへながるゝ　本郷　青木たま子

岸のへのかをりこぼせし梅一枝手をりてかもとみづやにほはむ　大阪　山本伊勢子

うす氷とくるみいけの水のおもにかげうつくしく匂ふうめかな　牛込　後藤喜代子

川上にうめさきしよりいかだしの袖もえならぬ香にほふなり　三河　永井さい子

待ちにまちし水際の梅は咲きにけりいざふるさとの母を迎へむ　大阪　船越小仙子

池みづにすがたうつしてさきにけりかはたのそのゝ梅の初はな　東京　松永徳子

うろうつも雪にあそふと見るばかり池のみぎはににほふ梅かな　熊本　日高かす子

けさよりはこゝろしてくめ梅つ川はれのかゞみの曇らぬまでに　麹町　石川蘭子

水のうへをふきわたりたるはる風にかはむかひにもかをる梅哉　山口　水上操子

花やなみ波やはなかとおほゆればいつれを梅とわきてみましや　信濃　田島みよ子

なにはえの絶えぬながれに梅のはな昔ゆかしくにほひけるかな　東京　松本くすゑ子

藍見川きよきなぎさに咲くうめをおのが心にうつしてしかな　岐阜　松岡章子

いろもかも水にうつりて川そひの梅のひともと咲きそめにけり　長野　岡田千穂子

雪のうちにほゝ笑いでてゆくみつの氷れるきしに梅のはなさく　肥後　佐々小琴子

肥後　千々波橘子

かけあさき里の小かはの波のいろににほひあらそふうめの花散
大和　栗山高子

春かせのかよふかはへのうめか香のした行みつに袖やひたさん
埼玉　澤田房子

いかつちの音なす瀧をうけつゝも咲きにほひけるたにあひの梅
埼玉　澤田伸子

老たれと色香はかへししら梅のなかれの清水をかゝみとなして
秩父　澤田榮子

池みつに姿うつしてさきにほふうめのはなこそをとめなりけり
千石富美子

賤か家のうしろをめくるいさゝ川ぬるみそめけり梅のにほひに
伊豫　さゆり

里川のきしの梅か枝にほひけりふしをもしろくうきつしつみつ
伊豫　蕭子

ゆくはるをゝしめとかひないさらひにかつ〳〵散りぬ岸の白梅
三河　榊原きく子

谷川のほとりに匂ふむめのはなみつにうつれるかけのゆかしさ
三河　榊原てる子

ゆくゝ水に匂ひかはしてさとかはのきしの梅か枝いまさかりなり
秋田　古瀬惟子

動かさるたつと思ひてみなそこにひそむとみしは梅のかけかも
秋田　古瀬とよ子

にこりなは深きにほひやなかるらんこゝろしてくめ梅の下みつ
秋田　古瀬りく子

池の面にをとるひこひのひれふれてかけさたまらぬ岸の梅か枝
秋田　三浦きく子

かゝみには誰しも恨あるものを笑みてそよそふきしのしらうめ
秋田　日野ちま子

くむ水のかをりもふかし梅の花あすは木のまをこひわたるらむ

岩代　菅野和子

みなかみの梅はとはてもこほれちる色香くまるゝかと川のいほ
神戸　湖乃潮子

東風吹かはつくしのはてにとふうめは廣く世界に名を流しけり
和歌山　白鷗女史

ぬは玉の暗にもしるき花の香にそてぬらしけりうめをたつねて
名古屋　不破きみ子

池水にいろかうつして梅のはなはるの日かけに咲きにほひけり
埼玉　横田音羽子

難波江の入り江を窓の色つくり朝ことにさくうめをみるかな
埼玉　横田秋子

芹つむと出てみたれは背戸ちかき田な井の水にうめのうつりて
秋田　細矢はる子

梅の花さきそめてよりいけみつのそこをも影のにほはするかな
本郷　小坂みさを子

川のへをふく風さへもかをるなりちかきみなかみ梅やさくらん
淡路　春海玉枝子

春はきぬゑかほ美くしはつゝうめのしつけき池にちりて香かける
備後　高坂たゞ子

ふくかせのうめの稍やわたるらんきよき小川になかるひとひら
福井　今村田鶴子

春あさき野川の水のうすこほりひもとき初めてにほふうめか香
麻布　林艶子

わたし守はるもいとなしかは沿のうめのはつ花さきそめしより
陸前　前田河みさを子

池水にうつるすかたのやさしくもわらひそめけり梅のはつはな
北海道　小山春枝子

汲みあけし水に梅か香移りけりうくひすこよとわれことつてん
兵庫　原田秀子

うめの花なかむることに思ふかなつくしのうみのかくはしの君
陸前 前田河千年

いつのまに春やきにけむ水のへにそへたる梅のかなりそめけり
福井 今村春子

かゝみなす池のつゝみの梅の花にほひもたかくみつにうつらん
岡山 小山松枝子

はる風にふみしみきはのうめの花うつれる水も香ににほふらん
愛知 山田たかの子

しかの浦梅のはなさくさかりにはよせくる浪もかんはしきかな
愛知 竹内しき子

川のへはなへてにそれのはやしかと思ふはかりににほふ梅か香
麻布 林環子

棹させは底にもにほふうめのはな香ややとるらむいけの清水に
福井 岩崎花子

川そひの岸のうめか枝さかりなり下ゆくみつも香ににほふらん
京都 森本秀子

いつのまにはるはきにけり池水にこそめの梅のかけもかたれる
日本橋 牛山素子

若水をむすひあけたるしつくにもうれしや梅のにほひこそすれ
上總 高名とよ子

里川のきよきなかれにかけみえてにほひこほるるうめのひと本
神戸 島川とよ子

いそく身も忘れてしはしなかめいる棹手にゆかししら梅の散る
伊豫 山本千鶴子

いへつとに一枝ゆるせうめのはな流れにちりてたれかめつへき
伊豫 山本壽賀子

ゆくひとなしはしとはかり衣手にきしの白うめ香をそとゝむる
伊豫 山本田鶴子

なり〳〵は瀧のしふきやかゝるらむさしての枝の梅そこほるゝ
伊豫 山本里美子

きぬあらふ小川のみつもかほるまて吹雪のことくうめの花ちる
下谷 椎野秀子

ちりうかふ梅のした水むすふ手のしつくも花のにほひなりけり
本郷 伊藤たけ子

池水にあけくれうつる梅のはなさかりひさしきかけや見るらむ
小石川 三宅芳子

かきそめの料にとくみしわか水ににほひわかちし白うめのはな
神奈川 永島波子

こゝろなきしつか小舟もとゝむらむ河へににほふしらうめの花
神戸 山本松野子

荒れはてししつか伏屋のさゝ池にさかさに匂ふうめのはつはな
横濱 中澤かしよ子

春さむき風をもいとはてかはきしににほひゆかしくさく梅の花
長野 坂野春美子

梅のはな一夜の中にほころひてなかめゆかしきけさのいけの面
羽後 鈴木きさ子

梅の花おのかすかたをみむとてやにはいけ近くひこりさくらむ
肥前 斎藤むら子

行くみつといかなることや語るらむきしへに咲ける白妙のうめ
武藏 田中拾紫子

はるかせに池のさゝなみかんはしくうかへる梅の花のましろき
東京 窪田園子

行水なかゝみとなしてさきにほふ老木のむめのかけのゆたけき
兵庫 高橋まち子

しつかやの軒はにたまるゆきみつにゆかしくかをるうめの一枝
神戸 大橋浪子

にほへなほ月にまかへる梅のはなしたゆく水にさきそめにけり
京都 内本縫子

しつ〳〵とみきはをあゆむやみ鶴のすかた淋しく梅のはなちる　埼玉　戸田折香子

たかために打ちなひくらん梅の花清きすかたをみつにうつして　奈良　天野照子

面影をうつせるみつはあさけれとうめか香ふかく匂ひけるかな　富山　孝子

梅の花そてにあまりてなつかしくしたゆく水も香ににほひけり　埼玉　松野みさを子

雪しもにたゆまぬうめの姿をはうつしてそ見むいけのかゝみに　松山　山崎匡子

いろよりもにほひそいとゝますかゝみ流れもよとむ梅のした水　武蔵　松本まつ子

いさらゐにかけをうつして咲にけりこそめにかをるうめの初花　福井　牧粂子

流れゆくみつにすかたをうつしつゝにほひもたかき梅の一もと　長野　小泉徳子

さきいてゝきよきなかれにうつりつゝかをりそふかき白梅の花

水雷艇

天

ますら雄かみ魂こめつるいかつちに
なとあたふねの砕けさらめや

東京市赤坂區北町四丁目一〇三　松本久壽恵子

地

鳴神のいきほひなしてかあたふねを
うちくたきつるふねはこの舟

熊本市中坪井町七十七番地　日高かず子

人

三河　榊原てる子

わたの舟うちくたきつるいかつちの
ひゝきは高しもろこしの海

甲

福井　牧粂子

忍ひつゝなみをくゝりて心地よくあた艦くたくいかつちのおと

乙

秋田　古瀬惟子

黒かねのふねをもくすと砕けはやいかつちと云ふなを負にけん

松山　田村多豆子

おほ海のそこいかつちの力らにはいつれの船かしつまさるへき

熊本　田代綾子

いかつちの音ひゝかせておほ艦をうみのもくすとなすはこの艇

備前　高坂津知子

日の本にあたなす舟をうちくたきかちときあけて勇むますらを

武蔵　松本まつ子

いかつちのとゝろきわたる唐港いくらの船をうちしつむらむ

羽後　鈴木きさ子

そこひよりたつけむりかとみしものは浪まを走るいかつちの艇

三重　神田みよし子

仇波をうちくたくこそいかつちと名におふ舟のいさをなりけれ

但馬　田尻保代子

波のへのあたのうき城ひとうちにくたきてかへるいかつちの舟

静岡　竹内みつ子

魚となりひとなる船の多くみえてしこえみしをも打くたくらむ

松山　匡子

大君のひかりをそへてわたつみのそこにとゝろくいくさ船かな

高坂たゞ子

あら涙もたちさわくらん恨みある舟をしづめしいかつちのおと

（以下到着順）

奈良　天野照子

霧ふかくあやめもわかぬまよなかに仇船おそふつとめけなけし

松山　上原のふ子

うちいれしなるいかつちの敵か舟くたきしはかり嬉しきはなし

山口　村上操子

この艦にこゝろせなゝむおほ船もふろれはくたく物とこそきけ

東京　渡邊初子

仇のふれくたきつくせし行動のたけくをゝしきいかつちのふれ

東京　渡邊名加子

降しきるふゝきをかしてすゝみ行いかつち艇のいさましきかな

大阪　山本伊勢子

なるかみの水のなかにとゝろきつあたの大艦しつみけるかな

牛込　後藤きよ子

いくはくのめさすあた艦ひとうちといさみてすゝむ我水らい艇

水戸　高村きの子

恐ろしきいさをなりけり山なせる艦をみるまにうちしつめては

本郷　小阪みさを子

ものゝふのこゝろをこめて仇の舟千尋のそこにくたくいかづち

岩代　菅野和子

いさましやなみおしわけて軍艦のむれにつきいる水雷のふれ

薩摩　松原みれ子

のる人のいさをも四方に響きけりあたをしつめし音のたかさに

秋田　三浦きく子

くたかてはやまぬ響の高きかな立つあたなみのやまたなすとも

秋田　日野ちま子

武夫のやたけこゝろに進むらむよにあたなみのやまをうかちて

長野　岡田千穂子

海國のまもりなりけりあた波をうちしつむへきいかつちのふれ

大和　栗山高子

わたつみの神やおとろきましまさんとゝろき渡るいかつちの音

肥後　佐々小琴子

から艦をなみのもくずとなしはてし水雷といふ名こそたかけれ

肥後　佐々有鄰子

水雷の神の名をえしいくさふれうなはらけりてとゝろきわたる

肥後　千々波橋子

うちはなつ玉よりはやき此艦をなとさゝなみと名つけそめけん

大和　栗山倹子

おちかくの山に響のとゝろきていくさのふれをくたくいかつち

埼玉　澤田伸子

はや艦のまたゝくひまにあたふれをうち砕きけむいかつちの音

千石　富美子

いちはやくなみまをはしる雷にいかなるふれもうたれぬそなき

三河　榊原きく子

あたふれをたゝひとうちにうちくたく水雷艇のちからをゝしき

秩父　澤田房子

身は船とゝもに沈めてあたふれをうち貫ぬきぬますらをのたま

秋田　古瀬とよ子

思ひきやたつのみやこもおとろかす此いかつちの艇しありとは

秋田　古瀬りく子

あた波のそこをくゝりていくたひかしこのいくさの艦砕くなり

埼玉　横田秋子

外浦のなみをけたてゝいかつちのくつがへしたるいくさ舟かな

秋田　細矢はる子

とゝろくはみそらにあらて水そこに仇舟くたくいかつちのおと

北海道　小山春枝子

仇艦をくたかてやはとぬはたまの闇夜ぬひゆくいかつちのふれ

ぬはたまの闇にまきれて仇ふねをおそへるときの勇ましきかな　兵庫　原田秀子

いにしへは空にのみとそおもへしを今は波まにいかつちのおと　陸前　前田河みさを子

わたつみの八重の汐路を遙〳〵とわけいかつちの小舟くしくも　福井　今村春子

暗のうちに萬歳のこゑとゝろきぬやまなすあたの艦をくたきて　岡山　小山松枝子

水けむりひけむりもたついくさ船大地にひゝくいかつちのおと　愛知　山田たかの子

雲ゐまてひゝきけるかなあた船をうちしつめたるいかつちの音　愛知　竹田しき子

あたの艦しつみにけりなこの艇に大和男の子のうちのれはこそ　麻布　林環子

いかつちを海のそこにもとゝろかしあたうちくたく舟勇ましき　福井　岩橋花子

二つなき身をもをしまぬますらをか仇の艦をもうちしづめけり　京都　森本秀子

海てらすともしのかけをゝかしつゝいさをたてし水雷のふれ　日本橋　牛山素子

仇のふれ打くたかんと木の葉なす小舟はしらせますら夫ゆくも　上總　高石登代子

かたちこそみふれの中の稚子ならめいさをはたかし水雷のおと　岐阜　松岡章子

砲たんもおそれふるよとうけ流しめさすてきかんあはれ砕けり　淡路　荏海玉枝子

雷のなるおほふれにむかひてはとゝろきわたるあたなみもなし　福井　今村田鶴子

あたの艦くたくいさをもこの艇にのるますらをのこゝろなり逸　麻布　林艶子

雷のおとはくもまのそれならてなみまのあたをうちしなりけり　陸前　前田河千年

和田つ海ふかきたくみにいかつちの天にとゝろくいさを高しも　伊豫　さゆり子

うちよするあた波しつむ水雷にかゝるたくみのをそろしきかな　伊豫　薫子

ますら男か身をもこゝろも打わすれ仇ふれくたく西のうなはら　長野　山本基子

いかつちのいかに鋭とく打わたり浪間にくたくあたのおほふれ　長野　山本直枝子

忍ひつゝあらなみ分けて雄々しくも仇舟をこそうちくたくなれ　長野　小泉みつじ子

水雷のふれはやよりもはやくして仇のおほふれくつかへしける　長野　小泉たつ子

仇舟のそこをうかちてくつかへすそのなるかみの音のはけしさ　三河　永井さい子

魚介も立ちまよふらむみな底を矢を射ることくとゝろこのふれ　大阪　船越小仙子

いさましき水雷艇のしわさこそとつくにまてもとゝろきにけり　東京　松永德子

うなはらのなみおしわけて水雷はあたなる舟をやふりもぞする　長野　小泉德女

水雷のこふれなからもいさましくうみの仇をはかけもとゝめす　下谷　椎野秀子

しこ船をうち沈めてしいさをしはこの水雷のふれにそありける　埼玉　町田勝子

魚形にうきしつみつゝくろかねにあたるとやふるいかつちの舟　加賀　北隆子

乙女子がやさしきこゝろ日に月につみてつくらん水雷のふれ　兵庫　高橋まち子

華族女學校教授 井上頼圀先生撰

初午詣での記

大阪市南區惠美須町二丁目六六三 船越小仙子

天

去年は折からの雪深うして樂しみ待ちし初午を仇に暮しぬ。さるを今年は思ひたのみし甲斐ありて日本晴のお天氣、姉樣けふは是非にと妹共に袖を引かれて立出づ。まだ春めかぬ楊柳二本相並びて淋しく立てるだら〳〵阪を下り、若木の梅の一本逸早く白う咲きたる畦道を過ぎて、やがて志ざす白玉大明神の境内に入れば、今更らに眺めらるゝは立並びたる鳥居、ひまに廻したる玉垣の一つ〳〵に何の何某と墨くろ〴〵に認めて可惜うるはしき紅を汚したる施主の心のいやしさ。あはれ其名は記さずとも神は照覽あるべきに。けふは母上の代參なればとて、拜殿ちかきうがひ場に口漱ぎ、手を洗ふて、何心なく赤の手拭手に取れば、『十八歲女、出征軍人の武運長久を祈る、』と優しき筆の運びのいぢらしさ。やがて神殿ちかく進み畏みながら二拜して妹もろとも家路に辿りつ。さるにても祈願をかけしいぢらしの女は何ものゝ、誰がために武運長久を祈るならむ。年月育てられたる父の身の上を案じてか、たゞしは友白髮の末まで連添ふ良人の無事を賴みてか、さては繋がる縁の唯一人の兄に生きて再び逢ふべき折を願ふてか。あはれ白玉大明神の境内、『十八歲女、出征軍人の武運長久を祈る、』と優しきこの十六字は、この夜の夢にまで入り來りぬ。いかに深く心の底にうつりたりけむ。

地

北海道夕張炭山聖公會　小山春枝子

『奉納正一位稲荷大明神』と筆太に書かれし幟四流、こゝのみは平和の里よと云はぬ計りに、ひら〳〵と春風に飜へされつ。今日を晴れと着飾りし老若男女の幾群れ、うちならす社の太鼓に心ひかれて足並いと輕げに立ち並びし赤き鳥居を往きつ戻りつ。

社前の路傍三四町の間に掲げられし地口行燈の趣向、繪の拙きに似で文句のおかしさ、誰が筆の慰みにや。赤の御飯は恭しく神殿に供へられ、納豆様のわらづと、そこ此所にうづ高し。お稲荷様眷族一同の喜び今宵のみは旅順陥落も物かは。

飯路隣村の農夫一人道連れとなり初午の縁起を説き聞かさる。虚か實か、面白かりき。征露第二年目の初午を迎ひし靜かなる夕。

人

岡山縣御津郡一宮村　小山松枝子

空いとのどかに、幸日曜なれば、例のたれかれかたらひて、初午詣でをと思ひたち、路程近き山越の方へとおもむきぬ。ゆく人歸る人ひきもきらず、老いたるは苦しげに二三歩ゆきては立ちとまり、腰うちのばすなどあはれいたはしや。下りてもなほ十幾丁あり、其間線香賣の少女のつきまとふはうるさしともうるさかりき。さて石段を上れば、左右に大幟あり、屋上には赤青白の旗もみゆ。今しも法衣の僧の讀經すらし、大鼓の音も聞えて、拜殿には數多の善男善女の珠數をもみ、或は板敷へ手をつきて、南無妙法蓮華經と一向に唱ふる聲はげに本尊にも通ずらんか。其前に立ちて鬮筒の四五個打振り居れど音は聞えず、側の堂にては御守か御札かいたゞくならん皆紙切を持ちつゝあり。此方には幾百の御蠟點りて、あたりはましろに其包紙ちりぼへり、又線香のつき〳〵投げこめるが打ち重りて盛に燃え居れり。所々の柱又は鳥居には武運

長久皇軍大捷祈願など記せる紙をはれり。やう〳〵人波をくゞり、種々なる店前を經て、歸りは本街道と定め出づれば、軒を並べし茶店の左右より婦女の出で、客を招く聲かまびすし。其所を過ぐれば路傍にめしいあるは不具なるもの、通ゆく人にむかひぬかづきてあはれを乞ふ、其顏を見れば額は砂にまみれてあはれともあはれなり。停車場まではうちつゞく往來のわづらはしかりつれど、こゝにて人々乘事せしかば、夫よりはいと靜に四方の景色もはれ〴〵しく、折しもふく風はなつかしき香りさへさそひきぬ。

岩代　菅野和子

程遠からぬ福島の里に、鎭座ましますす稲荷の祠は御利德あらたなりと聞きつるまゝ、朝な夕な、出征せる兄上が身上を祈奉りぬ。されば數度の軍に劣らぬ勳功建てしは御神の冥助によるべしなど思ふにつけ、いつかは詣でんと安き日とてはなかりけり。けふは初午とて、御開扉の事にしあれば幸なれ、心ゆく伯母君と、またきに脚絆合羽の扮裝して、ひたすら山又やまの坂路を急ぎに急ぐ、路すがら兄上の例ひきては疲勞も寒さも身に染みず、五里も早過ぎて午前十時に着しは、われながら怪まれけり。社内は參詣の誰彼引きもきらず、二抱もあらむ石の鳥居は、底津岩根に太敷きて嚴めしく、四邊の鉾杉は天雲に屹立ちて神々しく、思はず襟を正しけり。奥殿に打振る鈴の音は祈願成就とひゞきて心もとかし。先づ御喇に身を淸め廣前に武運長久を祈り、神官に御守護乞ひうけ、御神酒いたゞきてまかりぬ。既早宿志もはれ〴〵て、此想ひ滿洲の野に通ひし心地せられて、滑行難く覺かりき。社の左方、人多く集ひければ、立寄るに旅順口要塞の大砲にて、今は我手に落ち、紀念として各神社へ奉納せられしとか、見るさへ戰きぬ。あはれ幾多の將卒、これがため腦まされしかと更に慘し。

たそがれ時、足は棒の如く、歩みは牛の如くゆるく、やう〳〵にして家にかへりつきぬ。燈下に兄上が無事の雁信を得てうれしさのあまり記す。

伊豫　なむせい

けふは初午なれば道後の稲荷神社に詣でずやと母君のゝたまふまゝに、さらばとて支度もそこ〳〵に従妹の美代ちやんを伴ひて一番町停車場より滊車に打乗れば、程遠からぬ道後なれば時のまにして着きにけり。それより公園のかたをさして足を運びつゝ、やがて神社の前に至れば、あたりに菓子店を出し、参詣人はゆくもあり歸るもありてぞろ花かんざし玩弄品などひさぐ商人こゝかしこに露ぞろとひきもきらず、こぞ來りし時よりも一入まさりて賑々しく見受られぬるはげに旅順陥落したる目出度き年なればなるべし。あはれ夥多の老若男女も、おのがじゝ戦捷を祈るの外なかるらん、など思ひつゝ、赤き鳥居をくゞりて種々の供物してまつれる神前に拜しぬ。太皷の音は高く、鈴のねは何となく神さびて、神官のいのる聲いとゆかしや母君は社務所にて御守を受け給へり。さて一同詣で終りたれば、いざや歸らんとて境内を出でんとする折、一寸小間物屋に立寄り、美代ちやんの好みのリボンと花簪を撰び求め、それより序なれば温泉に入浴して、湯ざめのせぬまにと急ぎ我家に歸りぬ。

長野　小泉みつじ子

昨日今日、四方の山々瀞らぎ、霞のうら〳〵と棚引き渡りて、えも云はれぬ心地うらゝかに、伏屋にのみひきこもり居らんも、心なき業なれいでや、あすの初午な幸、かの招魂社へ詣でばやと、親しきたれかれ、そゝのかして、用意もそこ〳〵出で立つ。道すがら、あたりの景色たゝへて、御社に至れば、同じ心の人もいと多く、幾株となき庭前の梅の白き紅きが枝かはしつゝ、咲きみだれたるは、自ら赤き心をなめつるにやあらん、詣ずる人に、それと知らせがほなるも又たなくあはれなり。

御國のために、家をも身をも打忘れ、忠と義とに、戦場の露と消ゆる壯夫も、名は此花の如く馨しく匂ひ渡らんと思ふ折しも、ひゞく遠寺の鐘に、今はとて、友と共に名殘はあとにのこれども、又たの日を約して家にかへりぬ。

名古屋　不破きみ子

春風和らかにかどの柳を訪れ、咲き殘る梅が香を送り、萌出る野邊の千草は綠色を競ひ、四方の山邊と諸共に霞の中につゝまれつゝ、折しもけふは、霞朧きさらぎの、初めつかた、ひのえうまの日にしあれば、里遠からぬ稲荷山さそ賑はふらんと思へば、かど邊に通る人繁く、老たるあり、若きあり、はる〳〵遠きをたどりてにや、草履をうがち、裾なくゝりあげ、いと樂しげに歩むあり。又幼き子等のうれしげに若草入れし籠さげて、母にすがりつゝ返るあり。實に人の心の、のどけく見ゆる。妾幼き頃慈愛深かゝりし祖母君の御袖にすがり詣でしが、いつの昔のゆめと、きえにし祖母君今はなし、されば、祖母にならひ、幼き子等を伴ひて、今一度詣でばやと、思立ものしければ、折柄我軍國の戦捷を祈るとて祈禱を行はれる最中、我同胞の爲にとて、朗讀するないかで空しくかへらるべきと、終るを待ちて家路につけば、暮の根の長き春日の影さへも、はや西山に落ちかゝりぬ。

岐阜 松岡章子

けふは初午の日にてあれば、弟妹共に打連れて、程遠からぬ稲荷の社に詣でんとて出で行きぬ。そもそも初午と申すは、何れの時にや起りたりけん、そは、和銅年間、山城の國伏見の里に、稲荷の神を祭り給ひしを初めにて、靈驗いちじるしきを以て、人々の尊敬あつく、古歌に、衣更着やけふ初午のしるしとて稲荷の杉の元すゑもなし、と、ある如くに、二月にありて詣づる人々は、皆杉をたをりて家に持ち歸り、くさぐさの延喜をつけてまつるなり。また枕の草子に見ゆる如くに、いにしへは、雲の上人をはじめ、賤が伏屋にすもう乙女子までも、幸多からんためにと、詣づる人いと賑はしかりけるとぞ。然るに、維新となりては、やうやうに、祭りもさびて、只、相場人などのみなりしに、今年は、わきて、出征軍人の遺族、我が親、子、我が夫、兄弟の無事生還を祈らんとて、廣からぬ境内は、老幼男女と、赤白黄の、數多き旗とにてうづまりぬ。其多くの人々と鳥居とをぬけくゞり、御社の前に行きつき、ぬかづき拝し、兄のかちどきの聲いや高くいともまめやかに凱旋ましまさん事を祈り、家路をさして歸りぬ。この宮居は、此わたりにたゞ一つの稲荷の神なれば、小さけれどいと美し。

肥後 佐々有鄰子

おのれ、幼きなり、たらちれの父母君に從ひて、伏見の稲荷に詣でしことあり。今もほのかに、賑はひし樣をおぼゆれ、まいて、今年の今日こそは、いかなるらんと、そゞろに思ほゆれてこそ侍る。

諸人のくだればのぼるいなり坂。げに今日は朝まだきより、老若男女のにぎはひいはんかたなし。明治三十八年の二月十二日壬午の正午時に、父母姉弟うちつどひて詣でける。社務所を音なひて、父君のしるべの宮司君の御もとにまゐりけり。おろしの御酒たまはりて、神のみいつを物語なしたまふいとありがたし。

大神のあけのみづ垣ありがたし
ふしてぞながむあけのみづ垣

と聲ほがらかにうたへる老人あり。みるのごとわけし衣を着て、毎日正午時には此の御社に詣來て歌をなん奉るとぞ。参人のふし見の里にすめる、八十あまりの翁なり。愛孫の何某は、昨年召集せられて征露軍人なりと承る。國をおもひ、天皇につくす眞心。愛孫といひ、老翁といひ、大日本人の龜鑑となしてしたはしき事どもなり。枝吹わたる杉の上風は、梅花のかをりゆかしく、神のほぐらにみちみちたり。かすみはれたる空のながめも何となく神さびて、所からいとかうかうし。夕日照かはす杉の坂道を、あまたの人と前後になりて下りをへぬ。あけの鳥居のかたはらの餅ひ鏡をあがなひてありけるが、寳珠をかづきたる狐の土形のやきものをめせめせとそそのかされて、是も今日の家づとの一品にそへぬ。家にかへりつきし時は舊暦九日の月影の西山にかたふくころなりき。

短文

歸郷

土浦 大久保隆子

一條のかすかなる光をたよりに、浮雲の如き望を果さんとして旅の窓に雪螢をあつめ居りにし妾は今しばしの暇をえて慕はしきちゝ母の許に歸るなり。

あまた征邪の矢をはなちて迷子の胸をつらぬきし夕陽は、いつしか筑波相生の松ヶ枝にかくれて、世はやがてぬば玉の暗につゝまれぬと思ふまに、

蹴鞠に似たる十五夜の月は東の山のはにのぼりぬ森や丘や林や皆薄絹を隔てゝ見る如く、戀瀬の淵に玉躍るなり。

今しも橋の袂に彳める妾は、岸にせかるゝ玉琴の如き水の調をきゝて、昔忍ぶの情に堪えざるなりおゝ水中の月、妾は嘗て汝を捕へんとして水に溺れたる猿ありときく、それにしても汝は今妾の心がその猿の愚を追ふに等しきを笑ふなるか。

公報來

北海道　小山春枝

今日は二日の買ひ初めで、未明から市中が騒々しい、風はなしホンのお咒ひ程の雪がちら〳〵と降つた計りですぐ晴れた上天氣、交戰國のお正月とは思はれぬ位の靜さ。

昨日廻り殘したお友達に年賀の名刺を配る積りで家を出掛けたのが午後○時半、五六町程行くと、疳走つた聲をありッ丈ふり絞ッて旅順陷落公報來！帝國萬歲！と夢中になつて、南の方からふれて來る十八九の青年があつた、すると澤山の人間が役塲や郵便局の方へ向つて行列を始めた、この瞬間國民の思想は必ず大珍事！大喜悅！の情に充たされたであらう、市中は忽ち大活氣を帶びて來た。これが公報來！を耳にした十分間後の光景である。

埋火

備後　片山松子

北山おろし吹きあれていとゞすさまじき冬の日は老も若きもおしなべて戀しきものは埋火にこそ。且雪の夜などにて音なう人もなき時、獨り文机に向ひ書をひもとく折などには殊になつかしく、側より怠らず暖を送り其寒さをなぐさむるなど又なく可憐なれ。此埋火よ今はかく一ッの火桶に身をひそめ暫しの後に消え失すれど、若し昔のまゝにいづくかの山にて心ゆくばかり生ひ立たせなば、枝葉も次第に榮え行き千代の齡も保ちつらん、さるを一たび杣人が斧に代られてかくやかれ、小さき火桶に身を終ることそ限なういとしけれ。

別れ

愛媛　高橋茂子

我村學びの園によき師こそえつれと喜ぶ間もなく、嬉しき後の悲

しみは早やまのあたりとなりぬ。もれ聞けば父君は世にあらせられず、立派な後なし給ふ君にしあれば、いつまでもとゝまり給ふ事かなはずとかや。げに是非もなき事にこそ。我身には師とにもあらず、さればとて友ならず、只よき師とあかめしのみにもあらず、君の夫人花子の君こそ我無二の友なりければ、別れにのぞみ何となくお名残りなしきは人の情とばかりにあらで友と別れの我悲しさはや如何ばかりぞ。思へばしばしの交りなりしか。いな互にへたつとも心のみは必ず相別れましとちかはん。しるなは限りなく語れば名残りはよもつきまじ、何にかたとへむ。とは云へ假に心の淋しさ如何ともせんすべなきは皆之定まる浮世のならひとかや。あゝかこつもせんなし、今よりは文の便りをせめてもの我心やりとせん。さらば。

なりなりは訪ひても來ませ別れても
舟や車のある世なりせば

秋の夜

越後　八重子

萩の上風身にしむを覺えぬまでそゞろ興に入りし「ゲーテ」の詩集靜かにとぢて我は椽にたゞずみぬ。いかに淸き夜ならずや。あはれ淋しの夕べならずや。更けたる月はやせて蒼白き面をてらし、虫咽たる虫聲は切々として、哀愁を深からしむ。あゝこの夜多感の我豈に堪んや。さあれかく只獨り明月に向ひ、好める詩を誦みて秋風の調べに和しつゝ、思をゆかしくたのしかりし過去に走する時、それよ堪えがたき懊惱もやまん、由なき煩悶も、吹き拂はれし心地ぞすなる。

あゝかゝる夜に慰められてわづかに露の命を保つにこそ。
松の内の事を記す

肥後　佐々有隣子

明治三十八年は目出度たちかへりぬ。父母を始めみなみな起出て、手あらひ、口そゝぎ、四方八隅の神拜をそなしたりき。はがための餅鏡を神酒神饌にとりそへ、神前に奉りて、直會の宴をひらき、天皇の大御代天長地久なとなへ奉り、征露軍人の武運萬歳をそいのりける。親族のたれかれも今日の四方拜の式もすみぬとて立よりたまひぬれば、源氏のながれをくめるわが家の吉事なる兎のあつものをぞ裝しぬ。夕日のくだちのころにいたれば、笛鼓をならして村の男女數多舞ひかなで、軍人の萬歳をとなへて今様歌をうたひぬ。其詞は

天皇尊の御榮は流たえせす千代八千代
竹の萬歲松のかけ梅の花かざゝして舞
戀しき學び屋

松山　匡子

月日のたつのは早いもの、指折數ふれば、三年の昔である、丁度此頃の樣に、梅は笑び、柳は眉を開く陽氣な時であつた、親しき友と手とりかはして、あのひろびろとした、學びの庭にやつともえ出たばかりのしばふの上で、胡蝶の樣にとひまはつて、あなおとなけなし、と笑はれたこともあつた。或時はテニスをしてゐる友に心もかよふまりのかすかす、なといつてたはむれたこともあつた、業に付ては赤き心に導き給ふ師の君の御惠みを有難しとも思はで、洋服のボタンのはつれてゐるを見て無上におかしく堪かれて笑ひしこともありしよと、今はうつとりとして昔の事をくりかへすのである。あゝかの時いかに浮世の嵐は強くとも、共に學らしな樂りはせじとちかひし親しの友さへ、今はいつこのそらにやゐますらん。げに定めなき浮世なりけりと忍ぶに付ても、戀しきは學びの庭、あなしたはしの師の君よ。

旅順陷落

淡路　春海玉枝

チリンチリン。オヤ號外の聲、赤い帽子に白の服、背には赤字もて祝捷と記されて居る。號外片手に見るさへ勇ましい。我が家に入るや後をも見ずに　チリンチリン。

急いで見れば、旅順陷落の號外。アッと許りにしばし見とれたまゝ無言。あゝ、新年早々陷落とは、大戰爭しての事か、將た敵將の降伏か。何れにしても、出征將士の功績よ。あゝ我等にもまさる喜はどんなであろうか。
姉さん旅順陷落だ、萬歲ッ、ソレ國旗だ、イヤ提灯と大さわぎ。門を出づれば、軒の國旗が春風にヒラヒラと、御國の光を輝かして居る。

原田秀子の君に參らす

日高かず子

古より歌のよみ合せたるは多き例なれど、文の同じきは學淺ければにや見侍らず。今年一月一日、女鑑兼題なる「松の内の事を記す」の君の御文章、いとうるはしう地の位を得たまひぬ、いとめで度事になむ。されど妾が明治三十六年一月二十日兼題文の「松の内日記」とてものしたるに、言葉も心も同じくて、たゞこゝかしこ削りたる處かへたる處のみなる樣誦み侍るはひかめかあらぬか心苦しうこそ。歌にまれ文にまれ、行て見ぬ名所をよみもしかきもしぬるはつれなれど、白川といふも我住む熊本に流るゝ川、阿蘇かれも朝夕立向ふ山なり。さる同じ名の山川君が住み給ふ國にありやなしやは知り侍られども、君は公の拜賀に兄君を送り給ひぬ。妾は良人を送りつる一昨年の元旦くりかへす樣おぼえて、いとなかしうこそ見侍りしか。二日も三日も大方同じ、雨は雪と降りかはりけるよ人の境遇もかはかり似るものかなと驚かれ侍るかな。撰者の君は數多き文なれば、去年おとゝしの拙きをなど御心にとめたまふべき。されど妾は自ら筆とりつればよく覺え侍るなり。まして女鑑にも明らさまに撰まれつるものを、足らぬを添へ餘れるを削りてまことの文となしたまひつる、君が厚き御心ならんかしともおもへど、さらば外に道こそ侍らめ。君もはた敷島の同じ道ゆく友なるを、など打つけにはのたまはぬと、げに恨み侍りけるよ、草紙洗ひしおもとの恥さへ偲ばれて、一筆申すになむ、あしくなとりたまひそ。

原田氏の答こそ聞きたけれ。

短歌

月前陳思　和泉　福原すみれ子

さやかなる月の鏡にむかひても
はつかしからぬ心ともかな

評。古今にてらしてはづかしからぬ作。

折にふれて　京都　竹下季子

亡ひしひとりの兄をおもひいて
もの思ふ窓にあきの蝶とふ

評。情あり、景あり。

知れる人の沙河激戰に於て生死不明となりましゝを聞きければ　東京　山崎女苑

狂ほしくまやみをさくり君をよへは
谷にこたふる夢の一時

岸の松逆風

手をたれて水すくふへく手をあけて
風をうつへき岸の松か枝

評。一は苦悶、一は勇壮。

歸國の途汽車の中にて　下野　井上尙子
われしらずなにゝ笑まるゝゑみならん
　ふるさとちかき隧道の中

評、我しらずの一句、一首の骨子。

途すがら　板橋　田中拾紫
あきのもりこのまの紅葉輿ありと
　うつしゝ君のゑは更になき

評。有望の歯。

遙かに征露の兵を思ひて　播磨　本多宜子
あめのよも雪のあしたもものにやまにおきふしすゝむあはれ武夫

小泉閣次ぬしの近衛騎兵隊に入營せらゝを送りて　長野　山本直枝子
信濃なる御牧がはらのみつき駒つなきもあへぬ今日のわかれ路

祖父君の三十年祭に菊黄白菊といふことを　肥後　德永廣子
なきたまにたむけまつらんわかにはのまかきにさける黄菊白菊

川浪海軍大尉の君の戰死をいたみて父君によみて奉りたる　日高かず子
あた波にくたけし月のおもかけを袖にやとしてしのひますらん

菊黄白菊といふことを　肥後　德永多瑠子
たまゝつる今日のたむけのぬさにせん黄菊白菊さきのさかりを

折にふれて　安藝　田坂環子
君がてにあした理想のほあくろにのそ　みのうみをにひしほのわく

明治三十七年十月七日父の三十年祭に紅葉似錦といふことを　肥後　德永萬壽子
矢はつ嶽いむけのそての錦かとみえしは木々のもみちなりけり

新年山　肥後　坂本隆子
富士の山年のひかりの立そひてすかたけたかき今朝にもある哉

新年山　本所　三坂鏡子
ほの〳〵と年のあけゆく大そらにうごかぬふしの山を見るかな

新年山　東京　大塚里子
大内山日かけのとかにさしそめてみいつあふるゝ年はきにけり

新年山　肥後　內藤富子
富士のねは朝日さしそひ新年のなかめもたかき御代しつかなり

細川侯爵の別家長岡子爵の嗣子陸軍騎兵少尉正五位勳六等功五級長岡護全朝臣は八月三十一日遼陽に於て名譽戰死せられたり遺骨到着せしにより十月九日東京青山墓地に於て神葬執行あるにより舊熊本藩の諸士は同日午後より熊本市内に遙拜所をひらきて祭式ありければ夫と諸共に式場に侍りて　肥後　佐々小夢子
もの〳〵音は天にひゝきていとたかき君が勳功をあふくかしこさ

友を送りて　下野　井上滋子
矢さけひの野にゆく友をみおくりてたゝずむ袖にあしの花散る

野外霜　滋賀　馬淵波子
よもすから狐なきにし野邊みれはゆきかとはかり霜そおきける

田家豐年　愛媛　さゆり子
米たはらつみかされたる竈のうちあるしの笑もあふれける哉

夕時雨　愛媛　かほる子
ものおもふ夕へさひしきむら時雨ふるやの軒にさゝん花のちる

早春鶯　大和　栗山高子
うすかすみひきにし峰も見えなくにはやうくひすの聲そ聞ゆる

初霜　三坂きやう子

咲殘るひともときくのはなの上にはやおきそめぬ野路のはつ霜

新兵を見送りて　長野　岡田千穗子

男子とも世にうまれなは我もけふいくさのにはに出ましものを

新年望山　肥後　村上昌子

あたらしきとしのひかりやそむるらん朝日にはるゝふしの神山

折にふれて　愛媛　高橋茂子

さとせとも會得しかたきをさな兒に母の思ひのいとゝまされる

大和心　長野　小泉德子

つゝとらぬ女なからも國のためあたうつこゝろうちもたゆまし

知人の戰死　三河　榊原てる子

かはりたることはなしとの玉章のかたみとなれる今日そ悲しき

兵士の出征を祝ひて　播磨　本多宜子

外國のつゆときゆともきみのためつくせやつくせ大和ますらを

聞鶯　長野　小泉德子

さく花をたよりてきたるうくひすの聲はかをりてきこゆなりけり

雪似花　同　同

ときはなほはるにはとほき山里に花とも見えてふれるしらゆき

新年山　和歌山　白蘭女史

言ひ出てむことのはもなしほの〳〵と年立けさのふしのかみ山

新年の霧　同　同

はつ日かけまたかすまれとはるめきてしりへのやまに霧のなく

月　富山　白百合

くもりなきみ空の月をあふきつゝ千里のすゑの友をしぞおもふ

朝千鳥　大和　栗山高子

しらみ行いそ山まつに風さえてなみとゝもにもちとりたつなり

畏れ多くも　天皇御製「四海」の御歌を拜して　岩代　菅野和子

すめらきのひろきみめくみかしこみて異國人もなみたくむらん

暮夕　東京　田中拾棠

師の君のみはかに落葉つもり〳〵て三年むかしのふるさとしぬふ

月見待友　京都　森本秀子

こほろきの鳴く音に月もさえ渡る秋の夜ころよひびとの待たるゝ

明治三十七年十一月二十四日米田晃輔翁の一年祭に侍りて　肥後　佐々小琴子

名積米田翁は去年のあさしもと消けん今日そしのはれにける

折にふれて　佐藤かつ子

ものゝふのかすまへられし我つまは何處の里にとしむかふらん

菅家　山梨　標武子

千代かけて香こそ匂へれ梅の花つくしのはてにちりはてぬとも

落葉　長野　田島みよ子

小夜更けて時雨の降ると思ひしは木々の木のはのちるにぞ有ける

煤拂　前橋　竹のふし

煤はきて清めし部屋に一夜ねてはやくもむすふはつはるのゆめ

九月九日　愛媛　薫子

つめ箱にかをりうつして菊の宴千代のしらへをかなてけるかな

紅葉　松原みれ子

さをしかの妻とふ聲もあはれにてもみち散りしく秋のやまさと

父君の二十年の御祭に　肥後　德永萬壽子

二十年は八人まつりて三十年は三人てまつることしかなしも

暮るゝ年　須磨子

神籬いやめてまさんきくもみち四方になかむる今日のまとゐは

きのふといひけふと過してわさならすかこつまに〳〵暮る年哉

船上新年　磐城　三森須磨子

初日影ほほしら高くあふきつゝあゆむかたてにとしのにひふみ

兄の墓　野の露

おくつきにちりくる紅葉うつたかく手向し菊の上にたまれる

陸軍中尉猿木眞壽夫君は十月十二日奉天方面の戰爭

に名譽の負傷を承りて叔母君の御やとに消息まゐらすとて　肥後　佐々有鄰子
玉もよし猿木のきみかたけき名は奈天たかくひゝきぬるかな

歳暮感　肥後　秋吉輝尾子
おしなへて老もわかきもつゝみなくのとかに年をおくる嬉しさ

新年山　福井　岩橋花子
富士の山峯のしらゆきふかくとも春たつけさはかすみこむらん

松下殘菊　標武子
色かへぬ松の木かけに咲くきくは花のいろさへときはなりけり

同窓會にのぞみてよめる　群馬　林廣子
むつひにし同し園生の友とちとかたらふときそたのしかりける

述懷　伊豫　さゆり
人の世のなかははあはれ埋木のはなさくはるにあふよしもかな

新年松　東京　大塚里子
はつ日影外國かけててらすなり千代田のみやのまつの木すゑに

一月一日あまたよみける歌のうち　肥後　澤田春子
君とともに年立つ今朝はまつたけのおなしよはひの梅の花みる

一月一日旅順の陷落を聞て　肥後　德永而有子
新玉の年のはつそらのとかにてかちときあくる今日のうれしさ

出征軍人をおもひやりて　東京　大塚里子
國のためもゆるこゝろの一すちに雪にふすらんやまとますらを

一月一日旅順の降伏を承りて　肥後　德永萬壽子
かちときのこゑもろともに年立ちて御代萬代といはふくにたみ

軍國新年　三河　榊原きく子
家まもり年のはしめをことほきつ軍いかにとしのはるゝかな
のとかなる年迎へれとますらをはいのちさゝけてつくすま心

燕　伊豫　さゆり
つはくらの古巣たつれて賤か家になにを目あてに空のかよひ路

菊花　三河　榊原きく子
百數のみそのに咲るしらきくのかをりたふとくうるはしきかな

新年山　愛媛　高橋茂子
みちわたる年のひかりにおき遠くなかむる山もかけさやかなり

慰問袋といふものを調製して出征軍人に贈るとき　肥後　右田照子
大御代にまことつくしの軍人こゝろのにしきしたはしきかな

明治卅七年九月二十八日筑前國二日市の武藏の温泉に入湯して　肥後　佐々小琴子
病はみなあらひなかしてかみのもろ武藏の温泉こゝろすゝしき

傷病軍人の病衣をぬひつゝ　津　神田みよし子
かひもなきたをやめなれはこの衣をせめて心をこめてぬはまし

風前紅葉　肥後　佐々有鄰子
秋ふかき峰の紅葉はくれなゐにかぜまちかほのにしきいろこき

新年山　陸前　前田河千年
新玉のとしの初日にきみか代のめくみあふかぬやまなかるらん

艦上月　秋田　古瀬淮子
今日もまた時雨とゝもに遠近のやまめくりしてわれはきにけり

紅葉　東京　中村たみ子
ゆくりなくつきにうかれて立田川水にうつろふもみちみしかな

いと寒き日出征軍人をしのびて　三河　榊原てる子
この上にいくへ寒さのまさるらんみいくさ人そをもひやらるゝ

待春　三河　榊原てる子
なまくさき世の波風もしつまりてのとけき春のまたれけるかな

征人に寄する　宮氏　孝子
夜な〳〵につゝをまくらのうたゝねは我か古里の夢見るらむ

元日によめる　愛媛　高橋茂子
わかみつをすゝりにうけて歌かゝむ御題の山をのぞみなからに

旅順陷落を新年早々にきゝて

戦捷のたよりうれしもあら玉のさらでもいはふとしのはしめに

年の首戦地の友に　北海道　小山春枝

御代いはふ砲の響きにちからありて露兵はおちぬ旅順は落ちぬ

皇軍全勝　長野　山本民年子

はるかなる大海原のにしのくににかゝやきわたる日の御はた哉

征露の終局を祈りて

仇國とつもろうらみもふろ雪のとけてのとけきときそまたるゝ

負傷兵士に　神戸　今西みさを子

國の爲いたてはよしや身は臥せどまつこそ仰け立てしいさをゝ

月夜遠征を思ふ　三河　榊原菊子

冬のつきとほき異郷もてらすらむたゝしのはるゝまんしゆうか原

今様

あはれ里の子　北海道　小山春枝

敵の刄に兄逝くと　涙うかめし里の子が
旅順落ちぬと聞し時　萬歳謡ふ聲細し

初冬堀　松山　山崎匡子

游ぎし鯉のかけ消えて　木の葉交りの時雨ふる
よする水浪音たかく　浮草渡る風寒し

秋の山家　甲斐　武子

なれぬ山路にふみ迷ひ　小川の邊に月まてば
峰のあらしは靜まりて　遠音にひゞく鹿のこゑ

旅順陷落　福井　岩橋花子

幾百萬のわが兵が　血を流しけん海陸に
敵のたのみしかの港　露ちりはてゝ日はたかし

旅順陷落　岩代　菅野和子

東の空は雲はれて　昇る初日のうら〳〵と
惠みの光みつるとき　なびかぬあたやなかるらむ

秋の田舍　武子

門田の稻もみのりけり　いくさも最早かちにけり
やかてかへらん背の君に　さゝけまつらん新しなり

旅順陷落前の光景　前橋　竹のふし

かこみとくへきすへもなく　はなつ矢玉はやつきて
旭のかけにあはされは　あれは露の身こほらなん

新體詩

奈良八景　本郷　西岡古代子

春の光のほの〳〵と　かをるも床し八重櫻
けふ九重の青丹よし　奈良の都の跡いづら。
跡なき雲の消えはてゝ　あはれはかなき人の世を
今も昔をそのまゝに　見るもたふとし八の景。
にぬりおばしま雨晴れし　南圓堂の藤の花
長き日影をすぎがてに　見るも床しやふさ〳〵と
玉の小柳枝たれて　靜雅にふけし佐保の川

音なき水にあこがれて　螢ちりかふ影すゞし。
光さやけき秋の月　影をやどせば猿澤の
池、空明にますかゞみ　むかふ心にくもりなし。
夕つく日影たゆたへば　雲の三笠ぞうつくしき
くまなくさえし晩翠の　み空を高う鳥も見ゆ。
春日の杜は神さびて　安らにねむる鹿の群
あしとくすぐる夕立に　繪にも似たるか雲井坂。
轟橋の行人は　三人五人うちつれて
平和に酔へる大佛の　鐘一つ〳〵にうすれゆく

麹町　石川薫子

美しき人の面影

村の茂兵衛の愛嬢　此年十六夜月の眉
物新たまる新年に　樂しき一人の友を得つ。
今し小川に立出でゝ　いとしの君が衣すゝぎ
春あたゝかき香風の　岸の梅花をさそふ時。
白き花片ひら〳〵〳〵　朱唇のあたりかすむ時
笑みの靨の刻まれぬ　其ほゝ笑みそもや何。

前橋　ひろ子

豊年

秋も半は早やすぎて、　千代田の稲は重たけに、
かしらなさけてこがれ色、　豊年とこそ見えにけれ、
うれしさ面にあふれ出て、　老も若きも祝ふなり、

秋夜出征中の兄君をしたひて

肥後　徳永廣子

夜なよなてらす月影に、　むかしの秋をしのぶれは、
庭の木の葉をつみとりて。　柴笛ふきてとも〳〵に、
むつれあそひし兄君は、　今は荒野の草まくら、
耳をつんさく銃の音、　故郷おもふひまやなき、

遼陽陥落を祝ひて

肥後　千知波橘子

ひろき野原におく露の、　ひかりは玉をあさむけと、
かゞやきわたる日影には、　もろくも消てちるならひ、
大空たかくまひあがり、　上みぬ鷲を一矢にて、
うち落したるますらをが、　名譽のほとそいさましき、

出征中の夫君の夢を見て

肥後　徳永多瑠子

祝へや君は目出度も、　かちときあけてかへりしと、
よろこふまさへ木からしに、　うれしき夢ははやさめぬ、
枕にちかくなくむしに、　いとさひしさまさりけり、
まことなりせはいさよく、　かちときあけてかへりませ、

ある夜亡弟をしのひて

石狩　かつら子

われ子寶のなきゆゑに、　わか家つきはおとここの、
慶五郎もてつかせんと、　いまたなさなきころよりそ、
よろつに意加へつゝ、　育みひたし學び舎の、
數にいれしにかきかそふ、　その七年の春なりき。
彌生の空もすき去りて、　夏しも來れは瑞枝さす、
歌の庭に幾千もと、　咲たる中に一しほの、

色香高しと世の人の、
わか家嗣の花にして、
月かけ清き秋の夜も、
雪ふりつもる冬の夜も、
年月かされ今はしも、
我もうれしきこゝろより、
せんは口をしそれよりも、
身にうけさせて花の香の、
はる〳〵遠きみやこ路に、
六とせ昔しの春なりき。
いともしたしき名は武、
内務省てふ官房に、
弟は更なりわれさへも、
つとめはけみてひと度は、
歸り來りてはらからと、
まちつるものをいかなれは、
雁の便りに聞しかは、
心も空にみたれつゝ、
枯野の芦の面やせて、
誠にふかき兄上の、
こゝろの花もいたつきの、
實をも結はすわりなくも、
ひとへにゆるし玉はれと、
けにことわさにいふことく、
まゝならぬこそ浮世なれ。
老のたのしみ是のみと、
漸く咲きしそのはなも、
まさに枯なん冬木立、
くすりをすゝめあるはまた、
醫はやすなるなてし子は、
うるはしき實を結はんと。
まなひの窓にふみよませ、
火桶によりて文かゝせ、
十余り八とせとなりければ、
せまけき里の埋れ木に、
あつまの空の朝日かけ、
いよ〳〵高く咲せんと、
旅立せしはあはれ〳〵、
その身の幸は都へに、
白仁の君の恵みにて、
つとむる身とそ成にける。
こよなき事と喜ひぬ。
錦まとひて故郷に、
むつみ語らんそれのみと、
たゝかりそめのいたつきと、
都のかたを打なかめ、
うれたみ思ふ折からに、
歸り來れるわかいろと、
情の露に咲そめし、
あらしにちらん身となりて、
わか家に歸るはつかしさ、
涙なからにかこちけり。
月にむら雲花に風、
千々に心をくたきつゝ、
朝な夕なにやしなひて、
うしや實もなくいたつらに、
とはいひなからくさ〳〵の、
草木の芽す春の日に、
野邊に遊ひて氣をはらし、
こゝろの儘にゆるせしか、
いまは床によこたはり、
窓にとひ來る燕の、
病いよ〳〵はけしくて、
此世の名殘夕日かけ、
日の若みやにたひ立ぬ。
よるへ渚の捨小舟、
ともに消んとおもひしを、
いそしみはけみしかひありて、
杖よはしらと行末の、
みとり子なきをゆりなり。
みては弟をおもふなり。
見ては弟をおもふなり。
その身のこのむ何事も、
たゝいたつきのおもりゆき、
床にいけたる花なかめ、
啼音をきゝて日をふれと、
五月の二十日その日をは、
かけうすらきて久かたの、
跡にのこりしわか身こそ、
綱手はきれてたのみなく、
おもひかへしてなりはひに、
いまはたのしき身となれと、
老い身のよるわか松の、
同し若葉の學友を、
同し若葉の人たちを、

我が將士

海と陸とのへたてなく、
進みに進み一時も、
敵に向へは忽ちに、
身をも家をも打忘れ、
海のもくつと身をなせし、
流石名を得し敵將も、
降を乞ひしは是非もなき。
敵のたのみし旗艦をも、

淡路　森海玉枝子

忠義に凝れる我か軍の、
やすけき夢をむすひえす、
砲火を交へ劍をぬき、
或は荒野の露と消え、
甲斐こそ今はあたならて
旗をはまきて軍門に、
東洋一の要港と、
わか手に入れしけなけさよ。

都鄙新年

都もひなもおしなへて、
ちまたに遊ふ少女子の
男の子はそとに凧あけて、
おのかさま〳〵むつひつゝ、

群馬　林廣子

うれしき年を迎へけり、
追羽根姿美しや。
寒き風をも笑ましけに、
皆もろ共に祝ふなり。

師走の空

しはすの空の雪もよひ、
燈小暗き軒さきに、
笑をふくみてねむり居ぬ、
ちふさふくめる妻みてか、
手をとるかひもなきいてゝ、
そらには星のかけもなく、

前橋

竹のふし

街に人のかけもなく、
わらをしとれに幼子か、
情の母かふところに、
あはれいとしのうなゐよと、
こゝの寂寞をやふりたり、
赤城おろしの雪さへましりて、

愛媛 高橋茂子

雪のあした

枯木に花とめてんより、
學びに通ふ少女等の、
冷をもしのきなかくに、
たとる姿のいちらしさ、
雪のあしたの思ひこそ、
さてもかよわき身にてよく、
ゆきゝになやむ畑の道、
けにたのもしききはみなり、

●投稿募集

兼題

	歌	文
三月	澤若草、馬上春風	雛祭り
四月	菫、電車	戰死せる軍人の未亡人に贈る
五月	夜聽蛙、筍	落花を惜む
六月	百合、松下禪尼	綠陰に琴を彈きて

随意 短文、短歌、今様、新體詩

●投稿定規

一女子は何人にても投稿する事を得
一用紙は文章及新體詩は半紙、和歌今様は半紙半裁又は端書を用ふべし
一題異なるものは必ず用紙を別にし、二葉に渉るものは必ず紙捻にて綴り置くべし
一題目の下には必ず住所姓名を明記すべし
一文字は必ず楷書にて句讀點を施し鮮明に認むべし
一文章は一行十五字詰にて兼題ものは四十行以内短文は二十行以内に限る新體詩も亦廿句以内の事
一兼題文章及短文今様新體詩等總て一人一篇づゝに限る
一兼題和歌は一題に付一人一首、短歌は一人二首に限る、但上下句中二音の漢字三字を入れ他は悉く平假名にて認むべし
一投稿宛名は國光社女鑑編輯局とすべし
一原稿〆切期日は雜誌發行の廿日前即毎回前月十日迄とす
一〆切期日に後れたる兼題は總て其撰に入れず但短文短歌今様新體詩は次號に掲載すべし
一右の規定に違ひたるものは總て採用せず
兼題當撰者には文は天一圓、地五十錢、人三十錢、歌は其半數に當る計算を以て代價相當の書籍を呈す

○歌御會始

宮中新年歌御會始めは例年一月十八日に行はせられしを本年は同日軍旗親授式のあらせられたればにや越て十九日に行はせられたり御當日午前九時ころより内事課員御歌所員等鳳凰の間に出仕し　玉座及び皇后陛下の御座、几案の配置、御廂列席者の位地等諸般の準備を整頓し軈て參列の宮内官の人々幷に特に御召を蒙りたる佐々木樞密顧問官、題者點者高崎御歌所長、讀師高辻修長、講師入江爲守、發聲綾小路有良、講頌大原重朝、同大宮以季、同西五辻文仲、同金子有卿、奉行竹屋光昭、同植松有徑諸氏御定まりの席に着かれ御廂には讀師控長岡護美、近藤御歌所主事、本居、坂兩寄人、水野、長谷、小杉、大口、千葉各參候、遠山、加藤、兩錄事、幷に拜觀許可の唐橋從三位（在正）藤枝正四位（雅之）小原從五位（適）下條海軍主計大監、藏田、佐伯兩掌典東宮陪覽教授（鐵麿）香川山階宮家令等參集同十時　天皇陛下には徳大寺侍從長田中宮内大臣以下を又　皇后陛下には山内皇后宮亮、高倉典侍、姉小路權典侍、小池掌侍、津守權掌侍、西命婦等を從へさせられ、出御諸員起立最敬禮中に玉座、御座に着かせられ御式となり高辻讀師は　御前に向ひ懷紙を引き延ばし御淺硯蓋の上に置き入江講師先づ讀み上げ



綾小路發聲、大原講頌以下各講頌の諸氏は選歌より上臈への順序に依り講じ畢り、皇太子妃殿下 皇太子殿下の御歌を各二反づゝ講じ讀師は 皇后陛下の御前に進み御懷紙を拜受し講じ奉る事三反畢て返上し讀師は更に 天皇陛下の御前に進み御懷紙を拜受し講師の方に向け御硯蓋の上に置く此時 皇后陛下を始め奉り參列員一同起立講師は先づ一ト通り 御製を讀み上げ發聲上五文字を讀み講頌の諸氏等同音に朗吟し朗々講じ奉る事五反、講師より御懷紙を返上し奉り此に當日の御式を終らせられたり 兩陛下には各供奉員扈從の上入御あらせらる參列員及諸役には別殿に於て酒饌を賜りたり 御製、御歌、並に御前披講の參列の方々の歌及び選歌左の如し

新年山

御製

ふしのねに
にほふ朝日も
かすむまて
年たつ空の
のとかなる哉

皇后宮御歌

鶴の羽の
かさねていはふ
年立ちて
山さへゑめる
心地こそすれ

東宮御歌

あらたまの年のはしめに
あふけ人君かみいつの
いや高のやま

東宮妃御歌

ふしのねをいよ／＼高く
仰くかなあらたまりたる
年のひかりに

海軍大將大勳位功四級　威仁　親王

もろこしの山てふ山に日のみはた
立てゝやいはふ年のはしめを

勳一等　慰　子

あらたまのことしはことに日のもとの
山はたかくも仰かれにけり

侍從長從一位勳一等侯爵臣　藤原朝臣實則　上

大御代にこかね花さくみちのくの
山もゆたかに年立ちにけり

宮内大臣從二位勳一等子爵臣　藤原朝臣光顯　上

山の名の黃金白銀おほ君の
御手に入りけりとしのはしめに

樞密顧問官正二位勳一等伯爵臣　源　朝臣高行　上

あふきみる天のかく山のとかにも
初日にほひて年立ちにけり

樞密顧問官兼御歌所長正三位勳一等男爵臣　藤原朝臣正風　上

題者點者

もゝしきの大内山はとよむらん
年のほきことかちときのこゑ

讀　師　宮中顧問官從二位勳二等子爵臣　菅原朝臣修長　上

やま〳〵はなほ雪ふかしあらたまの
年はいつくをこえてきつらむ

講　頌　正三位伯爵臣　源　朝臣重朝　上

大御代とともにうこかぬ不二のねを
まつこそ仰け年のはしめに

發　聲　御歌所參候侍從正三位勳五等子爵臣　源　朝臣有良　上

いさましくしめしとりての山々に
みいくさ人は年迎ふらむ

奉　行　御歌所參候掌典正三位勳五等子爵臣　藤原朝臣光昭　上

君かよをやちよとうたふ國民に
山もこたへて年立ちにけり

講　頌　從三位子爵臣　藤原朝臣以季　上

のとかなる年やたつらむ山々に
つもれる雪も花とみえけり

講　師　正四位子爵臣　藤原朝臣爲守　上

とつくにの空もへたてす照すらむ
大内山のとしのはつ日は

講頌　正四位男爵臣　源朝臣文仲上

こゝろにもかゝる雲なく山はれて
御代ゆたかなる年立ちにけり

講頌　正四位男爵臣　物部連有卿上

あた浪はなきしみなとの山たかく
御旗なびきて年たちにけり

奉行　御歌所参候従七位勲七等臣　源朝臣有經上

霜かれし野すゑの山もなにとなく
のとかにみえて年たちにけり

撰歌　沖縄縣知事正四位勲二等男爵臣　源朝臣繁上

かちときの聲にうこかぬ山はあらし
世は静かなる年のはしめに

権典侍正四位　藤原文子上

いくさ人いさをゝつみし山の上に
年のはつ日やさしわたるらん

福岡縣士族従八位勲八等　吉田篤上

世をなへてにきはふ民のかまと山
けふりのとかに年たちにけり

あらたまの年立つ杣か斧はしめ
一日にきはふ山のおくかな

愛知縣平民　鈴木源太郎上

つはものにめし出されしわかせこは
いつこの山に年迎ふらん

山梨縣平民陸軍歩兵二等卒大須賀庄次妻　まつ江上

ためしなき年を迎へてあふくかな
おほうち山のたかきみいつを

富山縣平民　田村直喜上

○詠進歌數

歌御會始に詠進は年々數増し居れるか本年詠進の懐紙竪詠草の總數左の如し

皇族御詠進	枚
懐紙	七
計	七
臣民詠進懐紙	
御前披講	二一
高等官	四
華族及有位者	三五
女官	一七
御歌所	一八
神宮職員	一八
華族女學校	二二
向陽會	二二
計	一五七
臣民詠進竪詠草	
高等官	三四七
華族及有位者	四[illegible]

華族女學校	六一
女子高等師範學校	一三三
京都高等女學校	八五
向陽會	九
大日本歌道奬勵會	一五二八
大日本女學會	三九八
國學院	二七
東京府	七六〇
京都府	五〇七
大阪府	五三一
神奈川縣	一四七
兵庫縣	二九九
長崎縣	二三三
新潟縣	二九四
埼玉縣	二〇四
群馬縣	一六五
千葉縣	二四九
茨城縣	二八七
栃木縣	九五
奈良縣	一三六
三重縣	四九一
愛知縣	一一三二
靜岡縣	二四九
山梨縣	二三五
滋賀縣	三〇一
岐阜縣	三九七
長野縣	六七八
宮城縣	二四〇
福島縣	三〇一
岩手縣	一五八
青森縣	一九四
山形縣	三八一
秋田縣	三五五
福井縣	一〇二
石川縣	一四〇
富山縣	一四四
鳥取縣	六一
島根縣	二二七
岡山縣	二五八
廣島縣	二七四
山口縣	三七〇
和歌山縣	一三四
德島縣	一一七
香川縣	一一九
愛媛縣	一六一
高知縣	六八
福岡縣	二二八
大分縣	一六〇
佐賀縣	一三七
熊本縣	五〇六
宮崎縣	六七
鹿兒島縣	二七六
沖繩縣	三一
北海道	一八〇
臺灣	三四
戰地	一六四
米國在住者	四
獨國同	一
清國同	六
韓國同	四
計	一五五〇九
外に長歌	五
違式	四八〇
期日後到着	七四
計	五五九
總計	一六、二三二

○名譽の預選者

歌御會始に詠進せし一萬六千二百三十二首の中預選となり御前披講の光榮を擔ひたる者は左の六氏にして御式終ると同時に歌御會始奉行より夫々へ通牒せられたりと

沖繩縣	男爵 奈良原繁
宮城内	小倉文子
福岡市藥研町	吉田賢
愛知縣尾張國知多郡大高町	鈴木源太郎
山梨縣甲斐國東八代郡境川村	大須賀まつ江
富山縣越中國婦負郡東呉羽村大字五福	田村直喜

○淺草婦人法話會の奉公　淺草本願寺内に設けある淺草婦人法話會にては毎年春秋二季に催す大會を遠慮し其筋に照會したる結果右費用を以て恤兵部に封筒十萬枚を贈ることに決し尚ほ士氣振興の意を含

める會員自製の和歌を袋の表面に印刷する筈にて目下和歌の蒐集中なるよし十六日迄に集りたる分は左の如くなりといふ

朝日さす御旗の風に露ちりて
　さわぐ草木も打ちなびきけり　會長 岩倉 校子

御佛に身の行末をまかせ置て
　つくせますらを君か御ために　三條 治子

武士よ家なおもひそなみなとて
　力の限りたすけさらめや　九條 惠子

勇ましきわか旗風にもろこしの
　野邊のしこ草なびきふすらん　五島 善子

木がらしの寒き夜すからたえずく
　夢にそ浮ふ滿洲の野邊　酒井 夏子

ことあればこかれもたまも何かせん
　みいくさ人そたからなりける　貝塚 鏐子

仇なみなうちたひらけてかちときの
　こゑをあけつゝかへる日をまつ　中山 幸子

○愛國婦人會祝捷會

愛國婦人會にては十日午後二時より牛ケ淵公園なる同會に於て新年互禮會を兼ね戰捷祝賀會を開きたり當日は總裁閑院宮妃殿下を始め名譽會員なる東伏見、梨本、久邇、各宮殿下御臨場あらせられ會長岩倉公爵夫人を始め理事近衛九條、毛利、島津の各公爵夫人大山鍋島各侯爵夫人谷子爵夫人及當日の來賓東郷大將上村中將及各參謀長其他評議員二百餘名一同撮影をなしたる後樓上に於て式を行ひ總裁殿下の令旨會長岩倉公爵夫人久子の答辭あり東郷大將上村中將に各々一個の花束を贈り大將よりは謝辭を述べ是れにて式を了り洋食の饗應ありたり

○激浪中の看護婦

過日病院船御吉丸にて歸國し昨日赤十字社に歸來せる船客の談を聞くに同船は舊臘二十八日ダルニー出發傷病兵を滿載して歸航の途に就り航行約一晝夜にして天候俄かに險惡となり疾風凛乎として水面を吹き雨雪交々加はり怒濤山の如く起りて甲板を洗ひ帆裂け前檣折れ船室内の食器硯、硝子、尿器等悉く破壞するに至り傷病者は生氣なく嘔吐苦悶し救護員を呼んで救を求む狀轉た憫なり此際に當りて幾多の看護婦は纖弱の身を以て波なす汚物の裡に傷病者に侍し船暈の爲め終日絕食し或は轉倒吐血するも倘ほ苦痛を忍びて終始之が看護に任じ規律を嚴守して寸毫も怨嗟を唱へざりしは

實に奇特と云ふべく市井看護の以て龜鑑となすに足るものあり

○女學生の理想　近來地方の各高等女學校にては女學生の理想を試めすこと大いに流行し始めたるが此程石川縣高等女學校第四學年生徒に對つて「性行、學藝、地位」等に關する問題を出したる中全生徒百〇七名の中如上の將來の地位と題する問題に對して「良妻賢母となりて女子の本分をつくしたし」と答へしもの二十二名「家計に困難なく圓滿なる家庭を作り度し」と答へしもの二十一名「中等以上の身分になり度し」九名「家族健全に相和すること、教育界に身を委ね度し」以上いづれも七名づゝにて他は各思ひ〳〵の人樣々の理想なる中に獨身で山の奥に引き込み度いといふもの、軍人の妻となり度いといふもの、醫師の妻となり度いといふものいづれも一名なりしと

○東京高等女學校の祝捷　棚橋絢子女史の管理せる同校にては十九日祝捷會を開き上村中將に請ひて一場の講話をなせり中將は演壇に立ちて開戰以來の戰況を極めて簡單に述べ最後に特に女生徒に對して『諸孃の父兄及び親戚の中には必ず海陸軍に從ひて功績を立てつゝある者あらん而して戰は未だ央なり諸孃は宜しく身を奉ずるに素にして他日の凱旋を待つべし』と云ひ尙ほ『己れ六歳の折慈母を喪ひ前途の方針に窮せしに幸に一祖母の存するありて今より萬事我指揮する儘なれと諭されしより專心其敎に從ひ遂に今日あるを致せり諸孃も校長敎員の敎に從ひて背かずば必ず良妻賢母となることを得ん』とて茲に壇を下り次に校長の祝辭、生徒總代の祝文朗讀、唱歌等にて靜肅に其式を終りぬ

○感ずべき少女　鹿兒島市長田町堀の内馬場通に中村新吾氏といへば鄕黨にても五本の指に數へらるる人物にて過る丁丑の戰亂には薩軍に投じて右足に傷き終に切斷して其後ち少く閑散の地に身を委ね去る十七年造士館の再興さるゝや擧られて舍監となり令望ありしが勤續數年にして退職し家産を以て貧し

からず渡世し居りしに一子直已氏長ずるに及びて種種の事に失敗し終に邸宅より家產を擧げて人手に渡し哀れ其日も凌ぎ兼るにぞ直已氏は或公衙に奉仕る身となり辛くも兩親及び妻と妹とを養ひ居る內今より七年前に父は病死し二年を經て母亦病んで逝き續いて妹三人も遠逝り打ち續く災難に今は二進も三進も行ずなり住ふ家さへ思ふに任せず漸くのこと鹽屋村に小かなる家の一室を借て殘れる家具を賣代なしては果なき炊煙を立て居るを妹のイチ子(十九)は見るに見兼ねて兄の直已夫婦に思の丈を明し許を得て傳手を求め洲崎なる罐詰製造所に工女となりしは昨年一月の頃なりしが當時は殆ど糊口の途なきこと丶てイチ子は骨を粉にし身を碎きて朝未起より夜半に至るまで只專に働きつ丶得たる賃錢は一文たりとも其身に付けず家事を助けて兄夫婦に悌道至らざるなきものから自然とその工女連の評判となり感心な娘よとの噂高まりしにぞ所主島津久喜氏之を聞きイチ子に就て事の次第を取糺したるに件の始末の判明しより太く同情を寄せ早速直已氏を呼びて工場の監督と爲したれば今は兄妹の得る賃金にて其日を裕に送るより這は全くイチ子の忠實々々しき働きの天に通じたる報應なれ感心な娘よとの評判は愈々高まり聞く人皆な殊勝なものと稱へ居る由聞だに嬉しき美談にぞある

○女子宗敎學會

這回原田秀泰氏の首唱設立したる同會の趣旨書は左の如し來る二月中每日曜日を以て神田錦町女子商業學校に於て開演する由

日々に新にして又日に新なる我邦文明の潮流は、今や漸く物質的劣位を脫却して、精神的優位に趨進し來たれり。是に於てか爰に一度一部の人に依りて高閣に束ね去られんとしたる宗敎も、今は皆く人生には必ず缺くべからざる者なることを深く確認せらる丶に至れり。然り宗敎は實に人性が稟有せる最深最奧の要求にして、又精神的生活の最後の慰撫者、將た督勵者たり。然も奈何せん其の理極めて幽玄なるを以て、其の眞意を捕捉すること甚だ難く、爲に往々、人をして無限の煩悶苦惱を懷かしむるあるを。矧んや戰時、人心宗敎を求むること極めて急なる今日に於てをや。

惟ふに宗教や其の數啻に百のみならず、優劣高下、種類萬差、隨ひて自他の爲に寧ろ不幸を來たすが如き者も亦甚だ尠からず。然り而して此等各宗教の價値を判定し、眞相を發揮し、以てをのづから人をして最高圓滿の宗教に至ら令むる者は、實に宗教學的智識此者を措きて又他に求むべからざるなり。

勿論、宗教に關する科學哲學の盛なる今日、高等專門の學校に在りては、往々其れが講座を設け、男子は多少其の恩惠に浴しつゝありと雖も、彼の其の資性尤も宗教心に富める處の女子に至りては、獨り未だ全く聽講の自由を有せず。將た目下、日夕公開せられつゝある處の夫の宗教上の幾多の講演も、多くは智的方面の疑問を全然蔑視せる者か、然らずんば男女同席の講演にして、前者は教育ある者に向ひて不滿足の感を懷かしめ、後者は女子をして出席聽講するに躊躇せしむる者あり。是れ洵に女子、就中教育ある婦人に於て尤も遺憾とする處にあらずや。

是れ吾人が身の不肖を省みず、茲に斯會を立て、以て特に女子に限りて、公に宗教の學術的講演を開かんとする所以なり。

冀くは江湖の諸姉、吾人が意の在る處を諒として、誓ひて來聽あらんことを。

明治三十八年一月一日

女子宗教學會　創立者

主幹　原田秀泰

贊助員（姓名イロハ順）

文科大學教授　文學博士　井上哲次郎
哲學館大學長　文學博士　井上圓了
哲學館大學講師　近角常觀
女子高等師範學校教授　萩野仲三郎
東京高等女學校教頭　小川銀次郎
愛住女學校長　小貝貞子
東洋女學校創立員　和田鼎
醫科大學教授　醫學博士　片山國嘉
元哲學館大學講師　宗教學專攻　加藤玄智
女子商業學校主幹　成女學校幹事　嘉悅孝子
早稻田大學講師　吉田賢龍
東京高等女學校長　棚橋絢子
東京高等女學校創立者　棚橋一郎
元華族女學校教授　文學博士　南條文雄

文學博士 東洋女學校長　村上專精
東洋女學校創立員　村上龍英
在大學院宗教學專攻　内田融
日本女子美術學校創立者 淑德女學校長　黑田眞洞
文科大學講師 文學博士　前田慈雲
文科大學講師 文學博士　松本文三郎
日本女子大學講師 文學博士　松本亦太郎
元第一第二女子技藝學校長　寺田勇吉
跡見女學校長　跡見花蹊
哲學館大學講師　齋藤唯信
女子美術學校長　佐藤靜子
三輪田高等女學校長　三輪田眞佐子
三輪田高等女學校教頭　三輪田元道
女子文藝學舍長　島地默雷
女子高等師範學校教授　下田次郎

○教育上日露比較

日露戰爭の開始されてより日捷露敗の事實は明白に世界に公示されたり之れに關しては種々なる方面より其の原因を論究せられつゝあるが多くは教育の普及を以て首原因となすものゝ如し今ま教育上より日露の比較を調査するに其の國土面積に於ては露國は日本の約五十三倍なれども人口に於ては約二倍六に當り一方里内に住する人口は露國は八十九人なれど日本は千七百九十九人にして彼れは我の二十分の一に過ぎず以上は國土人口の比較なれども教育上に於ては小學校數は露國は人口千六百七十七人に付き一校に當れども日本は千七百九十二人に付き一校の割合なり露國は十九方里毎に一校を有すれども日本は一方里毎に一校を有す一校の教員數は露國は平均二人なれども日本は四人なり一校の兒童數は露國は五十三人なれども日本は百八十九人なり日本の教員は平均一人にて四十八人の兒童を教へ露國の教員は二十六人を教ふ經費は一校に付き露國は平均五百二十八圓なれども日本は千百六十圓にして兒童一人宛は露國は九圓八十錢にして日本は六圓十三錢なり女子の就學は日本は男五十六人に對して四十四人の割合なれども彼は男七十五人に對して二十五人の割合即

ち男の三分の一なり以上の統計に依りて教育普及の程度が日本の露國に優ることは明かなる事實にして若し教育が軍事上に關係を有するものとせば日本の露國に勝つ敢へて怪むに足らず

○經木眞田の話

經木眞田の販路視察の爲め曩に渡航し渡航の歸來専らその製造法の改良に苦心を重ねたるの結果斯業に一新面目を開き曩に製作品を携へて上京せる岡山縣玉島の人小山善太郎氏の談に曰く濠洲に輸入する經木眞田は頗る多額にて瑞西より十六萬圓伊太利より二百萬圓を輸入し又瑞西に於ける製造高は三百萬圓伊太利は一千萬圓に上るといふ盛況なるがその原料は孰れも他國に仰ぎ殊に日本產多きを占むるといふに至つては更に驚ろかざるを得ず▲元來我國に於ては帽子の需用男子を主とし婦人は極めて僅少なるが外國に於ては男女に限らず帽子を用ゐ居ることは今更云ふまでもなく而して男子用は麥稈婦人用は經木を以て作り又た白色即ち素地のものは夏季用とし春秋冬の三期は各季節に配合よき色彩を染着したるものを愛用せり▲濠洲にては男女兒共小學校初年時代は麥稈眞田帽を用ゆれども十五六歳以上の女子は經木眞田製のものにリボンレース等を編込み美麗なる裝飾を施し中にはその裝飾の爲めに帽子地質の見え分からぬまでになし二三十圓より五六十圓の代價を投ずるものあり日本人の眼より見れば奢侈の如くなるも生活程度の高き彼の地にありては敢へて異しむに足らざるなり▲婦人は帽子の形と衣服との配合に注意し裾の擴がりし衣服を着せし時は帽子も鍔の廣きを用ゐ裾細き衣服の時は帽子の鍔狹くして丈け高きを用ゐ配色も之れに準じて適應せしむるに努め運動、禮式、旅行等時と場所に依り各形を異にし旅行の際には必ず五六個を携帶するの習俗なり▲斯の如く需要多くして前途有望なる上に我國は原料に富み勞働賃亦低廉なれば盛んに製造して外國品と競爭なす事を得べく殊に之れが製造に就ては大なる製造所をも要せざればなり

東京高等女學校に於ける上村中將の談話

一 記 者

日本國民が久しき間、待ちに待ちたる旅順要塞の陥落は、祝すべき新年の初頭に於て、目出たくも傳へられたり、而も其の期は國民一般が豫期せし所よりは二週日若くは三週日夙く、其の局面には想像したる程の慘烈なる激戰を見ず、僅々一二砲臺の爆發占領により、比較的些少なる代價を以て開城降伏の報を齎らせしなれば、國民は一年中の目出たく祝すべき折柄に、斯くも意外に目出たく祝すべき一大決報に接したることゝて其の歡喜の度も亦一層甚しかりしなり、去れば、都鄙遐陬の別ちなく、到る處に種々なる催しの多かるが中にて、東京高等女學校は一月十九日の午前を以て、學びの庭に相應しかるやうにとの心遣ひもて、校内に祝賀會を開き、旅順の陥落には開戰當時より淺からざる關係あり、殆んど一ケ年の長き星霜を、黄海の風浪に、將た外洋の靄霧に暴露し、其の間苦心に苦心は重ねながら、二度三度狡猾暴横なる浦鹽艦隊を逸し、軍機を解せざる國民の爲めにあらぬ批評を蒙りたるも、終に時機に會して見事に其の艦隊と蔚山沖に戰ひ、一艘を擊沈し二艘に大損傷を蒙らしめ、全く之れを屏息せしめて、大に旅順攻擊艦隊の後を安からしめ、赫赫たる功勳を荷ふて舊臘東郷大將と歸京したる上村海軍中將を招請し、席上一場の講話を請へり、校の職員生徒先づ席に着き、來賓、新聞雜誌記者座定まりたる後、校長に伴はれて閾を排して入り來れる老將軍こそ上村中將なれ、中將久しき寒暑に堪へて、征旅の苦辛大方ならざりしならんに

▲凛たる容姿

の欽すべきものありしを見ては、誰かは心を強うせざるべき、好將軍の斯くも健在なる勇姿に接し、且つは端なく他の將校士卒の上を偲びやれば、戰局の

前途如何に遼遠なりとはいへ、轉た喜悅の情を禁ずる能はざりしなり。

此の日將軍は海軍中將の略服を着け、胸間一の大綬花章を佩ぶるのみ、其の質素にして而も温健なる、見るからに親むべく押るべからざる

△大和武士の氣品

の高さ、前額の廣きは其の慈仁に篤きを證し、兩眼巨大ならずして時に温情の溢るゝあるを見れば孩兒も笑つて其の膝に寄るべく、鼻下の髭は黑くして威容を添へ、締りて品よき唇は其の沈勇を語るもの、如し、帽子は服と共に外洋の風浪に曝露されたるならんか、殊に古びて見受けられき。やがて將軍は校長の紹介によりて、壇上に立ち、諄々として約

△一時間に涉る講話

を試みられぬ。飾りなき薩音も將軍の心胸を溢るゝ温情に融化されて、人の心に入ること尤も深く、其の浦鹽艦隊と相會して戰ふの狀、及び露兵の負傷を意にせざる事など、語り出でられし折には、靜粛に謹聽しつゝありし生徒等の覺えず知らず笑を洩らすものすらありき。又以て温かき、將軍の心によりて化せられたる戰爭談が、如何に壯快なる趣味を帶びて、聽者の心を打ちしかを知るに足らむ、去れば、其の講話の要を摘みて成るべく遺憾なからんやう之を記せんことは、尤も欲する所なれども、事、軍事上の講話に係ることゝて、之れを將軍の位置より見て、筆を愼むは當然吾人の義務たるべく信じたるまま、今は只其の概略をのみ記して、講話の順序を報ずるに止めむ。

△佩劍に帽子を持ち添へつ

壇上に立ちたる將軍は曰く『只今校長の開會のお言辭中にもありましたやうに、今回旅順陷落につき祝賀會を催ふす筈なれば、是非彦之丞にも參會致すやうにとの事は豫て申込まれて居たので厶いますがかくも目出たき今日の會に臨席致しまして、來賓並に職員生徒の諸君と相會することを得ましたのは、彦之丞の尤も光榮とする所で厶います』とて招待の

謝意を述べ、
『就ては何か講話を致すやうにとの豫てのお望みでは厶いますし、私も此の目出たき祝賀會に臨席致しましたからには、何かお話し致したい考ではありますが、軍國の今日頗ぶる多忙を極めて居りますので何の考案も厶いませぬ、が、折角のお招待に只默して居る譯にも參りませぬから、只思ひ浮びました儘を心中よりお話し致す外は厶いません、尤も戰爭の事については成るべく詳かにお話がしたい、何故なれば、諸君の父兄又は親戚の方々は、目下等しく出征中の御身分でありますから、其の方々が何れの方面で如何なる戰鬪に從事して居られるかを、想像されるたよりともなるべき事であるから、細かにお話したいのでありますが、今日まだ戰局半ばの事でありまして、遺憾ながら諸君に滿足を與へるだけのお話は出來ませぬ、私共は陛下の勅命によりまして只今の處歸京致しては居りますもの丶、旅順の艦隊は全滅したと申しましても、まだ其外に敵の艦隊にも第二、第三とあつて、それが何時來航せぬとも限らぬのである、又浦鹽艦隊も蔚山沖で擊破つたとは申すもの丶、修繕の出來た上は何時出て來ぬとも限らぬので、要するに、敵の艦隊としいへば、北にあるもの南にあるもの、其の

△悉くを滅して了はなければ

戰は全くの勝利ではない。私共は今回歸京致しまして、嚴かなる有難き恩命を拜しましたから、來る二十三日頃には再び出征の途に就く筈で厶います。尤も東郷大將は風邪で目下臥蓐中で厶いますが…』
斯くて將軍は一昨年十月以來の我海軍の有樣より說き起し、昨年二月五日我艦隊の將士が、宣戰の詔勅を拜し奉りし時の喜悅の情を語るらく『總じて喜び極まる時には、手の舞ひ足の踏む所を知らず、酒に醉ひ踊るなどの事があるものですが、當時の將士の喜びは、決して其の樣な喜び方では厶いません、此時の各將士は、勿論、心の中では踊るやうにもありましたであらうが、外面は至つて靜かなもので、

只其の禁へられぬ喜悦の情が眉宇の間に溢るゝ計り外出しても酒に酔ふものなく時間に後れるやうなこともありませず、かくて六日の午前に堂々として征途に就きました』、とて夫れより仁川の海戰、旅順の海戰、三たび行はれたる壯烈なる旅順閉塞の事、及び水雷を抱きて敵艦の轟沈をなすため單身海に投じたる勇士の事など、詳しく説き明し、次に瓜生艦隊と上村艦隊とが特別の任務を帶びて、旅順攻擊の艦隊に引分れ、夫れ〱定めの任務に就きて行動しつゝある折柄、金州丸の災禍、常陸丸の厄難に會したる事に説き及ぼし、當時に於ける兩艦隊の行動につきて圖解をなし、其の後、機至りて浦鹽艦隊に會し、蔚山沖にて偉功を奏されたる當時を語り

▲露兵が負傷を苦にせざる樣

を説きて言へらく、『私の艦隊が逃げ行く手負敵艦の追尾を中止して歸つて見ると、リユーリック號は最早沈沒して居て、澤山な乘員は打寄する荒浪を切つて泳いで居ましたが、其の泳いで居る露兵の元氣なこと、喩へて言へば片手が僅かに皮を殘して負傷の爲めにブラブラして居ると、それが泳ぐ邪魔になるからか、自から其の手を引千切つて海中に打捨て、片手でサッサと泳いで居る、又片脚がそれと同じくブラついて居ると、之れも亦泳ぐ邪魔になるものと見えて、其の片脚を手と同じ樣に引千切つて海中に打捨て、同じくサッサと泳いで居る、斯の樣な始末であるから手も脚も一本宛になつて、それで泳いで居るものさへあつた。其の慘酷なこと、其の憐れなことは、言葉にも盡されなかつたが、兎に角、扶け得らるゝだけは扶けることにして、救助に取り掛り扶ける爲めに繩を海中に投げやれば、其の片手片脚のものが其の繩に縋りついて上つて來た、負傷に恐れぬのか、元氣なのであるのか、孰れにしても異樣の感も起つたので、之れを醫員に尋ねて見ると、露人とて別に異つた體質の組織があるでもないのだから或は無神經なのではあるまいか、奇怪なことだ、と答へました。此の時救助し得たものは總數六百餘で

之れを佐世保に收容しました、私は當時折角收容したもの丶中に百六十幾人の負傷者もあつたものですから、出來得るだけ叮嚀に扱つて貰ふやうに、又た出來得るだけ施術に注意して貰ふために、醫員初め赤十字の人々や特志看護婦、愛國婦人會の方々にまで、懇々私の心中を話して置いて、再び出征の途につきましたが、皆さんが非常の苦心をせられました功がありまして、舊臘二十五日に同地に着しまして、當時收容した露兵の樣子を聞いて見ると、死者は僅々五人ばかりで、一同御國の御恩德に感泣して居るといふことを聞きました。此他お話致したいこともありますが、多くは新聞紙上に詳細掲げられてあるのですから、新聞紙によつて御承知を願いたい」とて茲に戰爭に關する講話を終りたり。

將軍は更に言葉を改めて、並み居る同校の生徒に向つて曰く、「今回の日露戰爭は極めて大切なる戰爭でありますから、人々其の覺悟を以て各々の業務に勉めて貰はねばならぬのは、勿論であるが、生徒たるものは、校長敎師其他の人々の薫陶に信頼し苟くも其の言葉に背かず、將來天晴れなる賢婦人となるやうに、忠孝の精神を基にして充分勉强して貰いたいのである。尤も諸君の父兄親戚の人々が、現に出征しつゝあれば、其の勞苦を思ひやるのは人情の自然ではあるが、實際出征者の勞苦は思ふ程にもないのであるから、徒らに其れ等の事に思ひ過しをすることなく、勉むべき事に專心勉めて貰いたいのであるさて其の勉むべき事といふ中にも、今日の場合奢らぬことに心掛けるのが第一の勤めである、奢らぬといふのは

▲質素を守る

ことなので、これは口に言ふことは極めて易いが、實行することは至つて困難であるから、充分の決心と用意とがなければならぬ、いづれ校長始め敎師の方々からも、熱誠なる敎訓のあることであらうから決して其の敎へに背かぬやうに勉め勵みて、他日の大成を期して貰はねばならぬのである、私は極めて

幼少なる時分、僅か六歳の時に母親に離れましたので、子供心にも此から後は何うなることかと、悲しいことに思ひましたが、此の時私には

▲一人の祖母

がありまして、宜しい、母親はなくとも、妾しの手で立派に育てゝあげるから安心せよと言はれました此の祖母は八十九歳で坐つたまゝに往生を遂げた人でありますが、私は只だ一心に此の祖母に信頼しまして、其の熱心なる訓誡を神様のお言葉のやうに心得て居まして、それで斯くまでになつたのでありますから、諸君も祖母又は父母其他の人々の教訓には決して背かぬやうに勉めて貰はねばならぬ」、とて將軍は壇を下れり。

生徒總代の答詞あり、唱歌あり、此日將軍より生徒一同に贈りたる寄贈品の披露あり、式全く終りたる後、將軍は更に職員一同に對し、「私は先きにも述べたるごとく、來る二十三日頃には再び出征の途に就くべく、去れば

▲諸君と再會

を期せんことは圖り難きを以て、健康にして邦家の爲めに盡されんことを望む」、旨を告げ、又更に生徒一同に向つて、「充分勉勵して怠りなからんことを望む」、旨を繰返し、言々句々悉く肺腑を衝いて出づるものにあらざるなきだけ、其の人々の心を動かしたるもの極めて大なるものありしを認め得しが、實にや將軍の熱誠は其の容をさへ紅く染めなすまでに見受けられたり。

嗚呼好將軍、想ふに當日の上村中將は永く此の校の爲めに記せらるべく、將軍やがて出征して舷を叩いて吟せん時は、校の職員生徒一同が、其の寄贈の品を抱きて、神に佛に將軍が戰場に於ける大成功を熱誠に祝福し合ふの時なるべし。

新刊批評

○心のあと△△出廬　嘗て讀賣新聞に連載されて好評嘖々たりし露伴氏の傑作出廬は這回美麗なる一册子となりて書肆春陽堂より發刊したり同君が哲學思想と文學趣味とを含蓄せる雄大の文章なることは世間已に定論あれば今代文學の大潮流を酌み眞趣味を翫味せんとする人人の必ず座右に備へて朝夕吟誦を怠るべからざるものなるべし尚詳細の批評は再三熟讀の上次號に掲載することゝせん（定價八十錢日本橋區通二丁目春陽堂發刊）

○教育寓話△我△子△の△惡△德　家庭の良否が子女の性行に影響するは改めていふ程の事にはあらずされど父母の一言一行が直ちに兒童の養成に及ぼす結果に就きて世人の冷淡なるは甚だ嘆ずべし本書は有名なるザルツマンの惡德養成法を基礎として大村仁太郎氏の編述せるものにして兒童惡德惡習の由て來る所を指摘し之が矯正の策を講ずるを以て趣旨とせるものなれば兒童を有せる父母と教育者との參考書として必讀のものといふべし（定價六十錢神田區同文館發行）

新刊書目

女學世界	第五卷第壹號	日本橋區本町	博文館
六合雜誌	第二百八十九號	芝區三田四國町ゆにてりあん弘道會	
をんな	第五卷第壹號	麴町區下二番町	大日本女學會
音樂之友	第七卷第參號	麴町區三番町	樂友社
婦人世界	第四拾四號	大阪鹽町四丁目	浪華婦人會
國學院雜誌	第拾壹卷第壹號	麴町區飯田町五丁目	國學院
商家の友	第參拾壹號	京橋區鍋町	時事新報社
東京經濟雜誌	每號	京橋區彌左衞門町	同雜誌社
婦女新聞	每號	牛込區東五軒町	婦女新聞社
愛國婦人	每號	麴町區飯田町	愛國婦人發行所
小天地	女學世界臨時增刊	日本橋區本町	博文館

定價

一册	前金貳拾錢
三册三ヶ月分	前金五拾七錢
六册半年分	前金壹圓拾錢
拾貳册一年分	前金貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行	金三拾錢
半頁 三十二行	金八圓
一頁 六拾四行	金拾貳圓
表紙一頁	金拾六圓

（色刷は特に御相談に應ず）

御注文規定

一切前金の事（但郵券代用一割增の事）●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地貳丁目貳拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便受取所へ●御照會の件は返信料御送附あるべし

明治三十八年一月卅一日印刷
明治三十八年二月一日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　渡邊宗一
東京市京橋區築地二丁目二十番地
印刷人　河本龜之助
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　株式會社國光社
（電話新橋二六九三番）
（電話新橋特八八番）

●河原操子女史へ贈品の件に付廣告

胡沙漠々朔風塵を揚げて晝猶昏き內蒙古の地に入りて半開蒙昧の民を導くに文明の教育を以てせんとする吾が河原操子女史の如きは其の壯圖洵に欽すべく其の義心寔に感ずべし之を雄壯なる日本女子の摸範とし又海國婦人雄飛の先導者といふも決して過褒にあらずと信ず然りと雖も顧みて之を思へば纖弱なる女流の身を以て獨り風烟索寞の間に立ち旦暮唯だ胡笳寒曲を聽く縱ひ遷謫俘虜の人たらざるも豈又斷腸の思なきを得んや是に於てか吾が同胞姉妹たるもの女史に對して感謝の辭を致し慰藉の情を寄するの至當なるは何人も恐らく異論なきところなるべし依て弊局玆に首唱者となり女鑑購讀者は勿論廣く有志婦人に向ひ寄贈を乞ひ其の集金額に依り藥籠其他の物品を購求し之を女史に贈りて感謝の意を表し且つ其の孤懷を慰藉するの料に供せんとす聞く蒙古の地醫藥甚だ乏しくして疾に罹るも治癒するの道を知らず是を以て一味の藥水、一粒の藥丸も至大の珍寶に値ひすと故に今贈るに藥籠を以てするは啻に女史身上の補益たるに止まらず又以て蠻民開導の一助とするに足るべきを信ずるなり切に望む有志婦人幸に弊局の微衷を諒せられ多少を論せず寄贈せられむことを

一寄贈金は一口拾錢以上とす
一寄贈金〆切期限は三月十五日とす
一寄贈金宛名は東京市京橋區築地二丁目國光社內女鑑編輯局と認めらるべし
一寄贈者の姓名及び寄贈金額は女鑑誌上に掲載すべきにより別に領收證を送付せず
一〆切期限後集金高に應じ直に藥籠及び其他の物品を購求し確實なる方法を以て速に送達の手續を爲すべし

明治卅八年一月一日

女鑑編輯局

●寄贈人名

金一圓　東京市下谷區御徒町三ノ三三　岡田春子
同　同　柳子
金五十錢　同　麹町區三番町八三　石川薫子
金十五錢　佐賀市南十間堀　殿村虎子
金十錢づゝ　麻布區霞町六番地　阿多やす子▲同上　三木原せき子▲同上　阿多たへ子▲鹿兒島市山ノ口町一四八番地　伊東みれ子▲同　伊東いは子▲同　伊東とみ子▲同　伊東しづ子▲同　伊東さだ子▲同　三木原たま子▲同　三木原ふぢ子▲芝區琴平町五　川崎さだ子▲同　川崎とめ子▲仙臺市杉山通八番地　堀ふみ子▲同　堀ゑん子▲島根縣那賀郡長濱村　神足まつ代子▲小石川區中富坂町一九　別所壽美子▲岡山縣久米郡鶴田村大字和田南　北條ふさ子▲芝區濱松町一丁目一五　川崎かう子▲同　川崎きみ子▲同　川崎たつ子▲京橋區築地二丁目二〇河本てる子▲同　河本てい子▲京橋區木挽町一丁目四番地　守岡つや子▲三河國渥美郡大川町二川　內藤まき子▲本所區石原町九二　播磨いく子▲廣島縣芦品郡府中町　大戸貞子▲神田區猿樂町五番地　倉橋たつ子▲本所區松坂町二丁目五　出川ゆき子▲靜岡縣沼津町城內二七一　南條はる子▲日本橋區北島町二丁目三四　田代ひで子▲廣島縣世羅郡上山村　平元よしの子▲芝區高輪北町五三　平元しづゑ子▲千葉縣安房郡吉尾村濱尾　卜部うら子▲北海道石狩國雨龍郡秩父別村　渡邊雪子▲麻布區霞町二四　水主季子▲橫濱市神奈川青木町　石川かれ子　（以下嗣出）

女學及家庭書類

著者	書名	冊數	定價	郵税
島田佳矣・野口駿尾共著	◎女子技藝 編物模樣圖案	全五冊	松ノ卷四十錢 櫻ノ卷五十錢 藤ノ卷五十錢 菊ノ卷五十五錢 梅ノ卷五十五錢	各二錢
棚橋絢子著	◎女道叢話	全	金三十錢	金四錢
三輪田眞佐子著	◎女子之本分	全	金二十五錢	金四錢
三輪田眞佐子著	◎女子處世論	全	金二十錢	金四錢
磯部武者五郎著	◎家計簿記法	全	金十五錢	金二錢
藤野天城著	◎女子小觀	全	金二十錢	金四錢
堀内新泉著	◎女樂師	全	金卅五錢	金六錢
松川霓州著	◎結婚と家庭	全	金十五錢	金四錢
堀内新泉著	◎家庭の鑑	全	金十八錢	金四錢
女鑑編輯局編	◎新編ひめかゝみ	全	金二十五錢	金四錢

▶國光社出版圖書目錄◀

梅澤清一著　◉清少納言と紫式部　全　定價金卅五錢　郵稅金六錢

澁谷愛著　◉萬國女子風俗　全　定價金二十五錢　郵稅金四錢

堀内新泉著　◉少女讀本　全三冊　定價各金十八錢　郵稅各金四錢

大町桂月著　◉常盤御前　全　定價金十三錢　郵稅金二錢

小林雨搭著　◉勾當の内侍　全　定價金十三錢　郵稅金二錢

濱田廉著　◉袈裟御前　全　定價金十三錢　郵稅金二錢

國府犀東著　◉靜御前　全　定價金十三錢　郵稅金二錢

長田偶得著　◉顏世御前　全　定價金十三錢　郵稅金二錢

杉谷正隆著　◉家庭訓歌修身百首　全　定價金二十錢　郵稅金四錢

高瀬眞卿著　◉學校家庭修身一夕話　全　定價六十錢　特價三十八錢　郵八錢　稅六錢

指原乙子著　◉女子文章軌範　全　定價金三十錢　郵稅金四錢

女鑑

明治三十八年二月一日發行　毎月一回一日發行　第拾五年第貳號　明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

東京[illegible]株式會社國光社印刷